

専門研究D

聴覚障害教育における教科指導等の
充実に資する教材活用に関する研究

(平成24年度)

研究成果報告書

平成25年3月



独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

平成 24 年度（専門研究 D）

研究課題：聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する研究
研究成果報告書目次

はじめに	1
研究の目的、調査対象、調査方法、 調査時期、研究体制、研究計画	1
第1章 聴覚障害教育における教科指導及び教材活用	
第1節 聴覚障害教育における教科指導	
第1項 教科指導	3
第2項 視覚教材	4
第3項 手話教材	4
第2節 特別支援学校（聴覚障害）における教材に関する実践研究	
第1項 幼稚部	5
第2項 小学部	5
第3項 中学部・高等部	5
第4項 重複学級	6
第5項 全体	6
第6項 コミュニケーション手段と教材	6
第2章 特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する 現状調査（調査1）	
調査の概要	9
第1節 国語科	
第1項 基本情報	11
第2項 結果	13
第3項 「国語科」のまとめと考察	30
第2節 算数・数学科	
第1項 基本情報	33
第2項 結果	35
第3項 「算数・数学科」の考察	41
第3節－1 外国語活動	
第1項 基本情報	43
第2項 結果	45
第3項 「外国語活動」のまとめと考察	54
第3節－2 英語科	
第1項 基本情報	57
第2項 結果	58
第3項 「英語科」のまとめと考察	71
第4節 自立活動	
第1項 基本情報	73
第2項 結果	76
第3項 「自立活動」のまとめと考察	91

第5節 電子黒板.	
第1項 回答数	· · · · 93
第2項 結果	· · · · 93
第3項 「電子黒板」のまとめと考察	· · · · 103
第3章 特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーションと言語に関する 実態調査(調査2)	
調査の目的、調査対象、調査方法、調査時期	· · · · 105
第1節 基本情報	
第1項 調査票回答数及び回収率	· · · · 106
第2項 在籍児童生徒数	· · · · 106
第3項 各部の学級数、児童生徒数、重複児童生徒数、人工内耳数	· · · · 106
第4項 教職員数及び聴覚障害職員数	· · · · 107
第5項 「基本情報」のまとめと考察	· · · · 108
第2節 調査A コミュニケーションの実態に関する調査	
第1項 コミュニケーション手段の選択や使用	· · · · 109
第2項 コミュニケーション手段の選択する際、重視していること	· · · · 110
第3項 コミュニケーション手段の選択に関する課題	· · · · 110
第4項 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況	· · · · 111
第5項 「コミュニケーション手段の選択・使用」のまとめと考察	· · · · 111
第3節 調査B 言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査	
第1項 コミュニケーションの状況を把握するための評価	· · · · 113
第2項 コミュニケーションの評価の必要性や課題	· · · · 115
第3項 「コミュニケーションの状況を把握するための評価」の まとめと考察	· · · · 117
第4項 日本語の言語力の状況を把握するための評価	· · · · 119
第5項 日本語の評価の必要性や課題	· · · · 120
第6項 「日本語の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察	· · · · 122
第7項 手話の言語力の状況を把握するための評価	· · · · 124
第8項 手話の評価の必要性や課題	· · · · 125
第9項 「手話の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察	· · · · 127
第10項 教師の手話の言語力向上のための評価内容	· · · · 129
第11項 「教師の手話の言語力向上のための評価」のまとめと考察	· · · · 129
研究分担者・協力者一覧	· · · · 131
おわりに	· · · · 132
執筆者一覧	· · · · 133

資料1：特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する
現状調査（調査1）

国語科

表1・8・1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）	・・・・・ 135
表1・8・2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）	・・・・・ 136
表1・8・3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）	・・・・・ 137
表1・9・1 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）	・・・・・ 138
表1・9・2 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）	・・・・・ 139
表1・9・3 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）	・・・・・ 140

算数・数学科

表3・9・1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）	・・・・・ 141
表3・9・2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）	・・・・・ 143
表3・9・3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）	・・・・・ 145

外国語活動

表3・2・3 教科書等の教材の有無と活用頻度	・・・・・ 147
表3・2・4 教材の活用状況	・・・・・ 148

英語科

表3・4・1 中学部における教材の有無	・・・・・ 149
表3・4・2 中学部における教材の使用状況	・・・・・ 150
表3・4・3 高等部の教材の有無	・・・・・ 151
表3・5・3 高等部の教材の使用状況	・・・・・ 152
表3・6・1 中学部の機器の有無	・・・・・ 153
表3・6・1 中学部の機器の活用状況	・・・・・ 154
表3・6・3 高等部の機器の有無	・・・・・ 155
表3・6・4 高等部の機器の活用状況	・・・・・ 156

自立活動

表4・6・1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（幼稚部）	・・・・・ 157
表4・6・3 屋外活動の教材	・・・・・ 158
表4・7・1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）	・・・・・ 159
表4・7・2 授業で活用する機器（小学部）	・・・・・ 160
表4・8・1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）	・・・・・ 161
表4・8・3 授業で活用する機器（中学部）	・・・・・ 162
表4・9・1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）	・・・・・ 163
表4・9・3 授業で活用する機器（高等部）	・・・・・ 164

電子黒板

表5・5・1 国語科担当者が電子黒板を活用したことがある教科	・・・・・ 165
表5・5・2 算数・数学担当者が電子黒板を活用したことがある教科	・・・・・ 165

表 5-5-3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用したことがある教科	166
表 5-6 学部別 電子黒板を活用することが望ましいと思われる教科等	166
表 5-7-1 国語科担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科	167
表 5-7-2 算数・数学担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科	167
表 5-7-3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科	168

資料 2 : 特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する
実態調査（調査 2）

表 3-3-3 コミュニケーションの評価の必要性	169
表 3-3-4 コミュニケーションの評価の課題	174
表 3-3-5 日本語の評価の必要性	179
表 3-3-6 日本語の評価の課題	184
表 3-3-8 手話の評価の必要性	188
表 3-3-8 手話の評価の必要性	192
表 3-3-10 教師の手話の言語力向上のための評価内容	195
資料 3 : 調査票 1、調査票 2	197

はじめに

聴覚障害教育は、今まで実践を通して培ってきた言語指導法を活かし、保有する聴覚を活用しつつ視覚情報を適切に用いる等の配慮の下に、教育を展開してきた。

現在、特別支援学校（聴覚障害）では、教科指導等をどのように学力向上に結び付けていかが課題視され、これに関する実践研究がなされている。教科指導等をより効果的に進め、学力の向上を図るために教材の果たす役割が極めて重要である。

これまで聴覚障害教育においては多くの教材が使用され、指導の充実のために努力を重ねてきた経緯がある。しかし、多様な教材をどのように活用するとよいかについては、なお実践や研究を積み上げる必要がある。

また、近年はICTの進歩に伴い、電子黒板等が授業において利用され始め、特別支援学校（聴覚障害）においても実践研究が行われ、有効的な活用について検討されるようになっている。

このような状況を背景として、特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部における教材活用の現状を明らかにし、学部における教材の選択や活用の在り方等を検討するための資料を提供することが重要と考え、調査研究に着手した。

1. 研究の目的

本研究では以下の2つの調査研究を実施する。

調査1：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査では、幼稚部における話し合い活動、小学部から高等部の教科指導等における教材活用の実態を調査し、学部毎の現状と課題を明らかにする。

調査2：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査では、指導の基礎となる幼児児童生徒等の言語やコミュニケーションの評価法、日本語評価、手話の活用状況について調査し、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段及び評価等の現状と課題を明らかにする。

2. 調査対象

全国特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部に所属する教員、学部主事もしくは主任

3. 調査方法

郵送による質問紙調査（悉皆調査）

4. 調査時期 平成24年10月～12月

5. 研究体制

原田公人（研究代表）、藤本裕人、庄司美千代、横尾俊（国立特別支援教育総合研究所）

研究協力機関 千葉県立千葉聾学校

神奈川県立平塚ろう学校

研究協力者 宮戸和成（筑波大学 教授、筑波大学附属久里浜特別支援学校 校長）

6. 研究計画

月	活動内容
H24. 4	調査内容検討、研究協力機関訪問
6	第1回研究協議会（6月30日（土））
7	研究協力機関訪問
8	調査票案作成、研究協力機関訪問
9	訪問調査票完成
10	調査票発送
11	調査票集約、調査データ入力
H25. 1	第2回研究協議会（1月19日（土））
2	研究成果報告書

第1章 聴覚障害教育における教科指導及び教材活用

第1章 聴覚障害教育における教科指導及び教材活用

文部科学省の教材機能別分類表^{*}によると、教材の機能を大きく次の4つに分類している。

①発表・表示用教材：

児童生徒が表現活動や発表に用いる、又は児童生徒が見て理解するための図示・表示の機能を有する教材

②道具・実習用具教材：

児童生徒が実際に使って学習・実習の理解を深める機能を有する教材

③実験観察・体験用教材：

児童生徒の実験観察や体験を効果的に進める機能を有する教材

④情報記録用教材

情報を記録する機能を有する教材

また、「教材機能別分類表（聾学校）」では、全体を通じた留意点として、「児童・生徒の障害の状態や特性等を十分考慮することが必要である。また、コンピュータ及びその周辺機器やコミュニケーション支援機器を有効に活用し、指導の効果を高めるようにすることが望ましい。」と示されている。

近年、教育の情報化に伴い、学校には大型ディスプレイや液晶プロジェクターなどの配備が進んでいる。特別支援学校（聴覚障害）も例外ではなく、授業形態そのものも変化の兆しが見られる。これまで聴覚障害教育においては、集団補聴器等が整備され、聴覚障害児の聴覚活用に大きな役割を果たしてきた。また、コミュニケーション手段の多様化傾向に伴い、視覚教材が実際の指導に取り入れられている。

このような状況を背景として、本章では、特別支援学校（聴覚障害）における教材研究及び教材・教具に関する特別支援学校（聴覚障害）実践研究を概観し、聴覚障害教育における教科指導及び教材活用を考える。

第1節 聴覚障害教育における教材研究

第1項 教科指導

聾学校における教科指導において、教材の果たす役割や教材開発を検討したものとして、田中ら（2007）は、聴覚障害児の書記表現力の指導の実態に関して現状を把握するため、全国の聾学校小学部・中学部を担当する教員127名を対象にアンケート調査を行った。そして、書記表現力の指導は、「国語科」の時間内だけでなく、「自立活動」や「放課後・昼休み」など教科外でも指導の機会が頻繁に設けられていた。また、教材に関して、「日記」や「感想文」など児童生徒の書記表現力の基礎を形成するために効果的と考えられる教材が選択されていたなどの結果から、聾学校においては、児童生徒の書記表現力の向上に向けた実質的な指導が展開されていることが示唆されたと報告した。また、仲野ら（2010）は、前報では助詞検定の基本的考え方、教材事例及び実施状況を紹介し、インターネットを活用した「Web助詞検定」について検討した。

理科教育について、中村ら（2008）は、体験的活動を通して生徒の理数科学習への興味・関心・意欲を向上し、聾学校の理数科指導を改善できるのではないかと考え、携帯電話で操作するロボット教材を活用した指導を試みた。

^{*}平成13年1月5日付け 文科初第718号 初等中等教育局長通知

また、林田ら（2012）は、外国語活動の活動内容などについて情報を得ることを目的として、特別支援学校(聴覚障害)小学部の教員に対して質問紙調査を行った。その結果、多くの学校が、全面実施にむけた指導体制や具体的な活動内容、コミュニケーション環境の整備、教材・教具、教科・領域との関連性について検討を進めていたことを報告した。

このように、聾学校における教材は、書記言語力の向上を目的としたり、教科や外国語活動等でのICTやインターネット等の活用を図るなど全教育活動において、様々な活用が図られ、重要な意味を有するものである。

第2項 視覚教材

聴覚障害児の障害特性から、視覚教材に着目した研究が進められている。金子（2008）らは、聴覚障害生徒がe-黒板を用いて作文の誤りを直す際の映像を組み込んだマルチメディア教材を製作し、聾学校中学部生徒52名を対象として、この教材を活用した授業を行った。その結果、(1)作文の誤りを直す映像に関して、興味・関心が認められ、(2)字幕の色や大きさなどの映像付加情報への着目が見られたこと、(3)考え方を説明した字幕付きの映像が有用であると評価した生徒が多かったことが示された。e-黒板の利点は生徒の思考過程を視覚的に表現でき、作文の誤りを直す学習においても、効果が期待できると報告した。また、佐藤ら（2011）は、難聴児・者への言語獲得支援を目的として視覚を生かした教材開発を行うため、聴覚障害者の視覚情報認知を検討した。そして、タッチパネルディスプレイパソコンの使用は、検査の操作が簡単で、かつパソコン使用に慣れていない被験者に対しても年齢を問わず受けやすい検査であり、年齢の低い幼児や学童を対象にして有効に活用できる可能性があると報告した。

聴覚障害児への視覚教材の活用の場面として、水谷ら（2008）は、人工内耳を使っている子どもの通常の学校生活や学習場面での配慮として教室環境や座席の位置、先生の話し方や授業での視覚的教材の活用など、人工内耳を使用した子どもの理解を助ける工夫が必要であると報告した。更に、大島ら（2005）は、音韻が情報として入りにくく定着しにくい聴覚障害幼児への適切な指導方法を確立することは、保護者支援の領域でもあると考え、音韻獲得のためには概念を先に入れていくべきであるというトップダウンの考え方にもとづいて、家庭でも活用できる視覚的な教材を作製した。

視覚教材は聴覚障害のある子どもの指導に有効であることから、ICTを積極的に導入する重要性や、通常の学校や保護者の連携や理解により効果が発揮されることを示唆している。

第3項 手話教材

近年、授業における手話の役割の重要性から、手話教材に関する研究も進められている。高橋ら（1994）は、コンピュータを使った初心者用の手話教材の自学自習システムの基礎的研究とそのためのプログラムの開発を試み、デジタル動画のシステムを単語と文のレベルで開発試行することにより、手話学習教材のもつ問題点と解決の方向を探った。また、野本ら（2006）は、聴者の両親を持つ3歳代から5歳代の聴覚障害幼児8名を対象に、日本語対応手話と音声言語の同時提示によるビデオ教材を視聴させ、聴覚障害幼児のコミュニケーション行動にどのように影響を及ぼすかを検討した。そして、教材を提示する前後の比較において提示後の方が手話単語の熟知度の成績が向上していたと報告した。

聾学校で保有する手話教材については、その量も十分とは言えない状況にある。授業に際しては、教師と子どもの実際でのコミュニケーションが基本となるが、授業のねらいや指導内容に応じた手話教材の在り方、活用に関する検討が今後ますます必要となるであろう。

第2節 特別支援学校（聴覚障害）における教材に関する実践研究

これまで特別支援学校（聴覚障害）では、幼稚部から高等部の全学部を通して、教科指導等における教材活用や教材開発に関する実践や研究が行われてきた。下記に、過去の特別支援学校（聴覚障害）の研究紀要や全日本聾教育研究大会研究集録より抽出した実践事例を挙げる。

第1項 幼稚部

- 1)「教師の発音指導に関する専門性を高め、児童に対してより効果的な指導が行えるようにする。」ことを目的に、清音の発音指導法について発音指導に関する資料作成を行った。取り組みの結果、どのような教材教具を用いて、どのように指導を行えばいいのかといった具体的な指導の手掛けりが得られた。（福島県立聾学校平分校）
- 2)言語を獲得させるための自主教材の研究のテーマで学部間の指導実態の交流、教材の意味と意義についての討論などを行ない、生徒に言語を獲得させるための環境整備をすすめてきた。研究では、内容分析、ねらいなどを討議した。（青森県立八戸聾学校）
- 3)母子の相互関係を形成するための教材、遊びの素材は、どのようなものが適切であるかについて研究を行った。手作り教材を集め、そのねらい、作り方、活用の仕方について冊子にまとめた。資料冊子「低年齢児のための教材ヒント集」を作成した。（三重県立聾学校）
- 4)幼稚部として一貫した指導を行うことを中心に、(1)環境や教材を整備し児童の理解や意欲の向上を促す、(2)場面設定を考え個別に支援しながら児童同士のやりとりを促す、(3)VTRによる授業記録を行い授業改善に向けて授業分析し問題点を洗い出す、の3つを柱に研究を進めた。（大阪市教育センター養護教育室）
- 5)0～3歳児を対象に、生活場面での音の聞かせ方や保育場面での音あそびについて、個々の教材（ハンドドラム、太鼓、サウンドシェイプ、拍子木等）の周波数・音圧分析も行いながら、(1)遊び方(2)児童の反応(3)配慮事項(4)応用（再現あそび）についてまとめた。（兵庫県立姫路聾学校）

第2項 小学部

- 1)国語科物語単元の指導に、手話DVDを中心としたマルチメディア教材を活用した。各学年で教材の有効性が示された。児童の手話力の把握、国語科の目標に照らし合わせた使用の方法など課題に挙げられた。（福島県養護教育センター）
- 2)結論を言葉で確実にまとめさせることを目的として視覚に訴えるVTR教材を取りあげた。単元内容にあわせた「理科教室」を導入での意欲づけ目的把握に、まとめでの思考の補助に使った。（愛知県立岡崎聾学校）

第3項 中学部・高等部

- 1)ICTを活用した学習指導の一つとして、自作教材を電子情報ボードで活用する実践を継続してきた。数学、理科、家庭科、体育では、それぞれの教科指導の目的に応じて、特徴のある自作教材を活用して、その評価の在り方について検討した。その結果、(1)事後の質問調査による回答の把握、(2)ループリック評価、(3)自己評価の活用、(4)授業分析の手法による評価により、生徒の学習状況を把握し、それを次の実践につなげるために活用できることが示された。（長野県立長野ろう学校）
- 2)理科の内容は、小学校高学年くらいから用語が増え、原理・法則・概念などの抽象的な学習の割合も増えてくる。そのため学習内容が子どもの実態とかけ離れてくる。そこで、教材をまとめた。そして、用語、実践例、視聴覚教材の項目で載せた。（愛知県立一宮聾学校）

- 3)(1)歴史上の人物の身体的な特徴、(2)情報提供手段の工夫、(3)日常生活場面での情報保障の面からの試みを行った。(1)では身長など自分と比べられる点を得たことで身近に感じられるようになった、(2)では時事に対する興味が増した、(3)では普段聞き流してしまう用語を目で確認する機会になった等といった成果が見られた。(愛知県立豊橋聾学校)
- 4)ものの見方考え方を深め言語力を高める指導を主題として、素材の教材化と教科の学習での課題の持たせ方、互いにかかわり合っての追究のしかたに重点をおいて研究した。(筑波大学附属聴覚特別支援学校)

第4項 重複学級

- 1)聴覚障害に加え、知的障害や肢体不自由等を併せ有している。3名の児童生徒に合った視覚教材の準備や環境整備も含めた支援のあり方について検証した。(長野県立長野ろう学校)
- 2)対象生徒は、知的障害と聴覚障害を併せ有している。(1)視覚的、具体的な教材教具を使用する。(2)理解語を増やす。(動詞中心)(3)共通のコミュニケーション手段を活用する。コンピュータや人形などの教材を使用した授業に意欲的に取り組んでいた。(宮城県立ろう学校)
- 3)個人差、能力差の大きい児童の実態をそれぞれどのようにとらえ、更にはどのような教材に取り組ませることがことばを豊かにし、思考力を育てることになるのか、素材の教材化と子どもたちとの出会いの場に切りこみ、指導の手がかりを追究した。(青森県立八戸聾学校)

第5項 全体

- 1)「ことばの定着を図り、日常生活に生かすための効果的な指導法を実践的に明らかにする。」ことを目的とし、全職員の共通理解を図りながら研究を行った。方法として幼稚部においては、本校の幼児に対応した「指導マニュアル」を作成すること、小学部においては、養護・訓練の時間を中心に、個々の実態に応じた言語指導のあり方を日々の実践の中で研究していくこととした。大まかに分類すると、音声言語や身振り言語による表現力の向上、視覚的教材を使用した言語力の向上についての実践研究を行った。その結果として、繰り返し指導することにより、ことばの表出方法が獲得された、語彙数が増加した、文を正しく作ることができるようになった。(福島県立聾学校平分校)
- 2)豊かなコミュニケーションの実現を目指し、言語の拡充を図る手立てを実践によって明らかにしようとした。児童の自主的活動になるよう意図した指導過程を考え、視覚教材を多くの場面で用いるようにした。「ことばノート」に書き込むことによって、一つの言葉にいろいろな角度から接することができた。また、覚えた言葉を実際に使うことまでを目標にしているが、子ども同士の会話や作文・日記等でも成果が出てきている。(沖縄県立沖縄ろう学校)
- 3)情報処理機器としてのパソコン導入により、教材・教具も多様化した。過去の教育実践を再検討し、各教科で共通するであろう主だった教材・教具について実践例を取り上げた。

(第47回東海地区聾教育研究会事務局)

第6項 コミュニケーション手段と教材

上記の研究や実践から、特別支援学校（聴覚障害）における教材は、コミュニケーション手段との関連で検討されている状況があった。

表1に、特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部で使用されているコミュニケーション

ヨン手段と教材との関連を示した。コミュニケーション手段は、発達段階や子どもの状態、学校の方針等に応じて変化していくことが想定される。また、学部で単独の使用教材や各部共通の教材があることも踏まえる必要がある。(なお、表1については、第2章での報告内容を検討する参考としたい。)

表1 特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段と教材

学部	コミュニケーション手段	教材 (学校保有教材・自作教材)
幼稚部	ことば(音声・手話) 発音サイン 絵カード(絵、写真、模型等) 実物	絵カード(絵、写真) 模型、実物、絵本、紙芝居、絵日記、掲示物 自作教材(「再現遊び」や絵本) 発音指導用教材 聴覚活用のための教材(CD、DVD、楽器等)
小学部	ことば(音声・手話)、書記言語	「読む・書く・聞く・話す」4領域に関する教材
中学部		電子黒板
高等部	発達段階によるコミュニケーション手段の変化	副教材、リライト 視覚教材
専攻科		発音指導用の教材、学習テキスト 聴覚活用のための教材(CD、DVD、楽器等)

(原田公人)

引用文献

- 1)田中耕司,斎藤佐和,聴覚障害児の書記表現力の指導に関する調査,特殊教育学研究,45(3), 137-148, 2007
- 2)仲野てる子,向井星十,松田明美,田川由美,藤立勝大,後藤豊,大塚和彦,細谷美代子, ろう学校における「助詞検定」の作成と実施, 電子情報通信学会技術研究報告,教育工学 109(387), 55-60, 2010
- 3)中村好則,後藤豊,携帯電話で操作するロボット教材の聾学校における可能性, 日本教育工学会論文誌 31(Suppl.), 81-84, 2008
- 4)林田真志,石田久美, 特別支援学校(聴覚障害)小学部における外国語活動の実施にむけた動向 : 担当教員に対する質問紙調査をとおして,広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要 no.10 page.7-13 ,2012
- 5)金子俊明,廣瀬由美,渡邊 明志, 聴覚障害生徒に対する作文指導におけるマルチメディア教材の効果 : e-黒板を活用した"作文の修正"を中心に,障害科学研究 32, 185-193, 2008
- 6)水田重幸,都築繁幸,人工内耳装用児の学校生活の実態に関する一考察(2),愛知教育大学教育実践総合センタ・紀要 (11), 95-100, 2008-02
- 7)佐藤のぞみ,杉田克生,下山一郎,タッチパネルを用いた難聴児・者への言語学習支援,千葉大学人文社会科学研究 no.23 page.257-273
- 8) 大島光代,都築繁幸,聴覚障害幼児の言語発達支援に対する視覚教材適用の試み,愛知教育大学教育実践総合センタ・紀要 (8), 231-236, 2005-02
- 9)高橋信雄, 松下剛,初心者用手話学習教材の開発と問題点, 電子情報通信学会技術研究報告. ET, 教育工学 94(278), 25-32, 1994-10-15

10)野本裕子,都築繁幸,聴覚障害児の日本語対応手話の習得に及ぼす手話ビデオ教材の効果
治療教育学研究 26, 67-74, 2006

<幼稚部>

- 1)コミュニケーションの能力をより高めるための効果的な指導法の研究全職員校内研究<第2年次>研究集録,福島県立聾学校平分校,1995
- 2)コミュニケーション手段の異なる児童が伝え合うための支援のあり方はどうあればよいか,幼稚部グループ,研究集録／青森県立八戸聾学校,2012
- 3)コミュニケーションの充実をめざして,岡美佐,脇田三千代,研究紀要,三重県立聾学校,1999
- 4)聴覚障害児の言語指導と教材・教具および補装具,伊藤督夫,教育相談事例報告書昭和62年度養護教育相談事例報告書,大阪市教育センター養護教育室,1988
- 5)コンピュータ等の教育機器を用いた教育方法の開発,中住喜雄,中村増男,姫路聾学校「研究のまとめ」,兵庫県立姫路聾学校,1990

<中学部・高等部>

- 1)ことばを豊かにし、思考力を育てる～児童の実態に即した国語教材をもとめて～,竹内加代子,窪田治夫,研究紀要,長野県長野ろう学校,1986
- 2)生徒が主体的に取り組む授業実践と理解を促すための教材教具の工夫,愛知県立一宮聾学校算数,数学研究班,研究・研修のまとめ / 愛知県立一宮聾学校,2008
- 3)日常生活に結びついた教材の工夫鳥井ちず恵,北島淳研究集録,愛知県立豊橋聾学校,1989
- 4)電子情報ボードを活用した授業の評価に関する検討,金子俊明,有友愛子,渡邊明志,半沢康至,西分貴徳,研究紀要,筑波大学附属聴覚特別支援学校,2012

<重複学級>

- 1)生徒自ら数学的見方考え方を獲していく学習のあり方～素材の教材化と生徒の思考過程を見極めた指導～,平出薰,塙田忠義 研究紀要,長野県長野ろう学校,1987
- 2)ことばを進んで増やし,使える子供を育てる指導の一試み～「ことばノート(動詞編)」づくりを通して,佐々木英人,沼田洋子,岸雅士,千田正義,弦巻英彦,研究集録,宮城県立ろう学校,1991
- 3)コミュニケーションを円滑に進めるために必要な教材や指導の工夫,研究集録,青森県立八戸聾学校,2012

<全体>

- 1)コミュニケーションの能力をより高めるための効果的な指導法の研究,校内研究<第2年次>研究集録,福島県立聾学校平分校,1995
- 2)児童の語彙力の向上とコミュニケーション力の向上をめざした教材作成と授業実践,沖縄ろう学校小学部,研究紀要,沖縄県立沖縄ろう学校,2006
- 3)保健体育における効果的な教材教具について,保健体育科研究班,研究集録, / 第47回東海地区聾教育研究会事務局,2009

第2章 特別支援学校(聴覚障害)における
コミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査
(調査1)

第2章 特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査（調査1）

調査の概要

第1項 調査目的

特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部における話し合い活動、小学部から高等部の教科指導等における教材活用の実態を調査し、学部や教科毎の現状と課題を明らかにする。

第2項 調査対象、調査時期

調査対象：平成24年度全国特別支援学校実態調査聴学校の部（全国特別支援学校長会）に掲載されている全国の特別支援学校（聴覚障害）の本校及び分校の計100校。
記述内容は、平成24年5月1日現在の各学校・学部の実態とした。

調査時期：平成24年9月～平成24年10月

第3項 調査内容

調査は、幼稚部の話し合い活動と小学部・中学部・高等部本科の教科指導等（国語科、算数・数学科、外国語活動・英語科、自立活動）に関する質問用紙から構成した。

調査対象の教科等の選定に当たっては、特別支援学校（聴覚障害）において、教育現場の課題意識が高い教科・領域であると捉えられていることを重視した。

「国語科」は、言語そのものを広範に取り扱う教科であり、特別支援学校（聴覚障害）においては、課題意識が最も高いと判断した。

「算数・数学科」は、文章題の困難さ等、言語理解や論理的思考を要する教科であり、これに関する教材について議論を積み重ねてきた経過があることから選定した。

「外国語活動・英語科」は、ともに言語を扱う教科・領域であるが、特に、外国語活動については、新学習指導要領により新しく導入された領域であり、教育現場の教材活用について情報が殆どないため、喫緊の課題として現段階での実態を明らかにする必要があることから選定した。なお、「英語科」については、「外国語活動」で使用されている教材との差異を検討する必要性があると判断し、選定した。

「自立活動」は、全学部を通して重要視されてきた経緯があり、コミュニケーション手段との関連からも実態を把握する必要があると判断し、選定した。

「幼稚部の話し合い活動」は、幼稚部教育において、広く定着している活動であり、教材について総合的に扱われている可能性が高いと考え、選定した。

質問内容は、記入者の教職経験年数や所属等の基本情報、教育課程、指導人数、担当する教科等で用いるコミュニケーション手段、教科等で活用する教材や機器の有無・活用頻度・加工の状況、自作教材の活用状況等とした。

また、小学部以上については、学習評価で用いる教材と活用状況、電子黒板の有無と活用状況等に関する質問項目を加えた。なお、本調査では、教科等で用いるコミュニケーション手段について、実際の授業場面を想定し、以下の説明を加えた。

- ・ 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- ・ 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- ・ 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- ・ 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む。）
- ・ キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- ・ その他：絵カード、身振り、発音サイン等

※ 「手話付きスピーチ」については、発話を主とすることから、補聴器や人工内耳による聴覚活用も含まれると考える。

第4項 回答数

幼稚部は各校2部、小学部以上は教科等毎に各2部送付した。回答数については、教科等別に記している。また、回答数のうち、経験年数や教育課程等の基礎情報に関する未記入の物を除いた調査票を調査の対象とした。

96校から回答を得、回収率は96%であった。

第1節 国語科

本節では、小学部から高等部までの各学部の国語科指導担当教員 2名（1校 6名）を対象として、教職経験、国語科に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、授業で活用する機器、学習評価で用いる教材の活用頻度と自作教材、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題を考察した。

第1項 基本情報

1-1 回答数

表 1-1 に、本調査に対して得られた全ての回答数（以下、総回答数）と調査対象とした有効回答数を学部毎に示した。

表 1-1 回答数

	小学部	中学部	高等部
有効回答数（総回答数）	150(161)	120(130)	96(111)

※ 有効回答…総回答数から教職、聾学校、学部経験年数が未記入のもの、複式学級担当、担当教育課程未記入のもの等を省いた。

1-2 教職・聾学校・学部経験年数

【小学部】

表 1-2-1 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、小学部経験年数を示した。なお、全ての経験年数とともに、これまで勤務した学校での経験年数を含むものとしている。本調査の記入者のうち、最も多い割合を占めた教職年数は、21 年以上で 30% を占めた。

一方、最も多い割合を占めた聾学校経験年数は、0～3 年未満で 26% であった。小学部経験年数も 0～3 年未満が最も多く 30% であった。教職経験年数が長いが、聾学校や小学部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-1 教職・聾学校・小学部経験年数 N=150 (数値は%)

経験年数	0～3 未満	3～6 未満	6～9 未満	9～12 未満	12～15 未満	15～18 未満	18～21 未満	21 以上
教職	12.0	9.3	6.7	9.3	12.7	5.3	14.7	30
聾学校	26.0	20.0	14.7	13.3	8.7	6.0	5.3	6.0
小学部	30.0	23.3	12.8	13.3	6.7	5.3	3.3	5.3

【中学部】

表 1-2-2 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、中学部経験年数を示した。なお、最も多い割合を占めた教職年数は、21 年以上で 42.5% を占めた。一方、最も多い割合を占めた聾学校経験年数は、0～3 年未満で 25.8% であった。中学部経験年数も 0～3 年未満が最も多く 34.2% であった。小学部同様、教職経験年数が長いが、聾学校や中学部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-2 教職・聾学校・中学部経験年数 N=120 (数値は%)

経験年数	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21以上
教職	10.0	6.7	5.8	7.5	8.3	5.0	14.2	42.5
聾学校	25.8	20.8	15.8	14.1	8.3	5.8	2.5	6.7
中学部	34.2	26.7	20.0	5.8	7.5	0.8	0.8	4.2

【高等部】

表 1-2-3 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、高等部経験年数を示した。なお、最も多い割合を占めた教職年数は、21年以上で 46.9% を占めた。一方、最も多い割合を占めた聾学校経験年数は、0~3 年未満で 35.4% であった。高等部経験年数も 0~3 年未満が最も多く 29.2% であった。小学部中学部同様、教職経験年数が長いが、聾学校や高等部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-3 教職・聾学校・高等部経験年数 N=96 (数値は%)

経験年数	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21以上
教職	4.2	8.3	1.0	9.4	8.3	8.3	13.6	46.9
聾学校	35.4	17.7	20.8	12.5	4.2	5.2	1.1	3.1
高等部	29.2	19.8	13.5	13.5	7.3	6.3	2.1	8.3

1-3 記入者の担当（所属）

表 1-3 に、記入者の担当（所属）を学部別に示した。いずれの学部も学級担任の割合が最も多く、小学部は 91.3%、中学部は 43.3%、高等部は 50.0% であった。

表 1-3 担当（所属） 小学部 N=150、中学部 N=120、高等部 N=96 (数値は%)

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	91.3	6.0	0	2.0	0.7
中学部	43.3	22.5	5.0	24.2	5.0
高等部	50.0	32.3	5.2	9.4	3.1

※ その他の回答…他学部所属

1-4 記入者が主に担当する学年

表 1-4 に、記入者が国語科の指導で主に担当する学年を学部別に示した。記入者が学級担任の場合は受け持ち学級の学年を、学級担任以外は国語科の指導で一番多い指導人数の学年を回答するよう求めた。

表 1・4 担当学年（いつも授業をしている学年）

	小学部 N=150、中学部 N=120、高等部 N=96 (数値は%)						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	重複
小学部	19.3	18.7	18	14	12	10.7	7.3
中学部	28.3	25.8	26.7	-	-	-	19.2
高等部	27.1	27.1	27.1	-	-	-	18.7

1・5 記入者が担当する学習グループ（学級）の児童生徒数

表 1・5 に、記入者が国語科の指導で担当する学習グループ（学級）の児童生徒数を示した。小学部では、1名が最も多く27.6%であった。中学部では、2名と5名が20.8%で最も多かった。高等部では、4名が最も多く24.0%であった。

表 1・5 学習グループ（学級）の児童生徒数

	小学部 N=150、中学部 N=120、高等部 N=96 (数値は%)							
	1名	2名	3名	4名	5名	6名	7名	8名以上
小学部	27.6	20.0	17.2	20.7	9.7	3.4	0.7	0.7
中学部	15.0	20.8	15.8	15.8	20.8	8.3	1.7	1.7
高等部	12.5	19.8	15.6	24.0	13.5	4.2	8.3	2.1

1・6 国語科の教育課程

表 1・6 に、記入者が担当する学習グループ（学級）の国語科の教育課程を示した。いずれの学部も準ずる教育課程が最も多く、小学部で81.3%、中学部で85.0%、高等部で90.6%であった。

表 1・6 国語科の教育課程 小学部 N=150、中学部 N=120、高等部 N=96 (数値は%)

	準ずる	下学年適用	知的代替	自立主
小学部	81.3	10.7	6.0	2.0
中学部	85.0	10.8	4.2	0
高等部	90.6	5.2	4.2	0

第2項 結果

(1) 国語科で使用しているコミュニケーション手段

表 1・7 に、記入者が授業の際に使用しているコミュニケーション手段（複数回答）を示した。最も多い割合で使用されているのは、手話付きスピーチで小学部で78.0%、中学部で89.2%、高等部で93.8%であった。

また、学部が上がるにつれ使用割合が増えるのは、手話付きスピーチ、筆談、指文字であった。学部が上がるにつれ使用割合が減るのは聴覚口話、日本手話、キュードスピーチであった。その他のコミュニケーション手段として挙げられたものは、身振り、絵カードや写真であった。

表 1・7 使用コミュニケーション手段

小学部 N=150、中学部 N=120、高等部 N=96（複数回答・数値は%）

	聴覚口話 スピーチ	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
小学部	62.7	78.0	14.0	35.3	14.0	56.0	17.3
中学部	60.0	89.2	12.5	47.5	2.5	72.5	8.0
高等部	56.3	93.8	10.4	60.4	1.0	78.1	12.5

(2) 教科書等の教材の活用

① 教科書等の教材の有無と活用状況（活用頻度、加工）

教科書等の教材の有無と活用について、24 の教材（1 検定教科書、2 聖学校用教科書、3 文部科学省著作本、4 附則の 9 条本、5 電子教科書、6 市販のワークブック、漢字ドリル、7 日本語指導用教材（教科書、問題集）、8 国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）、10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）、11 ことば絵じてん、12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）、13 絵本（行事、物語、説明等）、14 紙芝居（行事、物語、説明等）、15 写真（人物、場所、活動場面等）、16 動画（ビデオカメラで撮影したもの）、17 カレンダー、18 絵日記（スケッチブックの記録等も）、19 新聞、20 広告、チラシ、ポスター、21 雑誌（幼児・児童向け、その他）、22 DVD（テレビ番組、解説等）、23 手話・字幕付きDVD、24 インターネット上の Web 情報）を示し、それぞれの教材に対して、「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

なお、表中、各項目についての有効回答を示したため、回答総数（N）が変動している。

【小学部】

表 1・8・1 に、小学部国語科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。「よく使う」「時々使う」を合わせると 70%以上になると回答した教材は、検定教科書、市販のワークブック・漢字ドリル、写真、図鑑、カレンダー、国語辞典・漢和辞典（紙媒体）、インターネット上の Web 情報、絵日記（スケッチブックの記録等を含む）、絵本（行事、物語、説明等）であった。

また、「手を加えて活用」と「自作して活用」を合わせると 20%以上のものは、写真、インターネット上の Web 情報、日本語指導用教材、新聞、カレンダー、絵日記（スケッチブックの記録を含む）、聖学校用教科書、動画、市販のワークブック・漢字ドリル、検定教科書、広告・チラシ・ポスターであった。

また、「よく使う」と「時々使う」を合わせた回答割合が、「学校にある」回答割合を上回った教材は、市販のワークブック・漢字ドリル、写真、カレンダー、絵日記（スケッチブックの記録等を含む）、動画（ビデオカメラで撮影したもの）、日本語指導用教材（教科書、問題集）、電子辞書（国語辞典、漢和辞典）であった。活用すると多く回答された市販のワークブックや写真、絵日記（スケッチブックの記録を含む）、日本語指導用教材等は、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状となっている。

表 1-8-1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）（数値は%）

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	加工	自作	使わない
1 検定教科書	147	97.3	1.4	1.4	149	89.9	4.0	6.0	149	71.8	19.5	3.4	6.0
2 聖学校教科書	139	92.1	3.6	4.3	140	14.3	49.3	36.4	134	39.6	26.9	1.5	31.0
6 ワークブック	146	67.1	32.2	0.7	147	80.3	16.3	3.4	142	71.1	23.9	2.1	2.7
7 日本語教材	128	39.3	31.3	28.9	120	25.0	41.7	33.3	114	28.1	26.3	11.4	33.0
8 国語/漢和辞典	144	95.8	3.5	0.7	146	43.8	38.4	17.8	136	72.1	10.3	0.7	18.1
12 図鑑	138	100.0	0	0	145	29.7	65.5	4.8	138	83.3	11.6	0	5.4
14 紙芝居	134	94.8	0	5.2	141	8.5	36.2	55.3	126	38.1	8.7	0.8	51.2
15 写真	139	80.6	15.8	3.6	145	51.0	47.6	1.4	108	57.4	23.1	16.7	2.0
17 カレンダー	136	91.2	8.1	0.7	143	47.6	43.4	9.1	139	61.2	20.1	9.4	9.5
18 絵日記	130	59.2	30.8	10.0	138	43.5	32.6	23.9	130	43.8	20.8	10.8	24.6
20 広告等	131	79.4	13.0	7.6	138	3.6	46.4	50.0	133	30.1	20.3	0.8	46.5
24 Web 情報	141	91.0	4.5	4.5	145	26.2	51.0	22.8	138	38.4	37.0	1.4	25.0

【中学部】

表 1-8-2 に、中学部国語科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。「よく使う」と「時々使う」を合わせると 70%以上になる教材は、国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、検定教科書、市販のワークブック・漢字ドリル、写真、新聞、手話辞典（紙媒体、電子媒体）であった。

教師が「手を加えて活用」と「自作して活用」を合わせた回答割合が 20%以上のものは、写真、新聞、インターネット上の Web 情報、市販のワークブック・漢字ドリル、検定教科書、日本語指導用教材であった。

また、「よく使う」と「時々使う」回答割合が、「学校にある」回答割合を上回った教材は、国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、市販のワークブック・漢字ドリル、写真、新聞、日本語指導用教材、電子辞書（国語辞典、漢和辞典）であった。いずれの教材も「活用する」と多く回答された教材であり、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状となっている。

表 1-8-2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）（数値は%）

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 検定教科書	120	100	0	0	118	93.2	3.3	3.4	116	74.1	22.4	0	3.4
2 聖学校教科書	111	86.5	2.7	10.8	110	4.5	34.5	60.9	97	23.7	21.6	0	54.6
5 電子教科書	101	12.9	0.9	86.1	82	2.4	11.0	86.6	71	9.9	2.8	0	87.3
6 ワークブ	114	61.4	36.8	1.8	116	67.2	29.3	3.5	109	65.1	30.3	2.8	1.8

	ツク	国語 / 漢和辞典				手話辞典				写真				新聞			
8		115	93.9	6.1	0	117	61.5	36.8	1.7	111	95.5	2.7	0	1.8			
10		110	97.3	2.7	0	114	18.4	54.4	27.2	107	70.1	3.7	0	26.2			
15		107	71.0	21.5	7.5	111	26.1	56.8	17.1	105	32.4	39.0	7.6	21.0			
19		105	90.5	5.7	3.8	112	19.6	67.0	13.4	104	40.4	42.3	0.9	16.3			

【高等部】

表 1・8・3 に、高等部国語科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。「よく使う」と「時々使う」を合わせると 70% 以上になる教材は、国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、検定教科書、市販のワークブック、新聞、インターネット上の Web 情報であった。「手を加えて活用」と「自作して活用」している割合が全体の 20% 以上のものは、新聞、市販のワークブック、漢字ドリル、写真、インターネット上の Web 情報、日本語指導用教材、雑誌であった。

また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、市販のワークブック・漢字ドリル、新聞、写真、日本語指導用教材、電子辞書（国語辞典、漢和辞典）であった。いずれの教材も「活用する」と多く回答された教材であり、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状となっている。特に、電子辞書については、中学部、高等部での保有が 10% に満たず、「よく使う」「時々使う」の回答数と大きな開きが見られた。

表 1・8・3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				N	そのままである	手を加えて活用	自作して活用	使わない
		N	学	個	な	i	N	よ	く	使	わ	い	N					
1	検定教科書	95	99.0	0	1.1		95	88.4	6.3	5.3		93	81.7	11.8	1.1	5.4		
6	ワークブック	94	62.8	36.2	1.1		90	60.0	35.6	4.4		85	49.4	45.9	0	4.7		
8	国語辞典、漢和辞典	94	83.0	17.0	0		92	68.5	30.4	1.1		86	98.8	0	0	1.2		
14	写真	92	57.6	29.3	13.0		89	11.2	61.8	27.0		85	29.4	35.3	8.2	27.1		
18	新聞	91	86.8	9.9	3.3		92	26.1	63.0	10.9		87	31.5	50.6	2.3	12.6		
23	Web 情報	87	91.0	8.0	1.0		90	22.2	62.2	15.6		85	40.0	43.5	0	16.5		

② その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について、記述による回答を求めた。記述内容は、「教材名（品名）」、「場面や活用方法」とした。回答の内容に基づき、教材の使途別に分類し、学部毎に表に示した。教材名（品名）と用例（内容、活用場面、活用方法）等を表にした。

【小学部】

38 の回答が得られた。表 1・8・4 に、教材の使途、教材例、用例等を示した。

表 1・8・4 小学部国語科で活用する教科書等の自作教材等 N=38 ()内は回答数

A 使途	B 教材例	C 用例等
教科書の内容に関する教材（8）	手話 DVD 本文や挿絵の拡大版	物語や説明文を手話表現したもの

	物語スライド（パワーポイント） リライト教材文	物語の場面毎にスライドを作成、登場人物の動きも提示する。 物語文の読み取り、概要把握のため導入で活用、ルビ付きにする。
教科書の内容理解を促すための教材（19）	文章の内容理解 パネルシアター お面 写真、絵カード 模型 言葉プリント 漢字プリント 言葉絵カード 言葉学習用プリント 言葉ノート ワークシート 読解	導入で見る活動で使用 動作化で使用 本文の意味理解で活用 説明文の読み取りで操作する。 単元から語彙を抽出し、写真や絵を添えて解説したもの 漢字の練習、用例を書く 絵と裏に名称と文例 難語句の意味と短文作り、ひらがなやカタカナ練習用、濁音プリント 全教科共通で新出語句の意味と使い方を書く 学習した内容の理解、学習の流れの理解、場面の様子、人物の行動や気持ち、実験と結果、確認や宿題用の読解等
発展や補助のための教材（1）	作文集、読書感想文集、新聞や感想文の書き方の本	過去の作品として参考にする、教材文として活用
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材（10）	作文メモノート 絵日記 生活文 新聞ノート ひらがなカルタ、パズル なぞり型パズル（タブレット型PC） 文法学習教材	作文のためのメモ帳 毎日の体験を写真と文章でまとめる 身近な出来事やニュースを読み取る 記事の要旨と感想、記事のスクラップ 五十音の学習 漢字学習用アプリ 5W1H、動作語、文の構造、動詞の活用、助詞等

自作教材に関する記述から、国語科指導における教材の使途が4点分類された。まず、「教科書の内容に関する教材」である。これには、教科書の本文や挿絵そのものを拡大したり、パワーポイントで提示したりする教材など、教科書本文の内容には手を加え提示の仕方を変える教材と、手話DVDやリライト文など本文を変換し内容理解を促す教材とが見られた。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」が挙げられ、一番多くの回答を得た。内容理解の視点として、「文章の内容理解」「語彙や漢字の理解と定着」「読解」が挙げられた。文章の内容理解については、教師自作の絵や絵カード、写真、お面、模型など、映像や動作化を通して、文章の意味理解を促す意図が見られた。語彙や漢字の理解と定着については、絵や写真を併用して指導する、用例も記載し意味理解を促すなどを意図した自作プリントが多く作成されていることが示されていた。読解については、授業の流れに沿ったワークシートを自作し活用する記述が多く見られた。

次に、「発展や補助のための教材」として、単元に関連した図書作品の活用が挙げられた。作文の指導であれば、作文集や読書感想文などを取り上げ、教材文にして活用したり、表現の方法を学ぶ参考として活用したりする記述が見られた。そして、「国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材」が挙げられた。言語活動や言語事項の内容として、書く活動、読む活動、文法学習、五十音や漢字など語彙に関する活動の記述が見られた。

【中学部】

75の回答が得られた。表1・8・5に、教材の使途、教材例、用例等を示した。

表1・8・5 中学部国語科で活用する教科書等の自作教材等 N=75 ()内は回答数

A 使途	B 教材例	C 用例等
教科書の内容に関する教材 (6)	本文の拡大版 パワーポイント資料 リライト教材文 手話DVD	読み間違いがないかを確認する。 授業の補助となる写真や絵をパワーポイントにまとめたものを用い板書とする。 漢詩の朗読CDを字幕と組み合わせたもの。中国語の発音や音韻について知らせる。 教科書に合わせた、リライト文や問題等 長い小説の面白さを伝えるため、最初に全部を見せ、大まかな把握をさせる。途中細かく分けて使うこともある。
文章の内容理解 (6)	ペーパーサート 詩歌集・詩集 古典のマンガ版 パワーポイント資料	内容理解を促すため 教科書の課題が難しい時、関連のある作者や内容で平易な言葉づかいのものをもってくる。(解説を加える) 導入段階で全体のイメージを持たせるために使う。 各单元でつくった、文章提示(内容の理解を深めるため)写真や絵等の提示のためのもの。
教科書の内容理解を促すための教材 (23)	語彙プリント 意味調べ用ワークシート 辞書学習用教材プリント 国語の資料集 漢字の読みカード パワーポイント資料 重複用(手作りの)マッチングプリント、文字練習プリント ワークシート	本文の大切な表現、意味調べ、例文作りに活用する。 単元の導入の際に、意味のわからない語句を確認させ、ページ、行、読み方、意味、反対・類義語、短文を書かせる。 多義語の意味の調べ方を学習するために、文脈に合った意味を3択の中から選ぶ。 より多くの言葉の習得のために絵や写真の多い資料集を活用している。 新しい単元に入った時に1時間目に確認する。 実用的あるいは理解できる例文に作りかえて、練習やテストとして使う。 熟語を作らせたり、漢字と読みを対応させたりする。 漢字の成り立ち、四字熟語等(主に漢字や文法) 日本語と事物のマッチング学習時、ひらがな学習時に利用している。
読解 (5)		教科書の進度に合わせて、理解を助けたり、構造的に読み取るためのワークシートを作成している。 障害や生徒の実態に合わせて、書く量を減らすことを目的にして、教科書を要約したようなプリントを毎時間使う。
発展や補助のための教材 (28)	読書感想文入選作品集、作文集等 国語の便覧	構成や書き出し、タイトルの工夫、内容、視点の持ち方、考え方などを参考にする。 作者や作品の背景、他の著作、詩・短歌・俳句の表現技巧、作文の書き方等を知る手がかりとして活用。 古典や漢文、小説など、時代背景の理解に活用したり、語句の学習や文法の学習にも活用。

	詩集、短歌・俳句、小説 隨筆等の作品集	好きな詩や言葉を見つける、視写する、発表する等の活動の際に活用。 教科書の詩の学習に入る前に活用。
	高齢聴覚障害者の戦争 体験 DVD 学習マンガ	戦争の教材(教科書)を扱う際に活用。
	単元に関する内容が書かれた本 作文手引き	古典文学の作品紹介や、場面のイメージをつかませるために利用する。マンガ自体は事前には読まず事後に読ませることが多いが、対象の子どもによって使い方は変える。 様々な本に触れあい、視野を広げることを目的とする。 作文を書く手順や構成の仕方等が分かるようにワークシートにして書き込ませる。
	原稿用紙の書き方 (パワーポイント資料、ワープロ機能) 百人一首(パワーポイント) テレビ番組の録画	作文指導の時に、提示して説明する。 作文の添削や推敲の際に活用。(入れ替えやつけ加え、削除が楽) 読み手の声の代わりに、一字一字画面に写し出してゲームをする。 古典で活用。
	作文構成表	構成表、語彙表(行事に関係した語彙)を用いて行事作文を書かせる。
	新聞記事、投稿文	要約や感想を話したり、書いたりする際に活用する。 語句の意味を知る。
国語の関連する 言語活動や言語 事項に関する教 材 (18)	四コマ漫画 ことわざ、四字熟語プリント 動詞プリント	ニュースを知ろうとする姿勢を身に付ける。 出来事の一つ一つを上位概念につなげる際に活用。 漫画の状況の説明や要約を話したり、書いたりする一定のルールが視覚で分かるように表示したワークシート。
	ことばのプリント 文法(品詞)カード	文と絵(場面)を結びつけて覚えるようにする。(例)・肩をたたく・ドアをたたく・太鼓をたたく。 助詞、接続詞など文法の自作プリント 品詞分類表に貼ったりはがしたり(マグネット付)してくり返し使用。
	受け身ドリル(自作教材)	絵を導入し、段階に応じた問題を作成し、一冊のドリルとしてまとめた。
	口語文法の活用表 「国語帳」(漢字の読み書き、読解、言語事項の問い合わせ)	口語文法指導の時に、提示して説明する。 新聞の切り抜きから生徒が問題を作り中学部全員が毎日1枚その問題を解く。
	対義語、類義語ドリル	語彙の拡充
	文法学習用プリント	読字力検定を参考にして作成。指導事項の定着の確認のため活用。

「教科書の内容に関する教材」は、小学部と同様、提示の仕方を変える教材、手話DVDやリライト文のように表現方法を変えて分かりやすくする教材とが挙げられていた。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」について、小学部と異なる点として、古典の内容理解を促すための写真や資料集、古典マンガ等の活用が挙げられていた。語彙や漢字の学習については、多義語や四字熟語等のより複雑な語彙を扱うことから、意味と読み方、用例、反対語・類義語等を関連づけて学習できるような自作プリントが活用されていることが挙げられていた。読解については、毎時間自作ワークシートを作成し、文章の内容や構造の

理解を促したり、生徒がノートに書く量を調整したりする等、効率的な学習を進めるための工夫も見られた。

そして、「発展や補助のための教材」が、最も多く記述されていた。小学部に比べ、扱う教材文に古典や小説、隨筆、短歌・俳句等が加わることから、単元に関連した教材を集めて活用していることが挙げられた。

さらに、「国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材」では、書く、読む、文法、語彙といった内容が取り上げられており、小学部と共通した傾向であった。さらに中学部では、四コママンガや新聞記事等を教材として取り上げ、書く・読む等の言語活動を総合的に扱う活用の記述も複数見られた。

【高等部】

75の回答が得られた。表1-8-6に、教材の使途、教材例、用例等を示した。

表1-8-6 高等部国語科で活用する教科書等の自作教材等 N=75 ()内は回答数

A 使途	B 教材例	C 用例
教科書の内容に関する教材 (6)	新聞記事(読者投書欄、特に十代の若者の投書) 学校採択以外の教科書 小説、隨筆、詩、意見文、現代詩、古文(漢文)等 パワーポイント資料	教科書を活用して授業を進めることができない学習グループで使用している(論説文にかえて)。新聞記事を読み、漢字、語句の意味確認、読解を一連の学習活動として行っている。 教科書の教材が生徒の実態に合わない時に活用。(平易な内容のものや発展的な内容) 読書教材として活用。 教材文を投影させるための教材を作成し、活用。
文章の内容理解 (6)	教育テレビなどで放送した特別番組のBDディスク	情景の理解の補助教材として。
教科書の内容理解を促すための教材 (23)	プリント、ワークシート 小論文 題材、資料収集 寝殿造りの基礎知識、百人一首の謎、絵巻の見方・扱い方等	日々の授業で使用する。生徒の実態や状況に合わせて作成している。 調べ学習として活用。 教科書や問題集にはない背景的な部分での補助教材を自作して使用している。学習の動機付けに利用することが多い。(特に古典・漢文教材として)
語彙や漢字の理解・定着 (12)	ことわざ等、マンガ辞典 語彙カード 語彙の学習(国語便覧より) 敬語、漢文(返り点等)学習用コンテンツ	言葉を学習する際に。 語句の定着、復習に活用。 国語便覧をもとに、類義語、対義語、四字熟語、ことわざ、慣用句などのワークシートを作り、苦手な部分の補充をする。 ネット上に公開されているコンテンツの活用
発展や補助のための教材 (28)	短編小説、エッセイ、隨筆、単行本、雑誌、論説文、新聞のコラムや論説 古典、漢詩、詩、俳句、和歌	小論文を書かせる際の題材として、短く、平易な表現のものを選択して活用。 読解の教材として自作したり、参考にする。 単元の補助教材、発展教材として活用。

古典の自作教材	導入のところで、よく知られた昔話や説話文学を活用し、生徒に興味・関心をもたせている。
他校の生徒会誌、作文コンクールの入賞作品集	生徒の読み易い作文を取り上げ、読解の練習に用いている。
日記(学習グループ内で共通する話題やできごとがあった時)	学習グループ内で全員が経験したことや、心に残るできごとがあった場合、読み物教材として提示し、読みとれているか、確認する。
物語(絵本)	行事と関連づけて、実施。文字のみの文章を作成、ワークシートを作成し、絵本を補助として使用。古典や戦争教材の理解を促す時に活用。
自作プリント、ワークシート	単元の補助教材又は発展教材として活用。
文法の基礎、敬語、慣用表現の視覚教材	パワーポイントを活用して、教科書で扱うとき補助教材として使用。
漢字の作り立ちカード&四字熟語カード	漢字検定資格取得、語彙習得学習のために活用。
文法、語句、国語表現、動詞活用などの教材(テキスト、カード、プリントなど)	生徒の実態や苦手分野に合わせて作成し、活用。
国語の関連する言語活動や言語事項に関する教材 (18)	さまざまなものの絵(カット集などからコピー)を見て、数えさせる。 作文を書かせる際には、ポイントを明確にするため、自作プリントを使用する。 要約、感想文、報道の仕方、視野を広げる等で活用。
序数詞を学ぶ(スクラップ帳)	入試や就職に向けた小論文課題等で活用。 様々な評論に触れ、視野を広げる。
わかりやすい文章を書くための十ヶ条	単元の補助教材として、就職試験、大学入試に向けて
新聞記事、社説、コラム(記事そのものや参考にした自作プリント)	
市販の問題集(大学入試小論文、評論問題集、就職試験問題)	
課題プリント	

「教科書の内容に関する教材」として、教科書の教材文の代わりに扱う教材が挙げられていた。文章表現や内容が平易なもの、新聞記事等で生徒に親しみが持てるもの、他社の教科書等、教師が指導のねらいや生徒の実態に合わせて探していることが挙げられた。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」として、古文や漢文の学習、敬語やことわざの学習など、高等部の学習や生活の広がりに応じ、資料集や便覧を活用したり、参考にした自作プリントを活用していることが挙げられた。

そして、「発展や補助のための教材」は、中学部同様一番多く挙げられたが、扱う教材文の広がりに応じ、現代文でもエッセイ、随筆、論説や雑誌の記事、作文コンクール作品集といった多様さが見られた。また、古典についても、生徒の興味・関心や読書経験等に基づき、教科書以外の教材として漢詩、詩、和歌、短歌、俳句、物語等を取り上げ活用していることが挙げられた。

さらに、「国語科に関する言語活動や言語事項に関する教材」では、読む、書く、文法、語彙といった内容は、小学部や中学部と共に通するが、大学入試や就職試験にする問題集を参考にして教材を作成したり、手を加えたりしていることも特徴として見られた。

③機器等（発表・表示用）の活用

ア 機器等の有無と活用状況（活用頻度、加工）

国語科の授業における機器等の有無、活用の頻度、活用の状況について、19の機器等（1 黒板（短冊黒板、小黒板）、2 発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）、3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）、4 指文字表・指文字カード、5 手話表（簡単な手話表現の絵）、6 電子黒板、7 OHP、8 パソコン、プロジェクター、9 地上デジタル対応テレビ、10 DVDプレーヤー、11 CDプレーヤー等機器、12 実物投影機、13 デジタルカメラ、14 デジタルビデオカメラ、15 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）、16 個人用FM等システム、17 音声記号図・調音部位図、18 母音図（口形を表した図や絵）、19 キューサイン表（発音サインも含む））を示し、それぞれの教材に対して、「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したもの活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

【小学部】

小学部国語科の授業で活用する機器等の有無、活用の頻度、活用の状況については、教師が「手を加えて活用」したり、「自作して活用」している割合が全体の20%以上のものは、漢字表・漢字カード（カタカナ・ローマ字表も含む）であった（表1-9-1）。

また、漢字表・漢字カードは、個人で保有する割合が学校よりも上回った。

表1-9-1 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）
(数値は%)

教材の有無	活用頻度				活用の状況								
	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない				
3 漢字表・漢字カード	143	72.7	23.8	3.5	141	36.2	54.6	9.2	135	65.9	15.6	8.9	9.6

【中学部】

中学部国語科の授業で活用する機器等で「よく使う」と「時々使う」教材とその有無については、教師が手を加えて活用」と「自作して活用」を合わせて20%以上のものはなかった。また、「よく使う」と「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、中学部の回答では見られなかった。（資料：表1-9-2参照）

【高等部】

高等部国語科の授業で活用する機器等の有無と活用の頻度、活用の状況について教師が「手を加えて活用」と「自作して活用」を合わせると20%以上のものはなかった。また、「よく使う」「時々使う」回答割合が、「学校にある」回答割合を上回った教材は、見られなかった。

（資料：表1-9-3参照）

④ 学習評価で活用している教材

ア 学習評価で活用している教材の有無と活用状況

国語科の学習評価における市販のテスト（単元別、漢字、言語事項）について、「いつも活用している・時々活用している・活用していない」のうち一つ当てはまるものの回答を求めた。表 1-10-1 に、学部毎の活用状況を示した。

小学部では、「いつも活用」が一番多く、回答数全体の 60.7% であった。中学部では、「時々活用」と「活用していない」が同率で最も多かった。高等部では、「時々活用」が最も多く 52.1% であった。いつも活用している割合は、小学部から高等部へと学部が上がるにつれ減少していた。

表 1-10-1 市販テストの活用状況

	いつも活用	時々活用	活用していない
小学部(N=150)	60.7	20.7	17.3
中学部(N=120)	21.0	39.5	<u>39.5</u>
高等部(N=96)	13.5	52.1	31.3

イ その他の教材や自作教材

学習評価に係るその他の教材や自作教材について、記述による回答を求めた。記述内容は、「教材名（品名）」「場面や活用方法」とした。回答の内容に基づき、よく活用するその他の教材や自作教材を対象とし、活用場面による分類を行い、回答数と内容を表 1-10-2 に示した。

小学部では、36 の回答を得た。単元や本時の学習評価として、市販のテストの他、自作テストも作成されていることが挙げられた。また、学年のまとめや全体的な傾向の把握として、標準化されたテストの活用も挙げられた。

表 1-10-2 小学部でよく活用する自作テスト、評価用教材等

N=36

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	27	自作テストやプリント（単元、本時の学習内容の確認、漢字や語句の確認）、市販の漢字テスト
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	4	市販の国語ドリル（日本語の使い方や文法）、自作プリント、動詞や形容詞の活用表
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	5	読書力診断検査、J,Coss 日本語理解テスト、標準学力検査 CRT（教研式）、NRT テスト

中学部では、単元や本時の学習評価として自作テストが多く活用されていた。また、本時で活用したワークシート、作文や発表のビデオ録画記録、生徒の自己評価シートなど、学習の結果を評価に活用するとの記述も多く見られた。

また、自作ワークは、本時用、宿題用、自習用をそれぞれ作成するなど、繰り返し学習するための教材が多く作成されていることが挙げられた（表 1-10-3）。

表 1・10・3 中学部でよく活用する自作テスト、評価用教材等 N=46

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	36	漢字テスト、漢字練習プリント、自作テスト（本時、単元、定期テスト）、自作ワーク（本時、宿題、自習）、ワーク（電子データ）、自己評価シート、ビデオ映像、イラスト（授業のまとめをイラスト化）
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	9	ことわざ自作テスト、ディベート採点表、リスニング・テスト（字幕提示）、10問書き取りテスト、全校漢字テスト、漢字検定教材や問題集を参考にしたテスト、ことばの基礎に関するドリル
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	1	読字力テスト

高等部では、76 の回答を得た。中学部と同様、本時用、宿題用等多くの自作プリントやワークシートが作成されていた。また、苦手分野や過去の問題の復習など、試験を想定した教材が自作されていた（表 1・10・4）。

表 1・10・4 高等部でよく活用する自作テスト、評価用教材等 N=76

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	68	自作テスト（本時、単元、定期テスト）、漢字テスト、漢字練習プリント、自作プリント（復習、問題集、本時のまとめワークシート）
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	8	漢字テスト、過去に間違った問題や苦手分野の問題をまとめたテスト
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

⑤ あると良い教材

国語科の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について「教材名（品名）」「場面や活用方法」に関する自由記述を求めた。回答の内容に基づき、教材の種類別に分類し、教材名・内容、活用場面や方法を小学部は表 1・11・1、中学部は表 1・11・2、高等部は表 1・11・3 に示した。

小学部では、63 の回答を得た。このうち、文法事項の指導に関する教材が一番多く挙げられ、次で、語彙指導、評価に関する教材が挙げられた。文法事項の内容として、動詞の活用、助詞の使い方、能動文と受動文の理解が多く挙げられた。評価の内容としては、語彙や文法に関する実態把握と指導を意図したものが挙げられた。語彙指導の内容としては、動詞の活用、各品詞の意味と使用、敬語の意味理解と使用を意図したものが挙げられた。

表 1-11-1 あると良い教材（自由記述：小学部）

N=63

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話 DVD (5)	教科書対応、専門的な知識を持つ表現者による手話 DVD	教材文（特に物語文）の内容の把握、イメージ作りに活用。
教科書本文と挿絵の電子データ (4)	電子データ（拡大、加工可能な物） 拡大印刷した物 会議用ホワイトボードシートに教科書本文が拡大印刷されている物 電子教科書 手話に対応したデイジー図書	物語文で活用、書き込みできると良い。書いてあることを抜き出したり確かめたりするのに便利。 市販のものは高額のため、簡易なものがあればよい。 音声、文字、手話がセットになっていると確認や自学がやりやすくなる。
教科書とは別の教材（読み解説） (3)	児童が書いてある文の内容をイメージできるようなイラスト入りの長文 生活文の読みとり教材	高学年になるほど内容が抽象的で、文に抵抗を示すようになる。少しでもヒントを与えるようなイラスト入りの文章（物語）があればと良い。 いつも生活文を自作しており、クラスの児童の実態が異なるため、3通り作っている。いろいろな言語段階に応じた日常的な文～ニュースの内容のこと等いろいろな話題の短い読みとり文集があるとよい。 聴覚のみの障害のある児童もいるので、多様な段階に対応した教材、教具は必要。
教科書の補助教材 (7)	知的障害を伴う重複の児童用の教材集 教科書に出てくる語句を子どもに分かりやすく解説している教材（図・写真が多いもの） 教科書に対応した新しい言葉、漢字の意味解説や単語の絵つきカード 動詞等の言葉を映像化したもの 文法事項がコンパクトにまとめられた表 デジタル手話イラスト集	授業で読み解を進めていく際、使いたい。 意味が絵を見て理解しやすくする。 進出漢字や熟語の学習で活用。 教科書本文や会話等の中で、分からぬ言葉を、動作化したり、映像化した教材 教科書に出て来た文法事項の説明に役立てる。 手話の確認、教材を作成する際に活用。 重複児童への教材作成で困ることが多い。
辞書に関するもの (2)	言葉の意味と映像写真辞典	言葉の意味を文だけでなく写真や、動画などで、調べることができる。
評価に関するもの (7)	授業振り返りシート 段階別になった文法テスト、文法教材と一覧表	授業を終えて、児童が自分で何を学べたかを振り返られるもの。記入することで、学習したことを見つめさせられるようとする。 小学部～高等部までが系統的に使えるような、品詞ごとの教材を活用し、定期的にテストも行い、合格したら次のステップへ進むことができるようにする。実態把握のため活用。

	副詞の一覧と評価のためのプリント	教科書に出てくる文法表現などを重点的におさえるために使用する。意味と用い方ができるかを確かめる。
	学年(段階)ごとに各品詞の達成度(定着度)が評価できるチェック表 語彙表	一人一人の各品詞の定着度を確認し、弱点(重要事項)を把握して、以後の指導に活用するため
	分かりやすい動詞、形容詞、感情を表す言葉の活用表	品詞ごとに「読み理解」「手話理解」「文字表現」「手話表現」の実態を確認したり、共有したりする。次にどのようなことばに広がっていくのかの見通しをもつ。
文法事項の指導に関するもの (22)	動詞の活用がわかりやすい動画(アニメーション) 助詞の種類と意味が書いてある表 助詞の使い方の理解を深める教材(ドリル、活用表、例文表) 能動態、受動態の活用表	文法理解、テスト、読み書き、日常会話などあらゆる場面で評価や指導で利用する。 文法の学習で使用する。 児童が自分で表を見て、書く時や話す時に活用できるようにする。 言語の学習の時間に。 文法理解。「～する。～される。」の理解がしやすいツールとなるもの。
文指導に関するもの (3)	児童に分かりやすい指示語の表 文章を拡充していくためのドリル的なもの 話し言葉と書き言葉のちがいを理解できるテキスト 構造的に考えることができる、文のパズル	例えば、ある場面を挙げ、お風呂に入る自分の日常を振り返りながら文をつないでいく形式のもの。「はじめに電灯をつけます。暗いと○○だからです。(感情表現も含む)」 作文を書く時や、発表する時と、普段の会話での話し方を使い分けられるようにする。
語彙指導に関するもの (9)	ことばの意味に限った問題集 敬語の表(拡大・掲示できるもの) 絵とことばと手話、3位一体の表 動詞、名詞、形容詞、副詞など、各品詞について、その学年でおさえたい語彙の短冊 動詞、形容詞、心情を表す言葉の絵とことばのカード(絵と文字) 名詞、形容詞、動詞別の語彙を増やすプリント 気持ちのことばのチャート図	日常使うことばでも、誤った意味で、使っていることがある。意味調べやその記憶にとどまらず、定着させるために活用する。 小5国語の敬語の学習で活用する。また、他学年でも言葉の使い方を確認するために使える。 日常生活でよく使われる絵とことばと手話が一緒になった表があれば、手話→絵→ことばの順で日本語を指導しやすい。 文作りにおいて、なかなか自分で書くことができない子どもに活用させる。掲示しておけば、くりかえし確認もできる。 言葉で確認する前に絵でイメージをつくったり、絵を見せておいて、あてはまる言葉を考えさせたりする。 宿題や朝学習で日常的に使う。 うれしい、楽しい、かなしい、くやしい…など、気持ちを表すことばと表情

や状況などが分かる図。

気持ちを表す言葉、言い回しの表	「うれしい」「悲しい」などの単純な表現だけでなく、様々な言い回しがあることを知り、児童が日記等で活用できるように。
实物投影機	教科書を拡大して提出し、大切なところ等を全員で確認する。
その他（1）	児童がノートに書いた考え方等を発表する際に活用する。

中学部では、51の回答を得た。評価に関する教材が一番多く挙げられ、半数であった。次いで、教科書に関連するもの、手話・字幕付きDVDが挙げられた。

評価の内容として一番多く挙げられたのは、問題集やテストの電子データであった。生徒の実態に応じた目標と評価を行うため、電子データを基にテストを自作するとの記述が多くかった。教科書に関連するものとしては、検定教科書のリライト版、既に発行されている聾学校用教科書とは別の聾学校用国語教科書（検定教科書を聾学校向けに改訂したようなもの）が挙げられた。手話・字幕付きDVDについては、検定教科書に対応したDVD、古典作品に関する映像と手話、字幕が提示されるDVDなどが挙げられた。

表 1-11-2 あると良い教材（自由記述：中学部）

N=51

教材の種類	教材名・内容	活用場面と方法
手話・字幕付きDVD（5）	手話DVD（検定教科書対応） 字幕付き・手話付きDVD（朗読、古典作品、国語科に関連する映像番組や作品等）	検定教科書に掲載されている教材の翻訳DVD 映像に合わせ音声も字も同時に理解できるもの。朗読付（音声）、文字がカラオケのように色がかわるもの。 作品に対するイメージ作り、意欲や興味・関心を高めるために活用。
教科書に関連するもの（9）	電子教科書（現行の物、改良への要望） 教科書本文、教科書に掲載される文章や写真等全ての電子データ 教科書の本文（拡大印刷物）	写真、絵等の豊富なデータ、漢字指導用のデータ、文章の内容理解を深められる工夫等が備わったものを望む。 書き込みと印刷が可能な物を望む。 ふりがな付きのデータだと良い。 指導書に本文の電子データはついているが、横書きのテキストのため、加工しなければならない。 必要な箇所を選択して提示する。 授業中に掲示し、板書と合わせて活用。
教科書とは別の教材（読み解き指導）（2）	検定教科書のリライト文（3段階レベル）（電子データ版） ろう学校教科書	言語力のレベルの違う生徒を想定し、いくつかの段階のリライト文があれば、生徒の実態に合わせ、文章を編集し、教科書として使える。 準ずる教育として、中学校で使用しているものとは別の、中学校同等の学力をつけることのできる、ろう学校のために編集された教科書。
教科書の補助教材（3）	物語や、説明文など教科書の内容が絵（動画）になったもの。 映像DVD	読み解をしたあとに、目で見て、確認できる場面があると助かる。 教材に出てくる光景や物、動物等を提示する。

	教科書の文にあったイラストのデータ	教科書に関連した映像データがあると、より分かりやすく提示できる。
辞書に関するもの（1）	手話の動画辞典	手話の学習で使う。
評価に関するもの（26）	問題集やテストの電子データ版	授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習や評価を行う。 テスト作成や授業時の発問に使う。 家庭学習、予習・復習の課題として活用する。 授業の演習、復習、評価で使う。
	指導書にある問題やワークシートの電子データ 聾学校対象の国語アチーブメントテスト	年に1回、到達度評価をみるために、聾学校を対象とした国語のテストがあるとよい。(全国模試の聾学校版) 読みを覚える、単語の意味をイメージできるように学習する。
文法事項の指導に関するもの（1）	文法事項（助詞の使い方など）のデータ版	くり返し学習することで助詞の使い方を自然に身につける。
語彙指導に関するもの（2）	語彙の用法、意味のデータ版 映像	段階的に語彙力をつけていくように進める。 例「見る」「注目する」「見つめる」「ながめる」「見渡す」などがわかるようなビデオがあれば、先生が一人で実演するより、わかりやすい。
その他（2）	プラズマディスプレイ 各教室毎に設置されたプロジェクタ、スクリーン等	文章、写真、図、地図等を示し、学習の理解や動機づけを生かす。 本文を投影し音読時等に使用する。

高等部では、35の回答を得た。最も多く挙げられたのは、手話・字幕付きDVD、次いで、文法事項の指導に関するもの、語彙指導に関するものであった。手話・字幕付きDVDについては、検定教科書対応の手話・字幕付きDVD、古典作品に関連する映像と字幕が提示されるDVDが挙げられた。

また、作品中の進出語句や重要語句の手話表現の映像を希望する記述も見られた。文法事項に関するものとして、高等部生徒のレベルに合った問題集やドリル、テキストを望む記述が多かった。語彙指導に関するものとしては、日常生活で使う語句（教科書には出てこないが、流行語や年齢に応じて覚えた方が良いことばなど）を指導する教材やテスト、慣用句や四字熟語、ことわざ、敬語に関する問題集や教材が挙げられた。

表 1-11-3 あると良い教材（自由記述：高等部）

N=35

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
	教科書対応手話DVD	教科書の内容をろう者の感覚でとらえられるようにする。 内容理解、確認のために活用。
手話・字幕付きDVD（8）	教科書対応DVD（字幕、手話付き） 字幕つき映像（文学作品、古典作品、関連する映像）	文字、ことばだけでは、内容をつかみにくい生徒に。大まかな話の流れをつかむため。 導入と全体像の把握(特に学力に課題のある生徒を対象) 事前学習や導入などで映像を見せるとき、字幕があると分かりやすい。

	教科書に載っている作品の手話つきDVDや作品に出てくる用語の手話辞典	高等部の国語(教科書レベル)になると手話辞典にそのまま出ているが少ないので、作品ごとに手話での表現の方法とかを示す物があると良い。
教科書本文と挿絵の電子データ (4)	全部ふりがな付き本文 電子黒板とそれに対応した教科書のデータ	視覚による読みの確認、学習の効率化のため 長文読解において、文章の構造の説明等に使用したい。 教材を映し出し、その上に自由に書き込みができるもの。(書き出したものが印刷できると更によい。)
教科書の補助教材 (3)	同一教材におけるリテラシイ文 デジタル資料集	同一教室において能力差がある生徒の指導に使いたい。 資料集に載っている写真データをディスプレイに出し、説明や話し合いに使えると、共通画面に集中することができる。
辞書に関するもの (2)	漢文、古文、文法学習用コンテンツ 手話表現と国語の関連が視覚的にとらえられるもの。(DVDなど)	小テスト代わりに、短時間で知識の確認ができるかつ、基礎的な事項を指導する際にも活用できるもの。 品詞毎に手話を学ばせる。(例)形容詞、接続詞、副詞、ボキャブラリーを増やすためにも、日本語の微妙なニュアンスを伝えるという意味でも必要。)
評価に関するもの (4)	抽象概念を表す手話の違い 単元別の評価規準表 テスト問題作成システム シート、教科ふり返り 作文の評価表	(例)1.進歩、進化、発展、成長 2.文明、文化 3.伝統、しきたり、歴史、由来...細かい相違を表したもの。 単元ごとに評価規準がまとまつたものがあれば、定期的に評価を実施することができる。 加工可能なデータ(教科書に沿ったもの)があり、必要に応じて加工し、テスト問題として形式を整えられるもの。 聾学校の生徒を指導する際に、国語の教科として留意して指導すべき点をまとめたもの。 生徒が自分の課題(作文に関する)を理解するために、作文の評価の際に用いる。
文法事項の指導に関するもの (5)	英語の品詞と日本語の品詞との(文法)共通教材 日本語の文法力を向上させるドリル(高校生向け) 文法・語彙のテキストやワークブック	日本語の品詞分解をする時に英文の文法との共通点を思い出せるもの。助詞の意味など。 小学生レベルのものはあるが、それ以上の適当なものがない。単に敬語を覚えるといったものではなく、助動詞、助詞の適切な使い方を押さえつつ、文章力読解力を向上させるものがあるとよい。自立活動や国語の授業で使いたい。 高等部の生徒のレベルに合ったものがあれば、特に国語表現Ⅰの学習の中で使用したい。 イラストを使ったわかりやすい文法や敬語のテキストがあると、生徒の理解が進むと思われる。 聾覚障害者の発達段階に合った文法の体系をまとめたテキストまたはテストがあればよいと思う。
作文指導 (1)	書く力を育てるもの	短い文しか書けない生徒が多いので、書きたいという意欲がわくような内容のもの。
読解 (2)	<段階的にステップアップできる>「国語」の問題集 長文読解のワーク	小学校や中学校レベルの読解力や漢字力をつけたい場合、市販のものでは学年(例:小3など)が明記されており使いにくいため。 高校生用をそのまま使用すると、語彙が不足している生徒には内容が難しく使えない。中1から中2程度で学年

が印刷されていないもの。（生徒の自尊感情を尊重）

語彙指導に関するもの（5）	語彙カード 日常生活で使用する語彙指導教材やテスト 対義語、ことわざ、慣用句、四字熟語カード 敬語に関する問題集や教材	授業での復習や語句の定着を図るために活用。 日常で使うことば（教科書ではあえて習わないような）の習得の程度をはかれるような教材またはテスト 言葉の学習で、ゲーム形式で楽しく、くり返し使用する。 市販のものは、問題練習のみで、生徒にわかりにくいくともある。もっと場面や状況を限定して、使うことばを考えさせる方がほしい。
その他（1）	プレゼン用教材 日本語学習用音声PCソフト（外国语として発音・聞き取りの練習をするもの）	聴覚障害者がプレゼンを必要とした場面で使用できるもの 発音・聞き取り練習

第3項 「国語科」のまとめと考察

小学部から高等部まで、有効回答366名の回答であった。まず、基本情報として、記入者の教・聾学校・学部それぞれの経験年数は、いずれの学部においても、教職経験年数が21年以上の教員が30～46.9%を占めていた。その一方、聾学校経験年数が3年未満の教員が25.8～35.4%、6年未満であれば46～53.1%と約半数を占めている。また、学部の経験年数については、3年未満だと29.2～34.3%、6年未満では49.0～60.9%と半数以上を占めている。国語科の指導において、聴覚障害による学習上の困難さを教師が理解し、適切な実態把握と目標設定に基づき、指導内容を精選し、効率的授業を進めていくためには、国語科と聴覚障害の特性理解の双方の研修が必要である。校内での授業研究や研修を通しての専門性の継承・発展のための研修体制の強化が今後の課題と考えられる。

次に、国語科で使用されるコミュニケーション手段について、いずれの学部とともに手話付きスピーチが約80%以上を占めていることに加え、指文字も学部の進行に伴い約60%から約80%へと使用が増加している。板書を含む筆談も同様に35%台から約60%に増加しており、国語科においては、多様なコミュニケーションを用いながら、日本語の文字での伝達や確認、定着が重視されていることが伺えた。

教科書等の教材で、比較的活用が多い物は、全ての学部に共通して市販のワークブックや漢字ドリル、検定教科書であった。小学部では、写真や図鑑、次いで国語辞典や手話辞典であったが、中学部以降は国語辞典・漢和辞典が上位になり、国語科の教材文の意味理解のため、映像等の教材を活用しながら、徐々に言葉で言葉や文の意味を理解する方略に移行した指導が行われていることが伺えた。また、学校に保有されていないが、活用されている教材として、中学部以降は電子辞書が挙げられた。今後、必要な教材としての検討が必要と思われる。

自作教材について、記述内容を使途別に整理すると、「聴覚障害児童生徒に対する情報保障を目的とした教材」と「聴覚障害による学習の困難さへの対応を意図した教材」とに大きく分けられた。前者では、「教科書の内容提示に関する教材」に見られた拡大提示、ルビ挿入、

手話教材などが挙げられた。後者では、「教科書の内容理解を促すための教材」に見られた語彙・漢字の理解と定着のためのプリントやドリル、内容理解を促す絵や写真等の映像教材、国語科の目標達成を意図した読解や文章構成の理解を促すワークシート、国語科に関連した言語活動や言語事項に関するワークシートや作文教材などが挙げられた。その他、教科書の題材の発展や補助のための教材も挙げられた。国語科に関連した言語活動や言語事項に関する教材では、読む・書く活動を意図した教材も多く、現行学習指導要領でとり上げている教科指導での書く力の育成を意識した教材活用が多くなされていると考えられた。

一方で、日本語の文法や語彙指導を意図した教材も多く活用され、日本語の獲得と定着を意図した教材活用も多くなされていると考えられる。また、中学部以降、教材の現代文のバリエーションが増え、古典も登場することから、参考となる映像や動画、資料等の充実が求められていることも推察された。

提示や発表のための機器等で、比較的活用が多いものは、全ての学部に共通してパソコンとプロジェクター、デジタルカメラ、黒板や発表板であった。写真や動画のデジタル化、作パワーポイント資料の活用など、教材のデジタル化がさらに進むことをふまえた機器等の整備が必要だと思われる。

学習評価として、市販テストの活用は、学部が上がるにつれ、使用の割合は減少していた。特に、中学部以上については、授業のワークシート、宿題、テストと生徒の実態に応じて自作している回答が多くかった。さらに、作文や発表 VTR といった学習の成果物も評価の際に重視している。一方、国語科に関する言語事項として、文法や日本語の表記に関する評価テストも多く自作され、活用されていることも示された。

学部の進行に伴い、教材の内容が多岐になること、生徒の生活や行動範囲が広がること、就労や進学に向けた取組が必要なこと等を受け、教師が自作教材を活用し、対応していることが考えられる。

あると良い教材について、電子化された教材を望む回答が多くかった。小学部では、写真、動画、絵等の電子データ、中学部では問題集やドリルの電子データ、教科書の電子版等が挙げられたが、いずれも、児童生徒の実態に応じて、加工して活用したいとの記述が多くかった。どのような教材であれ、実際に指導する児童生徒の実態に応じて、担当者が手を加えて活用することから、手を加えるための素材が電子化されることへの期待が高いことが伺えた。特に高等部では、字幕・手話付き DVD への期待が多くかった。映像教材は多くのもの、字幕が十分でないことから活用に制限があり、字幕付き教材が充実することが期待される。

調査の結果から、国語科では、聴覚障害児童生徒への情報保障を意図した教材、聴覚障害による言語の遅れや偏りへの対応や配慮を意図した教材が活用されていることが示された。このような教材の使途を踏まえ、今後、国語科の目標を達成するための教材の在り方と効果的な活用について、より具体的な指導場面での検討が望まれる。

(庄司美千代)

第2節 算数・数学科

本節では、小学部から高等部までの各学部の教員 2 名を対象にして、教職経験、指導グループ人数、算数・数学の授業でのコミュニケーション手段、算数・数学に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題を考察した。

第1項 基本情報 教職経験年数（算数・数学：小学部・中学部・高等部）

（1）小学部

表 3-1-1 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、小学部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 36.6% で、聾学校経験年数の最多層は 0~3 年の 32.3% であった。今回の算数・数学の回答者としては、教職経験年数は 21 年以上であるが、聾学校での指導経験は 0~3 年という現状が読み取れる。また、所属学部経験年数の 0~3 年が 37.2% であった。

表 3-1-1 教職・聾学校・小学部経験年数 小学部 (N=161) (数値は%)

経験年数	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21以上
教 職	12.5	9.3	10.6	5.6	8.7	5.0	11.8	36.6
聾学校	32.3	24.8	11.8	8.7	8.1	3.1	2.5	7.5
小学部	32.3	24.8	13.7	9.3	4.3	1.9	3.7	8.1

（2）中学部

表 3-2-1 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、中学部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 31.4% で、聾学校経験年数の最多層は 0~3 年で 31.4% であった。今回の算数・数学の回答者としては、教職経験年数は 21 年以上であるが、聾学校での指導経験は 0~3 年という現状が読み取れる。また、所属学部経験年数の 0~3 年が 37.2% であった。

表 3-2-1 教職・聾学校・中学部経験年数 中学部 (N=121) (数値は%)

経験年数	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21以上
教 職	12.4	9.1	9.9	9.9	4.1	9.1	13.2	31.4
聾学校	31.4	19.0	21.5	9.1	7.4	6.6	1.7	3.3
中学部	37.2	25.6	15.7	8.3	4.1	2.5	2.5	1.7

（3）高等部

表 3-3-1 に、記入者の教職経験年数、聾学校経験年数、高等部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 48.6% で、聾学校経験年数の最多層は 0~3 で 30.5% であった。今回の算数・数学の回答者としては、教職経験年数は 21 年以上であるが、聾学校での指導経験は 0~3 年という現状が読み取れる。所属学部経験年数の 3~6 年が 29.5% であり、小学部・中学部と高等部では、最多層は同一ではない結果となった。

表 3-3-1 教職・聾学校・高等部経験年数 高等部 (N=105) (数値は%)

経験年数	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21以上
教 職	6	6.7	8.6	10.5	2.9	6.7	6.7	48.6
聾学校	30.5	24.8	13.3	10.5	4.8	4.8	3.8	7.6
高等部	22.9	29.5	14.3	10.5	4.8	7.6	1.9	6.7

(4) 所属学部

表 3-4-1 に、所属学部の担当を示した。小学部で算数を担当する回答者の 81.4%が学級担任であった。中学部で数学を担当する回答者の 43.0%が学級担任であった。高等部の数学を担当する回答者の 41.9%が学級担任であった。

表 3-4-1 担当 (所属) 小学部 (N=161) 中学部 (N=121) 高等部 (N=105) (数値は%)

担 当	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	81.4	7.5	1.2	8.1	0.0
中学部	43.0	28.1	5.0	18.2	5.8
高等部	41.9	25.7	6.7	16.2	7.6

(5) 指導している学年 (算数・数学 回答者)

表 3-5-1 に、回答者が指導している学年を示した。

表 3-5-1 担当学年

小学部 (1~6 N=161) 中学部 (1~3 N=121) 高等部 (1~3 N=105) (数値は%・複数回答)

	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	重複
小学部	16.1	18.6	19.9	16.8	11.2	11.2	11.2
中学部	50.4	49.6	53.7	-	-	-	16.5
高等部	56.2	44.8	50.5	-	-	-	21.9

(6) 指導グループ人数

図 3-6-1 に、回答者が、指導しているグループの人数を示した。小学部では、1 人での学習グループで授業を行っているとした回答が 28.9% であった。中学部では 2 人での学習グループで授業を行っているとした回答が 22.3% であった。高等部では 2 名での学習グループで授業を行っているとした回答が 27.2% であった。

表 3-6-1 学習グループ (学級) の児童生徒数

小学部 N=159、中学部 N=121、高等部 N=105 (数値は%)

	1名	2名	3名	4名	5名	6名	7名	8名以上
小学部	28.9	27	13.8	10.7	10.1	8.8	0	0.6
中学部	19	22.3	12.4	16.5	18.2	5.8	2.5	3.3
高等部	13.6	27.2	18.4	18.4	13.6	4.9	1.9	1.9

(7) 教育課程

表 3-7-1 に、回答者から得られた小学部（算数）、中学部（数学）、高等部（数学）の教育課程の集計結果を示した。準ずる教育課程は、小学部においては 92.5%、中学部では 91.7%、高等部は 87.6% であった。

表 3-7-1 学部別教育課程

	小学部 (N=161)	中学部 (N=121)	高等部 (N=105)	(数値は%・複数回答)
	準ずる教育	下学年適用	知的代替	自立活動主
小学部	92.5	25.5	21.1	3.7
中学部	91.7	38.8	25.6	5.0
高等部	87.6	27.6	20.0	1.0

第2項 結果

(1) コミュニケーション手段の状況

表 3-8-1 に、回答を集計したコミュニケーション手段の状況を示した。手話付きスピーチは小学部では 82.6%、中学部では 86.0%、高等部では 83.8% であった。指文字は、小学部では 63.4%、中学部では 65.3%、高等部では 56.2% であった。

聴覚口話は、小学部で 56.5%、中学部で 57.0%、高等部では 51.4% であった。

表 3-8-1 コミュニケーション手段

	小学部 (N=161)	中学部 (N=121)	高等部 (N=105)	(数値は%・複数回答)			
	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
小学部	56.5	82.6	7.5	33.5	12.4	63.4	13.0
中学部	57.0	86.0	10.7	43.0	4.1	65.3	8.3
高等部	51.4	83.8	16.2	39.0	1.0	56.2	2.9

※算数・数学担当者の回答から得られたコミュニケーション手段

(2) 教材の有無と活用（算数・数学）

教科書等の教材の有無と活用について、22 の教材（1 検定教科書、2 文部科学省著作本、3 附則の 9 条本、4 電子教科書、5 市販のワークブック、漢字ドリル、6 国語辞典、漢和辞典（紙媒体）、7 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）、8 手話辞典（紙媒体、電子媒体）、9 ことば絵じてん、10 図鑑（生活、生き物、乗り物等）、11 絵本（行事、物語、説明等）、12 紙芝居（行事、物語、説明等）、13 写真（人物、場所、活動場面等）、14 動画（ビデオカメラで撮影したもの）、15 カレンダー、16 絵日記（スケッチブックの記録等も）、17 新聞、18 広告、チラシ、ポスター、19 雑誌（幼児・児童向け、その他）、20 DVD（テレビ番組、解説等）、21 手話・字幕付きDVD、22 インターネット上の Web 情報）を示し、それぞれの教材に対して、「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

なお、表中、各項目についての有効回答を示したため、回答総数 (N) が変動している。

【小学部】

表 3-9-1 に、小学部算数科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。

小学部でよく使う教材は、検定教科書（90.1%）、市販のワークブック（78.9%）、カレンダー（30.4%）、写真（26.1%）、絵日記（23.6%）であった。時々使う教材としては、図鑑（45.3%）、ことば絵辞典（44.7%）、写真（41.6%）、絵本（42.2%）、手話辞典（39.8%）であった。

表 3-9-1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	
1	検定教科書	103	97.1	1.9	1	160	90.6	5	4.4	155	69.7	26.5	1.9	1.9
5	市販のワークブック、漢字ドリル	154	63.6	35.1	1.3	156	81.4	16	2.6	151	67.5	28.5	2	2
8	手話辞典	148	85.1	9.5	5.4	151	19.2	42.4	38.4	134	51.5	10.4	3	35.1
9	ことば絵じてん	151	93.4	6.6	0	151	19.9	47.7	32.5	135	54.8	15.6	0.7	28.9
10	図鑑	152	96.7	2.6	0.7	152	15.1	48	36.8	134	50.7	14.9	2.2	32.1
11	絵本	150	96	3.3	0.7	151	14.6	45	40.4	134	45.5	17.2	1.5	35.8
13	写真	141	66.7	23.4	9.9	152	27.6	44.1	28.3	132	26.5	32.6	14.4	26.5
15	カレンダー	144	80.6	17.4	2.1	152	32.2	32.2	35.5	132	37.1	23.5	9.8	29.5
16	絵日記	139	50.4	30.2	19.4	148	25.7	20.3	54.1	126	23	16.7	9.5	50.8

【中学部】

表 3-9-2 に、中学部数学科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。

中学部でよく使う教材は、検定教科書（84.3%）、市販のワークブック（57.0%）であった。時々使う教材としては、インターネット上の web 情報（35.5%）、手話辞典（33.9%）、カレンダー（28.1%）、市販のワークブック（27.3%）、国語辞典等（24.8%）であった。

表 3-9-2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	
1	検定教科書	118	97.5	0.8	1.7	118	86.4	4.2	9.3	115	64.3	27	0	8.7
5	市販のワークブック、漢字ドリル	111	57.7	36.9	5.4	109	63.3	30.3	6.4	106	51.9	36.8	3.8	7.5
6	国語辞典、漢和辞典	107	92.5	5.6	1.9	104	3.8	28.8	67.3	91	33	2.2	0	64.8
8	手話辞典	108	93.5	5.6	0.9	107	12.1	38.3	49.5	96	45.8	4.2	0	50
15	カレンダー	106	86.8	7.5	5.7	102	10.8	33.3	55.9	94	31.9	11.7	3.2	53.2
22	インターネット上の Web 情報	106	88.7	6.6	4.7	103	5.8	41.7	52.4	95	20	30.5	0	49.5

【高等部】

表 3-9-3 に、高等部数学科の授業で活用する教科書等の教材の有無と活用頻度、活用の状況を示した。

高等部でよく使う教材は、検定教科書 (84.8%)、市販のワークブック (41.0%)、であった。時々使う教材としては、手話辞典 (52.4%)、市販のワークブック (45.7%)、インターネット上の web 情報 (45.7%)、広告チラシ (26.7%)、カレンダー (23.8%)、新聞 (21.0%) であった。

表 3-9-3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
(数値は%)

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	使わ ない
1 検定教科書	101	98	0	2	100	89	6	5	96	81.3	12.5	2.1	4.2
5 市販のワークブック、漢字ドリル		66	31	3					96	44.8	50	5.2	89
8 手話辞典			81.3	12.5	6.3		93	11.8	59.1	29	84	58.3	9.5
15 カレンダー	94	81.9	3.2	14.9	89	3.4	28.1	68.5	74	28.4	5.4	10.8	55.4
17 新聞	92	77.2	4.3	18.5	85	3.5	25.9	70.6	69	7.2	24.6	1.4	66.7
18 広告、チラシ	92	69.6	7.6	22.8	84	1.2	33.3	65.5	76	5.3	30.3	1.3	63.2
22 インターネット上のWeb情報		75	5.4	19.6			87	14.9	55.2	29.9	77	20.8	49.4
											1.3		28.6

小学部、中学部、高等部における教材活用では、どの学部も教科書とワークブックや問題集が主要な教材として使用されている。また、小学部では、写真や絵日記、カレンダーなど具体物を使用しての授業が行われている傾向があった。そのほか、算数・数学の担当者として、教科書やワークブック以外に、国語辞典、手話辞典が使用されているところに教科指導における言語指導やコミュニケーションへの対応があることが推察された。

(3) 授業で活用する機器

算数・数学の授業で活用する機器として 26 の機器を設問で提示し、機器の有無・活用頻度・活用の状況を尋ねた。

小学部の授業でよく使われる機器は、黒板 (81.4%)、模造紙・画用紙 (52.8%)、集団補聴器 (36.0%)、数学カード (29.8%)、模型・おもちゃ (28.6%)、パソコン (23.0%)、発表板 (22.4%) であった。

中学部の授業でよく使われる機器は、黒板 (82.9%)、集団補聴器 (31.4%)、模造紙・画用紙 (19.8%) であった。

高等部の授業でよく使われる機器は、黒板 (82.9%)、パソコン (20.0%) であった。

(4) 自作教材（算数・数学）

算数・数学における自作教材について自由記述による回答を求め、104 (小 77、中 2、高

25) 件の回答を得た。記述内容を①使用用途、②教材例、③活用内容に分類し、さらに使用用途については、「教科書の内容の視覚的情報保障の充実」、「教科書の内容理解を促す教材」、「算数・数学に関連する言語活動や言語事項に関する教材」、「学習内容の定着、発展のための教材」の4カテゴリーに分けた。

また、「教科書の内容理解を促すための教材」については、「授業全体に関わるもの」と「特定の単元」の2つのカテゴリーに分けた。表2-4-1に、結果を示した。

表2-4-1 自作教材（回答104：小77、中2、高25）

使用用途	教材例	活用内容
教科書の内容の視覚的情報保障の充実（19） (小13) (中0) (高6)	拡大図 テープ図 文・言葉カード 計算カード スマートボード教材 教科書プレゼンファイル パワーポイントファイル	板書のため（小・高） 文章題を図示するために使用（小） 問題文を大きくして書く（小） 集団で一つのものを見るために使用（小） 教科書を画像として取り込み提示（小） 考え方の提示や問題文の提示（小・高） 問題文の提示（小・高）
教科書の内容理解を促すための教材（54） (小41) (中1) (高12)	学習のポイントカード 絵カード 文章題の絵図 授業全体 数カード（位取り板） 場面絵・情景絵 パワーポイント教材 紙芝居 プリント フラッシュカード 四則計算カード 九九カード 数え棒・タイル かけ算カード（よみ仮名付き） 立方体等の图形（自作）	学習の中の大切な言葉やポイントを掲示（小） 日常生活に結びつけイメージしやすくする（小） たし算、引き算の文章題を分かりやすくする（小） 計算問題や筆算の仕方の説明（小） 文章題の内容をイメージ化する（小） 操作の仕方が目で見てわかるように提示（小） 買い物シーンの紙芝居を作り、計算する（小） 生徒の実態にあわせて課題提示する（小・高） 単位・公式を示し思考活動の手がかり（高） 加減の計算（小） 授業の導入時に毎時間使用（小） 計算の時に使用する（小） 九九の暗記に使用（小） 視覚的に捉えやすくし問題提示後に使用（小）
特定単元等	時計の読み方・単位 三角形の敷き詰め図 プリント教材（エクセル） 『たしざんフラッシュ』 パワーポイント関数ソフト	ゲーム感覚で、時計の読み方・単位の理解（小） 三角形の内角の和を生徒が操作して理解（小） 一桁の瞬間的な四則演算のプリント教材（小） 計算スピードを高める（授業導入時：TV画面）（小） 图形や関数で使用（中・高）
算数・数学に関連する言語活動や言語事項に関する	文字カード 文カード 日にちの読み方シート	文章題の読み取りでキーワード提示する（小） 問題文を虫食いで提示し、重要な語を意識（小） 1日（ついたち）2日（ふつか）等の読み方（小）

する教材(12) (小 10)	用語カード あいうえおカード 数字カード	覚えなければいけない用語や法則を掲示(小) 説明及び児童の操作理解(小)
(中 0)	重要事項のカード化	重要なことをカードにまとめ、提示(小)
(高 2)	ことばカード	覚えさせたい言葉をカードに提示(小)
	数学用語カード	数学の専門用語・印象づけたい用語の短冊(高)
学習内容の定着、 発展のための教 材(19)	学習プリント ワークシート 紙黒板	文章題の練習・文章読解の経験を積ませる(小) 学習のふり返り(進度・理解度の対応)(小) 復習場面で使用する(小)
(小 13)	数学の週末課題	その週に行った学習を確認する課題を配布(つ まづいた所に焦点をあてて作成(小))
(中 1)		
(高 5)	基礎ドリル(数学) 復習問題 計算力テスト 基本問題プリント	授業内で問題提起及び家庭学習で使用(小) 電子黒板で2択問題を提示(集中力が増す)(小) 学校全体(小～高等部)を通し進級式で実施 基本問題を繰り返し練習(小・中・高)

(5) あると良い教材

「このような教材があったら良いと思われるもの」について自由記述を求めたところ、72件の回答を得た。回答についてその内容を検討し、次の10のカテゴリーに分類した。

分類のカテゴリーは、①「板書等の視覚情報の充実」、②「提示用(教科書等)ソフトウェア」、③「計算等練習ソフトウェア」、④「操作関連教材」、⑤「問題集・九九等練習教材」、⑥「テスト集計用教育事務ソフトウェア」、⑦「評価の検査(意欲・習熟度等)」、⑧「児童生徒用パソコン・電子機器」、⑨「他の学校の実践、データベース等」、⑩「言語事項に対応する教材」である。

小学部では、回答の多かった順では、板書等の視覚情報の充実(12人)、提示ソフトウェア(10人)、問題集・九九等練習教材(4人)であった。中学部では、評価の検査(6人)、操作関連教材(4人)、提示ソフトウェア(4人)であった。高等部では、評価の検査(6人)、板書等の視覚教材の充実(4人)、提示ソフトウェア(3人)であった。

表2-5-1に、具体的な記述内容を示した。

表2-5-1 あると良い教材(72回答 小34、中20、高18)

使用用途	教材例	活用内容
1 板書等の視覚情 報の充実(22) (小 13)	教科書の電子書籍 大きいそろばん 掛け図 軽量ホワイトボ ード(マス目)	パワーポイントに貼り付けて授業できるように(小) 黒板に貼れるマグネット式の大きいもの(小) 特に低学年でイメージをもたせやすい(小) ノートの書き方の模範として使用(小)
(中 4)	電子教科書	授業で、数直線や教科書の図版を拡大し提示(小・中)
(高 5)	語彙数が少ない生 徒の教科書	文章の意味がイラストつきで載っているもの(中)

		上下黒板 視覚情報をたくさん使いたい（高校の黒板）（中）
		個人ホワイトボード（マス目） 関数の単元で各自がグラフを作図し掲示（高）
2 提示用（教科書（図形ソフトエア（13）（小10）（中0）（高3））	iPadでのPCソフトウェア式のイメージ可視ソフトウェア 図形に関するソフトウェア ブロックの位取り板（3ヶタ） フラッシュ動画教材	アニメーションなど三次元（立体）表示（小） 数や量を操作しているかが分かるもの（小） 立体の見取り図や展開図の表示（小） 見て、あとどれくらい入るのか分かるもの（小） 例えば、確率でサイコロを何千とふるようなもの（高）
3 計算練習用ソフトウエア（3）（中0）（高0）	色々な関数ソフトウェア 数の計算ソフトウェア 自学用計算練習ソフトウェア 文章題ソフトウェア	任意の値でシュミレーションできるもの（高）かけ算、割り算（学校の誰もが使えるもの）（小） 習熟度に合わせて楽しみながら、効率よく行う（小） 文章問題の練習（文章題内容のアニメーション）（小）
4 操作関連教材（7）（小3）（中4）（高0）	計算のアプリサイト使用 教科書と同一の模型 具体物の模型 生徒が自作できる教材 文章題用具体物・絵・写真	web等経由でのシュミレーションや操作（小） 教科書の絵のイメージを实物で操作させる（小） 果物、虫（立体的な模型）（小） 自作教材で、計算や公式の手順・意図が理解（中） 文章題の読み取りでイメージしやすくなる（中）
5 問題集・九九等練習教材（6）（小4）（中1）（高1）	単元ごとの簡易問題集 九九のCD 日常生活の算数能力テスト 演習問題	どこの学年（単元）でつまずきがあるか（小） 聴覚障害があっても使えるもの（保護者の希望）（小） 買い物、食べ物の分配、単位と距離感、時間感覚（小）、数の発達段階にそった問題集 生徒の実態把握（中） 教科書と標準問題の間を埋める程度のレベル（高）
6 テスト集計用教育事務ソフトウェア（2）（小1）（中0）（高1）	企業開発ソフト（web等） 成績の比較	テストの結果を入れるだけで、得点集計と個人診断可能 個別の指導計画の参考になる（小） 過去の生徒とも比較できるもの（高）（例：1位〇年度 高2ペンネーム△点と表示）
7 評価の検査（意欲、意識、習熟度）（小0）（中6）（高6）	学習グループ分け評価 觳点別評価問題集 基本問題集 実態把握検査 評価プリント 自分でまとめるワークシート	生徒の実態に教材や教具は生徒に適しているか（中） グループ分けが適正に行われていることの根拠（中） テストを作成する際、観点別に評価するための参考 基本事項のみを学習する生徒評価（中） 数学の基礎力（小～中学）の把握（高） 単元別毎の確認プリント（多くの量が欲しい）（高） 単元後に理解度を測るため（高）
8 生徒用パソコン・タブレット		個人個人の分からないところが検索できるもの（中）

電子機器(3)	生徒用電子ノート	生徒の机に実物カメラがあり、書いたものがすぐに黒板に提示できるもの(中)
(小 0)(中 3)(高 0)	学習意欲をたかめるもの	学習後に、ネット上の教材を練習する(中)
9 他の学校の実践情報・授業実践・教授法問題データベース等(2)		他の学校での授業方法や実践が共有できるよう(中)
(小 0)(中 1)(高 1)	問題データベース	課題問題の作成(高)
10 言語事項に対応する教材(2)(小 0)	手話付きの数学史	数学に関する有名な人物の紹介(中)
(中 1)(高 1)	高等数学の手話表現	授業中に使いたい（現在は生徒と相談して決める）(高)

第3項 「算数・数学科」のまとめと考察

算数・数学を担当する先生方に教材の活用に関するアンケートを行った。回答をいただいた先生方の基本情報から、教員経験は21年以上で、小学部と中学部では、聾学校での指導経験は0~3年、高等部は4~6年の先生が多いということが示された。また、小学部や中学部での算数・数学の学習指導グループは、1~2人での学習グループが多いことがわかった。小集団で文章問題の理解や思考活動を深める上で、聾学校の算数・数学担当者の教材活用に影響をもたらす可能性もあると思われる。

教材の活用では、小学部、中学部、高等部とも、準じる教育課程のもとで検定教科書を使用し、市販のプリント等を使用しながら学力の定着を行っていることが読み取れる結果である。小学部では、教科書やプリント以外にも、カレンダー、写真、図鑑など具体物を教材として活用していることが示された。

自作の教材では、教師が対象児童生徒の実態に合わせて、教科書の拡大や一斉提示のための情報保障の工夫がなされている。また、教科書内容の理解においては、小学部では文章題の可視化のための工夫として、情景図や紙芝居の作成、キーワードのカード作成など、算数教科を指導するために必要な言語力の理解を促す教材が多く作成されていることがわかった。このことは、高等部でも、「数学用語カード」など、数学の専門用語や印象づけたい用語の短冊を作成して授業を行っているとの報告が挙がっている。総じて、聴覚障害教育において、具体的な経験を授業に取り入れたり、言語概念をかみ砕いて児童生徒へ説明したりするなどの手立てが行われているという状況があった。

次に、このような教材があったら良いと思われるものとして、電子教科書・関数や立体のイメージを分かりやすく提示するソフトウェアなど、算数・数学を担当される多くの先生方が活用の希望をしていることが示された。小学部では、実際の経験や操作活動を通じて、計算や図形の理解を進めていくわけであるが、中学部、高等部と学年が上がるにつれて、すでに理解した既習の算数・数学の概念や言葉を使って、新しい分野の理解に進むため、児童生徒が基礎力をどれくらい身についているのかを確実に把握することも重要になってくるところである。中学部と高等部の先生から、学習評価の検査（意欲・習熟度）の教材を求める意見が挙っているところは、聴覚特別支援学校の児童生徒の算数・数学の学習に於いて、準じる教育、下学年適用の授業を評価するうえでも重要な視点と考えられる。

その他、授業グループの人数が1~2名という実態と関連すると思われるが、過去の生

徒との成績の比較ができるものを求める意見があった。具体的な使用方法は「1位〇年度高2ペネーム△点のようなもの」という記載であった。教室の中で、競い合う同級生が少ない中で、学習意欲を高め、また近年の大学進学者が増えつつある聴覚特別支援学校の学力向上に向けた取組として、先生方の希望が述べられていると思われる。

聴学校での教員経験年数が0～3年の先生方が多い傾向があるなかで、「他の学校での授業方法や実践方法が共有できるように」という教材活用情報の流通に対する意見も、なんらかの方法を構築する必要があると思われる。多くの特別支援学校では、異動等の規則のために同一校勤務が数年間に限られる現実もあり、聴覚障害児童生徒の特性に対応する算数・数学の指導方法のノウハウを蓄積する必要があると思われる。

最後に、コミュニケーション手段と算数・数学教科の関係において、高等数学の手話表現についての課題も認識しておく必要がある。高等部の先生から、授業中に使う手話表現を生徒と相談して決めていくという回答があった。ICTの進展と同時に、教科指導で使用する専門用語も確実に、新しい内容が加わるなどの拡がりがある。生徒が分かるコミュニケーション手段で授業の解説を行いながらも、特に高等部や専攻科では専門用語そのものを、生徒が理解し使えるようにしていく必要があると思われる。

(藤本裕人)

第3節－1 外国語活動

新学習指導要領では、小学校学習指導要領に準じ、外国語活動を設けている。

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領¹⁾において、

- 小学部における外国語活動の目標、内容及び指導計画の作成と内容の取扱いについては、小学校学習指導要領第4章に示すものに準ずるほか、次の事項に配慮するものとする。
- 1.児童の障害の状態等に応じて、指導内容を適切に精選するとともに、その重点の置き方等を工夫すること。
 - 2.指導に当たっては、自立活動における指導との密接な関連を保ち、学習効果を一層高めるようにすること。

と示されている。

また、小学校学習指導要領解説²⁾では、外国語活動の目標として、

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
 - ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
 - ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。
- 以上の三つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することで、中・高等学校等における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくろうとするものである。

と示されている。

次に、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領³⁾ 第2章 各教科において、[外国語]について、

1 目標

外国語に親しみ、簡単な表現を通して、外国語や外国への関心を育てる。

2 内容

- 英語 (1) 身近な生活の中で見聞きする英語に興味や関心をもつ。
(2) 簡単な英語を使って表現する。

その他の外国語

その他の外国語の内容については、英語に準ずるものとする。

と示されている。

特別支援学校（聴覚障害）においては、平成23年度から小学部で完全実施となった現行学習指導要領の外国語活動に対して、移行期間よりALTの導入や中学部・高等部教員の協力等、校内の指導体制を整えてきた状況があった。外国語活動の指導に当たっては、基本的には「HiFriends!」⁴⁾を活用するとともに、自立活動における指導との密接な関連を保ち、学習効果を高めるようにしていくことが大切であるが、聴覚障害児の特性を踏まえた指導には、配慮や工夫が求められる。

本調査では、調査票の記入様式は同一であるが、本節では、その目標や指導内容が異なることから、外国語活動と英語科を分けて検討した。

- 1) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第4章 外国語活動(平成21年3月告示)
文部科学省
- 2) 小学校学習指導要領解説 外国語活動編 平成20年8月 文部科学省
- 3) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第2章 各教科(平成21年3月告示)
- 4) 文部科学省が作成した外国語活動のための補助教材

第1項 基本情報

(1) 回答数

表3-1-1に、回答のあった学校数、総回答数、有効回答数を示した。有効回答数は、経験年数の未記入があった回答4件を削除した。なお、結果の集計に当たっては、複数学年担当について、地域バランスを考慮し、ランダムに1学年を選択した。

回答のあった学校数82校、総回答数132件、有効回答数は128件（回答率96.9%）であった。

表3-1-1 回答のあった学校数、総回答数、有効回答数

回答学校数	総回答数	有効回答数
82校	132件	128件

(2) 教職、聾学校、小学部経験年数

表3-1-2に、教職、聾学校、小学部経験年数を示した。教職経験21年以上の担当者が32.8%、聾学校経験0～6年の担当者が51.6%と半数近くを占めた。また、小学部経験年数では0～6年の担当者が59.4%と半数を越えた。

表3-1-2 教職、聾学校、小学部経験年数

N=128(%)

	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21年以上
教職	10.2	13.3	9.4	7	6.2	11.7	9.4	32.8
聾学校	28.9	22.7	19.5	9.4	7	3.9	3.1	5.5
小学部	35.2	24.2	18.8	10.2	1.6	5.5	2.3	2.2

(3) 担当（所属）

表3-1-3に、所属の担当を示した。学級担任が71.9%であった。

表3-1-3 担当（所属）

N=128(%)

担当（所属）	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
	71.9	11.7	0.8	10.2	5.4

(4) 担当学年

表3-1-4に、担当学年を示した。外国語活動を行う5年生、6年生の担当者が89%であった。

表3-1-4 担当学年

N=128 (%)

担当学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	重複
	0.8	0	0.8	3.1	40.6	48.4	6.3

第2項 結果

(1) コミュニケーション手段

表 3-2-1 に、コミュニケーション手段を示した。手話付きスピーチが 75.8%、聽覚口話は 54.7% であった。指文字の使用も 68.8% と高かった。

表 3-2-1 コミュニケーション手段

N=128 (%)

聽覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュー ド スピーチ	指文字	その他
54.7	75.8	8.6	44.5	9.4	68.8	25

(2) 児童数及び指導者数

表 3-2-2 に、児童数と指導者数を示した。2~3 名で児童に対し、58 人 (46.0%) の回答があった。児童数 5 人以上のグループ指導を行っていると回答したのは 51 人 (40.5%) で、児童数 1 名に指導していると回答したのは 17 名 (13.8%) であった。

表 3-2-2 児童数及び指導者数

N=126 (未回答 2 名)

児童数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
回答数	17	26	32	17	9	9	8	4	1	2	0	1

(3) 教科書等の教材の有無と活用頻度

教科書等について 23 の教材 (1 英語ノート 1、2、2 教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)、3 市販の英語テキスト、ワークブック、4 カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)、5 語学学習用 CD、6 英和辞典、和英辞典(紙媒体)、7 国語辞典(紙媒体)、8 電子辞書(英和辞典、和英辞典)、9 手話辞典(紙媒体、電子媒体)、10 ことば絵じてん、11 図鑑(生活、生き物、乗り物等)、12 絵本(行事、物語、説明等)、13 紙芝居(行事、物語、説明等)、14 写真(人物、場所、活動場面等)、15 動画(活動場面、人物、場所等)、16 カレンダー、17 絵日記(スケッチブックの記録等)、18 新聞、19 広告、チラシ、ポスター、20 雑誌(幼児・児童向け、その他)、21 DVD(テレビ番組、解説等)、22 手話・字幕付きDVD、23 インターネット上の Web 情報) を提示し、それぞれについて、「学校に保有する・個人で保有する・どちらにもない」の選択肢から一つ回答することを求めた。また、23 の教材について、「よく使う・時々使う・使わない」の選択肢から一つ選択することを求めた。表 3-2-3 に、教科書等の教材の有無と活用頻度の回答結果を示した。

80% 以上「学校に保有する教材」としては、「英語ノート 1、2 (96.9%)」、「国語辞典 (92.0%)」、「図鑑 (89.4%)」、「絵本 (86.2%)」、「ことば絵じてん (88.6%)」、「手話辞典 (83.1%)」が挙げられた。個人で保有する教材としては、「市販の英語テキスト、ワークブック (32.3%)」、「電子辞書 (30.9%)」が挙げられた。

よく使う教材としては、「英語ノート 1、2 (45.5%)」、「カード教材 (49.1%)」が挙げられ、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 60% 以上挙げられた教材は、「英語ノート 1、2 (72.3%)」、「カレンダー (65.8%)」、「インターネット上の Web 情報 (64.6%)」で

あった。

50%以上「学校に保有」されており、70%以上「使わない教材」としては、「手話・字幕付きDVD」、「語学学習用CD」、「紙芝居」、「新聞」が挙げられた。

表 3-2-3 教科書等の教材の有無と活用頻度 (%)

教材	N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない
1 英語ノート 1、2	128	96.9	0.8	2.3	123	45.5	26.8	27.6
5 語学学習用CD	124	55.6	4.8	39.5	108	4.6	20.4	75.0
8 電子辞書（英和辞典、和英辞典）	123	4.9	30.9	64.2	99	8.1	10.1	81.8
9 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	124	83.1	9.7	7.3	117	15.4	35.9	48.7
10 ことば絵じてん	123	88.6	6.5	4.9	119	17.6	40.3	42.0
11 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	123	89.4	4.1	6.5	118	11.0	46.6	42.4
12 絵本（行事、物語、説明等）	123	86.2	5.7	8.1	118	10.2	39.0	50.8
13 紙芝居（行事、物語、説明等）	123	78.9	1.6	19.5	113	1.8	17.7	80.0
16 カレンダー	123	76.4	9.8	13.8	114	14.0	51.8	34.2
18 新聞	117	70.9	9.4	19.7	114	3.5	34.2	62.3
22 手話・字幕付きDVD	116	51.7	3.4	44.8	113	1.8	23.9	74.3
23 インターネット上のWeb情報	115	77.4	8.7	13.9	116	19.8	44.8	35.3

(4) 教材の活用状況

表 3-2-4 に、(3) と同様に、教科書等について 23 の教材を提示し、それぞれについて、「そのまま使う・手を加えて使う・自作する・使わない」の選択肢から一つ回答することを求めた。表 3-2-4 に、教材の活用状況を示した。

「そのまま活用する」教材としては、「国語辞典（43.4%）」、「図鑑（45.0%）」、「手話辞典（43.8%）」、「ことば絵じてん（41.7%）」であった。

「手を加え」及び「自作」を合わせて上位だった教材は、「カード教材（63.6%）」、「英語ノート 1、2（50.9%）」、「写真（48.5%）」であった。

表 3-2-4 教材の活用状況 (%)

教材	N	その まま	手を 加え	自作	使わ ない
1 英語ノート 1、2	120	25.0	44.2	6.7	24.2
4 カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	107	24.3	23.4	40.2	12.1
7 国語辞典（紙媒体）	106	43.4	3.8	0	52.8
9 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	112	43.8	6.3	1.8	48.2
10 ことば絵じてん	103	41.7	17.5	1.0	39.8
11 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	109	45.0	13.8	2.8	38.5
14 写真（人物、場所、活動場面等）	103	29.1	32.0	16.5	22.3

(5) その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について自由記述を求め、以下のカテゴリーに分類された（表3-2-5）。

46 の自由記述があった。学習指導要領のねらいに基づき、外国語活動で使用されているその他の教材や自作教材を「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」に分類した。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」としては、パワーポイント資料（自己紹介）、文カード、絵カード（インターネット教材から購入し、ラミネート加工）、ピクチャーカード、具体物や模型、アルファベットカード、bingoシート、Hi! friends! (H.24～)、英語ソングビデオ、歌のCD、歌詞カード、パワーポイント資料（単語、単文に読み方の字幕も挿入したもの）、同（英単語・読み方（カタカナ）・意味（日本語を表示））、同（新出表現の英文）、同（身近な物で絵と写真、単語、発音を提示）、CDROM（ASL表現の動画で動物の名前、色々な国のあいさつを表すもの）、Hi Friends② DVD、絵カード（数字、果物・動物、乗り物、絵カード、ピクチャーカード、同単語カード（スペル・読み方）、英文・英単語カード（単語・文に発音、読み方アクセントを記入）、フラッシュカード（英単語・構文を記載）、カード教材（英語、日本語、訳、手話）、学習内容のキーワード、キーセンテンス短冊カード、ワークシート、プリント、英単語表、フォニックスカード、アルファベット等が挙げられた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」としては、の英語カード、日常生活（学校 地域社会）で目にする外国語、ASL のDVD、ビデオが挙げられた。また、「文部科学省教材」として、「Hi, friends!」が挙げられた

表 3-2-5 その他の教材や自作教材

使途	教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るために、話したりする（38）	パワーポイント資料（自己紹介）	導入～まとめまで、視覚的教材として活用。
	文カード	毎時間、導入の挨拶で「あいさつ文」と「顔カード」を活用。
	絵カード（インターネット教材から購入し、ラミネート加工）	単語の紹介、ゲーム等で活用。
	ピクチャーカード	ゲームや外国語に慣れ親しむ際に活用。
	具体物や模型	ロールプレイでの会話で活用（食べ物、日用品など）。
	アルファベットカード	ゲームをする際に活用。
	bingoシート	学習内容を、楽しみながら反復練習をさせるときに活用。
	(H.24～)Hi! friends! 文科省	英単語にふれる、英語を使ったコミュニケーションの経験をし、楽しむ場面で活用。
	歌（3）	英語ソングビデオ（日本LL教育センター）
		毎時の導入で意欲づけや雰囲気づくりのために活用。

単語、文の聞き取りや表出（24）	英語の歌の CD	「かっこう」等、日本で親しまれている歌を英語の歌詞で歌ったりすることで、外国語の活動の導入とする。 「アルファベットソング」・「日よう月よう火よう・・・」のように、アルファベットや英単語に親しむことを目的に歌うこともある 出来るだけ、児童にとって楽しい発見につながるよう配慮するようにしている。
	歌詞カード	歌を歌う時に発音を記入したカードを見ながら歌う。
	パワーポイント資料（単語、単文に読み方の字幕も挿入したもの）	単語や短文の聞きとりや表出の際、音声教材の代わりに字幕を挿入したスライドを提示し、見て分かるようにしている。 英語ノートを基に自作。絵と英語とカタカナの読みを同時に提示する資料で、児童によって使う場合と使わない場合がある。
	パワーポイント資料（英単語・読み方（カタカナ）・意味（日本語を表示））	単元で必要な単語をとり出し、読みながら練習する。
	パワーポイント 資料(新出表現の英文)	新しい表現の導入で活用。クイズ形式で表示していく。
	パワーポイント資料(身近な物で絵と写真、単語、発音を提示)	一つのテーマを決め言葉を増やし、英語での言い方を学習する
	CDROM (ASL 表現の動画で動物の名前、色々な国のあいさつを表すもの)	導入や授業の一つとして活用。
	Hi Friends② DVD	音声、発音を聞いたり、ゲームをしたりする
	絵カード（数字、果物 動物、乗り物）	数を数える 物の名前を覚える際に活用。
	絵カード（英語ノートの絵を B5 サイズにカラーコピーしラミネート加工）	Hi. friends!に出てくる単語を学習する際に活用（提示、掲示）

		<p>外国語活動の中で、挨拶等日常会話の場面で提示し、視覚的に英語に親しむ目的で活用している。</p> <p>フラッシュカード（英単語・構文を記載） 每時間に活用。授業後に掲示。新出単語を覚える、表出の手がかりとなるように活用。</p> <p>カード教材（英語、日本語、訳、手話） 每時間活用する。その後ろ下の壁に貼って見られるようにしている。</p> <p>学習内容のキーワード、キーセンテンス短冊カード 本時のキーワードを提示する時に活用。</p>
書く活動（4）		<p>ワークシート 必要に応じて使用。</p> <p>プリント 書き込みのスペースや説明等、児童の実態に合わせて使用。</p> <p>イラストと単語を示したプリントで、くり返し書いて定着を図る。</p>
授業以外でも活用（2）		<p>英単語表 授業時、プリント等で出てきた英単語を、カテゴリー(数字、曜日、色など)に分けてまとめている。</p> <p>の時間割 教科名の単語カードを毎日貼り替え、1日の時間割を教室に掲示する。</p>
アルファベット（5）		<p>フォニックスカード カード（アルファベット） アルファベットの形や音を確認する。随時。一つ一つのスペルの書き方や大きさ、バランスなどを確かめるために、使うもの。</p> <p>アルファベットの読み方を覚えるため、フラッシュカードとして使う。</p> <p>ASL の指文字で表したり、発音したり、大文字と小文字をリンクさせるために使う。</p> <p>カードは、大文字、小文字、発音の3種類を自作。アルファベットと発音を提示毎時間の導入で活用。全員で読んで、発音を確認し覚えたものは外して、くり返し学習する。</p>
日本と国との言語や文化について体験的に理解を深めるための材料（4）	日本語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語と違うを知り言葉の面白さや豊かさに気づく	<p>自作の英語カード等 日本語カードと英語カードを用いてゲームをしながらカードあわせをする。</p> <p>日常生活（学校 地域社会）で目にする外国語 市販のワークブックと関連づけて生活で目にするものを見つけ出したり、覚えているものを話題にしたりして生活に根ざすようにしている。</p>

	ASL の DVD	ASL(American Sign Language)に親しむコーナーの際に活用。
日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、様々なものの見方や考え方があることが多く、多くの見方や考え方があり、多々	ビデオ	ヨーロッパの景色や人々の様子を撮影したもの
解を深める	異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深める	
文科省教材(4)	Hi, friends! (紙媒体、DVD)	毎時間活用する 教材の補助的な活用を行う 付属の DVD をテレビに投影して使用している。 毎時間の授業のテキスト

(6) その他の機器や自作教材

その他の機器や自作教材について自由記述を求め、機器「提示・板書」と「教材作成」のカテゴリーに分類された(表 3-2-6)。「提示・板書」では、パソコンやプロジェクター等の映像機器や貼り付け黒板で使用され、全体指導での活用が図られていた。「教材作成」では、カート等の教材保全のためにラミネーターが使用されていた。

表 3-2-6 その他の機器や自作教材

使途	機器名	場面や活用方法
提示・板書	パソコン、プロジェクター、スクリーン、大型テレビやモニター	パソコンから TV 画面に英単語や英文を絵とともに写し、児童に印象づける。
	ペントラブレット	表示したデータに書き込む際に活用。
	貼りつけ式黒板	英語の罫線が入った貼りつけ式(マグネット)黒板を用いて、アルファベットや英単語の学習を行う際に活用。
教材作成	拡大コピー機 A1～B1	基本的な表現や会話、文章を拡大して黒板などに掲示するために活用。
	ラミネーター	カード作りの際に活用。

(7) あると良い教材

66 の自由記述があった。(5) と同様に、「あったら良い」と思われる教材を「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」に分類した。表 3-2-7 に、あったら良いと思われる教材を示した。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」としては、BINGO ゲーム集、ダンスやゲームなどの動画、3D の字幕付体感型の英会話教材機器、動画や PC ソフト、スキットを撮影した DVD、英会話の動画（字幕付き）、会話場面、解説、部分練習等、ASL の会話や基本表現の動画（字幕付き）、簡単な会話を場面ごとに撮影した動画（JSL）、読み方の表記付き単語カード、短冊、曜日や動物、果物などカテゴリーでまとまっている単語表、短冊、単語・基本文型学習ソフト、フォニックスルールを学べる動画(アルファベット、口形付き)、イギリス発音の DVD、日本で馴染みのあるアニメーションの英語版（字幕付き）、簡単な英語の絵本等が挙げられた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」としては、外国語を外国の手話で表現している動画、外国のろう者同士の会話を撮影した動画（字幕付き）、外国人が手話でコミュニケーションしている様子の動画（字幕つき、日本語訳付）、外国の聾学校の様子や手話などの DVD や動画、ASL の動画辞典、ASL での簡単なあいさつや表現の方法を示した DVD、外国の暮らし（食生活、遊び、挨拶、行事、習慣など）、文化、学校（学校、聾学校）、会話などを撮影した動画、ASL ができるろう者、日本手話 ろう教師モデルの DVD（ASL や国際手話）等が挙げられた。

「文科省教材」としては、Hi, friends! や英語ノート、副読本に合った絵カードやフラッシュカード、小学生向けの英語ノートに準拠したドリル、ろう学校用の外国語活動用教材等が挙げられた。

表 3-2-7 あると良い教材

使途	教材名	場面や活用方法
外 國 語 を 用 い て 積 極 的 に コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を 図 る た め の 教 材 (9)	BINGO など音声を使わなくてもできる楽しいゲーム集 様々なダンスやゲームなどの動画 3D の字幕付体感型の英会話教材機器 クイズやゲーム感覚で、単語や英会話の学習が学級や学年単位で進められるような動画や PC ソフト。 よく使われる歌の身ぶりなどを入れた動画（ABC の歌やセブンステップスなど）字幕がありノーマルスピードとゆっくりスピードの両方があるもの 簡単なフレーズを入れたスキットを撮影した DVD	ゲームや体を動かすことを通じて、自然に英語の音に慣れる活動を設定する。 意欲を持たせる臨場感がある。シュミレーション的なものであればいいと思う。 英語力を養うと共に、英語力の判定にも活用したい。 楽しみながら体で英語を覚えることができる。ウォーミングアップで使える ロールプレイをする際の導入で児童に見せて手本とする。

	<p>積極的に外国語を聞いたり、話したりする（3.5）</p> <p>単語、文の聞き取りや表出（2.6）</p>	<p>英会話の動画（字幕付き） ・会話場面、解説、部分練習等も含まれていると良い。</p> <p>ASL の会話や基本表現の動画（字幕付き）</p> <p>簡単な会話を場面ごとに撮影した動画（JSL、ASL と字幕付）</p> <p>読み方の表記付き単語カード、短冊、教科書</p> <p>曜日や動物、果物などカテゴリーでまとまっている単語表、短冊(イラスト付きが良い)</p> <p>単語・基本文型学習ソフトやアプリケーション</p> <p>フォニックスルールを学べる動画（アルファベット、口形付き）</p> <p>アメリカ発音でなくイギリス発音のDVD(せめてアメリカ東部発音)</p> <p>日本でも馴染みのあるアニメーションの英語版（字幕付き）</p> <p>簡単な英語の絵本</p>	
<p>日本と外国の言語や文化について体験的 に理解を深めるための教材（2.3）</p>	<p>親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（1.0）</p>	<p>外国語を外国の手話で表現している動画</p> <p>様々な外国語手話のDVD</p>	

	<p>外国のろう者同士の会話を撮影した動画(日本語の字幕がつけられるもの)</p> <p>外国人が手話でコミュニケーションしている様子の動画(字幕つき、日本語訳付)</p> <p>いろいろな外国の聾学校の様子や手話などのDVDや動画</p> <p>ASL の動画辞典(知りたい ASL を検索すると動画で教えてくれる)</p> <p>ASL 教材</p> <p>外国の手話(ASL など)で簡単な会話をしている様子を撮影した動画</p> <p>日常生活で目にする外国語を撮影した写真や動画</p> <p>ASL での簡単なあいさつや表現の方法を示したDVD等</p>	<p>手話はそれぞれの国によって変わるという理解のために使う クイズ形式にできるよう日本語の字幕を取りはずしできるよう工夫すれば、子どももゲーム感覚で異文化に触れられる。</p> <p>世界には、あらゆる言語があり、手話も地域によって異なることを学ぶ。</p> <p>いろいろな外国の文化や、同じ境遇にいる人たちを知り、外国では言葉が違うように手話もちがうことも知る。</p> <p>授業準備や授業中子どもが知りたい ASL をその場で提示する。</p> <p>手話での指導なので、子供たちに ASL を通して外国語とふれあってほしい。</p> <p>手話にも違いがあることを知り、外国の言葉や文化に興味をもたせる。字幕付き(その国の言語と、読み方(カタカナ)、日本語)が良い。</p> <p>自分たちの生活と外国語のかかわりを知る場面で使う。</p> <p>日本語の手話と対応させるのではなく、ASL で伝えることで、外国語を学習してしる意識を作りやすいため。教師も学習できる。</p>
日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく (1)	<p>外国の暮らし(食生活、遊び、挨拶、行事、習慣など)、文化、学校(学校、聾学校)、会話などを撮影した動画</p> <p>同上(字幕+手話付き)</p> <p>同上(字幕付き) BGM 無し。</p> <p>外国の暮らしを撮影した写真データ</p> <p>外国の暮らしに関する本</p>	<p>外国の暮らしや文化を知る、日本との違いを知る、多様な文化があることを知る等の場面で活用。写真や絵より動画の方がイメージしやすい。</p> <p>付属の単語カード(発音表記付き)が良い。パワーポイント等で提示用の教材を作成し、外国の生活の様子を見て、日本での暮らしとの違いを考えさせる。</p> <p>異文化を知る学習で使用する。教室に置いておき、いつでも自由に見ることができるよい。</p>
ASL ができるろう者		

		日本手話 ろう教師モデルのDVD (ASL や国際手話)
文科省教材 (8)		<p>Hi, friends!や英語ノート（紙媒体、DVD 等の付属教材）</p> <p>Hi, friends!の副読本に合った内容の絵カードやフラッシュカード</p> <p>小学生向けの英語ノートに準拠したドリル</p> <p>ろう学校用の外国語活動用教材</p> <p>付属の音声教材に字幕があると良い。授業全体で活用することができる。</p> <p>各単元の学習内容を指導する時に、使いたい。（デジタル教材の絵カードの絵だけでは不足）</p> <p>授業内容を深めるためにカードや発音を表記するなど視覚化した教材があると、「見る、読む」活動が多く設定しやすい。</p> <p>授業のまとめ、宿題、学習評価に使用する。</p>

第3項 「外国語活動」のまとめと考察

本調査票では、82 校から有効回答数 128 件（回答率 96.9%）の回答を得た。回答した教員は、教職経験 21 年以上が 32.8%、聾学校経験 0～6 年が半数近くを占め、小学部経験年数 0～6 年が約 60% であった。また、回答した教員の 72% は、学級担任であった。また、89% が、外国語活動を行う 5 年生、6 年生の担当者であった。

コミュニケーション手段は、手話付きスピーチ（75.8%）、指文字（68.8%）、聴覚口話は（54.7%）であった。また、日本手話の使用も 10% 弱あった。

児童が 5 人以上のグループ指導を行っていたのは 40.5%、児童が 2～3 名では 46.0%、児童数 1 名では 13.3% であった。外国語活動は、他者とのコミュニケーション活動を取り入れることより、活動が更に活発になることが期待される。このため、5 年生と 6 年生での合同活動など、グループでの指導活動など工夫する必要があろう。

教科書等の教材の保有については、80% 以上、学校に保有する教材としては「英語ノート 1、2（96.9%）」があり、実際に、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 72.3% と高い利用率であった。また、50% 以上「学校に保有」されており、70% 以上「使わない教材」としては、「手話・字幕付き DVD」、「語学学習用 CD」等があったが、内容が適合していなかったり、聞き取りに困難性があるためと考えられる。

教材の活用状況を見ると、「英語ノート 1、2」が 50.9%、「カード教材」が 63.6%、それぞれ、手を加えたりされていた。「英語ノート」は利用率が高く、教師により工夫がされている状況があり、今後、聴覚障害児に配慮し改善されていくことが望まれる。

その他の教材や自作教材については、自由記述による回答を求め、1/3 の回答を得た。本調査票では、学習指導要領のねらいに基づき、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」から分類した。記述数の割合は、「外国語を用いて積極的にコミュニケ

ーションを図るための教材」は82%と殆ど占めた。「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」と「文部科学省教材」はともに9%であった。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」では、具体的な活動として、パワーポイント資料や絵カードを作成し、英単語に触れ、クイズやゲームを楽しみ、意欲を高める活動を行っていること伺われた。特に、外国語に親しむことを目標とした活動となっていた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」については、数が少ないが、ASL(American Sign Language)コーナーを設けたり、外国の景色や人々の様子を撮影したVTRを視聴するといった活動が示された。地域や学校事情により、具体的な体験をする機会が少ないことが予想されるが、VTR視聴による疑似体験の他、地域の博物館や資料館への社会見学等の機会を利用することも必要であろう。

また、「文部科学省教材」として、教科書付属のDVDを使用する活動が挙げられた。外国語活動ということでは、英語に限らず、今後さまざまな外国語の副教材を活用することも必要となろう。

「あると良い」と思われる教材については、記述数の割合は、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」は54%と半数以上となり、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」は34%、「文部科学省教材」は12%であった。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」では、「教室内に掲示し、英語にふれる機会をふやしたい。」、「英語力を養うと共に、英語力の判定にも活用したい。」というよう、楽しませることや評価に使いたい教材が挙げられた。言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ることに関する教材を求める意見は見られなかった。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」では、「手話にも違いがあることを知り、外国の言葉や文化に興味をもたせる。字幕付き(その国の言語と、読み方(カタカナ)、日本語)が良い。」や「異文化を知る学習で使用する。教室に置いておき、いつでも自由に見ることができるものだとよい。」といった教材を求める意見があり、何れも子どもには、できるだけ多く外国に触れる機会や体験を積ませたいものであった。

「文部科学省教材」では、「各单元の学習内容を指導する時に、使いたい。(デジタル教材の絵カードの絵だけでは不足)」や「授業内容を深めるためにカードや発音を表記するなど視覚化した教材があると、「見る、読む」活動が多く設定しやすい。」等、量的に教材提供を望む意見が出されていた。

外国語担当者は、本活動の目標を踏まえ、指導時間数が少ないので、精力的に指導に当たっている状況が示された。外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することを第1議としながら、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付いたり、外国の言語や異文化を理解することで、多様なものの見方や考え方があることも触れさせたい。

外国語活動は英語科と目標に共通点もあるが、異なるものもあり、ねらいに即した実践の積み重ねが期待される。

(原田公人)

第3節－2 英語科

第1項 基本情報

(1) 回答数

表3-2-1に、回答のあった学校数とそのうち回答があつた中学部と高等部の担当者の内訳を示した。中学部が設置されている学校76校のうち、英語科の担当者の回答数は112名であった。また、高等部が設置されている学校60校のうち、英語科の担当者の回答数は98名であった。

表3-2-1 回答のあつた学校数と中学部及び高等部の担当者数

	回答があつた学校数（校）	回答があつた担当者の人数（名）
中学部	76	112
高等部	60	98
(中学部 N=112、高等部 N=98)		

(2) 教職・聾学校・学部経験年数

表3-2-2に、教職経験年数を示した。教職経験年数は、中学部(35.7%)、高等部(40.4%)ともに「21年以上」が高い割合が示された。

表3-2-2 中学部及び高等部の回答者の教職経験年数 (%)

	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21年以上
中学部	9.8	10.7	11.6	9.8	8.0	6.3	8.0	35.7
高等部	4.0	14.1	8.1	13.1	6.1	6.1	8.1	40.4
(中学部 N=112、高等部 N=98)								

表3-2-3に担当者の聾学校経験年数を示した。中学部(46.4%)、高等部(45.9%)ともに「0～3年未満」に高い割合が示された。

表3-2-3 中学部、高等部の回答者の聾学校経験年数 (%)

	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21年以上
中学部	46.4	17.0	12.5	13.4	8.0	0.9	0.0	1.8
高等部	45.9	19.4	13.3	7.1	7.1	0.0	3.1	4.1
(中学部 N=112、高等部 N=98)								

表3-2-4に、中学部、高等部の回答者の学部経験年数を示した。中学部の経験年数は「0～3年」が49.5%と約半数を占めており、次いで「3～6年」が18.0%、「6～9年」が20.7%であった。また、高等部の経験年数は「0～3年」、「3～6年」が31.3%であった。次いで「6～9年」が13.5%であった。

表 3-2-4 中学部、高等部の回答者の学部経験年数

(%)

	0~3未満	3~6未満	6~9未満	9~12未満	12~15未満	15~18未満	18~21未満	21年以上
中学部	49.5	18.0	20.7	8.3	3.6	1.8	2.7	0.9
高等部	31.3	31.3	13.5	8.2	6.3	2.1	2.1	5.2

(中学部 N=112、高等部 N=98)

(3) 中学部、高等部の指導グループ人数

指導グループとして最も多いのは、中学部で2名と4名、高等部で2名と3名であった。

また、7名以上のグループで学習しているとの回答が中学部で1校、高等部で7校あった。

第2項 結果

(1) コミュニケーション手段

表 3-3-1 に、中学部のコミュニケーション手段、表 3-3-2 に高等部のコミュニケーション手段を示した。

中学部は、「手話付きスピーチ（85.8%）」、「聴覚口話（60.2%）」であった。また、高等部では、「手話付きスピーチ（90.9%）」、「聴覚口話（62.6%）」であった。

表 3-3-1 中学部の英語の授業で用いるコミュニケーション手段の内訳 (%)
(N=112)

聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
60.2	85.8	9.7	53.1	6.2	74.3	20.4

表 3-3-2 高等部の英語の授業でコミュニケーション手段の内訳 (%) (N=98)

聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
62.6	90.9	10.1	68.7	5.1	77.8	20.2

(2) 教材の有無と使用状況

ア 中学部の教材の有無

表 3-4-1 に、中学部の教材の有無を示した。(表中：「個人」は学校にはないが、個人で保有している教材)

学校に 80%以上保有されている教材としては、「検定教科書（98.1%）」、「手話辞典（88.9%）」、「国語辞典（84.9%）」、「図鑑（86.9%）」、「インターネット上の Web 情報（87.3%）」、「英和辞典・和英辞典（82.2%）」、「カレンダー（84.5%）」、「新聞（80.6%）」、「絵本（82.2%）」が挙げられた。

また、個人で有する教具として、「電子辞書（49.1%）」、「カード教材（40.2%）」が挙げられた。

表 3-4-1 中学部における教材の有無 (%)

教材	N	学校にある	個人	ない
検定教科書	107	98.1	0.9	0.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	88.9	8.3	2.8
国語辞典（紙媒体）	106	84.9	11.3	3.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	107	86.9	5.6	7.5
インターネット上の Web 情報	102	87.3	6.9	5.9
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	107	82.2	15.9	1.9
カレンダー	103	84.5	7.8	7.8
新聞	103	80.6	7.8	11.7
絵本（行事、物語、説明等）	107	82.2	4.7	13.1
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	107	39.3	40.2	20.6
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	106	8.5	49.1	42.5

イ 中学部の教材の使用状況

表 3-4-2 に、中学部の教材の使用状況を示した。よく使われる教材としては、検定教科書(89.1%)、手話辞典(62.0%)、国語辞典(43.7%)と回答があった。また、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 50%以上の教材としては、「図鑑(85.5%)」、「インターネット上の Web 情報(66.1%)」、「英和辞典・和英辞典(66%)」、「カレンダー(51.5%)」、「絵本(50.5%)」が挙げられた。

表 3-4-2 中学部における教材の使用状況 (%)

教材	N	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	110	89.1	6.4	4.5
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	62.0	35.2	2.8
国語辞典（紙媒体）	103	43.7	35.9	20.4
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	26.4	59.1	14.5
インターネット上の Web 情報	106	18.9	47.2	34.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	100	16.0	50.0	34.0
カレンダー	103	13.6	37.9	48.5
絵本（行事、物語、説明等）	107	8.4	42.1	49.5

ウ 高等部の教材の有無

表 3-4-3 に、高等部の教材の有無を示した。学校に 70%以上保有されている教材としては、「検定教科書(100%)」、「手話辞典(89.2%)」、「英和・和英辞典(83.9%)」、「インターネット上の Web 情報(90.7%)」、「図鑑(83.7%)」、「カレンダー(80%)」、「新聞(76.4%)」が挙げられた。また、個人で有する教具としては、「電子辞書(69.9%)」が最も多かった。

教材	N	(%)		
		学校にある	個人	ない
検定教科書	96	100.0	0.0	0.0
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	93	89.2	8.6	2.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	83.9	16.1	0.0
インターネット上の Web 情報	86	90.7	7.0	2.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	92	83.7	4.3	12.0
カレンダー	90	80.0	8.9	11.1
新聞	89	76.4	13.5	10.1
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	93	5.4	69.9	24.7

工 高等部の教材の使用状況

表 3-5-3 に、高等部の教材の使用状況を示した。よく使われる教材としては、「検定教科書（93.5%）」、「英和辞典・和英辞典（53.7%）」と回答があった。また、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 70%以上の教材としては、「市販の英語テキスト、ワークブック（97.8%）」、「インターネット上の Web 情報（78.7%）」、「電子辞書（74.1%）」、「カード教材（71.1%）」が挙げられた。

教材	N	(%)		
		よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	93	93.5	3.2	3.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	57.0	34.4	8.6
市販の英語テキスト、ワークブック	92	47.8	50.0	2.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	85	40.0	34.1	25.9
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	85	34.1	37.6	28.2
インターネット上の Web 情報	94	17.0	61.7	21.3

(3) 機器の有無と活用状況

ア 中学部の機器の活用状況

表 3-6-1 に、中学部の機器の有無を示した。学校に 90%以上保有されている教具としては、「プロジェクター（100%）」、「DVDプレーヤー・パソコン（98.2%）」、「黒板・デジタルビデオカメラ（96.4%）」、「デジタルカメラ（93.8%）」、「CDプレーヤー等オーディオ機器（93.7%）」、「放送機器（93.5%）」、「集団補聴器（90.1%）」が挙げられた。また、個人で有する機器として多かったのは、「発表板（18.2%）」、「指文字表（11.7%）」であった。

表 3-6-1 中学部の機器の有無

	N	学校にある	個人	(%) ない
プロジェクター	110	100.0	0.0	0.0
DVDプレーヤー	112	98.2	0.9	0.9
パソコン	111	98.2	0.9	0.9
黒板（短冊黒板、小黒板）	111	96.4	0.9	2.7
デジタルビデオカメラ	111	96.4	2.7	0.9
デジタルカメラ	112	93.8	5.4	0.9
CDプレーヤー等オーディオ機器	111	93.7	2.7	3.6
放送機器	108	93.5	1.9	4.6
集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	111	90.1	0.9	9.0
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	110	40.9	18.2	40.9

表 3-6-2 に、機器の活用状況を示した。よく活用される機器としては、「黒板（86.4%）」、「時々使う」教材として、パソコン（53.2%）が挙げられた。「よく使う」と「時々使う」を合わせて 50%以上の教材としては、「デジタルカメラ（56.9%）」、「DVDプレーヤー（53.7%）」が挙げられた。

表 3-6-2 中学部の機器の活用状況

	N	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板）	110	86.4	5.5	8.2
パソコン	111	30.6	53.2	16.2
デジタルカメラ	126	19.8	42.9	37.3
DVDプレーヤー	110	8.2	45.5	46.4

イ 高等部の機器の活用状況

表 3-6-3 に、高等部の機器の有無を示した。90%以上学校で有する機器としては、「プロジェクター（100%）」、「パソコン（97.9%）」、「DVDプレーヤー（96.9%）」、「黒板・デジタルビデオカメラ（94.8%）」、「デジタルカメラ（93.8%）」、「CDプレーヤー等オーディオ機器（90.6%）」、「放送機器（92.6%）」、「地上デジタル対応テレビ（90.4%）」が挙げられた。また、個人で有する教具として多いものに、「発表板（16.1%）」、「指文字表（12.8%）」が挙げられた。

表 3-6-3 高等部の機器の有無

	N	学校にある	個人	(%) ない
プロジェクター	96	100.0	0.0	0.0
パソコン	96	97.9	0.0	2.1
DVDプレーヤー	96	96.9	0.0	3.1
黒板（短冊黒板、小黒板）	96	94.8	2.1	3.1
デジタルビデオカメラ	96	94.8	1.0	4.2
デジタルカメラ	96	93.8	3.1	3.1
CDプレーヤー等オーディオ機器	96	90.6	1.0	8.3
放送機器	94	92.6	0.0	7.4
地上デジタル対応テレビ	94	90.4	1.1	8.5
指文字表（五十音、アルファベット）	94	64.9	12.8	22.3
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	93	50.5	16.1	33.3

表 3-6-4 に、高等部の機器の活用状況を示した。「よく使う」と「時々使う」を合わせて 50%以上の教材として、「黒板(86.2%)」、「パソコン(79%)」、「DVD プレーヤー(62.89%)」、「プロジェクター(55.9%)」が挙げられた。

表 3-6-4 高等部の機器の活用状況

	N	よく使う	時々使う	使わない
黒板	94	81.9	4.3	13.8
パソコン	95	37.9	41.1	21.1
プロジェクター	93	22.6	33.3	44.1
DVD プレーヤー	94	3.2	59.6	37.2

(4) その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について自由記述を求め、以下のカテゴリーに分類された(表 3-7-1)。中学部で 62、高等部で 52 の自由記述があった。中学部、高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」は、「学習内容の導入のための教材」「学習内容提示のための教材」「学習内容の定着」「授業内容の理解を促すための教材」「リスニング（聞く）のための教材」「読むための教材」「話すための教材」に分類された。

表 3-7-1 その他の教材や自作教材 (中学部 N=62 高等部 N=51)

カテゴリー	内容	中学部	高等部
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	6	0
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	13	19
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	16	14
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	16	2
聞く（リスニング）ための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示させる教材	4	6
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくするための教材	4	3
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	3	7

表 3-7-2 に、中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」を示した。

学習内容の導入のための教材としては、「要点を書いたカード」、「ワークシート」、「絵カルタ」が挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「教科書の本文を拡大したもの」「自作フラッシュカード（Power point）」「自作（パワーポイント）教材」「プロジェクト提示用本文」「デジタル教科書」が挙げられた。学習内容の定着としては、「品詞別、カテゴリー別の色付カード」「絵カード」「文法カルタ」「フラッシュカード」「単語学習プリント」「音読プリント」「一斉に行われる一般テストの対策プリント」が挙げられた。授業内容の理解を促すための教材としては、「教科書の本文とその訳文のプリント」「教科書を打ち直した物」「自作ワークシート」「自作ビデオ」「教科書プリント」「本文の発音をカタカナ表記したもの」が挙げられた。リスニング（聞く）ための教材としては、「自作リスニング教材」「英検に準じた形で字幕が流れる」「英検のリスニングを想定した字幕教材」が挙げられた。読むための教材としては、「単語学習プリント」「音読プリント」「自作のプリント」が挙げられた。話すための教材としては、「絵カード」「ボードゲームで使うボードやカード」が挙げられた。

表 3-7-2 中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教	要点を書いたカード ワークシート	本時のポイントとして授業の初めに提示する。生徒にはノートにとらせる。まとめとして使用する。 授業の始めに毎回使用する。

材	絵カルタ	絵を見てどの単語になるのか考えさせるカルタ。色・曜日・ものなど。ゲーム感覚でやらせて興味を持たせる。
学習内容 提示のための教材	教科書の本文を拡大したもの	生徒に分かりやすいように絵を加えたり、発音の仕方を書いたりして黒板にはって使っている。
	自作フラッシュカード (Power point)	語句と共に覚えられるよう、絵や写真も添付している。
	自作（パワーポイント）教材	基本文の習得のために、パワーポイントで日本文→英文の確認をさせている。
	プロジェクト提示用本文	板書する時間を省くため、終了後印刷して配布（パワーポイント）
	デジタル教科書	基本文、本文の提示
学習内容 の定着	品詞別、カテゴリー別の色付カード、絵カード等	各種語彙の定着、文法や語順を視覚的に学習させている
	文法カルタ	1～3年生までの重要文法や疑問詞のカルタをテスト前等に利用している。(30～40枚程度) いくつ?→How many? 未来形→be going to+動詞の原型
	フラッシュカード	カタカナで読み方を書いたカードの読みの部分だけを隠せるもの。新出語句の復習で使用。
	単語学習プリント 音読プリント	単語学習プリント→新出単語・連語を何度も書いて覚えるための学習プリント 音読プリント
	一斉に行われる一般テストの対策プリント	基本文と熟語を暗記して書けるまで、徹底的に取り組ませている。
授業内容 の理解を促すための教材	教科書の本文とその訳文のプリント	まず訳文を読ませ、それぞれの課の内容を日本語で理解させて英文を読ませ、新しい文法の説明をするようにしている。
	教科書を打ち直した物	本文を学習する時に使う。英語にはふり仮名をふって視覚的にも情報保障している。
	自作ワークシート	教科書の音読や文法で、補助教材として使用する。
	自作ビデオ	場面を想定したり、状況の理解を促す時に活用。
	教科書プリント、本文の発音をカタカナ表記したもの	単語習得およびスピーキングの為、実際に発音しながら、読ませる。
リスニング のための 教材	自作リスニング教材、英検に準じた形で字幕が流れる	教科書のリスニングセクションのスクリプトをパワーポイントを使って流している。全ての学年で展開できるよう準備中のため、活用頻度はまだ高い状況ではない。
	英検のリスニングを想定した字幕教材	英検リスニング代替試験の練習用として、パワーポイントを用いて行う。

単語学習プリント、音読プリントの教材	単語学習プリント→新出単語・連語を何度も書いて覚えるための学習プリント 音読プリント→教科書の本文（英文）の下にカタカナで発音を記入し、音読の練習に使うもの
自作のプリント	内容の解説等、口話や手話のみで難しい場合の補助として使用している。
絵カード（テキストのコピー）、ALTと英会話の授業で使う。 ボードゲームで使うボードや カード（テキストのコピー） 教科書プリント、本文の発音をカタカナ表記したもの	単語習得およびスピーキングの為、実際に発音しながら、読ませる。

表 3-7-3 に、高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」を示す。学習内容提示のための視覚教材としては、「教科書付属の CD」、「パワーポイント教材」、「自作 DVD 要点を書いたカード」が挙げられた。授業内容の理解を促すための教材としては、「ろう学校向け副教材」が挙げられた。学習内容の定着のための教材としては、「単語テスト」、「生徒の作ったクイズのカード」、「教材プリント」、「英検、センター試験、入試過去問等」が挙げられた。

リスニングのための教材としては、「PC データ(CD ROM 教科書付録)」、「自作リスニング教材」が挙げられた。読むための教材としては、「自作ワークシート」、「自作プレゼンテーション」、「パワーポイントによる英文のテロップ表示教材単語学習プリント」が挙げられた。「話すための教材」としては、「自作ワークシート」、「ふきだしカード」が挙げられた。

表 3-7-3 高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容提示のための視覚教材	教科書付属の CD パワーポイント教材	演習問題、導入、トピックにあった資料の提示 指文字(日本語・アルファベット)、単元毎の要点、復習問題、板書内容の整理、提示
授業内容の理解を促すための教材	自作 DVD ろう学校向け副教材(都違う教員による共同作)	場面の提示 ろう学校の生徒に使いやすい（自学自習できる）ワークブック
学習内容の定着	単語テスト 生徒の作ったクイズのカード 教材プリント 英検、センター試験、入試過去問等	個々に応じたスピード（進度）やレベルで進めしていく、覚えていく 文法の理解を深める場面、単元の文法事項を用いて生徒同士でクイズの英文を作り、出題させる。 文法練習の問題などを追加するときに使用する 問題演習、項目別要点整理、復習教材

リスニングのための教材	PC データ(CD ROM 教科書付録)	リスニング教材の音声をパワーポイントで文字にして流し、英問英答や内容把握の学習に活用する。」
	自作リスニング教材(英文をテロップで流す)	英検のリスニング対策として使用。
読むための教材	自作ワークシート	文章の読み取り、文法事項の練習
	自作プレゼンテーション教材	リーディングの題材の導入のため、写真・文字で(クイズ形式など) 情報を提示。(合わせたプリントも作成)
話すための教材	パワーポイントによる英文のテロップ表示教材	会話文の学習、内容の理解を促す場面
	自作ワークシート ふきだしカード(コミュニケーション活動で使用する短い文を書いてある)	会話活動の場面 あいさつのやりとりや問題が分からぬとき助けを求める(Help me!) など、コミュニケーションを活性化させるために使用。

(5) 学習評価で活用している教材

ア 市販のテストの活用状況

表 3-8-1 に、中学部・高等部における市販のテストの活用状況を示した。いつも活用しているとの回答は中学部で 12.1%、高等部で 12.2% であった。一方、中学部で 43.9%、高等部で 45.6% 活用しないと回答があった。

表 3-8-1 市販のテストの活用状況

	いつも活用している	時々活用している	活用していない	(%)
中学部 (N=107)	12.1	43.9	43.9	
高等部 (N=90)	12.2	42.2	45.6	

イ 市販のテスト以外の教材や自作教材

表 3-8-2 に、市販テスト以外の教材や自作教材について、自由記述を求め、その割合を示した。中学部(79.5%)、高等部(80.7%)と共に自作テストを挙げる回答が多かった。自作テストは、単語テスト、文法問題、単元ごとのテストなどであった。自作プリント・ワークシートは、単元に沿って説明や穴埋め問題などを作成したり、復習問題として作成するものであった。その他としては、授業チェック表が挙げられた。

表 3-8-2 市販テスト以外の教材や自作教材

	自作テスト	自作プリント・ワークシート	その他	(%)
中学部 (N=83)	79.5	18.1	2.4	
高等部 (N=88)	80.7	15.9	3.4	

(6) あると良い教材

英語の授業や学習評価するために、「あったら良いと思われる教材」について自由記述を求めた。中学部で72、高等部で52の自由記述が得られた。自由記述は、「学習内容の導入のための教材」「学習内容提示のための教材」「リスニング（聞く）のための教材」「読むための教材」「話すための教材「ICT」「その他」に分類された(表3-9-1)。

表 3-9-1 あると良い教材

カテゴリー	内容	中学部 (N=72)	高等部 (N=52)
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	34	13
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	10	6
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示する教材	7	5
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	0	1
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	13	15
ICT	情報機器や学習プログラム	6	6
その他		2	6

ア あると良い教材（中学部）

表 3-9-2 に、中学部であつたら良いと思われる教材を示した。

学習内容の導入のための教材としては、「教科書で紹介された街や行事、人物について画像、動画を集めたサイト」、「字幕付の映像教材」、「洋楽で英語字幕が一緒の DVD」「外国の暮らしと英会話を撮影した動画」が挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「教科書に合った DVD にテロップが付いたもの」、「教科書の単元の内容を再現した動画(字幕付き)」、「ピクチャーカード」が挙げられた。リスニング教材としては、「リスニング用、字幕テロップ」が挙げられた。話すための教材としては、「英語の発音 DVD」、「教科書に準拠した新出語句等の発音をカタカナで示した教材」、「口形がわかるフラッシュカードの映像」が挙げられた。ICT としては、「字幕作成ソフト」、「パソコンソフト」が挙げられた。ASL としては、「ASL の動画」、「ASL が学習できる DVD」、「教科書に沿った ASL の DVD」が挙げられた。その他としては、「聾学校用の問題集」が挙げられた。

表 3-9-2 あると良い教材（中学部）

N=72

カテゴリ 一	教材例	活用の方法
学習内容 の導入の ための教 材	教科書で紹介された街や行 事、人物について画像、動 画を集めたサイト	馴染みのない街、行事、人物を扱う内容の題材の場 合、そのイメージをつかませるために、痛心してい る。画像や動画はパソコンを通して、テレビの画面 で見ることが多いので教科書対応の画像、動画のサ イトがあると便利である。
	字幕付の映像教材	実際の会話場面や文化を知るため。
	ハロウィン、クリスマス、 サンクスギビングデイなど 1年の行事を紹介してい るもの	外国の文化をイメージできるような視覚教材・外 国文の文化を知る（それを確認する）アクティビテ ィー
	洋楽で歌手の口と英語字幕 が一緒に見られるよう なDVD	生徒の中には音楽に興味を持っている生徒もいる ので、英語で歌わせたい。
	外国の暮らしと英会話を撮 影した動画（BGM が無く、 手話と字幕付きが良い）	教科書に沿った内容で、その土地のことや文化につ いて説明と字幕付きの動画で説明したい。
学習 内容 提 示 の た めの教材	教科書に合った DVD にテ ロップが付いたもの	読む力をつけるのにも良いし、英検(リスニング代 替)の練習にもなる
	教科書の単元の内容を再現 したアニメなどの動画(字 幕付き)	教科書の内容を理解するために、分かりやすい動画 があると良い。リスニング CD が活用しにくい分、 映像を使いたい。
	ピクチャーカード	教科書の内容を推量したり、理解を促したりするた めに必要だと思う。
	デジタル教科書（色が変化 し、強調できるようなもの）	新出文法の導入
リスニン グ教材	リスニング用、字幕テロッ プ	リスニングの代替になる、字幕テロップがあると、 今後のテストや受験、英検対策になる。
話すため の教材	英語の発音 DVD	口形や舌の位置、息の使い方等、日本語口話をヒン トにしながら習得できると、スピーチングに役立 つ。
	教科書に準拠した新出語句 等の発音をカタカナで表示 する	新出語句等の導入に活用。
	口形がわかるフラッシュカ ードの映像	単語の発音など文字だけでなく、口形でも読みとれ るようにすると情報の一つとして良い。
ICT	字幕作成ソフト	英語検定で使用している字幕のようなものが、簡単 に入力して作れると、日常的に活用できる。

	パソコンソフト	英単語のつづりを入力し、正解、不正解（どこがまちがったか）を生徒自身が気づけるようなもの。前時の復習として、導入で使用し、書く意欲づけにつなげたい。
ASL	ASL の動画	アメリカ手話の簡単なものを紹介できるとよい。異文化への理解にもつながる。
	ASL の DVD	簡単な ASL を学習したい。実際の場面に合わせた会話を ASL で学習したい。
	教科書に沿った ASL の DVD	教科書を読む場面で使いたい。
	聾学校用の問題集	ワークだけでなく、問題集で基本を伸ばしたい。問題文の指示も分かりやすく、絵が多いものが良い。
その他	基本文が使われる場面を映像化したもの(手話と字幕付き)	わかりやすい場面で覚えさせたい。

イ あると良い教材（高等部）

表 3-9-2 に、高等部であると良い教材を示した。学習内容の導入のための教材としては、「手話付き DVD 教材」、「教科書の本文の DVD」、「ピクチャーカード」、「フラッシュカード」、「ASL の会話 DVD」、「ドリル」、「国別紹介動画」が挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「英語字幕付 DVD（教科書準拠）」、「教科書の指導書に出ている写真などを電子化したもの。+基本的な知識を補えるような画像」、「デジタル教科書」が挙げられた。読むための教材としては、「英検の 2 次試験で用いられる音読用の文章が多く載っている本」、リスニング教材としては、「英会話用 DVD セリフが文字で流れ出るもの」、「教科書の音声リスニング CD をテロップ（DVD など）にしたもの」が挙げられた。話すための教材としては、「英語の子音や母音など単語の基本的な発音が学べる教材」、「教科書本文の読み方の書いてある教材」、「市販の英語ソフトに発音がカタカナで表記したもの」、「会話練習 DVD」が挙げられた。ICT としては、「iPad」、「英単語テストアプリ」が挙げられた。その他としては、「外国の硬貨や紙幣のサンプル」、「聾学校での効果的な英語教育（授業）実践集」が挙げられた。

表 3-9-3 あると良い教材（高等部）

N=52

カテゴリ	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	手話付き DVD	文化や歴史、芸術などの説明や、英語の説明に視覚教材として使用する。
	教科書の本文の DVD (英文の状況を見られる)	導入で見せたい。
	ピクチャーカード フラッシュカード	文や会話の状況をイメージする助けとして活用できると良い、ウォームアップ等で毎回活用したい。

	ASLの会話DVD	ASL を用いての挨拶、簡単な会話などの DVD があると、授業の導入で使える。
	ドリル	授業の最初に応答練習(コミュニケーション活動)をしたり、英作文をしたりするためのベースになる。
	国別紹介動画	単元の導入部分で、登場人物の出身国、人種、言語文化などがまとめられた動画があるとわかりやすい。
	英語字幕付 DVD (教科書準拠)	教科書の単元の内容理解を助けるため、又は発展的な内容まで英語で理解し考えさせるために使用したい。
学習内容提示のための教材	教科書の指導書に出て いる写真などを電子化 した教材+基本的な知 識を補えるような画像 ・デジタル教科書	現在、プレゼンテーションを作成するため、自分で 1から写真や本を集めてカラーで提示しているの で、集めたものがあると非常に時間節約になる。 準ずる学習において、有効に活用できる。
読むための教 材	英検(3級や準2級レベ ル)の2次試験で用いら れる音読用の長さの英 文が多く載っている本。	短い文章を見て、それを理解し、要約できる力を身 につけさせたい。
聞く(リスニン グ)のための教 材	英会話用 DVD せりふ が文字で流れて出るも の 教科書の音声リスニン グ CD をテロップ(DVD など) にしたもの。	英検などのリスニングで代用されているような形 式の DVD があると、英会話のパターンプラクティ スやロールプレイ、英検対策になると思う。 聞いて活動するものが教科書に多いため、そのかわ りとする。現在はほとんど省いている。
話すための教 材	英語の発音の仕方、子音 や母音など単語の基本 的な発音が学べる教材 教科書本文の読み方の 書いてある教材 市販の英語ソフトに發 音をカタカナ表記した もの 会話練習DVD	適度に本当の英語の発音に近いカタカナも交えた ような発音の仕方がわかるような教材があれば良 い。 読み方は、本当の英語の発音とカタカナ表記と違う が、できるだけ英語の発音に近いものが良い。 授業で使う場面が多くあると思う。現在も小学校向 けなど映像的にも良い物が多く出ているが発音が わからないので使えない。 小人数での学習のため、口頭での英文練習がDVD でもできるようになれば良い。
ICT	英単語テストアプリ(電 子端末、ipad)	英会話の状況(印字での) 視覚確認が安易なので、 また文法も動く図解があれば理解しやすいのでは ないか。 英単語のスペル、意味、読み方を確認できる習熟度

別テストがあれば、授業の始めなどに確認テストとして利用したい。

その他	外国の硬貨や紙幣のサンプル 聾学校での効果的な英語教育（授業）実践集	外国為替のレートについて、日々変動することを理解し、経済に対する意識を高める。 書く力につけるための事例実践。
-----	---------------------------------------	--

第3項 「英語科」のまとめと考察

本調査では、中学部 112 名、高等部 98 名の回答を得た。教職経験年数 21 年以上の教員が、中学部（35.7%）、高等部（40.4%）であった。中学部の経験年数は「0～3 年」が 49.5% と約半数を占めており、次いで「3～6 年」が 18.0%、「6～9 年」が 20.7% であった。また、高等部の経験年数は「0～3 年」、「3～6 年」が 31.3% であった。次いで「6～9 年」が 13.5% であった。

指導グループでは、7 名以上のグループで学習している学校もあったものの（学部で 1 校、高等部で 7 校）、中学部（2～4 名）、高等部（2～3 名）と少人数での指導をしている実態であった。

コミュニケーション手段については、中学部・高等部ともに多様なコミュニケーション手段が使われていた。中学部では、手話付きスピーチが 85.8%、指文字が 74.3%、聴覚口話 60.2% であった。また、高等部では、手話付きスピーチが 90.9%、指文字が 77.8%、聴覚口話が 62.6% と、高等部の方が手話付きスピーチ、指文字の使用が多かった。

教材の有無については、中学部で学校に 70% 以上保有されている教材として、検定教科書、手話辞典、国語辞典、図鑑、インターネット上の Web 情報、英和辞典・和英辞典、カレンダー、新聞、絵本、ことば絵じてんが挙げられた。また、個人で有する教具として、電子辞書（49.1%）、カード教材（40.2%）があった。教材の活用状況では、よく使われる教材として、検定教科書（89.1%）、手話辞典（62.0%）、国語辞典（43.7%）が挙げられた。時々使う教材は、図鑑（59.1%）、インターネット上の Web 情報（47.2%）、英和辞典・和英辞典（50.0%）が挙げられた。

一方、高等部で学校に 70% 以上保有されている教材としては、検定教科書、手話辞典、英和・和英辞典、インターネット上の Web 情報、図鑑、カレンダー、新聞が挙げられた。また、個人で有する教具として、電子辞書（69.9%）が挙げられた。教材の活用状況では、よく使われる教材として、検定教科書（93.5%）、英和辞典・和英辞典（53.7%）が挙げられた。時々使う教材としては、インターネット上の Web 情報（61.7%）、市販の英語テキスト、ワークブック（50.0%）が挙げられた。中学部・高等部ともに、教科書を中心として、辞典やインターネット上の Web 情報を使用していた。

次に、機器の有無と活用状況であるが、中学部で学校に 90% 以上保有されている機器としては、プロジェクター、DVD プレーヤー・パソコン、黒板・デジタルビデオカメラ、デジタルカメラ、CD プレーヤー等オーディオ機器、放送機器、集団補聴器があり、このうち、「よく使われる機器」は、黒板（86.4%）、また、「時々使う」機器として、パソコン（53.2%）が挙げられた。

高等部で学校に 90% 以上保有されている教具としては、プロジェクター、DVD プレーヤー、パソコン、黒板・デジタルビデオカメラ、デジタルカメラ、CD プレーヤー等オーディ

オ機器、放送機器、地上デジタル対応テレビと、中学部とほぼ同様であった（集団補聴器は85.4%）。このうち、「よく使われる」機器の使用状況を示した。黒板（81.9%）であった。また、「時々使う」教具として、DVDプレイヤー（59.9%）が挙げられた。

その他の教材や自作教材については、中学部では、「絵カード」「教科書の本文を拡大したもの」「単語学習プリント」等の教材を始め、「ワークシート」「フラッシュカード」「教科書プリント」補助教材を活用しつつ、「自作のプリント」「自作ビデオ」「自作リスニング教材」「自作フラッシュカード（Power point）」「自作（パワーポイント）教材」「自作ワークシート」といった教材が挙げられた。一方、高等部では、「教材プリント」、「単語テスト」、「英検、センター試験、入試過去問題」等、進学や受験を目指した教材を始め、「自作リスニング教材」「パワーポイントによる英文のテロップ表示教材単語学習プリント」の教材が挙げられ、何れの学部とも、単語学習教材が作成されており、英単語の語彙拡充を目指している実態が示された。

学習評価で活用している教材として、市販のテストを常に活用しているとの回答は中学部で12.1%、高等部で12.2%であり、活用していないと回答したのは、中学部で43.9%、高等部で45.6%であった。市販の教材については、聴覚障害生徒に適合した教材が十分に揃っていない状況が伺われ、担当教員が、既存の教材に手を加えたり、新たに自作教材を作成していると考えられた。

中学部であると良い教材として、「字幕付の映像教材」、「教科書の単元の内容を再現した動画（字幕付き）」「リスニング用、字幕テロップ」等の他、「英語の発音DVD」、「ASLが学習できるDVD」といった映像教材が挙げられた。これらは、限られた指導数内で生徒が興味・関心を持つような教材の必要性を示したものと思われる。

高等部であると良い教材として、中学部同様、「手話付きDVD教材」、「英語字幕付DVD（教科書準拠）」「市販の英語ソフトに発音がカタカナで表記されたもの」等の映像教材の他、「デジタル教科書」、「教科書本文の読み方の書いてある教材」、「教科書の指導書に出てる写真などを電子化した教材」といった教科書の指導に直接有効な教材を求めていた。更に、「iPad」や「会話練習DVD」等が挙げられ、将来の活用を想定した教材も求めていた。このように、担当者からは、各種ソフトウェアの利用を期待する意見が多かった。これらは今後、導入されていくと予想されるが、これに伴う指導法の開発が更に求められよう。

今回の調査では、英語という教科学習に対して、生徒の意欲を高め、基礎的なコミュニケーション力を育成することに直接結びつく質問は設定していない。しかし、自由記述等の回答からは、学習内容の定着を図るべく、様々な教材を活用している実態が示された。また、聴覚障害生徒にとって苦手と思われる「話す」「聞く」に関する教材も駆使されている状況があった。更に、手を加えて使用する教材や自作教材の回答からは、所謂、聴覚障害生徒に「言語」に関する興味・関心の保持、伸長を目指して教材活用がなされていると考えられた。

（横尾俊、原田公人）

第4節 自立活動

特別支援学校学習指導要領^{*}においては、自立活動の指導項目として、健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成環境の把握、身体の動き、コミュニケーションが示されている。聴覚障害教育について、各項目の指導内容としては、「健康の保持」では、聴覚の疾患についての理解と自己管理、「心理的な安定」では、聴覚活用への関心、障害の受容、自立に向けた進路情報等の収集、「人間関係の形成」では、対人関係の形成、「環境の把握」では、手話等の活用、補聴器（人工内耳）装用による音・音声の聞き取り、「身体の動き」では、手話・指文字につながる手指機能や音器（舌・唇等）の機能、「コミュニケーション」では、コミュニケーション手段（読話、発音・発語、キュード・スピーチ、文字、指文字、手話等の活用）、情報機器等の活用等が考えられる。

また、自立活動における教材・教具について、特別支援学校学習指導要領解説（平成21年）では「目標を達成するための学習は、一定期間にわたって行われるが、その間においても、児童生徒が目標に近付いているか、また、教材・教具などに興味をもって取り組んでいるかなど、児童生徒の学習状況を評価し、指導の改善に日ごろから取り組むことが重要である。」と示し、指導評価の観点から、教材の役割を述べられている。

本節では、幼稚部から高等部までの各学部の教員2名を対象にして、教職経験、自立活動に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、授業で活用する機器、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題を考察した。

* 特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）」（平成21年6月）文部科学省

第1項 基本情報

4-1 幼稚部

有効回答数164。表4-1-1に、幼稚部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数21年以上が44.5%で、聾学校経験年数3～6年が18.5%、幼稚部経験年数0～3年が34.1%であった。教職経験年数が長いが、幼稚部経験が短い状況が示された。

表4-1-1 教職、聾学校、幼稚部経験年数 N=164（数値は%）

経験年数	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21年以上
教職		6.7	10.4	10.4	6.1	8.5	13.4	44.5
聾学校	17.9	18.5	16.7	14.8	6.8	10.5	5.6	9.4
幼稚部	34.1	22.6	12.2	14.6	4.9	3.7	2.4	5.5

表4-1-2に担当（所属）、表4-1-3に、担当学年を示した。92.7%が、学級担任であり、担当学年は年少、年中、年長とも30%台と同率であった。

表 4-1-2 担当（所属） N=164 (数値は %)

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
92.7	3.0	0.0	3.0	1.2
表 4-1-3 担当学年（いつも授業している学年）				N=171 (数値は %)
年少	年中	年長	重複障害	
30.4	33.3	33.9	2.4	

4-2 小学部

有効回答数 159。表 4-2-1 に、小学部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数 22 年以上が 47.2% で、聾学校経験年数 0~3 年が 18.2%、小学部経験年数 0~3 年が 25.2% であった。約半数が教職経験年数 22 年以上で、聾学校や小学部の経験 0~6 年の教員が半数ほど所属している状況が示された。

表 4-2-1 教職、聾学校、小学部経験年数 N=159(数値は %)

経験年数	0~3 未満	3~6 未満	6~9 未満	9~12 未満	12~15 未満	15~18 未満	18~21 未満	21 年以上
教職	5.7	6.9	6.9	8.8	9.4	4.4	10.7	47.2
聾学校	17.6	18.2	16.4	15.7	7.5	5.7	8.8	10.1
小学部	25.2	22.6	13.8	16.4	7.5	3.1	3.2	8.2

表 4-2-2 に、担当（所属）、表 4-2-3 に、担当学年を示した。53.5% が学級担任、回答者は第 1 学年が最も多く全体の 1/4、第 6 学年の回答者は 4.1% であった。

表 4-2-2 担当（所属） N=159 (数値は %)

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
53.5	13.2	1.5	25.8	5.0

表 4-2-3 担当学年（いつも授業をしている学年） N=159 (数値は %)

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	重複障害
24.1	14.2	9.5	15.1	19.3	4.1	13.7

4-3 中学部

有効回答数 136。表 4-3-1 に、中学部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数 22 年以上が 38.2% で、聾学校経験年数 0~3 年が 26.5%、中学部経験年数 0~3 年が 34.6% であった。約半数が聾学校経験年数 0~6 年で、中学部の経験 0~6 年の教員が 60% 以上所属している状況が示された。

表 4-3-1 教職、聾学校、中学部経験年数 N=136(数値は %)

経験年数	0~3 未満	3~6 未満	6~9 未満	9~12 未満	12~15 未満	15~18 未満	18~21 未満	21 年以上
教職	8.8	9.6	7.0	7.4	9.2	6.6	13.2	38.2
聾学校	26.5	19.1	14	10.3	11.2	7.4	2.2	9.3
中学部	34.6	30.9	14.0	7.4	2.2	4.4	2.9	3.6

表4・3・2に、担当（所属）、表4・3・3に担当学年を示した。64.7%が学級担任、回答者は第1学年から第3学年まで30%弱とほぼ同率であった。

表4・3・2 担当（所属）

N=136（数値は%）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
64.7	15.4	3.2	12.3	4.4

表4・3・3 担当学年（いつも授業している学年）

N=136（数値は%）

1年	2年	3年	重複障害
28.2	27.6	26.6	17.6

4-4 高等部

有効回答数109。表4・4・1に、高等部配属の教員における教職、聾学校、高等部経験年数を示した。教職経験年数22年以上が45%で、聾学校経験年数3～6年が22.9%、高等部経験年数0～3年が32.1%であった。約半数が教職経験年数21年以上で、聾学校や高等部の経験0～3年の教員は約1/3所属している状況が示された。

表4・4・1 教職、聾学校、高等部経験年数

N=109（数値は%）

経験年数	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21年以上
教職	6.4	7.3	5.5	10.1	7.3	7.4	11	45
聾学校	21.1	22.9	18.3	10.1	8.3	4.3	3.7	11.3
高等部	32.1	21.1	11	10.9	6.5	5.5	4.6	8.3

表4・4・2に、担当（所属）、表4・4・3に担当学年を示した。58.7%が学級担任、回答者は第1学年から第3学年まで30%弱とほぼ同率であった。

表4・4・2 担当（所属）

N=109（数値は%）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
58.7	21.1	8.2	8.3	3.7

表4・4・3 担当学年（いつも授業している学年）

N=109（数値は%）

1年	2年	3年	重複障害
29.4	28.6	25.8	16.2

第2項 結果

4-5 コミュニケーション手段（複数回答）

有効回答数 499。各学部のコミュニケーション手段を尋ねた。表 4-5-1 に、結果を示した。幼稚部を除き、小学部から高等部は手話付スピーチの割合が 80%台で高く、聴覚口話が続いた。

高等部での聴覚口話の割合は 40%に満たなかった。表中、手話付きスピーチは、補聴器（または人工内耳）を併用している。

表 4-5-1 コミュニケーション手段

N=499 (複数回答) (数値は %)

	聴覚口話	手話付 スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	指文字	その他
幼稚部	22.4	26.3	2.0	11.0	4.8	19.4	14.0
小学部	59.1	82.4	9.4	43.4	11.3	70.4	21.4
中学部	56.6	84.6	13.2	56.6	5.1	67.6	9.6
高等部	39.4	88.1	17.4	50.5	3.7	68.8	12.8

4-6 教材の有無、活用頻度、活用状況（幼稚部）

幼稚部における教材の有無と活用について、18 の教材（絵本（行事、物語、説明等）、紙芝居（行事、物語、説明等）、絵日記、写真（人物、場所、活動場面等）、動画、絵カード、文字カード、実物、新聞・雑誌、広告・ちらし・ポスター、図鑑、音楽CD、DVD、手話・字幕付きDVD、PCソフト、ことば絵じてん、カレンダー、インターネット上の Web 情報）を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

表 4-6-1 に、結果を示した。N は回答数。学校で保有する教材で多いものは、絵本、紙芝居、図鑑、ことば絵じてん、カレンダーが 90%前後を占めた。個人で保有する教材は、絵日記（57.0%）が最も多かった。活用の頻度では、よく使う教材として、絵カード、写真、絵本が挙げられた。活用状況として文字カード（48.7%）や絵カード（32.5%）を自作して活用されていた。

表 4-6-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（幼稚部）

(%)

	教材の有無				活用の頻度			活用の状況					
	N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その ままで ある	手を 加え	自作	使わ ない
絵本	164	94.7	5.3	0.0	159	78.6	20.1	1.3	157	68.8	30.6	0.6	0.0
写真	164	89.2	10.8	0.0	163	88.3	11.7	0.0	157	37.6	43.3	0.0	19.1
絵カード	164	81.9	16.9	1.2	163	90.8	8.0	1.2	160	39.4	26.9	32.5	1.3
文字カード	160	66.3	28.8	5.0	162	62.3	30.9	6.8	158	20.9	23.4	48.7	7.0
図鑑	164	95.2	4.8	0.0	160	5.1	5.6	0.2	155	84.5	13.5	0.0	1.9

4-7 自作教材（幼稚部）

その他の自作教材について、自由記述を求めた。表 4-6-2 に、「よく使用する自作教材」を示した。自作教材として、行事と言語指導のカテゴリーに分けた。行事・校外学習ではカード（口形）や事前学習用のパワーポイントの作成、言語指導として、個に合わせた教材が作成されていた。

表 4-6-2 よく使用する自作教材（自由記述：幼稚部）

使用用途	教材例	用例
する。行事 (校外学習)	予定表 日課の絵カードに文字 と口形文字 絵カード おゆうぎ DVD 子どもや保護者の人形 カード 遠足等の事前学習用パ ワーポイント	一日、一週間分の予定。その日の活動を記録し、振り返る。 毎日、朝すること（タオルをかける、シールをはる、など） のことばを押えるために使用。音声を確実にとらえるために (記号として) 口形文字を添えて使用 行事(運動会、遠足、プール学習、夏休みの生活、クリスマス、 お正月、節分、ひなまつり、冬のあそび)の時に話す時に使う。 紙芝居風にしたりして話したりする。 学校でうたう歌やおゆうぎを担当者が、DVD で撮り、教材に している。 行事などを説明するときに実際にこのカードを操作することで内容を理解しやすくする。 学校～目的地まで行く過程が分かるパワーポイントを作成し、スライドショーで見せる。(学校の写真、子どもや T の写真をペーパーサートにしたもの、目的地の写真、利用する乗り物の写真を使いスライドを作成する。行事ごとに作成する。) 前年度の行事の写真をスライドショーで流し、行事のイメージをつかんでもらう。
言語指導	こどはあそび等の自作教材(ex、しりとり○のつくことば、クロスワード等) 立体教材 言葉、数、色、形など	各学年ごとに、保育で使用する。ことばあそびのための自作教材 絵カードと同様、子どもが何度も繰り返し、さわったり試したり遊んだりできる教材を作成している。(段ボール箱のサツマイモ畑など) 個々の実態に合わせたものを作成し、個別指導で扱う。

4-8 屋外活動の教材の有無、活用頻度、活用状況（幼稚部）

屋外活動における教材の有無と活用について、13 の教材（1 スケッチブック、2 メモ帳、3 虫かご、4 虫取り網、5 魚とり網、たも網、6 バケツ、7 ことば絵じてん、8 図鑑、9 絵本、10 紙芝居、11 写真、12 絵日記、13 デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ）を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「い

つも持っていく・時々持っていく・あるが持っていない・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

表 4-6-3 に、結果を示した。N は回答数。「よく使う」と「時々使う」の回答のあった教材を示した。「よく使う」と「時々使う」が 70%以上の教材として、メモ帳、虫かご、虫取り網、写真、デジタルカメラ、デジタルビデオカメラが挙げられた。

表 4-6-3 屋外活動の教材（よく使う+時々使う 70%以上：幼稚部）

	回答総数(学校、個人)	回答数(%)	
		N	よく使う
2 メモ帳	145	31.7	44.8
3 虫かご	163	23.9	69.3
4 虫取り網	161	17.4	80.6
5 魚とり網、たも網	108	13.0	62.0
1 1 写真	162	38.3	52.8
1 3 デジタルカメラ、 デジタルビデオカメラ	164	76.8	18.8

4-9 屋外活動の自作教材（自由記述：幼稚部）

その他の屋外活動の自作教材について、自由記述を求め、表 4-6-4 に、結果を示した。屋外活動の自作教材として、ことばあそび・絵カードの他、ポケット図鑑、活動写真表が挙げられた。

表 4-6-4 屋外活動の自作教材（自由記述：幼稚部）

教具例	用例
ことばあそび	花や虫などのカードを使用する。名前を覚えるため、ひらがなを併記している。
絵カード	
ポケット図鑑	主に首にかけたり、ウエストポーチなどに入れて携帯し、必要に応じて出す。
手作りカード集	
活動写真表	活動内容を写した写真を時系列に並べたり、コメントを記入したりして、体験したことを見い出す手がかりにしている。また、保護者に伝える手がかりにする。
手作りプリント	観察したいもの、見つけさせたいものの写真を貼って名前や特徴をそえたプリント。自分で探す手がかり等に活用(ex 春の草花を数種類のせたもの)

4-10 教材の有無、活用頻度、活用状況（小学部）

小学部における教材の有無と活用について、34 の教材（1 聲学校用教科書、2 文部科学省著作、3 附則の 9 条本、4 日本語指導用教材、5 市販のワークブック・問題集、6 国語辞典、7 漢和辞典、8 電子辞書、9 手話辞典、10 ことわざ辞典、11 ことば絵じてん、12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）、13 絵本（行事、物語、説明等）、14 紙芝居（行事、物語、説明等）、15 なぞなぞ、16 カルタ・百人一首、17 絵カード、18 写真（人物、場所、活動場面等）、19 カレンダー、20 絵日記、21 新聞、22 広告、チラシ、ポスター、23 雑誌、24 音素材用 PC ソフト・CD、25 耳の構造図、26 補聴器、イヤモールド、チューブ、27 補聴器

点検用具、28 発音・発語指導用具、29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）、30 DVD（テレビ番組、解説等）、31 手話・字幕付きDVD、32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）、33 デジタルルビデオカメラ（撮影した動画）、34 インターネットのWeb情報を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

表4-7-1に、「よく使う」と「時々使う」が70%以上の教材、加工及び自作教材が30%以上の結果を示した。Nは回答数。教材で多いものは、聾学校用教科書、国語辞典、漢和辞典、ことば絵じてん、図鑑、絵本、紙芝居、耳の構造図、補聴器、楽器、デジタルカメラ、インターネットのWeb情報を90%以上を占めた。個人が保持する教材は、絵日記、電子辞書、絵カードが20から30%挙げられた。活用の頻度では、よく使う教材また時々使う教材として、ことば絵じてん、図鑑、絵本、市販のワークブック、デジタルカメラ、補聴器点検用具、発音・発語指導用具が挙げられた。また、加工したり自作教材として、市販のワークブック、日本語指導用教材、なぞなぞ、写真、発音・発語指導用具、デジタルカメラ等(30~40%)が挙げられた。

表4-7-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）

	N	学校	個人	ない	よく使 う+ 時々	(%) 加工 and 自作
1 聾学校用教科書	153	92.8	2.6	4.6	64.7	36.6
4 日本語指導用教材	145	56.6	24.1	19.3	60.7	37.2
5 市販のワークブック、問題集	151	54.3	38.4	7.3	82.8	52.3
6 国語辞典	154	97.4	2.6	0.0	66.2	3.9
7 漢和辞典	153	96.7	2.6	0.7	41.2	1.3
11 ことば絵じてん	157	94.3	5.1	0.6	92.4	20.4
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	155	97.4	2.6	0.0	91.0	9.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	156	96.2	3.8	0.0	90.4	21.2
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	150	96.7	0.0	3.3	44.7	13.3
15 なぞなぞ	155	89.7	8.6	2.6	65.8	38.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	153	60.8	37.3	2.0	45.1	32.0
25 耳の構造図	146	93.8	2.1	4.1	50.0	15.8
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	153	92.8	5.9	1.3	77.8	8.5
27 補聴器点検用具	152	19.1	0.0	0.0	85.5	4.6
28 発音・発語指導用具	153	87.6	9.8	2.6	73.9	31.4
29 楽器	146	90.4	2.1	7.5	53.4	6.
32 デジタルカメラ	152	91.4	8.6	0.0	89.5	44.7
33 デジタルルビデオカメラ	149	92.6	6.7	0.7	69.1	30.2
34 インターネットのWeb情報を	148	91.2	5.4	3.4	65.8	35.8

4-1-1 授業で活用する機器（小学部）

自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、23の教材（1 黒板、2 発表板、3 漢字表、4 指文字表、5 手話表、6 電子黒板、7 OHP、8 パソコン、9 プロジェクター、10 地上デジタル対応テレビ、11 DVDプレイヤー、12 CDプレイヤー等、オーディオ機器、13 実物投影機、14 デジタルカメラ、15 デジタルビデオカメラ、16 集団補聴器、17 放送機器、18 個人用 FM 等システム、19 ひらがなカード、20 音声記号図、21 母音図、22 キューサイン表、23 カードリーダー）を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを使っている・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。表 4-7-2 に、「よく使う」と「時々使う」が 50% 以上の教材、加工及び自作教材が 10% 以上の結果を示した。N は回答数。

学校の教材・教具として多いものは、パソコン、プロジェクター、DVD プレーヤー、デジタルカメラの他、ひらがなカード、母音図（55～60%）であった。指文字表、手話表、ひらがなカード、キューサイン表、カードリーダー（20～50%）が挙げられた。

「よく使う」及び「時々使う」教材として、黒板、発表板、パソコン、CD プレイヤー、デジタルカメラ、ひらがなカード（70～87%）が挙げられた。また、加工したり自作教材として、ひらがなカード、母音図、漢字表、手話表、パソコン、デジタルカメラ（10～27%）が挙げられた。

表 4-7-2 授業で活用する機器（小学部）

	N	学校	個人	ない	よく使う +時々	加工・ 自作
1 黒板	150	98.0	0.7	1.3	86.9	3.3
2 発表板	84	56.4	20.8	22.8	67.1	8.7
3 漢字表	113	74.8	16.6	8.6	58.3	10.6
8 パソコン	155	100	0.0	0	70.3	14.2
9 プロジェクター	150	98.0	0.7	1.3	51.6	2.0
10 地上デジタル対応テレビ	137	90.1	0	9.9	44.1	3.9
11 DVDプレイヤー	150	98.0	0	2.0	54.9	1.3
12 オーディオ機器	150	98.0	1	0.	61.4	2.6
13 実物投影機	135	88.2	0.7	11.1	33.3	0.7
14 デジタルカメラ	148	94.9	4.5	0.6	84.0	12.2
15 デジタルビデオカメラ	150	98.0	2.0	0	64.1	7.2
16 集団補聴器	135	88.8	0	11.2	48.7	0
17 放送機器	139	92.1	0	7.9	29.8	1.3
19 ひらがなカード	107	70.4	26.1	3.3	59.9	27.6
20 音声記号図	139	92.7	2.7	4.7	48.0	13.3
21 母音図	135	88.2	8.5	3.3	55.6	20.3

4-12 その他の自作教材（小学部）

その他の自作教材について表4-7-3に、自由記述を求めた結果を示した。その他の自作教材として、ペーパーサート、プリント、発音カードなど、言語指導に関する教材が多く使われた。

表4-7-3 その他の自作教材（自由記述：小学部）

教具例	用例
読解問題に応じたペーパーサート	読解教材（自作）に合わせ、動きや行動を表現するためのもの
PCのパワーポイントの教材	言語指導（文法指導、語彙指導） アニメーション機能を利用した発音練習や、イラストや写真、動画を利用した単語およびスピーチレベルにおける発音練習の教材として使う。
文法ドリル	文法カルタの内容を定着させるためのドリル。週末はその週取り扱っている文法事項のプリントをさせている。
文法カルタ 「がをで」 「が、を、に」時制、やりもらい、受身、こそあど、接続詞、使役 自動詞等	「が、を、に」時制、やりもらい、受身、こそあど、接続詞、使役 小学部の児童を語彙力に応じて3つのグループに分かれ、子ども同士競い合い、楽しみながら行う。
会話文用設定イラスト	言語指導、作文指導（場面の把握など）複数の登場人物の気持ちや発言を考えさせ会話を文章化する。
iPad	数の指導…数の合成分解の理解 50音…書き順などくり返し
ことばカード	動詞や形容詞等を絵、手話、ひらがなで表したカード
日記新聞	週末の出来事を各自発表し、友人の話を記事に書く。記事をまとめ新聞にする。言語指導で用いる。
短冊をつかって絵日記	スケッチブックに、絵日記をかく。
ことばのプリント	言語指導で使う。文章の中に正しく助詞や接続詞を記入させたり、動詞の活用を考えさせたり、テーマを決めて、それについて説明させたり、自分の考えをまとめさせたり等、様々な内容について活用。
文法ドリルプリント	助詞や動詞の活用などの練習プリントを朝の自立活動の時間に使用している。
HA各部の名称プリント	自分のHAの各称・各部の各称を学習する際に使用している。
認知に関するプリント	主に幼児教育で使われている空間認知や図形認知、記憶ことばなどのプリントを朝自習や家庭学習プリントをしてさせている。
構文クイズプリント	児童の言語表現の実態を把握するために使用。
ランゲージバル	先生や友だち（自分も含めて）の声や音を録音して、誰の声か聞き分けさせたり、何と言っているか聞きとらせたりする。
気もちの種類表	「うれしい、楽しい」などの決まりきった感情表現だけでなく、「とまど

	う、はればれする」など多様な表現を一覧できる表にし、自分の気持ちに合うものを選ぶ。
カラーヒントカルタ	ことばの指導(語句を覚える場をイメージして様子をことばで表現する等)で使用
おかし	舌あそびをしてリラックスした状態と、舌の動きをなめらかにした上で発音指導に入るようしている。
発音カード	自立活動の学習のはじめの5~10分で発音練習を行う。
小学部連絡板	季節や行事、いろいろな話題について、クイズやふき出しを掲示し、言語指導に使っている。
口腔模型	調音指導(調音点の確認等)で使う。単音節の調音要領、特に顎の開き具合や舌の口蓋への接触の有無や程度を児童に実際に操作させイメージさせる。
カセットレコーダー	構音学習で自分の声を聞き返す時、再生して使用している。

4-13 あると良い教材(自由記述: 小学部)

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について、表4-7-4に、自由記述を求めた結果を示した。あると良い教材として、ソフトウェア、発音指導機器等、コンピュータ機器が挙げられた。

表4-7-4 あると良い教材(自由記述: 小学部)

教材	使用場面
発音チェックソフト	自分の発音状況を確認させる
チャットのできる端末やソフト	子ども同士でのメールの方法 やり方を教える
安定性の高い、発音練習機器、ソフト	呼気の調整、発音のコントロール・母音、各子音の発音練習、プロソディの練習等、単独、あるいはPCに接続して発声・発語指導をゲーム的に繰り返して行う。
障害や福祉制度について、年齢に応じた指導教材(DVDソフト)	
簡単にうてるキーボード	パソコンを使って絵日記をかく ひらがな表のようなキーボード自己紹介や音読、音声練習、ビデオ撮影機能を利用して自己の発音の状況を即時に客観的に把握する、音声分析ソフトを利用して、自声の音響的特徴を把握する。
タブレット端末	作文を書くための指導で活用。マインドマップを作成し、一つの事象から枝を増やしていくイメージをふくらませ、単語を文章化するという方法で作文を書く方法を知る。
マインドマップ	
日本語各音節の調音要領がダイナミックな視覚的イメージで表されるような機器	日本語の音節の調音要領の確認、モニターを見て、各音節の調音要領を視覚的(動画)に把握する。
ことば写真辞典	特に誤発している音節について確認し、自己修正の力を育てる。語彙の少ない子どもや知らないものについて初めて教える場面で写真を見せる

何と言っているでしょう	話し手の気持ちを考える。友達や人の気持ちを考える。社会性を身につける。何らかの場面を設定した文章があり、会話の部分を空欄にする。前後の流れからどんなことを言っているか考える
ストーリーを考えて、セリフを入れよう。	物語の読み取り学習、話しの流れをイメージする学習、絵カードをストーリーに沿った順に並び替える、物語やセリフを考える。
言語指導大系(のようなもの)	自立活動における言語指導。児童の発達段階や言語力に合わせ指導する際に参考にする。

4-14 教材の有無、活用頻度、活用状況（中学部）

中学部における教材の有無と活用について、小学部同様に34の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校ないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

表4-8-1に、「よく使う」と「時々使う」が70%以上の教材、加工及び自作教材が30%以上の結果を示した。Nは回答数。

学校に保有する教材は、絵日記(31.29%)を除き、45.9~97.7%と多くが保有されていた。個人で保有する教材では、市販のワークブック(45.9%)や電子辞書(44.2%)が挙げられた。「よく使う」及び「時々使う」教材として、漢和辞典(100%)を始め、デジタルカメラ、インターネットのWeb情報、補聴器点検用具、写真(70~84.4%)が挙げられた。

また、加工したり自作教材として、割合が高いものとして、文部科学省著作教科書(71.3%)、附則の9条本(69.0%)、紙芝居(64.1%)、絵日記(56.8%)が挙げられた。

表4-8-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部） (%)

	N	学校	個人	ない	よく使 う+ 時々	加工 and 自 作
2 文部科学省著作	122	68.0	4.9	27.0	14.8	71.3
3 附則の9条本	113	64.6	12.3	27.4	19.5	69.0
5 市販のワークブック、問題集	122	43.4	45.9	10.7	77.9	25.4
6 国語辞典	131	93.9	5.3	0.8	70.2	21.4
7 漢和辞典	131	93.9	5.3	0.8	100	35.9
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	128	88.3	0	11.7	16.4	64.1
18 写真（人物、場所、活動場面等）	128	62.5	25.0	1.2	76.6	37.5
19 カレンダー	128	86.7	12.5	0.8	75.0	19.5
20 絵日記	125	31.2	20.8	48.0	28.8	56.8
21 新聞	127	87.4	9.4	3.1	85.0	28.3
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	128	88.3	8.6	2.3	70.3	23.4
32 デジタルカメラ	128	89.1	0	0	85.9	16.4
33 デジタルビデオカメラ	127	92.1	0	0	74.0	21.3
34 インターネットのWeb情報	127	84.3	0	0	84.4	12.5

4-15 その他の自作教材（中学部）

表4-8-2に、その他の自作教材について自由記述を求めた結果を示した。その他の自作教材として、4コマ漫画本、発音に関するプリント、ワークシート、ゲームが挙げられた。

表4-8-2 その他の自作教材（中学部）

教材例	用例
日本語指導の手引き	手引きを元にパワーポイントやワークシートを作成したりしている。
4コマ漫画本	言語指導(文脈の把握、場に合った表現等)で使う。吹き出しの一部台詞を消した4コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。それから、擬音語・擬声語の使い方を知るために用いる。
	漫画をワークシートに提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。上記のものプラス、その場面状況を説明する文作りも行っている。
	バラバラの4コマ漫画を並べ変えて、その後、状況を客観的に文章で説明させる。
	言語指導(文脈の把握、場に合った表現等)で使う。吹き出しの一部台詞を消した4コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
6コママンガ(歌詞)	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した4コママンガ。
鏡文字のカード	歌詞をよんで、6コママンガにする。背景、人の気持を考えて描いていく。
発音に関する自作プリント	鏡に向って、生徒と並んで発音チェックに使用し、良い、もう少しと区分けし、意識して発音できるようにさせる。
日本語指導のための（書記日本語）文法指導用プリント	考えを記入させたり、アンケートをとらせたり、そして発表させて、明瞭さを確認する。
手作りワークシート、パワーポイント	動詞、形容詞、助動詞の活用の法則や使用例を知り、毎日の帯自立の時間に短文づくりを行う。ことばの使い方（絵じてん）よりピックアップし、色々な日常生活場面で使うことばを記入できるようにしている。
365日のワークシート	障害（自己）認識、聴覚、補聴器についてなど、災害時の情報補償、手帳の活用などそれぞれ関連項目について、ワークシートになるよう自作している
プレゼンテーションソフト	言語指導に使う。手話や日本語に関心をもたせ、理解に結びつける。
自校で作成した手話ビデオ	障害について考え、どのように行動していくか実践的な態度の育成を図る。
	耳の構造やきこえのしくみ等の説明を使う。
	定型手話（指導手話）の手型について学ぶ、方言的な手話について学ぶ。

才

ニュース紹介(新聞)	ニュースの記事を紹介する。自分の感想を入れて発表するための「原稿ワークシート」を見ながら写真を提示するなどして、相手に伝わりやすい発表の工夫を考えさせている。
新聞記事	新聞記事の要約活動で使う。
朝日小学生新聞のスクラッチ	今の話題やニュースを意識させる。特集をスクラッチして、図鑑や資料として活用する。
NHK 手話ニュースこどもウィークリー	ニュースを知り、自分の考えをまとめ。番組を録画しておき、DVDにダビングして視聴。ニュースを知ることと、それについて意見を書く練習をする。
文法すごろく	文法指導の問題の復習で使用。教室の床いっぱいにロープではしご状にすごろくを作り、子どもに合わせた問題をおいておく。
動詞めくりゲーム	言語指導で(動詞の活用)の理解を深めさせるために使用
場面に応じた対話の方法 (自作)	「もし・・・したら・・・」「○○の時・・・する」正しい返答ができるか、生活場面で対応できるなどを考えさせ、手話、筆談で答えさせたりする。
SST シート	絵を見て、描かれた状況を把握し、その場にふさわしい言動・態度のとり方を考える。
騒音計	音の大きさを調べる、きこえ方等の基礎知識について学ぶ。

4-16 授業で活用する機器(中学部)

自立活動の授業で活用する機器(発表や表示するために活用するもの)について、23の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた(表4-8-3)。表中、Nは回答数。

学校が保有する教材として50%以下のものは、個人用FM等システム(49.6%)、キューサイン表(47.5%)であった。個人が保有する教材では、発表板(17.1%)、手話表(15.1%)、個人用FM等システム(13.8%)、ひらがなカード(13.6%)であった。「よく使う」及び「時々使う」教材・教具として、黒板(86.9%)、パソコン(88.3%)が多く占めた。また、加工したり自作教材として、割合が高いものとして、漢字表(62.4%)が挙げられた。

表4-8-3 授業で活用する機器(中学部)

	N	学校	個人	ない	よく使う +時々	加工・ 自作	(%)
1 黒板	130	98.5	0.8	0.8	86.9	3.1	
2 発表板	129	62.0	17.1	20.9	55.8	7.8	
3 漢字表	125	58.4	11.2	30.4	27.2	62.4	
5 手話表	123	50.4	15.4	34.1	26.0	7.3	
8 パソコン・プロジェクター	128	100.0	0.0	0.0	88.3	11.7	

1 7 個人用 FM 等システム	123	49.6	13.8	36.6	1.6	0.8
1 8 ひらがなカード	125	68.8	13.6	17.6	1.6	0.8
2 1 キューサイン表	122	47.5	4.9	47.5	0.8	0.8

4-18 その他の自作教材（中学部）

その他の自作教材について、表 4-8-5 に、自由記述を求めた結果を示した。その他の自作教材として、発音指導ソフトウェア、パワーポイント等が挙げられた。

表 4-8-5 その他の自作教材（自由記述：中学部）

教具例	用例
発音指導	発音明瞭度検査で活用している。プログラム(PC ソフト)
	母音の練習のため
	息の使い方を意識させるための教材（息を吸ったり、はいたりして楽しめる物）息じやんけん、息ボーリング
音調べ	騒音計を使う。廊下を走る音、物を落とす音。ハウリング、ドアを開ける音など
パワーポイント	学習する内容を自作してためてある。各々のクラスや学年で実態に合わせて作り直している。
譜面台	発表原稿を見ながらスピーチするときに原稿を置く。
4コマまんが	セリフを考えたり、気持ちを考えたりする。

4-17 あると良い教材（自由記述：中学部）

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について、表 4-8-4 に、自由記述を求めた結果を示した。

あると良い教材として、語彙、構文のチェックリスト表、ろう教育の歴史、手話等の映像教材が挙げられた。

表 4-8-4 あると良い教材（自由記述：中学部）

教材	使用場面
語彙、構文のチェック表	学習評価や引き継ぎの資料として活用。
クリスト表	
ストーリーを考え て、セリフを入れよ う。	物語の読み取り学習、話しの流れをイメージする学習、絵カードをストーリーに沿った順に並び替える、物語やセリフを考える。
語彙チェック表	自立活動や個別指導の時。個人の語彙力、語彙の傾向等を把握する。
ワークシート	ゲーム感覚でコミュニケーションや言葉、必要な情報を学べるもの。
ろう教育の歴史・ろ う文化・ろう運動に ついて	生徒たちに知識として、指導したいと思っていても、映像や文字情報ではつきりと提示できるものを持っていないのであると良い。映像を見ながら、感想や疑問点等、自由に話し合わせる。
障害や福祉制度につ	写真や映像のソフトがたくさん欲しい。目からの情報を使って、さらにイ

いて、年齢に応じた メージをふくらませられるものが良い。

指導教材(視覚教材)

何と言っているでし 話し手の気持ちを考える。友達や人の気持ちを考える。社会性を身につける
よう 何らかの場面を設定した文章があり、会話の部分を空欄にする。前後の流れからどんなことを言っているか考える。

日本手話と日本語対 応手話のちがい DVD のような間接的なものでなく、人的な教材があるといいと思う。見る
だけでなく、実践も入れながらの授業。

発音チェックソフト 自分の発音状況を確認させる

マインドマップ 作文を書くための指導、マインドマップを作成し、一つの事象から枝を増やしていってイメージを膨らませ、単語を文章化するという方法で作文を書く方法を知る。

4-19 教材の有無、活用頻度、活用状況（高等部）

高等部における教材の有無と活用について、中学部と同様に 34 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを使っている・使わない」の質問を設け、当てはまるものを一つ選択することを求めた。

表 4-9-1 に、「よく使う」と「時々使う」が 70%以上の教材、加工及び自作教材が 60%以上の結果を示した。N は回答数。

学校が保有する教材として少ないものは、電子辞書（13.1%）であった。個人が保有する教材では、電子辞書（51.5%）、新聞（60%）、補聴器、イヤモールド、チューブ（50.0%）が多くかった。「よく使う」及び「時々使う」教材として、70%以上のものは、聾学校用教科書、文部科学省著作教科書、附則の 9 条本、インターネットの Web 情報、デジタルカメラ、新聞、手話・字幕付きDVD 等であった。

「よく使う」及び「時々使う」教材・教具として、新聞（82.0%）、デジタルカメラ（7.07%）、インターネットの Web 情報（89.6%）が占めた。

また、加工したり自作教材として、割合が高いものとして、聾学校用教科書、文部科学省著作教科書、附則の 9 条本（71.9～74.7%）の他、紙芝居（69.1%）、楽器（68.4%）が挙げられた。

表 4-9-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）

	N	学校	個人	ない	よく使 う+時々	加工 and 自作	(%)
1 聾学校用教科書	92	65.2	4.3	30.4	9.8	72.8	
2 文部科学省著作	87	59.8	2.3	37.9	12.6	74.7	
3 附則の 9 条本	89	56.2	7.9	36.0	12.4	71.9	
8 電子辞書	99	13.1	51.5	35.4	43.4	39.4	
9 手話辞典	103	94.2	4.9	1.0	75.7	18.4	
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	97	82.5	1.0	16.5	14.4	69.1	
21 新聞	100	90.0	60.0	40.0	82.0	13.0	

26 補聴器、イヤモールド、チューブ	100	92.0	50.0	30.0	68.0	25.0
29 楽器(うちわ太鼓、リズム積み木等)	95	90.5	1.1	8.4	17.9	68.4
31 手話・字幕付きDVD	98	89.8	7.1	3.1	71.4	24.5
32 デジタルカメラ	99	98.0	0.0	0.0	81.8	20.2
33 デジタルビデオカメラ	99	97.0	0.0	0.0	70.7	31.3
34 インターネットのWeb情報	96	97.9	0.0	0.0	89.6	12.0

4-20 その他の自作教材（高等部）

その他の自作教材について、自由記述を求め、表4-9-2に結果を示した。その他の自作教材として、PCソフト、模擬体験用機材等が挙げられた。

表4-9-2 その他の自作教材（自由記述）

教具例	用例
発音指導プログラム(PCソフト)	発音明瞭度検査で活用している。
パワーポイント	学習する内容を自作してためてある。各々のクラスや学年で実態に合わせて作り直している。
譜面台	発表原稿を見ながらスピーチするときに原稿を置く。
デジタルフォトフレーム	行事等の後、画像をスライドショーにして廊下で流しておく。活動の場面を繰り返し、生徒が目にすることで記憶に残る。
タブレット型PC & モバイルWi-Fi	授業の中で、各自調べたい内容をすぐに調べることができる。動画で自分の手話や表情を確認できる。
模擬体験用機材一式	市役所・病院・銀行の3つを高1～高3で模擬体験している。その時の教材。市役用・病院用・銀行用と卒業後、1人で行く事を想定して活用している。
365日のワークシート	自立活動の時間に提示する。クイズ形式にしたり、事象を提示して、やりとりすることを大事にしている。

4-21 授業で活用する機器（高等部）

自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、中学部と同様に23の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを使っている・使わない」の質問を設け、当てはまるのを一つ選択することを求めた(表4-9-3)。Nは回答数。

学校が保有する教材として少ないものは、ひらがなカード(6.8%)であった。個人が保有する教材では、発表板(12.9%)、手話表(10.1%)であった。「よく使う」及び「時々使う」教材として、80%以上のものは、黒板、パソコン、デジタルカメラであった。また、加工したり自作教材・教具として、パソコン(11.7%)の他は少なかった。

表 4・9・3 授業で活用する機器（高等部）

	N	学校	個人	ない	よく使う +時々	(%) 加工 +自作
1 黒板	101	97.0	1.0	2.3	86.1	1.0
2 発表板	101	61.4	12.9	25.7	58.4	5.9
5 手話表	99	51.5	10.1	38.4	17.2	5.1
8 パソコン・プロジェクター	103	98.1	0.0	1.9	93.2	11.7
10D VDプレイヤー	102	99.0	0.0	1.0	75.5	2.0
18 ひらがなカード	93	6.8	8.6	22.6	18.3	3.2

4-2-2 その他の教材・教具（自由記述：高等部）

その他の自作教材・教具について、自由記述を求めた。その他の自作教材として、iPad & モバイル Wi-Fi、模擬体験用機材、拡大コピー機等が挙げられた。

4-2-3 あると良い教材（自由記述：高等部）

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について自由記述を求め、表 4・9・4 に結果を示した。

あると良い教材として、自立活動(聴覚障害者用)の教科書、聴覚障害教育の歴史等の映像教材、自立活動用チェックシート、手話テスト、読書力診断検査など、高校生用の教材等が挙げられた。

表 4・9・4 あると良い教材（自由記述：高等部）

教材	使用場面
自立活動(聴覚障害者用)の教科書(できれば幼・小・中・高一貫した内容で)	年間の指導計画や個人の指導計画・指導内容を作成する上で役立つ。 生徒たちに知識として、指導したいと思っていても、映像や文字情報ではつきりと提示できるものを持っていないのであると良い。映像を見ながら、感想や疑問点等、自由に話し合わせる。
聴覚障害者の歴史に関する掛図またはDVD（手話と口話の歴史、聴覚障害教育の歴史など）	「障害についての理解を深める」授業の中で利用する。 社会生活を送る上で、聴覚障がい者が困る場面や判断に迷う場面を事例別に編集したビデオDVD。例、会社での人間関係。公共の場でのトラブル、情報保障のない場面など 解決するための事例学習に活用する。
他校の紹介ビデオ	国内外問わず、聴覚障害があっても、多方面に活躍している方々の映像やインタビュー、スピーチ等が文字入りで入っているもの。なるべく、多数、多職種について触れてあるとよい。 生徒は他校の様子を知りたがるが、実際に見学には行けないため、他校を知ることで、自校の特色が分かれば良いと思う。

社会参加に向けたDVD	社会参加する上での色々な場面での対応の仕方の参考になるもの。全体指導などから卒業後の再学習などに対応できるもの、個人が安価で購入できるものでも可か。
字幕つきのDVD教材 様々な場面(会社に入るときや入ってから)を想定したDVD	「性の指導」や「聞こえについて」の学習に活用。 障害認識などで活用し、ディスカッションさせたい。
福祉用具(目ざまし時計 インタホーン、呼名、ベビージグナル)	実際に使うために布団と枕があるといい。
ライブチャットのようなもの	席にいながら手元で授業に対する意見、感想などを入力し、リアルタイムで集約し、メイン画面で出力する。キーボード入力の難しい場合にも自分の意見に近いものをボタンで選べるようにする。
タブレット型PC	現在沢山のアプリがあるので、そのアプリを利用し(例)社会人のマナー 社会人の言葉づかいなど 動画を使用し視覚的に学べるものを見選び指導に役立てる。
自立活動用チェックシート(高等部用)	社会参加に必要なことがらを、自立活動の領域別に発達の段階に則した具体的な達成内容の目安があるもの。担当者や本人が達成の目安にできる。
語学力、文法力が生徒に分かる教材	個別指導で生徒が自己の力を客観的につかむ。
ろう学校検定のようなもの	読み取り・コミュニケーション・手話力・行動力などを測るもの 社会に出るために何級レベルなど。
進路に関する全国の聴学校卒業生の実態がまとめであるもの(データ)	本校の卒業生の様子(就職して困ったこと等)を伝え、厳しい現状を伝えるようにしているが、本校だけだと少ないため、全国の方の様子や、働く際に直面している課題を幅広く知ることができると良い。
障害を知る、自己認識のチェック項目	障害認識の授業の際、生徒がどこまで受けとめているかによって内容がかわってくるため、事前の実態把握に使用したい。
手話テスト(高校、成人用)語い、文法について	実態把握や事後評価に使用したい。聴覚障害者向けの高校生で知つておくとよいもの(手話)が目安程度でもわかるとよい。
日本手話と日本語対応手話のちがい	DVDのような間接的なものではなく、人的な教材があるといいと思う。 見るだけでなく、実践も入れながらの授業をしたい。
読書力診断検査(高校・成人用)	現在、実際把握のため、中学生用を使用しているが、参考程度であり、進路等の話し合いなど、保護者や本人に実力を理解してほしい時に、明確な資料になりづらい、聴者との差がわかると目標がはっきりすると思われる。

第3項 「自立活動」のまとめと考察

学部が上がるにつれて回答数が減っているが、基礎情報として、幼稚部から高等部まで、有効回答数 568 名の回答を得た。各部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数について、全学部とも教職経験年数 22 年以上の教員が 38%~47% と長いが、聾学校経験年数 0 ~6 年の教員が 40% 台であった。所属学部経験年数を見ると、経験年数 0~3 年の教員が、幼稚部 (34.1%)、小学部 (25.2%)、中学部 (34.6%)、高等部 (32.1%) と 1/4 から 1/3 を占めた。自立活動は発達年齢に対応した専門的指導が求められる領域の一つであることを踏まえると、校内において研修体制の充実が必要であると考えられる。

各学部のコミュニケーション手段については、幼稚部を除き、小学部から高等部は手話付スピーチの割合が 80% 台と高く、補聴器（または人工内耳）の併用による指導が認められた。今日の特別支援学校（聴覚障害）のコミュニケーション手段として、総体的には手話付スピーチが定着している状況があり、自立活動においては、個に応じた指導という観点から、より一人一人の発達段階を考慮した指導が求められる。

学校保有の教材で多いものは、幼稚部では絵本、紙芝居、図鑑、ことば絵じてん、カレンダー等の教材が 90% 前後を占めた。個人では絵日記が最も多かった。こうした教材は、聾学校で定常化され、視覚的に子どもの記憶に残したり、繰り返し活用できる教材として、母子間でのコミュニケーション活動だけなく、学級内での活動にも有効に活用が図られていると考えられる。

幼稚部での自作教材としては、行事や言語指導用の教材が作成されており、屋外活動においては、デジタルカメラやメモ帳、写真などが用いられ、半具体物の活用が図られている。

これらは記憶保持だけではなく、興味や関心の持続だけなく、事後指導にも有効活用されている事が伺われた。特に、デジタルカメラは全学部で使用され、聾学校での主要な教具になっている。

小学部では、聾学校用教科書、国語辞典、漢和辞典、ことば絵じてん、図鑑、絵本、紙芝居、耳の構造図、補聴器、楽器、デジタルカメラ、インターネットの Web 情報が広く活用さて、書きことばを意識した教材を積極的に導入している状況が認められた。個人が保持する教材・教具として、電子辞書が挙げられたことは注目される。また、市販のワークブック、が活用頻度の高い教材をして採り入れられ、これを子どもに応じて修正し、使用する実態があった。更に、補聴器点検用具、発音・発語指導用具、CD プレイヤーの使用も認められ、自立活動における言語指導や聴覚学習にとって不可欠の教材として考えられる。

また、「あると良い教材」としてコンピュータソフトや発音指導機器等が挙げられた。これらの導入により、子どもの記録管理、子どもの興味・関心の持続、更に情報の共有化や簡便化を図るなど、幅広い活用が期待される。

中学部では、絵日記を除き、小学部での教材を保有していたが、絵日記は手を加えて活用していた。また、個人で市販のワークブックや電子辞書をほぼ半数の割合で保有し、活用が図られていた。その他の自作教材として、発音指導に関するプリントの 4 コマ漫画等、言語面で語彙や語用の拡充を図る教材用いられていた。あると良い教材として、ろう教育の歴史、手話等の映像教材が挙げられ、発達段階に応じた自己意識や自己効力感など障害の対する理解教育の必要性が考えられた。

高等部では、「よく使う」、「時々使う」教材、加工や自作教材の減少傾向が見られた。60% 以上活用している教材は、10 教材であった。しかし、新聞等の活用 (82.0%)、手話辞典 (75.7%)

など、他学部にない特長が認められた。自作教材として、iPad & モバイル Wi-Fi の記述もあった。情報通信機器の活用や時事問題を取り上げる中で、生徒に社会を見据えた課題意識を育てることが伺われた。あると良い教材として、自立活動(聴覚障害者用)の教科書、自立活動用チェックシートなど、高校生用の教材等が挙げられ、中学部の延長ではなく高等部専用の教材を充実する必要がある。

何れの学部においても、語彙や発音等の言語面の教材が共通しており、低い学部ほど、教材の量も多岐にわたる傾向があった。また、自作教材も既存の教材をアレンジして作成されている実態が明らかになった。更に、デジタルカメラやパソコンは、教材作成の重要な道具となっていた。

自立活動は幼稚部から高等部までの一貫した指導が求められる。このため共通教材として、学部を超えて活用することも意義があり、ICT の活用により、簡便化や教材情報の共有化も期待される。一方で、発達段階に応じた教材も必要となる。自立活動は一人一人の障害の状態に応じた指導を行うという観点からは、教材の質の向上を図ることも重要である。高等部のように、発達段階に応じた教材の量そのものが潤沢ではない状況もあり、指導時間や指導内容を考慮した場合、学校全体の課題として捉えていく必要もある。更に、自立活動と他の領域教科との関連性において、検討する必要がある。国語科や算数・数学、音楽科などで使用される教材と共通性を持たせて活用することも必要である。しかし、指導のねらいは独自に設定されるべきであり、同一教材であっても、その活用について工夫が求められよう。

自立活動は障害の改善・克服を目指した教育活動の一つである、とりわけ、聴覚障害の実態把握を行う上で重要である。様々なコミュニケーション場面を設定(想定)し、聞こえの発達状況の把握や様々な感覚の活用を図る指導を行っているが、知識、機能だけではなく、卒業後の生活を見据えた教材とその活用について検討する必要がある。

(原田公人)

第5節 電子黒板

本節では、小学部から高等部までの各学部の国語科、算数・数学科、外国語活動・英語科、自立活動担教員2名を対象として、所属校での電子黒板の有無、活用頻度、活用した教科や場面、活用への期待（活用が望ましいと思われる教科や場面、活用のための必要要件）、活用上の工夫や配慮点について尋ね、得られた結果から電子黒板の活用を巡る現状と課題を考察した。

第1項 回答数

表5・1に、本調査に対して得られた全ての回答数（以下、総回答数）と調査対象とした有効回答数（電子黒板の有無を回答したもの）を各学部毎に示した。

表5・1 回答数

	国語	算数数学	外国語	自立活動	計
小学部	133(161)	139(161)	99(132)	111(159)	482(613)
中学部	95(130)	101(121)	89(113)	96(136)	381(500)
高等部	83(111)	83(105)	66(99)	73(109)	305(424)
計	311(402)	323(387)	254(344)	280(404)	1,168(1,537)

第2項 結果

(1) 電子黒板の有無

表5・2に、学校での電子黒板の有無を示した。自校に電子黒板が有ると回答したのは、有効回答数のうちの54.8%であった。

表5・2 電子黒板の有無

N=1,168 (数値は%)

有り	54.8
----	------

(2) 電子黒板の活用頻度

有効回答数のうち、電子黒板の活用頻度に回答した調査票を抽出した。この結果、各学部の回答数は、小学部が73(15.1%)、中学部が76(19.9%)、高等部が70(23.0%)であった。

これらの抽出した回答を対象とし、表5・3に、記入者の電子黒板の活用頻度を学部毎に示した。各学部とも「年間5回以下」と回答した割合が最も多かった。また、週1回以上活用していると回答したのは、小学部42.5%、中学部41.7%、高等部35.7%であった。

表5・3 電子黒板の活用頻度 小学部 N=73 中学部 N=76 高等部 N=70 (数値は%)

	週5回以上	週1回以上	年間6回以上	年間1~5回
小学部	21.9	23.3	12.3	42.5
中学部	22.4	17.1	19.7	41.7
高等部	20.0	30.0	14.3	35.7

(3) 電子黒板を活用したことがある教科等

電子黒板を活用したことがある教科等について複数回答による回答を求めた。表 5-4 に、学部毎の結果を示した。

小学部担当者の回答数は、国語（46）、算数（42）、社会（35）の順に多かった。次いで、学校行事（33）、総合的な学習の時間（31）となっていた。

中学部担当者の回答数は、総合的な学習の時間（53）、特別活動（32）、学校行事（31）の順に多かった。次いで、英語（26）、国語（22）と数学（22）となっていた。

また、高等部担当者の回答数は、総合的な学習の時間（35）、その他（職業科の授業、進路指導における講話や説明会等）（31）、学校行事（27）の順に多かった。次いで、国語（23）、情報（22）、外国語（18）となっていた。

表 5-4 学部別 電子黒板を活用したことがある教科等

小学部 N=482 中学部 N=381 高等部 N=305 (複数回答 数値は回答数)

	小学部	中学部	高等部
国 語	46	22	23
社 会	35	18	10
公 民	1	—	7
算数・数学	42	22	10
理 科	22	11	13
音 楽	10	3	0
生活科	8	—	—
外国語活動・英語	22	26	18
図工・美術	6	5	5
保健体育	6	1	7
技術・家庭科	7	7	5
道 德	19	19	—
特別活動	26	32	0
情 報	—	—	22
総合的な学習の時間	31	53	35
学校行事	33	31	27
その他の	25	21	31

※その他…自立活動、LHR や HR、職業科、生徒対象の講話や研修会、教科等を合わせた指導

次に、表 5-5-1、表 5-5-2、表 5-5-3 に、国語科、算数・数学科、外国語活動・英語科の担当者別の結果を示した。

表 5-1-1 から、国語担当者が、活用したことのある教科等について、小学部の回答数は、国語（14）、算数（10）、学校行事（10）の順に多かった。中学部の回答数は、国語（17）、総合的な学習の時間（15）、学校行事（11）の順に多かった。高等部の回答数は、総合的な学習の時間（13）、学校行事（11）、国語（10）と情報（10）の順に多かった。

表 5・5・1 国語科担当者が電子黒板を活用したことがある教科

小学部 N=133、中学部 N=95、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	14	17	10
算数・数学	10	1	5
情 報	—	—	10
総合的な学習の時間	7	15	13
学校行事	10	11	11

表 5・2・2 から、算数・数学担当者が、活用したことのある教科等について、小学部の回答数は、その他（教科等を合わせた指導、自立活動）(13)、国語(12)、算数(11)の順に多かった。中学部の回答数は、数学(16)、総合的な学習の時間(11)、その他（自立活動、教科等を合わせた指導）(11)の順に多かった。高等部の回答数は、その他（進路学習、生徒向け研修会、自立活動）(13)、国語(6)と情報(6)の順に多かった。

表 5・5・2 算数・数学担当者が電子黒板を活用したことがある教科

小学部 N=131、中学部 N=101、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	12	0	6
算数・数学	11	16	4
情 報	—	—	6
総合的な学習の時間	7	11	5
学校行事	10	4	3
その他	13	11	7

表 5・5・3 から、外国語活動・英語担当者が、活用したことのある教科等について、小学部の回答数は、算数(11)、外国語活動(10)、国語(10)、社会(10)の順に多かった。

中学部の回答数は、英語(17)、総合的な学習の時間(14)、学校行事(6)の順に多かった。高等部の回答数は、英語(11)、総合的な学習の時間(11)、その他（進路学習、生徒向け研修会、自立活動）の順に多かった。

表 5・5・3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用したことがある教科

小学部 N=99、中学部 N=89、高等部 N=66（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	10	2	5
社 会	10	3	2
算数・数学	11	1	0
外国語活動・英語	10	17	11
総合的な学習の時間	11	14	11
学校行事	8	6	7
その他	3	3	9

(4) 電子黒板を活用することが望ましいと思われる教科等

電子黒板を活用したことがある教科等について複数回答による回答を求めた。表 5-6 に、学部毎の結果を示した。

小学部担当者の回答数は、理科（139）、社会（137）、算数・数学（126）の順に多かった。次いで、国語（120）、総合的な学習の時間（86）となっていた。

中学部担当者の回答数は、総合的な学習の時間（100）、理科（86）、社会（80）の順に多かった。次いで、数学（75）、国語（70）となっていた。

高等部担当者の回答数は、総合的な学習の時間（69）、学校行事（61）、情報（61）の順に多かった。次いで、理科（59）、社会（55）となっていた。

表 5-6 学部別 電子黒板を活用することが望ましいと思われる教科等

小学部 N=482、中学部 N=381、高等部 N=305（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
社会	137	80	55
算数・数学	126	75	43
理科	139	86	59
情報	—	—	61
総合的な学習の時間	86	100	69
学校行事	70	69	61

※ その他…自立活動、LHR や HR、職業科、生徒対象の講話や研修会、教科等を合わせた指導

次に、表 5-7-1、表 5-7-2、表 5-7-3 に、国語科、算数・数学科、外国語活動・英語科の担当者別の結果を示した。

表 5-7-1 から、国語担当者が、活用することが望ましいと回答した教科等について、小学部の回答数は、社会（38）、算数（38）、理科（37）の順に多かった。次いで、国語（32）、学校行事（18）となっていた。

中学部の回答数は、総合的な学習の時間（24）、学校行事（21）、国語（20）、社会（20）の順に多かった。次いで、理科（19）、数学（17）となっていた。

高等部の回答数は、総合的な学習の時間（26）、学校行事（24）、社会（22）の順に多かった。次いで、国語（20）、理科（20）となっていた。

表 5-7-1 国語科担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科

小学部 N=133、中学部 N=95、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国語	32	20	20
社会	38	20	22
算数・数学	38	17	14
理科	37	19	18
総合的な学習の時間	15	24	26
学校行事	18	21	24

表 5-7-2 から、算数・数学担当者が、活用することが望ましいと回答した教科等について、小学部の回答数は、社会（42）、理科（42）、算数（36）の順に多かった。次いで、国語（34）、

総合的な学習の時間（30）となっていた。

中学部の回答数は、数学（27）、理科（24）、総合的な学習の時間（24）の順に多かった。次いで、社会（16）、国語（15）、学校行事（15）となっていた。

高等部の回答数は、情報（15）、国語（12）、数学（10）、理科（10）の順に多かった。次いで、総合的な学習の時間（9）、社会（6）、学校行事（6）となっていた。

表 5・7・2 算数・数学担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科

小学部 N=139、中学部 N=101、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国語	34	15	12
社会	42	16	6
算数・数学	36	27	10
理科	42	24	10
情報	—	—	15

表 5・7・3 から、外国語活動・英語担当者が、活用することが望ましいと回答した教科等について、小学部の回答数は、理科（27）、社会（25）、国語（22）、総合的な学習の時間（22）の順に多かった。次いで、算数（19）、外国語活動（19）となっていた。

中学部の回答数は、総合的な学習の時間（25）、英語（20）、社会（19）の順に多かった。次いで、理科（18）、特別活動（18）となっていた。

高等部の回答数は、総合的な学習の時間（19）、学校行事（19）、情報（14）、理科（14）の順に多かった。次いで、社会（12）、英語（12）となっていた。

表 5・7・3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う

教科 小学部 N=99、中学部 N=89、高等部 N=66（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国語	22	14	9
社会	25	19	12
理科	27	18	14
外国語活動・英語	19	20	12
情報	—	—	14
総合的な学習の時間	22	25	19
学校行事	15	17	19

(5) 電子黒板を活用したことがある授業場面

授業場面として、「教員が課題を提示する場面」「学習の理解を深める場面」「実験や観察、製作の手順を説明する場面」「子どもに発表させる場面」「子どもの活動や作品等を提示する場面」「その他」の 6 場面を提示し、活用したことがある場面について複数回答を求めた。表 5・8 に、学部別の結果を示した。

小学部の回答数では、学習の理解を深める場面（89）、実験や観察、製作の手順を説明する場面（75）、教員が課題を提示する場面（70）の順に多かった。

中学部の回答数では、教員が課題を提示する場面（67）、学習の理解を深める場面（62）の順に多かった。

高等部の回答数も中学部と同様、教員が課題を提示する場面（55）、学習の理解を深める場面（53）の順に多かった。

表 5-8 学部別電子黒板を活用したことがある授業場面

小学部 N=482 中学部 N=381 高等部 N=305（複数回答、数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
教員が課題を提示する場面	70	67	55
学習の理解を深める場面	89	62	53
実験や観察、製作の手順を説明する場面	75	41	26
子どもに発表させる場面	33	40	34
子どもの活動や作品等を提示する場面	36	29	23
その他	16	4	20

次に、表 5-9 に、教科担当者別の回答結果を示した。

国語の回答数は、教員が課題を提示する場面（44）、学習の理解を深める場面（42）の順に多かった。算数・数学の回答数も教員が課題を提示する場面（58）、学習の理解を深める場面（55）の順に多かった。外国語活動・英語では、学習の理解を深める場面（53）、教員が課題を提示する場面（43）の順に多かった。

「その他の場面」の回答は、大半が「活用していない或は活用経験がない」ための選択であった。具体的な場面の記述について、国語では、「児童生徒の発言を記入する場面」「書籍やタイトル等の情報を提示する場面」が挙げられていた。算数・数学では、「生徒が触れることで数的な現象を理解しやすくする場面」が挙げられていた。外国語活動・英語では、「写真、映像、図等の視覚教材を提示する場面」が挙げられていた。

表 5-9 教科等担当者が電子黒板を活用したことがある授業場面

国語 N=311 算数・数学 N=323 外国語活動・英語 N=254（複数回答、数値は回答数）

	国語	算数・数学	外国語活動・英語
教員が課題を提示する場面	44	58	43
学習の理解を深める場面	42	55	53
実験や観察、製作の手順を説明する場面	31	42	28
子どもに発表させる場面	35	21	25
子どもの活動や作品等を提示する場面	25	23	18
その他	10	10	10

(6) 電子黒板を活用することが望ましいと思われる授業場面について

電子黒板の効果について、「児童生徒の意欲を高める」「児童生徒の理解を促す」「児童生徒の表現や技能を高める」「児童生徒の思考を深める」の 4 点を提示し、「とても思う」「少し思う」「あまり思わない」「全く思わない」の中から一つ選択することを求めた。

表 5-10 に、学部毎の結果を示した。いずれの学部においても、「少し思う」が最も多い回答数であった。

表 5・10 学部別 電子黒板を活用することが望ましいと思われる授業場面

小学部 N=482 中学部 N=381 高等部 N=305 (数値は回答数)

	とても思う			少し思う			あまり思わない			全く思わない		
	小学部	中学部	高等部	小学部	中学部	高等部	小学部	中学部	高等部	小学部	中学部	高等部
意欲を高める	108	68	56	139	121	113	17	19	18	2	3	3
理解を促す	84	63	51	152	129	112	26	16	23	4	3	4
表現や技能を高める	51	36	45	153	123	109	57	49	32	4	3	4
思考を深める	59	46	49	158	128	102	42	34	24	5	3	5

表 5・11 に、教科等別の回答結果を示した。いずれの教科においても、「少し思う」が最も多い回答数であった。

表 5・11 教科等担当者別電子黒板を活用することが望ましいと思われる授業場面

国語 N=311 算数・数学 N=323 外国語活動・英語 N=254 (数値は回答数)

	とても思う			少し思う			あまり思わない			全く思わない		
	国語	算数		国語	算数		国語	算数		国語	算数	
		数学	外国語 動・英語		数学	動・英語		数学	動・英語		数学	動・英語
意欲を高める	58	71	54	88	103	85	14	14	11	2	2	2
理解を促す	48	57	47	94	111	88	16	19	16	4	3	1
表現や技能を高める	32	35	31	89	107	98	37	45	23	4	3	0
思考を深める	25	44	35	93	107	93	30	34	22	4	4	2

(7) 電子黒板を活用する上で、今後必要と思われること

電子黒板を活用する上で、今後必要だと思われることを「全ての教室に整備すること」「より性能の良い機器を整備すること」「映像に字幕を付けること」「映像に手話を付けること」「データ放送ができ、その内容が充実されること」「映像の種類や内容を充実させること」「その他」の 7 点提示し、当てはまるものについて複数回答を求めた。

表 5・12 に、学部別の結果を示した。

いずれの学部においても、「全ての教室に整備されること」、「映像に字幕を付けること」「映像の種類や内容を充実させること」の順で回答数が多かった。また、「その他」には、137 の記述回答が得られた。

記述された内容を上記の表 5・12 にある(1)~(7)の視点で整理し、表 5・13 に示した。記述では、より簡単な操作や使いやすさへの要望、教員研修への要望が特に多かった。

表 5-12 電子黒板を活用する上で、今後必要と思われること

小学部 N=633 中学部 N=480 高等部 N=412(複数回答 数値は回答数)

	小学部	中学部	高等部
(1) 全ての教室に整備	155	128	108
(2) より性能の良い機器を整備	64	54	50
(3) 映像に字幕	142	116	83
(4) 映像に手話	62	38	34
(5) データ放送ができ、その内容が充実	64	34	37
(6) 映像の種類や内容の充実	110	68	68
(7) その他	36	42	32

表 5-13 電子黒板を活用する上で、今後必要と思われる具体的な内容 () は回答数

(1) 全ての教室に整備 (12)	各教室への設置を希望 (9) 電子教材の配布を希望 (3)
(2) より性能の良い機器を整備 (51)	より簡単な操作、使いやすさを希望 (34) 設置や移動の簡便さを希望 (7) 新しい物、コンパクトさを希望 (2) ペンの性能向上を希望 (2) タブレット等が良い (3) テレビ型が良い (2) 画像のプリントアウトを希望 (1)
(5) データ放送ができ、その内容が充実 (2)	インターネットへの接続を希望 (1)
(6) 映像の種類や内容の充実 (16)	電子教材の充実 (7) 加工可能な電子教材、ワープロや表計算ソフトとの互換性 (8) 映像のダウンロード (1)
(7) その他 (56)	教員の研修 (30) 教師の意識、授業力 (6) 活用事例集（効果的な活用）や教材の共有化 (6) 安価、予算確保 (4) アドバイザーや支援員配置 (2) 教材作成のための時間確保 (2) タブレット型やほかの機器の活用で可能 (6)

(8) 電子黒板の活用にあたり、工夫や配慮していること

電子黒板の活用にあたり、聴覚障害児童生徒への使用に際し工夫していることについて、自由記述による回答を求めた。

自由記述の内容は、学部や教科担当者間で大きな差異は認められなかった。表 5-14 に、記述された工夫・配慮点を示した。

表 5-14 電子黒板の活用にあたっての工夫・配慮点

小学部 N=36、中学部 N=26、高等部 N=36 () は回答数

工夫・配慮点	具体的な内容
1. 電子黒板の使用 目的と使用場面の検討 小学部(6) 中学部(8) 高等部(7)	<ul style="list-style-type: none"> 場面と目的に応じて電子黒板と既存の教材とを使い分けた授業計画をする。 教科書の文を提示、生徒に考えの根拠を指し示してもらう等の場面で活用。既習の内容の理解を深めるために活用。 理科の実験で、自分の考察を説明させるのに活用。生徒自ら電子ペンを持ち、写真やグラフに書き込ませながら説明させている。 算数のグラフ作成、長文の提示で活用。 相互に発表の評価をさせ、効果的な表現や伝達の工夫について考えさせる。 電子黒板でないと指導や提示ができない場面でのみ活用（ペンと筆跡のズレが正確な情報を伝達できないため）。 聴覚障害児の課題として推論が重要。国語科では、ことばをことばで考えること（単に視覚的に分かりやすくするのではなく）を大切にしたい。 本時のポイントをしぶり、考えさせる時間、意見を引き出す時間、ノートに書く時間、定着させる時間を確保する。 授業中のコミュニケーション（話すこと、聞くこと、やりとり）の活動を確保する。 学習過程が分かる板書構成（電子黒板で提示する物、掲示物も含む）を計画しておく。 基本は従来の黒板で授業を進め、アニメーション等や確認事項、手順をおさえる際に、必要に応じて電子黒板を活用。（電子黒板の情報が残らないため）
2. 電子教材の加工や準備 小学部(4) 中学部(9) 高等部(11)	<ul style="list-style-type: none"> 電子黒板で提示する情報（文章、写真、図等）を事前に取捨選択する、加工しておく。 外國語活動では、発音やアクセントを色分けや強さの表記で示している。 効率的に進めるため、見せたいものを抽出したり、拡大したりする。 教材文に関する絵や写真をあらかじめ電子データにしておく。（古文、漢文では特に多く使用） 効果的に見せるため、映像を編集、選択して利用している。 一度に多くの情報を出すのではなく、アニメーション機能等を使って、順序よく提示するよう準備する。 国語の教材文や提示する文章が読みやすい、理解しやすいようにしておく。 ふりがなをふっておく。或いは、表示できるようにしておく。 分かち書きをしておく。 一目で見れる長さの文にする。 本文と質問文のシートの色を変える。 教材に解説文をつける。 簡潔で分かりやすい表現で作成する。 効率的な学習のための準備や配慮をする。 予想される意見、キーワードなどもすぐ表示できるよう準備しておく。 生徒の学習プリントと画面を一致させ、ノートを取りやすくしている。
3. 注目のさせ方 小学部(4) 中学部(1) 高等部(1)	<ul style="list-style-type: none"> 教師の話し方 教師と電子黒板のどちらに注目させるのかが分かるよう、教師の話し方の切り替えに留意している。 学習習慣 電子黒板を使うときは、手元は何もないようにし（教科書を閉じる）、視線を集中させる。 注目を促すための合図、黒板に視線をスムーズに向けさせるためのルールを作って徹底する。
4. 他教材の併用 小学部(5) 中学部(3) 高等部(3)	<ul style="list-style-type: none"> 文字情報を残しておくための配慮 紙の教材は残るので振り返りが可能。使い分けが必要。 提示した情報が全て消えてしまわないよう必要に応じてプリントしておく。 学習の過程が分かるよう、文字で残す。（板書） 黒板にカードをはり、まとめを行ったり、定着をはかる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>他教材との併用</u> 実物、写真、プリント教材
5.活用の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じ、前の場面に戻りながら、内容を思い出させる。
小学部(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 消えてしまう情報（映像）を記憶に止めるために強調したり、反復したりする。
中学部(1)	
高等部(2)	
6.見やすさへの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>機器と児童生徒の位置</u> 話者（授業者や発表者）と掲示物（電子黒板）が児童にとって同一方向になるよう配慮する。 ・ <u>文字の大きさ、色、フォント等</u> 見やすく疲れないよう、文字の大きさや色使いをはっきりしたものにする。 文字の大きさ、フォントはゴシック体 明るさの調整 使用時間の制限（目の疲労予防） 事前テストの実施（実施と映像の大きさの確認） 聴覚障害以外の生徒と一緒に活動する場合、前列にする等の配慮をする。 採光、カーテン、照明などを工夫する。
7.情報保障	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>音声付きの映像では、教師が手話通訳をつける。</u>
小学部(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>映像があれば、手話の有無にかかわらず、字幕をつけている。</u>
中学部(2)	
高等部(0)	
8.機器の準備や操作	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>準備について</u> アクシデントのため使用できなくなった場合の代替手段や心構えの準備が必要。 2つスクリーンを用意（発表用、質疑応答時のコメント記入用） ・ <u>操作について</u> 使用する際の量、授業のスピードを損なわないようにする（操作に時間をとられないようにする）。 操作しやすくしている（児童にも） 生徒も自分で操作、発表できるように指導しておき、空いた両手で手話をつけるようにしている。（教員も同様） 生徒が電子端末を利用している際に、教員が一斉に管理できるのが便利。生徒が注目させるのに役立つ。 通信機器がついていると情報提供がしやすい。
9.その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>電子黒板を使った授業研究が必要</u>
小学部(1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>他機器の活用</u>（書画カメラ、PC、プロジェクター、タブレット、MacTV）
中学部(0)	
高等部(3)	

自由記述から、活用上の工夫・配慮点は、「授業を計画、準備する段階での工夫・配慮」「授業を実際にに行うにあたっての工夫・配慮」「その他」に分類された。

「授業を計画、準備する段階での工夫・配慮」として、「1.電子黒板の使用目的と使用場の検討」「2.電子教材の加工や準備」「8.機器の準備や操作」が挙げられ、記述回答総数約半数を占めた。特に、「1.電子黒板の使用目的と使用場面の検討」では、既存の教材も含め、使用目的と場面を検討した上で使い分けることを重視する記述が多く、授業中のコミュニケーションや児童生徒が考える時間を確保する記述も多かった。また、電子黒板の情報は紙媒体のように残らないため、学習過程が分かる板書にすることを重視する記述が多かった。「2.電子教材の加工や準備」では、提示する情報の取捨選択や加工、教材文の内容理解を促す配慮、効率的な学習を進めるための提示情報の加工、ワークシートやプリントの準備に関する記述が多かった。「8.機器の準備や操作」では、機器トラブルの際の対応を事前に想定しておくこと、黒板とスクリーン等提示する機器と配置計画に関する記述が見られた。

次に、「授業を実際に行うにあたっての工夫・配慮」として、「3.注目のさせ方」では、師の話し方、電子黒板を活用するにあたっての学習習慣の育成に関する記述が見られた。「4.他教材の併用」では、電子黒板で提示する情報が紙媒体のように残らないため、プリントやワークシートの併用、板書計画の吟味、实物や写真等既存の教材の活用に関する記述が見られた。「5.活用の仕方」では、提示する情報が順次変わっていくことへの対応とし、前の場面の振り返りや児童生徒に印象づけるための提示の工夫に関する記述が見られた。「6.見やすさへの配慮」では、機器と児童生徒の位置や文字の色・フォント等への配慮に関する記述が見られた。「7.情報保障」教師による手話通訳、字幕の挿入に関する記述が見られた。「その他」として、授業研究の重要性と他機器の活用の工夫が挙げられた。

第3項 「電子黒板」のまとめと考察

電子黒板の有無を回答した調査票 1,168 から、回答数の 54.8% が「有る」と回答したことから、特別支援学校（聴覚障害）の約半数に 1 台は、電子黒板が設備されているものと思われる。この回答数のうち、電子黒板の活用頻度に回答した調査票を抽出し、活用頻度を学部別にまとめたところ、小学部から高等部までのいずれの学部においても、年間 1~5 回の活用頻度に対する回答が最も多かった。（小学部 42.5%、中学部 41.7%、高等部 35.7%）

一方、「週 1 回以上」と「週 5 回以上」の回答結果を合わせると、小学部では 45.2%、中学部では 39.5%、高等部では 50.0% となり、週 1 回以上活用している教員は、小学部・高等部では回答者の約半数、中学部では回答者の約 4 割となっていた。このことから、活用経験のある教員の中には、活用頻度が少ない場合と日常的に活用している場合があると思われる。

電子黒板を活用したことがある教科等については、学部別の回答数を求めた結果、小学部では国語、算数、社会、学校行事、総合的な学習の時間の順となっており、教科指導に加え、特別活動や総合的な学習の時間でも活用されていることが示された。

中学部は、総合的な学習の時間、特別活動、学校行事の順で、高等部は、総合的な学習の時間、その他、学校行事の順であった。高等部のその他の内容は、「職業科の授業、進路指導における講話や説明会」の記述が多く見られた。さらに、教科担当者別の回答数を求めた結果、国語、算数・数学、外国語活動・英語のいずれの教科等においても調査票記入者が担当する「国語」「算数・数学」「外国語活動・英語」が上位となっていた。（但し、高等部数学を除く。）

このことから、中学部や高等部において、教科担当者（国語、数学、英語）の専門教科で電子黒板を活用していること、さらに、特別活動や総合的な学習の時間でも活用していることが示された。また、高等部においては、職業科や情報、進路学習などの活用も示された。

電子黒板の活用が期待される教科等について、小学部では国語、社会、算数、理科、外国語活動、総合的な学習の時間の回答が多く、これらの教科等での活用が期待されていることが示された。中学部では、総合的な学習の時間、理科、社会、国語、数学の回答が多く、高等部では、総合的な学習の時間、情報、学校行事の回答が多く、その後教科が続いている。教科担当別に回答を求めたところ、記入者が担当する教科（国語、数学、英語）の回答が上位になっていることから、担当教科での活用が期待されている一方、総合的な学習、職業に関する教科や学習での活用も期待されていることが示された。これは、記入者が現在活用している教科等での効果を踏まえた期待が含まれている可能性があること、あまり活用した経

験がないために効果の予測が難しく回答が控えられた可能性も考えられる。

電子黒板を活用した授業場面について、小学部では学習の理解を深める、実験や観察、製作の手順を説明する、教員が課題を提示する場面という回答が多かった。中学部と高等部では、教員が課題を提示する、学習の理解を深める場面という回答が多かった。いずれの学部においても、学習の理解を深める場面の回答が多く、実際の授業で学習の理解を深めるための手立て（電子黒板で何をどのようにするのか等）をさらに検討していくことが必要だと思われる。

また、電子黒板を活用することが望ましい授業場面について、どの学部も全ての項目（意欲、理解、表現や技能、思考）についても少し思うという回答が最も多かった。記入者の中には、活用経験が無い或は少ない教員も多いことも回答に影響を与えていたものと思われる。

電子黒板を活用する上で、今後必要だと思われることについては、いずれの学部においても、全ての教室に配置すること、映像に字幕が入ること、映像の種類や内容が充実されることが上位であった。また、自由記述から、各教室への設置に加え、簡便で操作がしやすい機器への期待、教員研修の充実への期待が大きいことが示された。さらに、電子教材については加工が可能な物という要望もあり、一人一人の実態や教育的ニーズに応じた教材作りのための期待も見られた。また、活用事例集や教材の共有化を望む回答もあり、校内外での情報共有や研修の場の確保が課題と考えられる。

電子黒板の活用にあたっての聴覚障害児童生徒への配慮点や工夫について自由記述を求め、88の回答を得た。工夫・配慮点として、授業計画や準備段階で行うこと、授業中に行うこと、その他（研修や他機器の活用）に分けられた。授業計画や準備段階については、電子黒板及び既存の教材の特性を踏まえ、活用の目的と場面を検討すること、学習過程が分かる板書構成にすることが特に重視されていた。また、授業中のコミュニケーションを活発にすること、ことばで考える場と時間の確保が重視されている記述が多く、現行学習指導要領で示されている聴覚障害児童生徒への教科指導上の配慮事項を強く意識した授業が行われていることが伺えた。さらに、授業中の配慮点や工夫として、聴覚障害児童生徒の見やすさへの配慮、内容理解を促す解説やワークシートや教材の準備、併用等が重視され、視覚からの情報が必要とする聴覚障害児への配慮を強く意識した授業が行われていることが伺えた。

(庄司美千代)

第3章 特別支援学校(聴覚障害)における
コミュニケーションと言語に関する実態調査
(調査2)

第3章 特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査（調査2）

1. 調査の目的

本調査は、コミュニケーションの実態に関する調査（調査A）及び言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査（調査B）より構成した。コミュニケーションの実態に関する調査（調査A）では、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段の選択、教師と児童生徒、児童生徒間でのコミュニケーション手段の使用等のコミュニケーションに関する実態を得ることを目的とした。

また、言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査（調査B）では、特別支援学校（聴覚障害）においてコミュニケーション、日本語、手話に関する評価法が使用状況を得ることを目的とした。

2. 調査対象

特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部に所属する学部主事もしくは主任

3. 調査方法

郵送によるアンケート調査（悉皆調査）

4. 調査時期 平成24年10月～12月

（※ 調査票は「調査1：特別支援学校（聴覚障害）における指導法と教材活用に関する現状調査」に同封した。）

本調査では、コミュニケーション手段を、以下のように定義した。

聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション

手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時に表現するもの

日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話

筆談：書きことばによるコミュニケーション

キードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキーサインを組み合わせたもの

その他：絵カード、身振り、発音サイン等

第1節 基本情報

本節では、幼稚部から高等部までの各学部における学級数、児童数（重複障害学級を含む各学年の人数）、重複障害がある児童数、人工内耳を装用児数、学部の教職員数、聴覚障害がある教員数、教職員に係る特記事項を尋ねた。

第1項 調査票回答数及び回収率

表3-1-1に、全体及び各学部の回答数、回答率を示した。本調査では、全国特別支援学校（聴覚障害）の分校・分教室を含む100校に調査票を送付し、94校（回収率94%）の回答を得た。

表3-1-1 回答校数及び回収率

	全体	幼稚部	小学部	中学部	高等部
発送校	100	94	93	88	66
回答校（回収率）	94（94%）	88（94%）	85（91%）	77（88%）	61（92%）

第2項 在籍児童生徒数

表3-1-2に学級数、児童生徒数、重複児童生徒数、人工内耳装用数を示した。児童生徒数は5479名、重複児童生徒数は881名（13.9%）、人工内耳数は1290名（20.4%）と人工内耳装用数の増加傾向が認められた。

表3-1-2 学級数、児童生徒数、重複児童生徒数、人工内耳数（人）

学級数	児童生徒数	重複児童生徒数	人工内耳装用数
1,640	5,479	881（13.9%）	1290（20.4%）

第3項 各部の学級数、児童生徒数、重複児童生徒数、人工内耳数

表3-1-3に幼稚部、表3-1-4に小学部、3-1-5に中学部、表3-1-6に高等部の学級数、児童生徒数、重複児童生徒数、人工内耳数を示した。

幼稚部では、重複児の割合が、8.4%～13.8%と増加傾向にあった。また、人工内耳装用児は30%以上（年中は37%）と全体平均より1割多くなっていた。

表3-1-3 幼稚部

	学級数	児童数	重複児数	人工内耳数
1年（年少）	113	395	33	128
2年（年中）	104	365	37	135
3年（年長）	102	349	48	111

小学部では、重複児の割合が、16.9%（小2年）～24.3%（小5年）と20%前後で推移していた。また、人工内耳装用児は28.3%（小1年）、31.3%（小2年）から24.4%（小3年）23.4%（小4年）21.1%（小5年）、21.3%（小6年）で推移していた。

表 3-1-4 小学部

	学級数	児童数	重複児数	人工内耳数
1年	96	296	64	84
2年	100	326	55	102
3年	108	295	74	72
4年	101	312	62	73
5年	109	322	78	68
6年	99	300	54	64

中学部では、重複児の割合が、中2年生が10.1%であったが、他は20%弱であった。また、人工内耳装用児は中2年生が36.9%と高かった。

表 3-1-5 中学部

	学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
1年	119	392	78	90
2年	104	365	37	135
3年	102	349	48	111

高等部では、重複児の割合が、13.5%～16.9%と15%前後で推移していた。また、人工内耳装用児は7.1%～10.1%と他学部の割合に比し低かった。

表 3-1-6 高等部

	学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
1年	127	476	71	48
2年	125	456	77	35
3年	131	481	65	34

第4項 教職員数及び聴覚障害職員数

本調査における全回答校の教職員数は4,080名（1校平均43.4名）、聴覚障害職員数は234名（1校平均2.5名）であった。表3-1-7に教職員に係わる特記事項を示した。この質問には177の回答（複数回答）があった。約半数が学部をまたいで授業をしていると回答した。また、教員の異動が多いことも挙げられた。その他として、「聾教育が初めて」、「通級指導教室を担当し、校内の詳細なコミュニケーションの状況が不明」等の回答が挙げられた。

表 3-1-7 教職員に係わる特記事項（複数回答） N=177

教職員に係わる特記事項	回答数
学部をまたいで授業をしている	81
教員の異動が多い	38
その他	58

第5項 「基本情報」のまとめと考察

本調査では、全国特別支援学校（聴覚障害）の分校・分教室を含む100校に調査票を送付し、94校（回収率94%）的回答を得た。基礎情報として、聾学校幼稚部から高等部までの各学部における学級数、児童数（重複障害学級を含む各学年の人数）、重複障害がある児童数、人工内耳を装用児数、学部の教職員数、聴覚障害がある教員数、教職員に係る特記事項を尋ねた。在籍児童生徒数は、児童生徒数は5,479名、重複児童生徒数は881名（16.1%）、人工内耳装用数は1,290名（23.5%）であった。また、全回答校の教職員数は4080名（1校平均43.4名）、聴覚障害職員数は234名（1校平均2.5名）であった。

1校平均58名在籍となるが、地域により少人数化傾向が著しい。学校によっては1学級当たり在籍数が減少し、複式学級で構成している学級もある。在籍児童生徒数や学校規模の減少のため、障害種を併せて学校再編が行われている地域もある。更に、障害のある子どもの教育の場の拡がりに伴い、通常の学校に移る子どもが増加していくことが予想される。

聴覚障害教育を取り巻く大きな変化として、新生児聴覚スクリーニングが全国の殆ど地域で稼働し、聴覚障害の早期発見に寄与してきた。新生児聴覚スクリーニングに伴う重度の聴覚障害の早期診断は、特別支援学校（聴覚障害）での相談時期が一層、早まるに繋がる。

本調査で特別支援学校（聴覚障害）における人工内耳装用の割合が20%を越えたことは、新生児聴覚スクリーニングを反映したものの一つと考えられる。学部別では幼稚部、小学部の人工内耳装用児の在籍率が高いが、今後は中学部、高等部での在籍率の増加が予想される。また、重複障害児については、医療機関より療育機関に紹介される事例が多いと考えられるが、聴覚障害を併せ有する場合には、特別支援学校（聴覚障害）で対応しており、今後、重複障害の在籍率も増加することが予想される。

このように、障害の状況が個々に異なり、さまざまな聴力レベルにある子どもに対し、個人や集団に対応したコミュニケーション手段を考慮する必要があるが、これに関して、今後校内において更なる議論が求められる。議論に際しては、保護者の意向や地域（医療等）の専門家の知見を踏まえることが大切である。

第2節 調査A コミュニケーションの実態に関する調査

調査Aでは、コミュニケーション手段の選択や使用に際する学部で共通した方針の有無、コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項（3つ選択）、コミュニケーション手段の選択にかかる課題（3つ選択）の3点を尋ねた。

第1項 コミュニケーション手段の選択や使用

幼稚部から高等部までの回答総数は303（複数回答）。コミュニケーション手段の選択や使用に際する学部で共通した方針が「ある」と回答したのは220（72.6%）、「ない」と回答したのは83（27.4%）であった。

各質問に具体的なコミュニケーション手段が220（複数回答）より記述されていた。

表3-2-1にコミュニケーション手段の分類を示した。表中、手話・手話付きスピーチ及び指文字は、補聴器（人工内耳）を併用して使用されている。手話・手話付きスピーチが半数以上を占めており、聴覚口話は1/4であった。「子どもの実態に合わせて」と言う回答も、1/4弱あった。

表3-2-1 コミュニケーション手段（複数回答） N=220

	回答数
聴覚口話、聴覚主導	53
日本手話	4
手話、手話付きスピーチ*	134
指文字*	53
トータルコミュニケーション	8
同時法	5
子どもの実態に合わせて	48

コミュニケーション手段の選択や使用に際しては、学部内で相談する（40）、担任の判断に委ねている（14）、特になし（21）、生徒個人にあわせている（6）、その他（8）の回答があった。その他として以下の記述があった。

「基本は担任の判断だが学部でも様々な手段を使うということや一人一人の実態に応じた手段について確認している」、「指導者間での共通理解のもと生徒の実態や場面に応じて選択している」、「本人が最も気持ちを伝えやすい方法、手掛かりとなるべき手段を用いる」、「基本的には聴覚口話をベースにその子に実態に合わせて主な手段を決めている」、「生徒のコミュニケーションの実態を学部会で話し合って個々に合わせてある程度の方針を決めたが、もう学校経験の先生が多くなかなかうまくいかない」、「保護者の考えも聞いて、・生徒の実態と職員のコミュニケーション力に合わせて選択している」

第2項 コミュニケーション手段の選択する際、重視していること

コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項を10項目（生育歴、発達の状態や重複障害の有無、聴力の程度、人工内耳の装用、言語力、聴覚障害がある保護者、保護者の希望、学級集団の構成、特ない、その他）示し、このうち3つ選択することを求めた（複数回答）。

発達の状態（24.3%）、言語力（21.5%）、聴力の程度（20.7%）が選択された。また、保護者の希望（7.8%）あったことは注目される。

表3-2-2 コミュニケーション手段の選択する際、重視していること（複数回答）N=883

生育歴	発達の状態	聴力の程度	人工内耳	言語力	聴覚障害がある保護者	保護者の希望	本人の希望	学級集団構成	特ない	その他
15	183	215	44	190	16	69	42	71	10	28
1.7%	20.7%	24.3%	5.0%	21.5%	1.8%	7.8%	4.8%	8.0%	1.1%	3.2%

その他として、「学校の方針（2）」、「卒業後の生活（社会生活、就労生活）（2）」、「職員の使えるコミュニケーション手段（2）」、「聴覚活用（2）」、「本人の使い慣れている手段」、「児童の実態と全体像」、「個々の子どもの特性」、「将来に向けての必要性」、「社会自立を進めるために必要となる手段の選択」、「就職先のニーズ」、「選択ということがなく聴覚を中心としたコミュニケーション手段」、「手話能力」、「音韻、リズム」、「メディア検討委員会で確認される「本校のコミュニケーション手段使用について」に基づいたもの」、「聴覚口話、手話の指導をするが成長に応じて子どもが得意なモードに比重を置くようにしている」、「ききとる力や見る力等の認知特性、情緒の安定」、「1番意思疎通がとれる方法を考えて選択する」、「学部全体の構成」、「意味理解から子どもにとっての分かりやすさ」が挙げられた。

第3項 コミュニケーション手段の選択に関わる課題

コミュニケーション手段の選択にかかわる課題を7項目（補聴システムの整備、補聴器等の調整・聴覚活用の方法、教師の手話力、手話を用いた指導方法・指導内容、重複障害がある幼児、保護者の希望、その他）示し、このうち3つ選択することを求めた。

教師の手話力（23.8%）、補聴器等及び手話を用いた指導方法・指導内容（各20.9%）が選択された。また、ここでも保護者の希望（6.8%）あったことは注目される。

表3-2-3 コミュニケーション手段を選択にかかわる課題（複数回答）N=880

補聴システム	補聴器等	教師の手話力	手話を用いた指導	重複障害	保護者の希望	本人の希望	その他
74	184	209	184	102	60	14	53
8.4%	20.9%	23.8%	20.9%	11.6%	6.8%	1.6%	6.0%

その他として、「子ども（言語力、聴こえ、個人差、語彙力、発達段階、理解力、手話力、筆談力（33）」、「教師（教員数、指導力、経験不足、知識、研修、指導方法、視覚的教材）（13）」、

「保護者の考え方（1）」、「医療機関との連携（1）」が挙げられた。

第4項 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況

学部内でのコミュニケーション手段の使用状況について、教師と幼児児童生徒の間及び幼児児童生徒間で用いられているコミュニケーション手段のうち、6項目（聴覚口話、手話付きスピーチ、日本手話、筆談、キュードスピーチ、その他）から、「当てはまるもの全て」と「主要なもの」の回答を求めた（複数選択）。ここでは「当てはまるもの全て」に1点、「主要なもの」に2点を与え、合計した割合を示す。

表3-2-4に、教師と幼児児童生徒、表3-2-5に、幼児児童生徒間の学部内でのコミュニケーション手段の使用状況を示した。教師と幼児児童生徒では、手話付きスピーチ、聴覚口話の順であった。幼稚部と小学部ではほぼ同率であったが、中学部と高等部では手話付きスピーチが聴覚口話を10%以上、上回った。

幼児児童生徒間をみると、表3-2-4と同様、手話付きスピーチ、聴覚口話の順であった。しかし、幼稚部では両者はほぼ同率であるが、小学部12.7%、中学部18.6%、23.1%との差が広がった。また、日本手話の使用については、学部が上がるにつれて使用の割合が増える傾向が見られた。

表3-2-4 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（教師と幼児児童生徒）（%）

学部	聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	その他
幼稚部	35.3	35.6	3.8	5.2	6.0	14.0
小学部	31.1	37.0	5.4	11.4	4.9	10.3
中学部	27.7	43.2	3.7	18.2	2.0	5.1
高等部	27.5	41.2	7.3	18.0	1.7	4.3

表3-2-5 学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（幼児児童生徒間）（%）

学部	聴覚口話	手話付き スピーチ	日本手話	筆談	キュード スピーチ	その他
幼稚部	35.8	37.4	6.8	1.0	4.8	14.2
小学部	28.9	41.6	11.7	3.8	5.4	8.6
中学部	27.0	45.6	11.2	8.1	3.5	4.6
高等部	21.0	44.1	20.5	6.2	2.1	6.2

第5項 「コミュニケーション手段の選択・使用」のまとめと考察

コミュニケーション手段の選択や使用に際する学部で共通した方針については、「ある」と回答したのは72.6%で、全回答の約3/4であった。残りの「ない」と回答したのは、学校の方針がないと判断するよりも、校内に様々な考えがあり、職員間で十分コンセンサスを得る途上にあると解釈するのが妥当であろう。

コミュニケーション手段の選択や使用に関しては、手話、手話付きスピーチが主流になっている状況が占めされた。しかし、これまで特別支援学校（聴覚障害）が基本としてきた、

聴覚口話法が減少してきたと判断するのは性急かもしれない。

「子どもの実態に合わせて」との回答が1/4あった。個人ではなく、学部（学校）として子どもの実態をどのように捉えるのか、今回の調査では明確にされていない。時代と現在では、口話か手話かの二者択一で議論されていた状況が異なっている。事前の学校調査から「子どもに合わせる」と言う表現が多々用いられている状況があった。その意味するところは、「子どもを主体（中心）にした視点で、コミュニケーション手段を選択することが重要である」と思われた。

次に、コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項として、発達の状態（24.3%）、言語力（21.5%）、聴力の程度（20.7%）が選択された。最も重視している事項として「発達の状態」が挙げられたことは、上述した「子どもに合わせる」という回答の多さに準じたものであろう。また、保護者の希望（7.8%）、人工内耳（5.0%）は、個別の教育支援計画や人工内耳装用事例の増加を背景として、今後、コミュニケーション手段選択の重要な要因になる可能性があると考えられる。

コミュニケーション手段の選択にかかる課題については、教師の手話力（23.8%）、補聴器等及び手話を用いた指導方法・指導内容（各20.9%）が選択された。重複障害（11.6%）は、本調査での在籍率の反映したものと考えられる。手話力については、本調査で明らかになった手話付きスピーチの使用率の高さや異動人事から、研修の充実が喫緊の課題となっていることが推察される。

学部での教師と幼児児童生徒、幼児児童生徒間のコミュニケーション手段の使用状況の結果から、いずれも手話付きスピーチを主たるコミュニケーション手段となっていることが示された。ただし、本調査では、高等部においても生徒間のコミュニケーション手段が聴覚口話を使用している生徒が21.0%おり、聴覚管理や補聴機器の調整に関する専門性が求められていることが示唆された。

「聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議先の協力者会議」（平成5年）※の報告には、「どのようなコミュニケーション手段を選択・活用するかについては、それぞれの学校における聴覚障害教育、聴覚障害児の国語教育に対する教育方針や指導理論に基づくことが大切である。」と示されている。コミュニケーション手段は聴覚障害教育の主要な課題であるが、本報告書に示されたように、国語教育をどう進めるかという観点を踏まえた実践が重要となると考える。

※「聴覚障害児のコミュニケーション手段について（報告）」、聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議、平成5年3月22日

第3節 調査B 言語及びコミュニケーション評価に関する調査

調査Bでは、コミュニケーションの状況を把握するための評価、日本語の言語力の状況を把握するための評価、手話の言語力の状況を把握するための評価の3点を尋ねた。

なお、本調査で言う評価とは、市販テスト（発達検査、言語力検査等）、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含むものとした。

第1項 コミュニケーションの状況を把握するための評価

コミュニケーションの状況を把握する方法について、名称等、活用の目的、実施の範囲、実施の周期、対象児の5つの欄を設け、それぞれ具体的な自由記述による回答を求めた。

なお、名称等には「市販・自作」、活用の目的には、「実態把握・指導に活用・その他」、実施の範囲には、「学部内で実施・学部を超えて実施」、実施の周期には、「定期的・年に（　）回・不定期」、対象児には、「全員・決まった学年・選択した幼児児童生徒・選択の理由（自由記述）」を示し、該当する事項に選択を求めた。

(1) 名称等

各学部総数355の回答があり、市販（214：60.3%）、自作（141：39.7%）であった。

評価法として最も多かったのは聴力検査・聴力測定（153）、次いで発音明瞭度検査（104）、語音聴力検査（76）であった。

表3-3-1に、コミュニケーションの状況を把握するための評価に関して記述のあった各種検査等を示した。

表3-3-1 コミュニケーションの状況を把握するための評価

発達検査	新田中B式知能検査、乳幼児精神発達診断（津守式）、WIPPSI、絵画語彙発達検査、WISC言語性、新版K式発達検査、TIC式言語発達診断検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査、K・ABC、WISC-Ⅲ他
語彙	語彙チェックリスト、語彙表、読字力検査、単語了解度、幼児・児童読書力テスト、漢字力検査、読話テスト、観点別日本語能力テスト他
発音	発音チェック表、音韻操作課題、発音定着確認表、発音指導プログラム2009他
手話	手話コミュニケーション日本語プログラム、日本手話検定他
聞き取り	C1-2004きこえの検査、聴能マトリックス検査、JANT、日常生活文聴取検査他
その他	あそびの記録、VTR分析、行動観察、コミュニケーションの実態調査、自立活動指導段階チェック表他

(2) 活用の目的

各学部総数660の回答があり、実態把握（379：57.4%）、指導に活用（264：40.0%）、その他（17：2.6%）であった。その他として、「発音指導」、「聴覚管理 いつもときこえが違うと感じたときはすぐに実施」、「聴力測定とあわせて補聴の状態を把握しフィッティングに役立てる」、「補聴器のフィッティングや人工内耳のマッピングの参考として」、「中耳炎や聴力の変動を確認する」、「認知特性等の評価を指導に活用する」、「進路実現

のため」、「子どもの評価というよりも教師の技量を向上させるため」、「関係機関との連携のため使用」、「保護者支援」等の記述があった。

(3) 実施の範囲

各学部総数 396 の回答があり、学部内 (216 : 54.5%)、学部を超えて実施 (180 : 45.5%) であった。半数以上が学部内で実施していた。

(4) 実施の周期

各学部総数 842 の回答があり、「定期的」(272 : 32.3%)、「年に（ ）回」(444 : 52.7%)、「不定期」(126 : 15.0%) であった。定期的と年に（ ）回を加えると 86% と実施率が高かった。

(5) 対象児

各学部総数 398 の回答があり、全員 (239 : 60.4%)、決まった学年 (41 : 10.4%)、選択した幼児児童生徒 (116 : 29.3%) と、全員を対象児とするのが 60% あった。選択の理由について対象、検査、担任、コミュニケーション、グループ、保護者に分類された。表 3-3-2 に、分類した結果を示す。

表 3-3-2 対象児選択の理由

対象	希望しない生徒を除く、小学校に入学を希望している幼児、重度、重複学習の発語の難しい児童は除く、聴覚口話が主になっている子ども、より客観的データが必要な場合、文レベルの聴取が可能になった段階、手話・日本語障害認識含めて取組やすいと感じた子ども、聞きとれる聴力の残っている生徒のみ、発育器官に障害がなく、かつ、ひらがなが読める者、本校の乳幼児教育相談で定期的な指導を受けずに入字した幼児のみ
	就学を控えた 5 歳児と保育園や幼稚園へのインテグレーション、交流保育を希望している幼児、検査可能なレベルになつたら実施する（幼すぎるうちはムリにやらない）、検査目的、方法が理解できる生徒、検査方法の理解の難しい児童は除く
担任	担任が実態把握のために必要と判断した場合に実施、重複児童については担任の判断で実施している、学習態度の成熟度で判断するため、実態を全職員に正しく理解してもらう必要があったため
コミュニケーション	主なコミュニケーション手段が聴覚口話の児童、音声によるコミュニケーションが有効かどうか客観的に判断するため、内耳、聴覚活用を主にコミュニケーションしている児童生徒、音声言語によるコミュニケーションの個々の実態を把握するため
聴覚活用	聴覚活用がある程度できている子、聴覚活用や音韻の意識から可能と思われる児童、測定結果と補聴器装用時の話声の聞き取りに差が感じられたため、補聴評価の一環としてルーチン化されている
補聴器	聴力低下の可能性のある生徒、補聴器を買い換えた生徒、補聴器の装用効率を

	見るため、補聴器のフィッティングをする子ども、転学を考えている児童、補聴器を新たに購入する際、機種同士で比較する、保有聴力及び補聴器調整の把握
発音	聴きとった音を発声できる児童、発音指導の内容を決めたり評価したりするために必要な幼児、子どもの発音発声の状況に合わせて実施、個々の子どもの発音実態により実施するかどうか決める、五十音の平仮名が読め、発音要領をほぼ獲得している幼児、特に発音が不明瞭でうまくなりたいと希望した生徒、音声で会話をするようになった幼児の実態把握
グループ	聴覚口話+手話付きスピーチグループで行っている指導編成グループ、聴覚口話グループ所属児童と日本手話グループ所属児童で希望する者、聴覚口話+手話付きスピーチグループで行っている。
保護者	本人や保護者の希望や生徒の実態を踏まえた学級担任の判断

第2項 コミュニケーションの評価の必要性や課題

コミュニケーションの評価の必要性や課題について自由記述による回答を求めた。自由記述の内容から必要性と課題を分けた。コミュニケーションの評価の必要性については、実態把握、自立活動、コミュニケーション、聴覚、発音、職員間理解に分類された。表3-3-3に、「コミュニケーションの評価の必要性」の分類結果（一部抜粋）を示す。

表3-3-3 コミュニケーションの評価の必要性

実態把握	<ul style="list-style-type: none"> 客観的な評価と行動観察、保護者からの聞き取りや医療（療育）情報を合わせ総合的、多面的な実態把握をする必要がある。
自立活動	<ul style="list-style-type: none"> 児童の実態把握の際、基本となる聴力（補聴器装用時を含む）を各担任が読み取ることができること。 実態把握には必要な評価であり、また、児童の変化を確認する意味でも必要。
運動	<ul style="list-style-type: none"> 結果は担任やSTとも共通理解できる客観的評価で自立活動等の指導につながる。読字力テストは聴覚活用が比較的できている生徒でも、曖昧な聞こえで間違えた読みをしていることがわかる。 社会に出たときに、どれだけ通用するかが大切で就業体験や現場実習などはそのよい機会と考える。コミュニケーションの評価は自立活動の中で数値化していく方法も考えられる。 コミュニケーションの評価については、自立活動の時間における指導で担当者の判断で行っている程度で日常の観察が主な評価となっている。定期的にどんな評価を行っていけばよいかの検討が必要である。
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> 部内や家族など限られた人とのコミュニケーションはある程度できている。ただしいずれも大人を介する場合が多く、子ども同士の話し合いが十分できていないことや環境も含め模索しているところである。
シグニфикант	<ul style="list-style-type: none"> 読話テストがそのやる目的が、現在のろう学校の現状に合っているのかという疑問の声が教員から上がっている。 コミュニケーションの評価 자체むずかしい。あれば授業の中でも使える。現在子どもの姿をもとに評価を検討している。

ヨン	・本人が場に応じたコミュニケーション手段を使い自身が知識はもちろん自己を確立していく過程で自分のコミュニケーション力を知ることは必要である。また、本人が社会に出たときにすべてを手がかりとして活用できるよう、自分のきこえの状態を知りどうすればよいかを考える手立ての一つになるとを考えている。
発音	・発音の明瞭度がその生徒なりに保たれ、向上しているか評価したり、コミュニケーション手段に関する実態を調べるために必要。 ・子どもの実態を把握し指導に活かすことができるので必要。 ・発音の実態をとり発音指導の手立てと考えるために活用。語音聴力検査は聞こえの状態を知り指導に活かすために実施している。
職員間理解	・職員の共通理解が図れる ・コミュニケーションの実態を全職員に正しく理解してもらい指導に役立てるには評価は必要。 ・指導の方向性を出すために客観的かつ具体的なコミュニケーションの評価=実態把握は不可欠だと思います。課題はその評価を担任以外の全職員が共通理解すること。

コミュニケーションの評価の課題については、実態把握、重複障害、手話、検査、将来、聴覚、発音、指導力、保護者・教員間連携、時間に分類された。表3-3-4に、「コミュニケーションの評価の課題」の分類結果（一部抜粋）を示す。

表3-3-4 コミュニケーションの評価の課題

実態把握	・生徒の実態把握はできたが、分析等細かな話し合いができるいない。 ・発音指導・きこえの実態については担任に任されており客観的な実態把握ができるない。 ・計画的な発音指導をしていくための実態把握は部内で検討していきたい。 ・実態を適確に把握するために検査等を用いた評価は有効である。しかし、そこから一人一人にあった適確な課題や指導方法につなげるところに課題がある。
重複障害	・重複の子どもの評価が難しい。 ・重複児の割合が高く、発達全般の評価に偏りがちになる。 ・重複障害のある児童の割合が増え検査ができる子が減っている。職員の入れ替わりが多く発音指導や検査の方法などについて引き継がれていかない。
手話	・コミュニケーションのつまずきや実態を把握し指導に生かし一次言語をしっかり身に付けさせる必要がある。 ・コミュニケーションの状況と言語力は大きく関係しておりコミュニケーションの評価、日本語、手話の言語力の評価は分けて評価することはできない。
検査	・談話や語用能力、会話能力を評価するツールがない。 ・実施した検査の結果はある程度評価されるが、その評価を指導に活かすための手立てが個々の指導計画に十分に反映されていないことが課題としてあげられる。
将来	・個に応じたコミュニケーション手段はどのようなものかを探ったり自己の発音状況を把握することは、社会自立するために必要な自己理解であると思う。人事異動により発音指導が可能な教職員が少なくなくなっていること等が課題となっている。 ・人の声がどの程度聴こえているのか、それが社会で役に立つものなのか客観的に判断したい。

職場で困らないように曖昧なコミュニケーションを減らしたい。

-
- 聴覚
- ・67Sは検査材料が10例あるのだが67Aに関しては2例しかないので、もう少し検査材料がほしい。
 - ・いわゆる聴覚管理<能力の育成>は聴覚口話法による言語コミュニケーション能力の育成にとって重要であり、その能力育成が同時に重要な（指導上の）課題です。
 - ・特に聴力の重い生徒について補助手段の理解度を把握した上で授業等での活用に配慮が必要である。
-
- 発音
- ・コミュニケーション能力は聴能面、発音面からだけではとらえきれないと考える。
 - ・聞こえの良し悪し=発音が明瞭というわけではないのに発音が明瞭だと聞こえがよいと思ってしまう。そのため配慮しなければならない点が曖昧になる。
-
- 指導力
- ・教員の指導力に格差がある（コミュニケーション技能）
 - ・評価者と指導者との連携が困難。客観性をもたせた評価から同僚教員に率直な授業改善の提言がしにくい一面がある。外部の評価を導入したり、様々な工夫が必要となる。どうしても相互の評価がしにくい教育現場、特に専門性を自負するベテランの多い環境では課題となる。
-
- 保護者教員間連携
- ・保護者の願いや医療機関からのアプローチとの調整も課題の一つ。
 - ・個々のコミュニケーションの力に合わせたやりとりができているかを観点にして日常生活の中で児童のコミュニケーションの力を引き出すことを目標にしている。子ども同士、子どもと教員の両方が大事。児童同士の話し合い活動を積極的に取り入れていくことで、児童と教員ではまだ伝わり合うことが難しい部分もあることが課題。
 - ・担任や関係研と連携を取る場合には検査結果を資料として共有するだけでは不十分であり、分析を行った上でこの検査を今後どのように指導していくかという点での共通理解が必要であるが、その辺りで課題が残るよう思う。
-
- 時間
- ・教科指導に追われてなかなか検査結果を指導に活かすことができない。
 - ・ろう教育の専門性の継承において非常に大切だと思います。実際には授業中にかなり経験的に言語指導をすることが多く、実践を整理して伝えられないのが課題です。
 - ・児童数が多く検査に時間がかかる。また、検査結果もなかなか十分に分析できない。検査者（自立活動担当）と担任がもっと連携しなくてはいけない。
 - ・職員の測定技術の向上、聴能に関するノウハウの伝授、これらが必要であるがその時間的余裕がないというのが現状。
-

第3項 「コミュニケーションの状況を把握するための評価」のまとめと考察

コミュニケーションの状況を把握する方法について、名称等では、評価法として多かったのは聴力検査・聴力測定、次いで発音明瞭度検査、語音聴力検査であった。具体的な名称として、発達検査では、「津守稻宅式 乳幼児精神発達診断法」や「新版 K式発達検査」、語彙評価として、「幼児・児童読書力テスト」、「観点別日本語能力テスト」、発音評価として、「発音チェック表」、「音韻操作課題」、手話評価としては、「手話コミュニケーション日本語プログラム」、「日本手話検定」、聞き取り評価として、「C1-2004 きこえの検査」、「JANT」等が挙げられ、市販や自作教材による評価を実施していた。

活用の目的は、「実態把握」をしていたが、「関係機関との連携のため使用」、「保護者支援」等、外部との情報提供も行っていた。実施の範囲は、学部を超えて実施（45.5%）と全

校的な取組となっている状況が示された。また、実施の周期は頻度が高く、対象児も全員と回答したのが 60.4%と多かった。特別支援学校（聴覚障害）では、様々な評価法を用いて、コミュニケーション評価に努めている状況が示された。

コミュニケーション評価の必要性は、実態把握、自立活動、コミュニケーション、聴覚、発音、職員間理解に分類された。

実態把握では、「コミュニケーションの評価は実態を把握し学部の教師全体で指導に当たる必要があるので何らかの形の評価は必要。」、自立活動では「自分の発話がどの程度どのように他者に聞こえているのかについて生徒自身にフィードバックして意識させたり、検査の結果をうけて日ごろの指導の中でも意図的に取り上げたりすることは必要。」、コミュニケーションでは「コミュニケーションの力がどれくらいあるのかコミュニケーションとして欠けている力を補うためにも必要である。」、聴覚では「聴力検査の結果と併用し個々の実態により具体的につなげられる。」、発音では「子どもの実態を把握し指導に活かすことができる所以必要。」、職員間理解では「コミュニケーションの実態を全職員に正しく理解してもらい指導に役立てるには評価は必要と思われる。」等、評価と指導に連続性を持たせることを目指した取組を挙げた。

一方で、以下のような課題も挙げられた。コミュニケーション評価の課題は、実態把握、重複障害、手話、検査、将来、聴覚、発音、指導力、保護者・教員間連携、時間に分類された。

実態把握では「コミュニケーションの力は聴力等聽こえだけで評価できず様々な要因が関係しているので、それらをどのように考慮していくのかが課題である。」、重複障害では「重複の子どもの評価が難しい。」、手話では「コミュニケーションの状況と言語力は大きく関係しておりコミュニケーションの評価、日本語、手話の言語力の評価は分けて評価することはできない。」、検査では「評価は必要だと思うが、実際場面に生かせるような検査法と評価があればよい」、将来では「卒業後の進路先において音声をつかったコミュニケーションは重要な部分を占めることになる。そのため、コミュニケーション評価の必要性は大きい。しかし、本校高等部ではこの評価を受けての指導体制が十分とは言いがたい。」、聴覚では「聴力等に関する教員の知識不足。」、発音では「コミュニケーション能力は聴能面、発音面からだけではとらえきれないと考える。」、指導力では「自立（聴能）担当に任せることが多く普段の指導に生かせていない。」、保護者・教員間連携では「生徒のコミュニケーションの実態から次のステップや進路指導のポイント等を考えていく必要があると思うが学部間での共通理解をはかることが難しい。」、時間では「コミュニケーション方法等についての研修が行われることが望ましいが研修の時間がなかなか確保できず課題である。」等、多岐に渡る課題が挙げられた。

実態把握や教員間連携は、必要性と課題の両方で取り上げられているが、課題として「将来」や「時間」が取り上げられている状況が示された。

コミュニケーション評価に関する自由記述からは、校内の全教員がその意義を理解し、日常的に評価を行い、かつ研修も多く試みられているが、更に充実させていくためには、校内における情報共有の方法や指導体制の見直しの必要性が示唆された。具体的には、目的を絞った研修、個別の教育支援計画の活用等が考えられる。

第4項 日本語の言語力の状況を把握するための評価

日本語の言語力の状況を把握する方法について、名称等、活用の目的、実施の範囲、実施の周期、対象児の5つの欄を設け、それぞれ具体的な内容の自由記述による回答を求めた。また、名称等には「市販・自作」、活用の目的には、「実態把握・指導に活用・その他」、実施の範囲には、「学部内で実施・学部を超えて実施」、実施の周期には、「定期的・年に（）回・不定期」、対象児には、「全員・決まった学年・選択した幼児・選択の理由（自由記述）」を示し、該当する事項に選択を求めた。

(1) 名称等

各学部総数249の回答があり、市販（224：89.9%）、自作（25：9.6%）であった。

(2) 活用の目的

各学部総数428の回答があり、実態把握（241：56.3%）、指導に活用（174：40.7%）、その他（13：3.0%）であった。その他として、「就学判定等の資料とする（幼・小引き継ぎ資料）」、「自立活動のグループ編成の参考にしている」、「子どもの評価と言うよりも教師の技量を向上させる為」、「保護者にも記入してもらい実態を知ってもらう。覚えてほしい言葉を保護者に分かってもらう」、「言語力の評価を行うことができる」、「言語力の向上」、「読むことの能力の客観的な評価」、「定期的に実施することで引継ぎ資料としたり指導すべき点の参考にする」、「今までの指導の方法を振り返る」、「自立活動のグループ編成の参考にしている」、「24年度より実施9月に全校で行う」、「2500程度の語彙を一覧化し理解、表出の数を保護者にチェックしてもらう。保護者に子どもの実態を把握する手掛かりとしてもらう」、「語彙数のチェックのため」、「客観的なデータを得ることができる」、「定期的に実施することで引継ぎ資料として指導すべき点の参考にする」、「機関連携のための資料とする」等の記述があった。

(3) 実施の範囲

各学部総数256の回答があり、学部内が（180：70.3%）、学部を超えて実施（76：29.7%）であった。70%が学部内で実施していた。

(4) 実施の周期

各学部総数940の回答があり、定期的（356：37.9%）、年に（実施回数）回（467：49.7%）、不定期（117：12.4%）であった。定期的と年に（）回を加えると87%と実施率が高かった。

(5) 対象児

各学部総数531の回答があり、全員（220：41.4%）、決まった学年（134：25.2%）、選択した幼児児童生徒（177：33.3%）であった。「選択した幼児児童生徒」の理由として、「実態把握のため（36）」、「可能な子ども（28）」、「重複児以外（26）」、「必要に応じて行う（14）」、「保護者・本人の希望（10）」、「重複児については担任の判断で実施（8）」、「インテグレードする子ども（3）」、「年長児のみ（2）」、この他、「総合評価」、「保護者にチェックしてもらうことによって保護者への意識付けにも活用している」、「語彙を広げていくにあたって保護者のめやすにしてもらう」、「校内国語科教科部会の取組として対象児を決めて実施」、「読書力診断検査だけでは、どこまで分かっているのか把握できなかったから」、「一応希望制

になっているがほぼ全員が希望している状況」、「研究の対象」、「学習や生活に困難がある」、「言語の理解と表出の発達状態をこの2つの検査を併せて評価している」、「適用範囲を鑑みて」等の記述があった。

第5項 日本語の評価の必要性や課題

日本語の評価の必要性や課題について自由記述による回答を求めた。自由記述の内容から必要性と課題を分けた。日本語の評価の必要性については、実態把握、検査、コミュニケーション、職員間理解、指導、教科、読み、語彙、文法に分類された。表3-3-5に分類結果を示す。

表3-3-5 日本語の評価の必要性

実態	<ul style="list-style-type: none">・それぞれの教科指導の中で日本語の評価に近い内容で生徒の実態把握をしながら指導方法の検討をしている状況です。基準となる評価方法で評価することは必要と感じています。
把握	<ul style="list-style-type: none">・学力の基礎となる日本語をどこまで理解できているかを推し量るために必要。
握	<ul style="list-style-type: none">・児童の実態把握、読解力や思考力を評価できる。
検査	<ul style="list-style-type: none">・絵画語彙検査やITPAなど担任が個人的に実施する場合もあるが客観的な日本語の評価は学部としては行われていないので何か実施をしてもよいかとも感じる。・評価（検査結果）によって児童の言語力の実態が把握でき、分析により指導の目安が立てやすくなる。・読書力の診断検査を止めてCRT標準学力検査に切り替えて総合的な日本語の力を把握するよう取り組んでいる。生活にも学習にも総合的な日本語の力が必要であると考えている。
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none">・基礎学習において日本語は欠かせないものであり教科指導を行っていく上でも児童の言語力を知っておく必要がある。教科指導にかかわらずコミュニケーションをとる上でも（手話等を使っても）日本語は重要と考えます。
二ヶ月一シヨン	<ul style="list-style-type: none">・豊かなコミュニケーションをするための評価は指導の目標・手立てを考える上で必要である。日常的な言語活動（読解、作文、コミュニケーション、新聞作り、授業内のやりとり等）の中で総合的に判断し指導に役立てていくことが必要である。・生徒同士がコミュニケーションをとる場面や指導をする場面などにおいても、その生徒の日本語の力を理解しておくことは重要である。
職員間理解	<ul style="list-style-type: none">・読書力診断検査終了後、学習指導係が分析し誤りの傾向等について部の教員に報告している。やりっぱなしではなく分析し全員に伝えることは必要だと思う。・日本語の言語力の状況について教員間で共通理解を図ったり、保護者に説明したりするために、ある程度標準化した評価の必要性は感じる。特に5歳児の就学先を検討する際に活用することができる。・聴覚障害のある生徒の日本語力の把握と教員全体としての課題の共通理解が必要である。
指導	<ul style="list-style-type: none">・社会生活上では日本語が中心となるため日本語をどのように理解して使っているかを把握し、その後指導に役立たせるためには必要性を感じる。・言語の習得具合を確認するのに必要。・学習活動を進める上で生徒個人の実態把握。学習グループ編成の資料として活用。

教科	<ul style="list-style-type: none"> 今後 ALADJIN の結果がでたので必要なドメインを選択して実施していくことを計画している。学習を進めていく上で基礎となる一次言語をしっかりと身につけさせる必要がある。 実態をしっかりと把握した上で指導を勧め遅れずに教科学習を進めていく力をつける必要がある。 日本語の力が教科指導を行う際に重要になってくる。教科学習の内容を理解するためには児童がどれだけの言語力をもっているかの評価は必要だと思う。
読み	<ul style="list-style-type: none"> 本校生徒の日本語活用は高いとは言い難い。理由の一つに語彙力不足が考えられる。例えば熟語の意味と読みが一致していない理解をしていることがあり十分使いこなすことができていない。よりきめ細かい指導、教科を越えた全体でかかる指導が必要と考える。 児童段階における言語活動を構成する各活動、例えば「読み」「書き」「聞く」「話す」活動は充実していかなければならないと考える。 読み書きの力を養うために必要な指導方法、内容を考えるために必要である。
語彙	<ul style="list-style-type: none"> 語彙チェックについて使いやすいものを作りたいと考えているが現在は各担任が過去の資料などを使ってチェックをしている。 知的能力と語彙の関係など客観的評価を参考にする事でより具体的となる。
文法	<ul style="list-style-type: none"> 語彙獲得や文法、よみとりの力を評価することで日常の学習に生かせることができ個々の課題にあわせた内容を選んでいくことができる。 日本語力の客観的な評価方法とその分析結果から「～のような点に課題があり」（例…格助詞の使い方）「～のような指導が効果的である」（帰納的な方法での文法指導）のような評価と指導が一体になったものがあればよいと思います。

コミュニケーションの評価の課題については、実態把握、検査、評価方法、コミュニケーション、指導、読み・文法、時間、保護者に分類された。表 3-3-6 に、分類結果を示す。

表 3-3-6 日本語の評価の課題

実態把握	<ul style="list-style-type: none"> 結果を指導場面で効果的に活用することが課題である。 生徒の実態把握をするうえで必要な評価であると考えているが、教員の移動や専門性ともかかわって指導に活かしきれていないのが現状であり課題である。 実態把握が生徒の能力を決定付けてしまい一層の向上に向かうのではなく現状を肯定し生徒の能力を見切ってしまうことにつながる懸念がある。
検査	<ul style="list-style-type: none"> 客観的な日本語の力の実態や課題を知る方法の一つとして、検査は必要である。 検査結果を充分に生かし切れていないことが課題である。 市販の検査では把握しかねる実態の児童について自作の検査がない。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 個々の生徒の言語力の把握が指導者たちの印象や学習した資料等によるものが多く共通理解を得るにはアバウトで曖昧さが残る。このような調査等を行い客観的な評価の活用を図る必要がある。 必要を感じているが現段階で決めて行っているものはない。 今年度、何を使ってどう評価していくのか検討していく予定である。
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> 評価によって一人一人の苦手な分野が明らかとなった際、それに対してより効果的な指導が課題。 生徒のつまずきがどこにあるのか理解のレベルはどの程度なのか等、生徒の実態を把握する

ニ	ことで日ごろの指導方法や指導内容に反映させることができる。テスト結果を分析し、日ごろの指導に具体的に生かす技量を教員が磨いていくことが課題である。
一	・言語力の評価は日々の授業に生かして言語力を向上させるために必要だと思うが、把握する方法が少なくどう客観的に判断し指導に活かすことができるか悩むところである。
シ	・日本語の知識はできるだけ増やしたい。日本語の力、即ちコミュニケーションの力ではないので日本語の力をコミュニケーションの力に結び付けていくことが課題である。
ヨ	
ン	
指 導	・語彙に関する評価は行っているが日本語の言語力を総合的に評価する必要性を感じている。 ・教科学習をすすめていくために児童の言語力を客観的に把握しておくことは必要であり、その発達段階に応じたていねいな言語指導をしなければならないと考えている。 ・毎日の日記指導で助詞や言葉の順序について書くことができるようにする具体的指導方法の工夫。 ・助詞の使い方をよくまちがう生徒がいる。濁音や半濁音をつけまちがう。日記を書かせ文の書き方など指導しているがなかなか直らない。
読 み	・文法の中でも助詞の指導方法の工夫 日本語の読み取りに対する評価の方法。 ・情報を正確に読み取り自分の考えを整理してまとめて伝える力を身につけさせるための具体的指導の在り方について研究、工夫していく必要がある。
文 法	・日本語の教科書を使って学習を進めるためには日本語の読み書きは必要。さらに意味理解において文法力、○○大学附属市民総合医療センターも読みの力等が課題となっている。
時 間	・教科指導（教科書指導）で本人がどれだけの力を持っているのか実態を把握する必要がある。その力を向上させる必要があるが時間がない。
保 護 者	・教科書がない中、担任の考え方だけで指導をしていくには不安もあり保護者にもお話する上で指針となる。じっくりと検査にとりくむ時間がとりづらい。 ・お子さんの実態をとらえ保護者と話をするには必要である。しかし、その実態をもとにどのように指導計画をすればよいのか、また、評価方法の学習、評価の時間の確保等難しい。 ・今年度在籍の幼児には単語（名詞中心）の言葉チェックぐらいしか実施できない（実態により）学校と保護者の共通理解及び指導の際の参考となるため必要である。 ・いろいろな検査があるので目的に応じて使っていくことが大切。保護者への説明が不可欠だが適切に説明する必要がある。

第6項 「日本語の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察

日本語の言語力の状況を把握する方法について、名称等では、市販されているものを使用するのが90%あった。活用の目的は、コミュニケーション評価と同様に、「実態把握」が60%弱、「指導に活用」が40%あった。学部内での評価の実施が70.3%あり、実施の周期は、定期的と年に（実施回数）回を加えると87%あり、定常化が認められた。

評価対象児については、全員（41.4%）、決まった学年（25.2%）、選択した幼児児童生徒（33.3%）と、「全員」が多いものの判断が分かれた。

「選択した幼児児童生徒」の理由として、「可能な子ども」や「重複児以外」という記述も見られ、日本語の評価をどのようなもので行うと良いのか、学部や学校で異なる状況が伺われた。その要因の一つに、聴覚障害児の日本語評価として、市販されているものを使用するのが90%であり、聴覚障害児の特性に対応した日本語評価法の必要性が示唆された。日本語の評価の必要性については、実態把握、検査、コミュニケーション、職員間理解、指

導、教科、読み、語彙、文法に分類された。

実態把握では「本校では帯自立（15分間）の指導として言語指導を習熟度別のグループ編成をして行っており、そのために実態把握と評価は必要です。一定の成果も上がっていると考えています。」、検査では「日本語の言語力は様々で分かっていると思われることばでも分かっていないことがあります、指導に活かすための状況を把握する意味でも必要。」、コミュニケーションでは「豊かなコミュニケーションをするための評価は指導の目標・手立てを考える上で必要である。」、職員間理解では「聴覚障害のある生徒の日本語力の把握と教員全体としての課題の共通理解が必要である。」、指導では「正しく使用しているか分かって使用しているか、どこでつまずきがあるか、繰り返しつまずくのはどこか等を把握し指導に生かす。」、教科では「教科指導を進めていく上で日本語の言語力を把握しておくことは大切なことである。」、読みでは「読み取る力を知ることでウィークポイントを補う手立てをうち読み取る力を高めていく必要がある。」、語彙では「知的能力と語彙の関係など客観的評価を参考にする事でより具体的となる。」、文法では「語彙獲得や文法、よみとりの力を評価することで日常の学習に生かせることができ個々の課題にあわせた内容を選んでいくことができる。」等が挙げられた。

一方で、以下のような課題も挙げられた。日本語評価の課題は、実態把握、検査、評価方法、コミュニケーション、指導、読み・文法、時間、保護者に分類された。実態把握では「実態把握が生徒の能力を決定付けてしまい一層の向上に向かうのではなく、現状を肯定し生徒の能力を見切ってしまうことにつながる懸念がある。」、検査では「諸検査を通して幼児の日本語力における評価を客観的にしていくことは大切である。

しかし、その結果を以後の指導にどう生かしていくかが課題である」、評価方法では「客観的な評価の活用を図る必要がある。」、コミュニケーションでは「日本語の力、即ちコミュニケーションの力ではないので日本語の力をコミュニケーションの力に結び付けていくことが課題である。」、指導では「生徒の言語発達の現状を知り、個々の言語におけるつまづきに対して指導を工夫する。」、読み・文法では「一人一人の子どもの実態に合わせた文法指導（自立活動）。」、時間では「教科指導（教科書指導）で本人がどれだけの力を持っているのか実態を把握する必要がある。その力を向上させる必要があるが時間がない。」、保護者では「いろいろな検査があるので目的に応じて使っていくことが大切。保護者への説明が不可欠だが適切に説明する必要がある。」等が挙げられた。

日本語の評価の必要性及び課題については、実態把握、検査、コミュニケーション、指導、読み・文法が共通事項として挙げられた。必要性として、「職員間理解」、「教科」、「語彙」が挙げられた。

また、課題として、「評価方法」、「時間」、「保護者」が新たに挙げられた。聴覚障害教育における日本語の指導は、教科指導の中核であり、多くが強く意識されており、教員間の理解は必須の事項であることが伺われた。また、コミュニケーション評価と同様に、「時間」や「評価方法」に課題を挙げていた。このことは、授業の質を上げることだけではなく、時間をかけることの重要性を示唆していると考えられる。

保護者との連携に関する記述は、教師の専門性の一つとして認識すべきであると解釈される。本調査では、指導上の具体的工夫について情報を得てはいないが、日本語評価の必要性と課題は表裏一体であることを示していると考えられる。

第7項 手話の言語力の状況を把握するための評価

手話の言語力の状況を把握する方法について、名称等、活用の目的、実施の範囲、評価の内容、実施の周期、対象児の6つの欄を設け、それぞれ具体的な内容の自由記述による回答を求めた。また、名称等には「市販・自作」、活用の目的には、「実態把握・指導に活用・その他」、実施の範囲には、「学部内で実施・学部を超えて実施」、実施の周期には、「定期的・年に（　）回・不定期」、対象児には、「全員・決まった学年・選択した幼児・選択の理由（自由記述）」を示し、該当する事項に選択を求めた。

（1）名称等

各学部総数40の回答があり、市販（17：42.5%）、自作（23：57.5%）であった。手話の評価について市販の評価表が少なく、自作している状況があった。この中で、以下のような評価に関するテストや教材があった。「日本手話文法テスト（14）」、「J.COSS日本語理解テスト（3）」、「語彙表（3）」、「コミュニケーションテスト（2）」、「ごいチェックリスト（全国早期支援研究協議会版）（2）」、「読み取りテスト（2）」、「手話の読み取り 理解について（自主活動教材）（2）」、「日本手話文法テスト（金沢大学版）」、「手話語彙検査」、「各種の手話ビデオ教材」、「行動観察」、「手話表現（手話単語）のチェックをするための語彙表」、「手話検定」、「手指メディア習得状況テスト」、「自立活動にて手話ウィークリー鑑賞」、「手指メディアテスト」、「自立活動 指導段階チェック表」

（2）活用の目的

各学部総数75の回答があり、実態把握（40：53.3%）、指導に活用（23：37.3%）、その他（7：9.3%）であった。その他として、「保護者支援」、「手話力向上」、「日本語の理解」等の記述があった。

（3）実施の範囲

各学部総数40の回答があり、学部内（33：82.3%）、学部を超えて実施（7：17.5%）であった。70%が学部内で実施していた。

（4）評価の内容

各学部総数103の回答があった。表3-3-7に、結果を示した。理解（31.1%）、語彙（26.2%）、表現（20.4%）の順で、理解の割合が全体の1/3を占めた。その他として、「日本語対応手話の文法」、「表現の理解」、「発音、漢字」が挙げられた。

表3-3-7 評価の内容

理解	表現	語彙	日本手話	日本語	その他	N=103
32	21	27	14	7	2	
31.1%	20.4%	26.2%	13.6%	6.8%	1.9%	

（5）実施の周期

各学部総数67の回答があり、定期的（20：29.9%）、年に（　）回（30：44.8%）、不定期（17：25.4%）であった。定期的と年に（　）回を加えると75%と実施率が高かった。

(6) 対象児

各学部総数 40 の回答があり、全員（22：55.0%）、決まった学年（8：20.0%）、選択した幼児児童生徒（10：25.5%）であった。「選択した幼児児童生徒」の理由として、「幼稚部のため発達の状態を考え 5 歳児を対象としている」、「指導編成グループ、日本手話所属児童手話での文法力の把握」、「日本手話の理解の程度を把握する為」、「学部内相互コミュニケーションの実態を把握し個々にあった手話の表出をする」、「手話表現（手話単語）をどのくらい獲得しているのか把握することによって手段保育場面等の話かけに使用して活用している」、「手話の発達評価の必要なもの」、「テスト実施可能の児童」、「聴覚活用が難しく口話による表現ができない幼児」、「全員が対象だが重度重複児には使用が難しいと判断し使用していない」、「日本語の読解ができる生徒」、「日本語の文法力の把握」等の記述があった。

第 8 項 手話の評価の必要性や課題

手話の評価の必要性や課題について自由記述による回答を求めた。自由記述の内容から必要性と課題を分けた。手話の評価の必要性については、必要性、手話力、手話の言語力、日本語、コミュニケーション、実態把握、研修、指導、幼稚部に分類された。表 3-3-8 に、分類した結果を示す。

表 3-3-8 手話の評価の必要性

必要性	<ul style="list-style-type: none">・手話そのものを考えるなら将来、いわゆる聾社会の中に溶け込んでいくためには必要なものだと考える。学校教育においては概念形成をしていくため一方法だと捉えている。・行っていません。必要性は感じていません。・手話の必要性を意識してもらうには言語力評価を実施することは大変有効と考える。
手話力	<ul style="list-style-type: none">・手話力については日常生活の中でどの程度使用しているかを評価する必要性がある。・教員の手話力の不足をどう向上させるか必要です。コミュニケーション力、言語力を図りたいが図れないのが現状。「○○こんな言葉もしらない」「ことばがない」とよく言われますが、言う人たちは日本語のみ「ことば」と言っている為、手話言語についての理解が得られません。一般化された手話力評価のものがあると、どこに課題があるのか測れます。
手話の言語力	<ul style="list-style-type: none">・聴覚障害教員（非常勤）の手話をどの程度理解できているかを把握できるとよい。しかし、手話の言語力を伸ばすためにはあえて「授業で」というより普段の学校生活や聴覚障害教員の授業などを通して自然に身につけさせていくしかないのではないかと考えている。・手話の言語力評価は必要だと思うが、手話力向上のための研修をもっと充実させることがまず必要。・手話の言語力というよりは日本語と手話とのマッチング能力…つまり日本語力の評価になってしまうようにも思えるが教師が発信する手話を生徒がどの程度知っているのかは測つておきたい。
日本語	<ul style="list-style-type: none">・日本語の言語力と手話の言語力を同一バッテリー（本校自立担当者自作）を用いて評価している。今後検査内容の検討が必要。
日本語	<ul style="list-style-type: none">・日本語把握との関係性を知る上では有効と考える。
コ	<ul style="list-style-type: none">・手話で一次言語をしっかり身に付け、遅れずに教科学習、日本語の学習についていくことができる（読む、書く）。・本校及び当学部では先に（P2）「学部の指導目標」で示したとおり「個に応じた手段でコミュ

ミ	ニケーション能力を高める」指導を行っていますが、現在のところ聴覚口話法を基盤にして行っており、当面、手話はその補助的手段として活用しています。言語コミュニケーション手段の多様な考え方を総合的に検討しながら指導にあたってまいります。
ユ	・生徒が手話、音声のどちらの手段から主に情報を得ているのか、どの程度理解できているのか等の現状把握は生徒個々のコミュニケーション手段を考えていく上でも必要である。
二	・手話を含めたトータルなコミュニケーションツールを用いた言語力養成は、生徒の将来を左右する大きな問題であると思う。
ケ	・日本手話文法テストは数年前1度実施しましたが、その後は使用していません。現在手話を第1言語とする児童は重複障害の児童だけなので観察でほぼ実態把握はできると考えています。
一	・部内では手話中心に活動が進められている。ろう教員は小学部30名中7人名いる。手話の使える教員もたくさんいる。しかし、子ども同士のやりとりは読み取りきれないものがある。手話を覚えている最中の教員はたいへんな負担を感じている。実態把握をして授業を行うために評価は必要ある。
シ	・言語の定着を確認するのに必要。
ヨ	・教師の日本手話の力をつけることが大事。手話のとらえ方を職員で共通理解する必要がある。
ン	・教師側の評価も必要だと考えます。
実	・自分達が日常使用している手話表現が、本当にその時その時の文章に合ったものであるか見直したり通常使用する表現以外の手話があることを知る機会を設けることは大切だと思う。
態	・小学部までは、「日本手話文法理解度検査」（金沢大）を使用していたが、中学部生徒向けではないため、実施していない。
把	・教科学習を進める上で、必要な言語力（手話に関する）を把握し、指導を進める必要を感じる。
握	・手話に関して幼稚部段階で客観的に評価する必要性を今のところ感じていない。
研	・幼稚部の段階では手話は意味理解の手掛かりとして使用しているため獲得状況の評価は必要としていない。
修	・幼稚部段階で使用する手話は身ぶりの延長の範囲にとどまることが多いので今の時点では必要性がない。
指	
導	
幼	
稚	
部	

手話の評価の課題については、手話力、手話の言語力、実態把握、指導、評価法に分類された。表3-3-9に分類結果を示す。

表3-3-9 手話の評価の課題

手	・教師の主觀で生徒の手話力を評価しており、それがコミュニケーションの豊さや学力の向上に十分につながっていない。また、この手話力の重要性等について学部や学校全体で話し合いがされていない現状であることが課題としてあげられる。
話	・現在は手話力についての評価は実施していません。今後の検討課題です。
力	・聴力の厳しい子、聴覚障害の家庭など、手話言語を持っている子どもの評価も必要と思う。また、一般の検査ではやりにくいこともあるので手話での言語力評価も必要だろう。本校では実施していないが他校の情報などを得ることも課題の一つである。

言語	<ul style="list-style-type: none"> 手話の言語力向上は大切ですが指導者側の手話力は課題だと思います。ただし手話ができる・できないだけで教員を選ぶことはたいへん危険だと思います。
力	<ul style="list-style-type: none"> 自立活動の時間に帯時間で毎朝、手話表現の指導をしている。手話の言語力をまとった形で評価していなかったが行う必要があると思う。課題としては生徒のニーズに応じて指導の内容が異なるので目的とどこまでの（実態からくる教育的ニーズ）内容を扱うかを学部で検討する必要がある。
実態	<ul style="list-style-type: none"> 伝達内容の詳しさ 伝達の意欲 日本語の習得とのバランス（コミュニケーションと日本語の押さえ）必要であると感じているが実施には至っていない。
把握	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの評価と同じカテゴリーになるのでは？ 地域差が激しい手話を統一的な視点で評価できるのだろうか。
指導	<ul style="list-style-type: none"> 手話表現や手話で通訳する場面で正しく理解できているかを把握するため指導にどう利用するか。 評価の仕方に課題 語彙の広がりをどう指導するか。 まだ学校として「生徒の手話使用」「手話の指導について」様々な意見があり手話をどう学校教育に位置づけるかという段階です。
評価法	<ul style="list-style-type: none"> 国語や英語においてテストを行なうように手話においてもどれくらい手話単語を、文章を表現できるかというテストを行う必要があると思います。ただどのようにやっていくかという方法が確立されていない気がします。 どのような方法で評価すればよいか具体的な話し合いができていない。

第9項 「手話の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察

手話の言語力の状況を把握する方法について、先ず、名称等を尋ねたが、この質問に対して、各学部総数で40の回答を得た。他の質問に比して回答数が相当少ないと見える。自作が約60%と回答があった。これは、手話の評価について市販の評価表が少ないことがある。自作の評価として、「各種の手話ビデオ教材」、「(手話単語)のチェックをするための語彙表」、「自立活動 指導段階チェック表」が挙げられた。活用の目的は、実態把握(53.3%)、指導に活用(37.3%)と両者で90%を越えた。実施の範囲では、学部内での実施が70%であった。

評価内容（各学部総数103）として、「理解(31.1%)」、「語彙(26.2%)」と言語としての手話の位置づけ評価がなされていた。また、「日本手話(13.6%)」、「日本語(6.8%)」が挙げられ、評価内容や視点として、手話に関する捉えに相違があることが示唆された。実施の周期は、学部内で80%を越えた。対象児（各学部総数40）は、全員が55.0%であった。

次に、手話の評価の必要性については、必要性、手話力、手話の言語力、日本語、コミュニケーション、実態把握、研修、指導、幼稚部に分類された。

必要性では「現在のところ特に必要は感じていません。」や「手話の言語評価は必要だと思いますが本校ではできていません」との記述があった。手話力では「教師の手話力の問題があるのでビデオ教材を使って行っているが、保護者の手話力をどうつけるか。」、手話の言語力では「生徒の手話も曖昧な所があつたりすることもあり、教師も含め手話の言語力向上のための評価は必要と思います。」、日本語では「手話の内容を日本語におきかえていく時には手話で理解できているのか確認する必要がある。」、コミュニケーションでは「生徒が手話、音声のどちらの手段から主に情報を得ているのか、どの程度理解できているのか

等の現状把握は生徒個々のコミュニケーション手段を考えていく上でも必要である。」、実態把握では「生徒がどのような手話をどのように理解しているか実態を把握することは大切。」、研修では「教師の日本手話の力をつけることが大事。手話のとらえ方を職員で共通理解する必要がある。」、指導では「教科学習を進める上で、必要な言語力（手話に関する）を把握し、指導を進める必要を感じる。」、幼稚部では「手話に関して幼稚部段階で客観的に評価する必要性を今のところ感じていない。」や「人工内耳の幼児が増える中で手話の位置づけ幼稚部として検討中。」が挙げられた。

また、手話の評価の課題は、手話力、手話の言語力、実態把握、指導、評価法に分類された。手話力では「教職員の手話の力量に課題がある」、手話の言語力では「手話の言語力評価は必要と考えるが定期的に実施するにはまだ指導体制が十分とは言えない。」、実態把握では「生徒が普段使っている手話について通じ会っているようでしっかりと通じていないこともある。」、指導では「評価の仕方に課題 語彙の広がりをどう指導するか。」、評価法では「どのような方法で評価すればよいか具体的な話し合いができるいない」等が挙げられた。

手話評価の必要性と課題については、手話力、手話の言語力、実態把握、指導が共通項として挙げられたが、必要性についての意見が是非も含め、多く述べられていた。特に、幼稚部段階での手話活用、手話評価については議論が分かれていることが示された。

また、「手話」という用語については、特別支援学校(聴覚障害)では、コミュニケーション手段としてではなく、教科指導にどのように位置づけ、聴覚障害児の可能性を伸ばしていくかの議論に移行していることが示されたものと考えられる。ただし、回答の中には、「手話力」あるいは「手話の言語力」という表現が多く見られ、それぞれの意味するところが同義であるのか不明な部分もある。従って、これらの記述について考察するのは急と考える。

なお、本調査において、特総研の聴覚障害班では「手話付きスピーチ」と「日本手話」について一応の定義付けをして回答を求めたが、「手話力」や「手話の言語力」については言及していない。教育現場での議論を共通化する上でも、これらについて何らかの定義付けをするか、統一した表現にしていく必要があると思われる。

第10項 教師の手話の言語力向上のための評価内容

教師の手話の言語力向上のため評価を用いている場合、その概要について自由記述による回答を求めた。手話の評価の課題については、研修、手話検定、その他に分類された。表3-3-10に、分類結果を示す。

表3-3-10 教師の手話の言語力向上のための評価内容

研修	<ul style="list-style-type: none">・学部、学校としては、実施していないが、会議の際に（職員会議、学部会等）、ミニ研修を行ったり、・全校研修に年間数回取り組むなど手話力の向上に取り組んでいる。・校内研修の中で、日本手話文法テストを行う（評価は特にしていない）。・校内研修での年度末確認テスト（上級、中級、初級にわかつて各講座講師が実施）。・教師の評価はないが、職員全員による手話研修や有志による手話研修（サークル）などで研修を実施している。
手話検定	<ul style="list-style-type: none">・任意であるが手話検定を受けている。・手話検定の本を使って手話の勉強している。ドリル練習を行い検定用のDVDを使っておおまかな評価を行う。・手話検定に沿った研修の実施。
その他	<ul style="list-style-type: none">・自己評価ではあるが学部会のはじめ5分程度、手話の読み取りを行っている。出題者の手話（200字程度の文）を代表1名が声を出して読み取る。その後、参加者全員で出題者の手話付きスピーチを聞きながら自分の読み取りについて評価する。
の他	<ul style="list-style-type: none">・授業の指導自己評価の中で一部評価項目として挙げてあり全教師がチェックしています・校内においても日本手話と日本語対応手話についての認済が深まらず、どちらをターゲットにして育てていくのかの方向性を定めにくい。

第11項 教師の手話の言語力向上のための評価に関するまとめと考察

手話の評価の課題については、回答数が多くなかったが、研修、手話検定、その他に分類された。

研修では「手話研修会は実施しているが、評価は特にしていない。」、手話検定では「手話検定か、県聴覚障害者協会主催の講座への参加をよびかけている。」、その他では「全員が評価尺度を共有している状況にはまだ至っていないのが現状です。」等が挙げられた。研修や手話検定等を通して何らかの評価の目安をもつ必要があるという記述が多かった。

所謂、教師の「手話力」の向上が、教師にとっては子どもとのコミュニケーションに寄与することが大であろう。この場合、「調査1」での教材活用にも通じるものであるが、教師の手話は、「手話を教えるのか、手話で教えるのか」の視点を明確にする必要があると思われる。

また、今後、聴覚障害児が高等教育に進む事例が増加していくことを想定した場合、コミュニケーションベースだけではなく、彼らの発達段階に応じた思考の深まりや拡がりが一層求められる。このため、これまで以上に手話や「手話力」の在り方について十分議論する必要があろう。

(原田公人)

研究分担者・協力者一覧

(1) 研究協力機関

千葉県立千葉聾学校

神奈川県立平塚ろう学校

(2) 研究協力者

宍戸和成（筑波大学 教授、筑波大学附属久里浜特別支援学校 校長）

(3) 研究分担者（国立特別支援教育総合研究所）

原田公人（研究代表）、藤本裕人、庄司美千代、横尾 俊

おわりに

本報告書は、特別支援学校（聴覚障害）における教材活用及びコミュニケーション手段に関する実態調査の結果報告です。調査にあたっては、全国聾学校長会はじめ、多くの特別支援学校（聴覚障害）のご協力のもと、約1,800部のご回答をいただきました。本調査に多大のご協力をいただき深くお礼申し上げます。

特に、自由記述欄には、多くのご意見をご記入いただき、過去、現在、そして今後の聴覚障害教育を考える貴重な情報を得ることができました。

また、本研究に当たって、千葉県立千葉聾学校及び神奈川県立平塚ろう学校には研究協力機関として、宍戸和成（筑波大学附属久里浜特別支援学校長）には研究協力者として、予備調査、学校訪問、研究協議会等において、貴重なご助言・ご指導をいただきました。改めて感謝申し上げます。

今回の報告書作成に当たっては、調査票の集計に時間を要し、分析が不十分であると反省しておりますが、幼稚部から高等部における各教科の教材活用及びコミュニケーション手段の現状について概要を把握することができました。研究班では、今後も更に検討を深め、課題をより明確にし、今後の聴覚障害教育に有益な情報発信ができるよう努めていきたいと思います。

最後になりますが、本報告書を多くの方にご覧いただき、ご批正ご指導を賜れることができましたら幸甚です。

平成25年2月
原田公人（研究代表）

執筆者一覧

第1章

第1節 感覚障害教育における教科指導 原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第2節 特別支援学校（感覚障害）における教材に関する実践研究
原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第2章

調査の概要 庄司美千代（国立特別支援教育総合研究所）

第1節 国語科 庄司美千代（国立特別支援教育総合研究所）

第2節 算数・数学科 藤本 裕人（国立特別支援教育総合研究所）

第3節－1 外国語活動 原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第3節－2 英語科 横尾 俊・原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第4節 自立活動 原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第5節 電子黒板 庄司美千代（国立特別支援教育総合研究所）

第3章

第1節 基本情報 原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第2節 調査A コミュニケーションの実態に関する調査
原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

第3節 調査B 言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査
原田 公人（国立特別支援教育総合研究所）

資料 1

調査票 1：特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段
と教材活用に関する現状調査（調査 1）

資料 1

特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と 教材活用に関する現状調査（調査 1）

国語科

表 1-8-1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）（数値は%）

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 検定教科書	147	97.3	1.4	1.4	149	89.9	4.0	6.0	149	71.8	19.5	3.4	6.0
2 聾学校用教科書	139	92.1	3.6	4.3	140	14.3	49.3	36.4	134	39.6	26.9	1.5	31.0
3 文部科学省著作本	130	68.5	3.1	28.5	119	0.8	15.1	84.0	110	3.4	10.0	3.6	82.9
4 附則の9条本	121	50.4	8.3	41.3	111	2.7	10.8	86.5	102	5.9	3.9	2.9	85.3
5 電子教科書	131	26.7	1.5	71.8	105	7.6	15.2	77.1	102	18.6	3.9	2.0	75.2
6 市販のワークブック、漢字ドリル	146	67.1	32.2	0.7	147	80.3	16.3	3.4	142	71.1	23.9	2.1	2.7
7 日本語指導用教材（教科書、問題集）	128	39.8	31.3	28.9	120	25.0	41.7	33.3	114	28.1	26.3	11.4	33
8 国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	144	95.8	3.5	0.7	146	43.8	38.4	17.8	136	72.1	10.3	0.7	18.1
9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	132	3.8	15.9	80.3	106	3.8	5.7	90.6	102	7.8	0	1.0	91.7
10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	143	86.7	11.2	2.1	142	20.4	52.8	26.8	131	57.3	13.7	1.5	29.1
11 ことば絵じでん	139	93.5	5.8	0.7	124	36.3	59.7	4.0	129	69.8	15.5	2.3	12.5
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	138	100.0	0	0	145	29.7	65.5	4.8	138	83.3	11.6	0	5.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	135	98.5	0.7	0.7	144	34.7	54.9	10.4	134	73.1	16.4	0.7	9.8
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	134	94.8	0	5.2	141	8.5	36.2	55.3	126	38.1	8.7	0.8	51.2
15 写真（人物、場所、活動場面等）	139	80.6	15.8	3.6	145	51.0	47.6	1.4	108	57.4	23.1	16.7	2
16 動画（ビデオカメラで撮影したもの）	133	67.7	12.8	19.5	141	7.1	60.3	32.6	131	38.9	19.1	9.2	32.8
17 カレンダー	136	91.2	8.1	0.7	143	47.6	43.4	9.1	139	61.2	20.1	9.4	9.5
18 絵日記（スケッチブックの記録等も）	130	59.2	30.8	10.0	138	43.5	32.6	23.9	130	43.8	20.8	10.8	24.6
19 新聞	138	88.4	9.4	2.2	144	11.1	56.9	31.9	136	37.5	30.1	2.2	30.5
20 広告、チラシ、ポスター	131	79.4	13.0	7.6	138	3.6	46.4	50.0	133	30.1	20.3	0.8	46.5
21 雑誌（幼児・児童向け、その他）	130	49.2	23.1	27.7	130	3.8	43.1	53.1	124	31.5	13.7	1.6	52.7
22 DVD（テレビ番組、解説等）	135	73.1	12.7	14.2	138	3.6	50.0	46.4	132	44.7	11.4	0.8	44.6
23 手話・字幕付きD	140	70.1	7.5	22.4	134	5.2	38.1	56.7	126	38.9	5.6	0.8	55.7

VD													
24 インターネット上の Web 情報	141	91.0	4.5	4.5	145	26.2	51.0	22.8	138	38.4	37.0	1.4	25

表 1-8-2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）（数値は%）

		教材の有無				活用頻度			活用の状況					
		N	学校	個人	ない	N	よく	時々	使わ	N	その	手を	自作	
							使う	使う	ない					使わ
1	検定教科書	120	100.0	0	0	118	93.2	3.4	3.4	116	74.1	22.4	0	3.5
2	聾学校用教科書	111	86.5	2.7	10.8	110	4.6	34.5	60.9	97	23.7	21.6	0	54.6
3	文部科学省著作教科書	100	63.0	3.0	34.0	99	5.1	14.1	80.8	82	6.1	14.6	2.4	76.8
4	附則の9条本(旧107条本)	100	46.0	16.0	38.0	91	4.4	11.0	84.6	77	9.1	9.1	0	81.8
5	電子教科書(検定教科書対応)	101	12.9	1.0	86.1	82	2.4	11.0	86.6	71	9.9	2.8	0	87.3
6	市販のワークブック、漢字ドリル	114	61.4	36.8	1.8	116	67.2	29.3	3.5	109	65.1	30.3	2.8	1.8
7	日本語指導用教材(教科書、問題集)	100	26.0	31.0	43.0	90	12.2	36.7	51.1	84	21.4	22.6	6.0	50.0
8	国語辞典、漢和辞典(紙媒体)	115	93.9	6.1	0	117	61.5	36.8	1.7	111	95.5	2.7	0	1.8
9	電子辞書(国語辞典、漢和辞典)	101	4.9	42.6	52.5	93	17.2	18.3	64.5	104	30.8	0.9	0	68.3
10	手話辞典(紙媒体、電子媒体)	110	97.3	2.7	0	114	18.4	54.4	27.2	107	70.1	3.7	0	26.2
11	ことば絵じてん	108	87.0	4.6	8.3	109	5.5	37.6	56.9	107	34.6	7.4	0.9	57.0
12	図鑑(生活、生き物、乗り物等)	107	97.2	1.9	0.9	110	9.1	49.1	41.8	106	48.1	8.5	0.9	42.5
13	絵本(行事、物語、説明等)	107	90.7	4.7	4.7	111	11.7	42.3	45.9	107	36.4	15.9	0	47.7
14	紙芝居(行事、物語、説明等)	102	77.5	2.9	19.6	106	3.8	15.1	81.1	102	8.8	3.9	1.0	86.3
15	写真(人物、場所、活動場面等)	107	71.0	21.5	7.5	111	26.1	56.8	17.1	105	32.4	39.0	7.6	21.0
16	動画(ビデオカメラで撮影したもの)	103	61.2	16.5	22.3	107	8.4	36.4	55.1	108	26.9	13.0	3.7	56.5
17	カレンダー	103	92.2	5.8	1.9	106	18.9	42.5	38.7	101	37.6	15.8	3.0	43.6
18	掛け図	103	68.0	1.9	30.1	108	5.6	17.6	76.9	105	12.4	5.7	1.9	80.0
19	新聞	105	90.5	5.7	3.8	112	19.6	67.0	13.4	104	40.4	42.3	1.0	16.3
20	広告、チラシ、ポスター	101	77.2	10.9	11.9	104	9.6	35.6	54.8	100	22.0	20.0	1.0	57.0
21	雑誌	102	52.9	25.5	21.6	107	5.6	36.4	57.9	103	17.5	21.4	0	61.2
22	DVD(テレビ番組、解説等)	101	61.4	17.8	20.8	110	9.1	35.5	55.5	107	28.0	12.1	2.8	57.0
23	手話・字幕付きDVD※	103	74.8	10.7	14.6	106	5.7	37.7	56.6	103	28.2	10.7	1.9	59.2
24	インターネット上の Web 情報	104	84.6	10.6	4.8	109	18.3	54.1	27.5	107	31.8	38.3	0.9	29.0

表 1・8・3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
(数値は%)

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	学 校 N		個 人 い N		よ く 使 う	時 々 使 う	使 わ な い	N	そ の ま ま	手 を 加 え	自 作	使 わ な い	
1 検定教科書	95	99.0	0	1.1	95	88.4	6.3	5.3	93	81.7	11.8	1.1	5.4
2 聖学校用教科書	86	60.5	3.5	36.0	89	4.5	5.6	89.9	87	8.0	0	0	92.0
3 文部科学省著作教科書	92	54.3	6.5	39.1	93	3.2	6.5	90.3	92	4.3	5.4	1.1	89.1
4 附則の9条本	91	45.1	3.3	51.6	89	2.2	9.0	88.8	85	4.7	3.5	1.2	90.6
5 電子教科書	86	7.0	0	93.0	89	1.1	3.4	95.5	85	0	1.2	0	98.8
6 市販のワークブック、漢字ドリル	94	62.8	36.2	1.1	90	60.0	35.6	4.4	85	49.4	45.9	0	4.7
7 日本語指導用教材（教科書、問題集）	85	40.0	28.2	31.8	87	11.5	40.2	48.3	82	12.2	32.9	3.7	51.2
8 国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	94	83.0	17.0	0	92	68.5	30.4	1.1	86	98.8	0	0	1.2
9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	93	4.3	55.9	39.8	91	20.9	25.3	53.8	88	43.2	0	0	56.8
10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	92	95.7	4.3	0	89	25.8	52.8	21.3	83	70.0	7.2	0	22.9
11 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	91	94.5	3.3	2.2	89	3.4	57.3	39.3	87	46.0	13.8	0	40.2
14 写真（人物、場所、活動場面等）	92	57.6	29.3	13.0	89	11.2	61.8	27.0	85	29.4	35.3	8.2	27.1
15 動画（ビデオカメラで撮影したもの）	90	45.6	16.7	37.8	90	1.1	35.6	63.3	86	15.1	15.1	5.8	64.0
16 カレンダー	89	80.9	13.5	5.6	90	13.3	35.6	51.1	89	37.1	7.9	3.4	51.7
17 携け図	87	54.0	0	46.0	89	1.1	14.6	84.3	88	13.6	0	0	86.4
18 新聞	91	86.8	9.9	3.3	92	26.1	63.0	10.9	87	34.5	50.6	2.3	12.6
19 広告、チラシ、ポスター	89	79.8	10.1	10.1	91	3.3	39.6	57.1	89	20.2	18.0	2.2	59.6
20 雑誌	87	48.3	23.0	28.7	92	2.2	42.4	55.4	88	18.2	21.6	1.1	59.1
21 DVD（テレビ番組、解説等）	88	63.6	21.6	14.8	90	2.2	52.2	45.6	84	33.3	15.5	0	51.2
22 手話・字幕付きDVD	87	70.1	13.8	16.1	91	4.4	41.8	53.8	87	32.2	10.3	0	57.5
23 インターネット上のWeb情報	87	9.8	8.0	1.1	90	22.2	62.2	15.6	85	40.0	43.5	0	16.5

表 1-9-1 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）
(数値は%)

	機器等の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	146	98.6	0	1.4	146	91.1	7.5	1.4	140	92.1	6.4	0	1.4
2 発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	141	51.8	23.4	24.8	137	27.7	36.5	35.8	127	55.9	8.7	0.8	34.6
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	143	72.7	23.8	3.5	141	36.2	54.6	9.2	135	65.9	15.6	8.9	9.6
4 指文字表・指文字カード	139	66.9	20.9	12.2	135	10.4	30.4	59.3	129	38.0	4.7	0.8	56.6
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	136	47.8	17.6	34.6	126	6.3	30.2	63.5	125	26.4	8.8	2.4	62.4
6 電子黒板	140	52.1	0.7	47.1	121	4.1	4.1	91.7	118	9.3	0	0	90.7
7 OH P	138	74.6	0	25.4	130	2.3	6.2	91.5	120	10.0	0.8	0	89.2
8 パソコン、プロジェクター	145	98.6	0.7	0.7	143	33.6	51.0	15.4	136	67.6	13.2	5.1	14.0
9 地上デジタル対応テレビ	141	92.2	0.7	7.1	136	15.4	30.9	53.7	133	42.9	1.5	3	52.6
10 DVDプレーヤー	142	96.5	0.7	2.8	139	6.5	49.6	43.9	138	52.9	2.2	0.7	44.2
11 CDプレーヤー等機器	141	97.9	0	2.1	138	5.8	45.7	48.6	135	45.9	3	1.5	49.6
12 実物投影機	137	82.5	1.5	16.1	136	8.1	22.8	69.1	133	30.1	0.8	0	69.2
13 デジタルカメラ	144	93.8	6.3	0	140	50.7	38.6	10.7	136	75.0	11.0	2.9	11.0
14 デジタルビデオカメラ	142	96.5	2.8	0.7	139	21.6	46.8	31.7	133	60.9	8.3	0	30.8
15 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	140	85.7	0.7	13.6	107	54.2	18.7	27.1	136	54.4	0.7	0	44.9
16 個人用FM等システム	135	42.2	11.9	45.9	134	17.2	9.7	73.1	132	25.8	0.8	0	73.5
17 音声記号図、調音部位図	136	86.8	0.7	12.5	133	1.5	36.1	62.4	121	32.2	4.1	1.7	62.0
18 母音図（口形を表した図や絵）	137	89.8	5.8	4.4	137	6.6	43.8	49.6	134	37.3	6.0	3.7	53.0
19 キューサイン表（発音サインも含む）	135	37.0	5.9	57.0	128	0	6.3	93.8	136	11.0	1.5	0	87.5

表 1-9-2 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）
(数値は%)

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板(短冊黒板、小黒板)	117	96.6	0.9	2.6	116	86.2	6.9	6.9	117	91.5	1.7	0	6.8
2 発表板(各生徒が持つホワイトボードや小黒板)	111	55.0	18.5	31.5	112	18.8	33.0	48.2	103	45.6	2.9	0	51.5
3 漢字表・漢字カード(カタカナ、ローマ字も含む)	110	41.8	16.4	41.8	112	5.4	24.1	70.5	111	16.2	5.4	8.1	70.3
4 指文字表・指文字カード	106	66.0	14.2	19.8	109	5.5	15.6	78.9	108	16.7	2.8	2.8	77.8
5 手話表(簡単な手話表現の絵)	105	50.5	11.4	38.1	110	6.4	16.4	77.3	107	16.8	3.7	0.9	78.5
6 電子黒板	110	54.5	0.9	44.5	114	2.6	8.8	88.6	113	8.0	4.4	0.9	86.7
7 OHP	109	79.8	0.9	19.3	110	1.8	10.9	87.3	109	11.0	0.9	0.9	87.2
8 パソコン、プロジェクター	114	99.1	0.9	0	116	35.3	52.6	12.1	105	71.4	8.6	6.7	13.3
9 デジタル対応テレビ	107	89.7	0	10.3	109	12.8	23.9	63.3	100	30.0	3.0	0	67.0
10 DVDプレーヤー	110	96.4	0.9	2.7	112	5.4	43.8	50.9	104	42.3	4.8	0	52.9
11 CDプレーヤー等オーディオ機器	107	96.3	0	3.7	110	3.6	22.7	73.6	107	20.6	2.8	0	76.6
12 実物投影機	105	84.8	0	15.2	106	3.8	27.4	68.9	102	26.5	2.0	0	71.6
13 デジタルカメラ	112	97.3	1.8	0.9	113	25.7	42.5	31.9	105	53.3	11.4	1.0	34.3
14 デジタルビデオカメラ	113	98.2	0.9	0.9	112	15.2	29.5	55.4	105	37.1	5.7	0	57.1
15 集団補聴器(FM、赤外線、ループ)	108	86.1	0	13.9	111	36.9	11.7	51.4	104	43.3	1.0	1.0	54.8
16 個人用FM等システム	102	35.3	7.8	56.9	107	8.4	9.3	82.2	101	10.9	2.0	1.0	86.1
17 音声記号図、調音部位図	103	71.8	1.0	27.2	107	1.9	8.4	89.7	108	6.5	5.6	0	88.0
18 母音図(口形を表した図や絵)	105	75.2	1.9	22.9	109	2.8	7.3	89.9	110	6.4	4.5	10.9	88.2
19 キューサイン表(発音サインも含む)	103	41.8	1.9	56.3	108	1.9	3.7	94.4	107	2.8	0.9	0.9	95.3

表 1-9-3 機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
(数値は%)

	N	学校	個人	ない	よく使う +時々	加工・ 自作
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	95	93.7	0	6.3	88.2	0
2 発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	94	50.0	14.9	35.1	50.0	6.7
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	92	27.2	18.5	54.3	17.6	9.9
4 指文字表・指文字カード	92	63.0	6.5	30.4	19.5	3.3
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	92	45.7	6.5	47.8	19.8	3.4
6 電子黒板	94	52.1	0	47.9	10.6	1.1
7 OHP	92	76.1	0	23.9	12.7	2.2
8 パソコン、プロジェクター	94	98.9	0	1.1	87.8	17.1
9 地上デジタル対応テレビ	93	88.2	0	11.8	37.0	5.5
10 DVDプレーヤー	92	95.7	0	4.3	57.6	4.7
11 CDプレーヤー等オーディオ機器	92	93.5	0	6.5	25.8	2.2
12 実物投影機	90	86.7	0	13.3	30.8	2.3
13 デジタルカメラ	94	95.7	2.1	2.1	67.1	15.5
14 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	90	87.8	0	12.2	32.2	1.1
15 個人用FM等システム	88	29.5	14.8	55.7	12.1	0
16 音声記号図、調音部位図	88	65.9	0	34.1	3.3	0
17 母音図（口形を表した図や絵）	90	70.0	1.1	28.9	5.5	0
18 キューサイン表（発音サインも含む）	89	41.6	1.1	57.3	2.2	0.

算数・数学科

表 3-9-1 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）
(数値は%)

	教材の有無	活用頻度				活用の状況							
		N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作				
1 検定教科書	103	97.1	1.9	1	160	90.6	5	4.4	155	69.7	26.5	1.9	1.9
2 文部科学省著作 教科書(知的障害者用さんすう☆ ～☆☆☆)	146	68.5	3.4	28.1	138	2.9	10.1	87	122	5.7	8.2	2.5	83.6
3 附則の9条本(旧 107条本)	141	46.8	13.5	39.7	128	3.1	7.8	89.1	114	6.1	7	0	86.8
4 電子教科書(検定 教科書対応)	142	20.4	1.4	78.2	125	9.6	8.8	81.6	110	16.4	2.7	2.7	78.2
5 市販のワークブック、漢字ドリル	154	63.6	35.1	1.3	156	81.4	16	2.6	151	67.5	28.5	2	2
6 国語辞典、漢和辞典(紙媒体)	148	94.6	5.4	0	150	18.7	32.7	48.7	130	49.2	6.2	1.5	43.1
7 電子辞書(国語辞典、漢和辞典)	140	3.6	27.1	69.3	130	0.8	9.2	90	113	8	2.7	0.9	88.5
8 手話辞典(紙媒体、電子媒体)	148	85.1	9.5	5.4	151	19.2	42.4	38.4	134	51.5	10.4	3	35.1
9 ことば絵じてん	151	93.4	6.6	0	151	19.9	47.7	32.5	135	54.8	15.6	0.7	28.9
10 図鑑(生活、生き物、乗り物等)	152	96.7	2.6	0.7	152	15.1	48	36.8	134	50.7	14.9	2.2	32.1
11 絵本(行事、物語、説明等)	150	96	3.3	0.7	151	14.6	45	40.4	134	45.5	17.2	1.5	35.8
12 紙芝居(行事、物語、説明等)	141	84.4	1.4	14.2	150	3.3	22.7	74	121	16.5	11.6	0.8	71.1
13 写真(人物、場所、活動場面等)	141	66.7	23.4	9.9	152	27.6	44.1	28.3	132	26.5	32.6	14.4	26.5
14 動画(ビデオカメラで撮影したもの)	139	57.6	12.2	30.2	147	9.5	32.7	57.8	123	25.2	17.1	6.5	51.2
15 カレンダー	144	80.6	17.4	2.1	152	32.2	32.2	35.5	132	37.1	23.5	9.8	29.5
16 絵日記(スケッチ)	139	50.4	30.2	19.4	148	25.7	20.3	54.1	126	23	16.7	9.5	50.8

ブックの記録等 を含む)																	
17	新聞	141	87.9	7.8	4.3	153	5.9	34	60.1	125	20.8	23.2	1.6	54.4			
18	広告、チラシ、ポスター	141	80.1	12.1	7.8	151	2	39.1	58.9	126	22.2	21.4	0.8	55.6			
19	雑誌(幼児・児童向け、その他)	138	53.6	18.1	28.3	144	2.8	28.5	68.8	119	20.2	12.6	1.7	65.5			
20	D V D(テレビ番組、解説等)	136	61	11	27.9	145	3.4	22.1	74.5	118	19.5	7.6	1.7	71.2			
21	手話・字幕付きD V D	138	59.4	5.1	35.5	145	1.4	20	78.6	118	22	2.5	0.8	74.6			
22	インターネット上の Web 情報	134	88.1	5.2	6.7	145	15.9	40.7	43.4	126	32.5	25.4	1.6	40.5			

表 3-9-2 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）
(数値は%)

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	
1	検定教科書	118	97.5	0.8	1.7	118	86.4	4.2	9.3	115	64.3	27	0	8.7
2	文部科学省著作 教科書（知的障 害者用さんすう ☆～☆☆☆）	100	56	5	39	89	3.4	12.4	84.3	82	6.1	7.3	4.9	81.7
3	附則の9条本 (旧107条 本)	100	35	10	55	83	0	7.2	92.8	79	0	6.3	3.8	89.9
4	電子教科書（檢 定教科書対応）	104	13.5	1.9	84.6	80	1.3	10	88.8	75	8	4	0	88
5	市販のワークブ ック、漢字ドリ ル	111	57.7	36.9	5.4	109	63.3	30.3	6.4	106	51.9	36.8	3.8	7.5
6	国語辞典、漢和 辞典（紙媒体）	107	92.5	5.6	1.9	104	3.8	28.8	67.3	91	33	2.2	0	64.8
7	電子辞書（国語 辞典、漢和辞典）	106	11.3	31.1	57.5	89	1.1	6.7	92.1	82	7.3	2.4	0	90.2
8	手話辞典（紙媒 体、電子媒体）	108	93.5	5.6	0.9	107	12.1	38.3	49.5	96	45.8	4.2	0	50
9	ことば絵じてん	105	80	1.9	18.1	91	1.1	6.6	92.3	88	12.5	5.7	0	81.8
10	図鑑（生活、生 き物、乗り物等）	106	93.4	0.9	5.7	104	1	14.4	84.6	87	12.6	4.6	1.1	81.6
11	絵本（行事、物 語、説明等）	106	93.4	0.9	5.7	104	1.9	11.5	86.5	88	9.1	4.5	1.1	85.2
12	紙芝居（行事、 物語、説明等）	104	70.2	0	29.8	97	0	4.1	95.9	84	3.6	2.4	1.2	92.9
13	写真（人物、場 所、活動場面等）	103	73.8	8.7	17.5	99	7.1	28.3	64.6	90	10	21.1	6.7	62.2
14	動画（ビデオカ メラで撮影した もの）	100	64	4	32	97	2.1	18.6	79.4	86	8.1	8.1	7	76.7
15	カレンダー	106	86.8	7.5	5.7	102	10.8	33.3	55.9	94	31.9	11.7	3.2	53.2
16	絵日記（スケッ チ）	100	40	8	52	93	2.2	5.4	92.5	81	2.5	4.9	0	92.6

チックの記録

(等を含む)

17	新聞	105	92.4	0	7.6	103	2.9	26.2	70.9	90	14.4	15.6	1.1	68.9
18	広告、チラシ、 ポスター	104	79.8	7.7	12.5	102	3.9	23.5	72.5	89	12.4	16.9	1.1	69.7
19	雑誌（幼児・児 童向け、その他）	100	55	8	37	95	2.1	8.4	89.5	83	3.6	7.2	0	89.2
20	DVD（テレビ 番組、解説等）	102	64.7	8.8	26.5	98	2	13.3	84.7	86	9.3	4.7	0	86
21	手話・字幕付き DVD	102	67.6	6.9	25.5	95	1.1	13.7	85.3	83	10.8	2.4	0	86.7
22	インターネット 上の Web 情報	106	88.7	6.6	4.7	103	5.8	41.7	52.4	95	20	30.5	0	49.5

表 3-9-3 教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
(数値は%)

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	
													使わ ない	
1	検定教科書 文部科学省 著作教科書 (知的障害 者用さんす う☆～☆☆ ☆)	101	98	0	2	100	89	6	5	96	81.3	12.5	2.1	4.2
2	附則の 9 条	92	51.1	1.1	47.8	74	1.4	9.5	89.2	62	3.2	9.7	1.6	85.5
3	本（旧 10 7 条本） 電子教科書	86	37.2	2.3	60.5	70	4.3	17.1	78.6	62	8.1	8.1	6.5	77.4
4	(検定教科 書対応) 市販のワー	93	19.4	1.1	79.6	64	4.7	7.8	87.5	58	5.2	3.4	0	91.4
5	クブック、 漢字ドリル 国語辞典、	100	66	31	3	96	44.8	50	5.2	89	51.7	40.4	3.4	4.5
6	漢和辞典 (紙媒体) 電子辞書	92	31.5	16.3	52.2	78	1.3	26.9	71.8	71	16.9	8.5	1.4	73.2
7	(国語辞 典、漢和辞 典) 手話辞典	92	6.5	20.7	72.8	70	0	17.1	82.9	65	16.9	0	0	83.1
8	(紙媒体、 電子媒体) 図鑑(生活、	96	81.3	12.5	6.3	93	11.8	59.1	29	84	58.3	9.5	0	32.1
10	生き物、乗 り物等) 写真(人	91	73.6	0	26.4	83	0	9.6	90.4	68	8.8	1.5	1.5	88.2
13	物、場所、 活動場面 等)	90	61.1	6.7	32.2	82	1.2	22	76.8	69	8.7	13	7.2	71

	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	90	47.8	5.6	46.7	78	0	10.3	89.7	67	7.5	4.5	1.5	86.6
14														
15	カレンダー 絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	94	81.9	3.2	14.9	89	3.4	28.1	68.5	74	28.4	5.4	10.8	55.4
16														
17	新聞 広告、チラシ	92	77.2	4.3	18.5	85	3.5	25.9	70.6	69	7.2	24.6	1.4	66.7
18	シ、ポスター 雑誌（幼児・児童向け、その他）	92	69.6	7.6	22.8	84	1.2	33.3	65.5	76	5.3	30.3	1.3	63.2
19														
20	DVD（テレビ番組、解説等）	90	41.1	10	48.9	78	1.3	15.4	83.3	68	5.9	11.8	2.9	79.4
21	手話・字幕付きDVD インターネット上のWeb情報	91	37.4	9.9	52.7	78	2.6	17.9	79.5	66	12.1	6.1	3	78.8
22														
		92	41.3	6.5	52.2	78	3.8	20.5	75.6	68	17.6	8.8	0	73.5
		92	75	5.4	19.6	87	14.9	55.2	29.9	77	20.8	49.4	1.3	28.6

外国語活動

表 3-2-3 教科書等の教材の有無と活用頻度 (%)

教材	N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない
1 英語ノート1、2	128	96.9	0.8	2.3	123	45.5	26.8	27.6
2 教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	122	17.2	5.7	77.0	89	1.1	20.2	78.7
3 市販の英語テキスト、ワークブック	124	19.4	32.3	48.4	10	9.0	37.0	54.0
4 カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	123	51.2	27.6	21.1	110	49.1	37.3	13.6
5 語学学習用CD	124	55.6	4.8	39.5	108	4.6	20.4	75.0
6 英和辞典、和英辞典(紙媒体)	125	74.4	13.6	12.0	118	11.9	31.4	56.8
7 国語辞典(紙媒体)	125	92.0	6.4	1.6	115	22.6	22.6	54.8
8 電子辞書(英和辞典、和英辞典)	123	4.9	30.9	64.2	99	8.1	10.1	81.8
9 手話辞典(紙媒体、電子媒体)	124	83.1	9.7	7.3	117	15.4	35.9	48.7
10 ことば絵じてん	123	88.6	6.5	4.9	119	17.6	40.3	42.0
11 図鑑(生活、生き物、乗り物等)	123	89.4	4.1	6.5	118	11.0	46.6	42.4
12 絵本(行事、物語、説明等)	123	86.2	5.7	8.1	118	10.2	39.0	50.8
13 紙芝居(行事、物語、説明等)	123	78.9	1.6	19.5	113	1.8	17.7	80
14 写真(人物、場所、活動場面等)	124	58.1	21.8	20.2	111	19.8	55.9	24.3
15 動画(活動場面、人物、場所等)	123	43.1	13.0	43.9	108	9.3	38.0	52.8
16 カレンダー	123	76.4	9.8	13.8	114	14.0	51.8	34.2
17 絵日記(スケッチブックの記録等)	116	21.6	12.9	65.5	107	3.7	12.1	84.1
18 新聞	117	70.9	9.4	19.7	114	3.5	34.2	62.3
19 広告、チラシ、ポスター	117	58.1	9.4	32.5	114	1.8	31.6	66.7
20 雑誌(幼児・児童向け、その他)	117	40.2	11.1	48.7	110	0	22.7	77.3
21 DVD(テレビ番組、解説等)	116	50	7.8	42.2	112	2.7	31.3	66.1
22 手話・字幕付きDVD	116	51.7	3.4	44.8	113	1.8	23.9	74.3
23 インターネット上のWeb情報	115	77.4	8.7	13.9	116	19.8	44.8	35.3

表 3-2-4 教材の活用状況

(%)

	教材	N	その まま	手を 加え	自作	使わ ない
1	英語ノート 1、2	120	25.0	44.2	6.7	24.2
2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	87	13.8	8.0	2.3	75.9
3	市販の英語テキスト、ワークブック	96	11.5	32.3	5.2	51.0
4	カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	107	24.3	23.4	40.2	12.1
5	語学学習用 CD	102	17.6	5.9	1.0	75.5
6	英和辞典、和英辞典(紙媒体)	109	39.4	4.6	0.9	55.0
7	国語辞典(紙媒体)	106	43.4	3.8	0	52.8
8	電子辞書(英和辞典、和英辞典)	95	13.7	1.1	0	85.3
9	手話辞典(紙媒体、電子媒体)	112	43.8	6.3	1.8	48.2
10	ことば絵じてん	103	41.7	17.5	1.0	39.8
11	図鑑(生活、生き物、乗り物等)	109	45.0	13.8	2.8	38.5
12	絵本(行事、物語、説明等)	107	32.7	19.6	0.9	46.7
13	紙芝居(行事、物語、説明等)	104	12.5	6.7	1.0	79.8
14	写真(人物、場所、活動場面等)	103	29.1	32.0	16.5	22.3
15	動画(活動場面、人物、場所等)	101	23.8	16.8	7.9	51.5
16	カレンダー	105	38.1	24.8	4.8	32.4
17	絵日記(スケッチブックの記録等)	96	9.4	3.1	3.1	84.4
18	新聞	102	15.7	21.6	1.0	61.8
19	広告、チラシ、ポスター	102	16.7	16.7	0	66.7
20	雑誌(幼児・児童向け、その他)	99	11.1	11.1	1.0	76.8
21	DVD(テレビ番組、解説等)	102	25.5	7.8	0	66.7
22	手話・字幕付きDVD	99	21.2	6.1	0	72.7
23	インターネット上の Web 情報	102	32.4	30.4	2.0	35.3

英語科

表 3-4-1 中学部における教材の有無 (%)

教材	N	学校にある	個人	ない
検定教科書	107	98.1	0.9	0.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	88.9	8.3	2.8
国語辞典（紙媒体）	106	84.9	11.3	3.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	107	86.9	5.6	7.5
インターネット上の Web 情報	102	87.3	6.9	5.9
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	107	82.2	15.9	1.9
カレンダー	103	84.5	7.8	7.8
新聞	103	80.6	7.8	11.7
絵本（行事、物語、説明等）	107	82.2	4.7	13.1
ことば絵じてん	105	74.3	10.5	15.2
市販の英語テキスト、ワークブック	106	62.3	35.8	1.9
紙芝居（行事、物語、説明等）	102	61.8	1.0	37.3
語学学習用 CD	106	54.7	8.5	36.8
DVD（テレビ番組、解説等）	103	47.6	16.5	35.9
写真（人物、場所、活動場面等）	102	43.1	27.5	29.4
広告、チラシ、ポスター	103	62.1	10.7	27.2
動画（活動場面、人物、場所等）	102	40.2	19.6	40.2
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	99	14.1	10.1	75.8
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	107	39.3	40.2	20.6
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	105	20	4.8	75.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	106	8.5	49.1	42.5
手話・字幕付きDVD	102	54.9	14.7	30.4
雑誌	102	41.2	22.5	36.3

表 3-4-2 中学部における教材の使用状況 (%)

教材	N	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	110	89.1	6.4	4.5
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	62.0	35.2	2.8
国語辞典（紙媒体）	103	43.7	35.9	20.4
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	26.4	59.1	14.5
インターネット上の Web 情報	106	18.9	47.2	34.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	10	16.0	50	34.0
カレンダー	103	13.6	37.9	48.5
新聞	106	9.4	38.7	51.9
絵本（行事、物語、説明等）	107	8.4	42.1	49.5
ことば絵じてん	96	8.3	36.5	55.2
市販の英語テキスト、ワークブック	101	6.9	30.7	62.4
紙芝居（行事、物語、説明等）	99	6.1	29.3	64.6
語学学習用 CD	95	4.2	24.2	71.6
DVD（テレビ番組、解説等）	106	3.8	17.9	78.3
写真（人物、場所、活動場面等）	95	4.2	20	75.8
広告、チラシ、ポスター	96	3.1	34.4	62.5
動画（活動場面、人物、場所等）	103	2.9	16.5	80.6
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	91	3.3	8.8	87.9
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	105	1.9	19.0	79.0
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	96	2.1	17.7	80.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	95	2.1	6.3	91.6
手話・字幕付きDVD	10	1.0	24.0	75.0
雑誌	82	1.2	24.4	74.4

表 3・4・3 高等部の教材の有無 (%)

教材	N	学校にある	個人	ない
検定教科書	96	10	0	0
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	93	89.2	8.6	2.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	83.9	16.1	0
インターネット上の Web 情報	86	90.7	7.0	2.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	92	83.7	4.3	12.0
カレンダー	90	80	8.9	11.1
新聞	89	76.4	13.5	10.1
市販の英語テキスト、ワークブック	93	63.4	33.3	3.2
手話・字幕付きDVD	88	59.1	14.8	26.1
語学学習用CD	91	54.9	7.7	37.4
広告、チラシ、ポスター	88	56.8	21.6	21.6
写真（人物、場所、活動場面等）	91	53.8	20.9	25.3
DVD（テレビ番組、解説等）	88	48.9	22.7	28.4
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	87	43.7	18.4	37.9
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	93	38.7	30.1	31.2
動画（活動場面、人物、場所等）	91	38.5	18.7	42.9
外国語辞典（紙媒体）	86	34.9	27.9	37.2
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	91	17.6	7.7	74.7
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	87	6.9	12.6	80.5
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	93	5.4	69.9	24.7

表 3-5-3 高等部の教材の使用状況

(%)

教材	N	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	93	93.5	3.2	3.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	57.0	34.4	8.6
市販の英語テキスト、ワークブック	92	47.8	50	2.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	85	40	34.1	25.9
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	85	34.1	37.6	28.2
インターネット上の Web 情報	94	17.0	61.7	21.3
写真（人物、場所、活動場面等）	87	14.9	47.1	37.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	96	13.5	44.8	41.7
カレンダー	90	12.2	31.1	56.7
外国語辞典（紙媒体）	80	10	22.5	67.5
新聞	90	8.9	37.8	53.3
動画（活動場面、人物、場所等）	87	5.7	34.5	59.8
語学学習用 CD	83	4.8	10.8	84.3
広告、チラシ、ポスター	88	3.4	35.2	61.4
教授用掛図(発音图表、英語版世界地図等)	119	2.5	48.7	48.7
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	87	2.3	29.9	67.8
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	88	2.3	30.7	67.0
DVD（テレビ番組、解説等）	89	2.2	42.7	55.1
手話・字幕付きDVD	92	2.2	41.3	56.5
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	83	0	10.8	89.2

表 3・6・1 中学部の機器の有無 (%)

	N	学校にある	個人	ない
プロジェクター	110	10.0	0	0
DVDプレーヤー	112	98.2	0.9	0.9
パソコン	111	98.2	0.9	0.9
黒板（短冊黒板、小黒板）	111	96.4	0.9	2.7
デジタルビデオカメラ	111	96.4	2.7	0.9
デジタルカメラ	112	93.8	5.4	0.9
CDプレーヤー等オーディオ機器	111	93.7	2.7	3.6
放送機器	108	93.5	1.9	4.6
集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	111	90.1	0.9	9.0
地上デジタル対応テレビ	109	87.2	0	12.8
实物投影機	108	76.9	0	23.1
OHP	109	73.4	0.9	25.7
指文字表（五十音、アルファベット）	111	66.7	11.7	21.6
母音図（口形を表した図や絵）	109	62.4	0.9	36.7
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	110	59.1	1.8	39.1
電子黒板	110	57.3	0	42.7
手話表（簡単な手話表現の絵）	108	46.3	9.3	44.4
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	110	40.9	18.2	40.9
個人用FM等システム	106	42.5	3.8	53.8
キューサイン表（発音サインも含む）	107	33.6	4.7	61.7

表 3-6-2 中学部の機器の活用状況 (%)

	N	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板）	110	86.4	5.5	8.2
集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	109	36.7	2.8	60.6
パソコン	111	30.6	53.2	16.2
デジタルカメラ	126	19.8	42.9	37.3
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	105	20	27.6	52.4
プロジェクター	109	19.3	37.6	43.1
個人用FM等システム	94	13.8	9.6	76.6
地上デジタル対応テレビ	108	11.1	25.0	63.9
DVDプレーヤー	110	8.2	45.5	46.4
指文字表（五十音、アルファベット）	105	6.7	26.7	66.7
電子黒板	99	5.1	11.1	83.8
CDプレーヤー等オーディオ機器	108	3.7	19.4	76.9
放送機器	108	3.7	7.4	88.9
实物投影機	102	2.9	16.7	80.4
デジタルビデオカメラ	110	2.7	28.2	69.1
母音図（口形を表した図や絵）	104	1.9	6.7	91.3
キューサイン表（発音サインも含む）	97	2.1	3.1	94.8
手話表（簡単な手話表現の絵）	10	1.0	13.0	86.0
OHP	104	1.0	8.7	90.4
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	101	1.0	9.9	89.1

表 3-6-3 高等部の機器の有無 (%)

	N	学校にある	個人	ない
プロジェクター	96	10.0	0	0
パソコン	96	97.9	0	2.1
DVDプレーヤー	96	96.9	0	3.1
黒板（短冊黒板、小黒板）	96	94.8	2.1	3.1
デジタルビデオカメラ	96	94.8	1.0	4.2
デジタルカメラ	96	93.8	3.1	3.1
CDプレーヤー等オーディオ機器	96	90.6	1.0	8.3
放送機器	94	92.6	0	7.4
地上デジタル対応テレビ	94	90.4	1.1	8.5
集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	96	85.4	1.0	13.5
实物投影機	94	78.7	1.1	20.2
OHP	93	78.5	0	21.5
指文字表（五十音、アルファベット）	94	64.9	12.8	22.3
手話表（簡単な手話表現の絵）	93	62.4	7.5	30.1
電子黒板	94	59.6	0	40.4
個人用FM等システム	92	60.9	6.5	32.6
母音図（口形を表した図や絵）	95	56.8	4.2	38.9
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	93	50.5	16.1	33.3
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	93	48.4	2.2	49.5
キューイング表（発音サインも含む）	93	37.6	3.2	59.1

表 3-6-4 高等部の機器の活用状況

(%)

	N	よく使う	時々使う	使わない
黒板	94	81.9	4.3	13.8
パソコン	95	37.9	41.1	21.1
プロジェクター	93	22.6	33.3	44.1
集団補聴器	90	20	18.9	61.1
発表板	87	18.4	29.9	51.7
指文字表	92	10.9	22.8	66.3
デジタルテレビ	92	10.9	20.7	68.5
個人用FM等システム	84	11.9	7.1	81.0
デジタルカメラ	94	7.4	35.1	57.4
手話表	89	4.5	19.1	76.4
实物投影機	89	4.5	21.3	74.2
デジタルビデオカメラ	94	4.3	21.3	74.5
放送機器	90	4.4	7.8	87.8
電子黒板	88	3.4	12.5	84.1
DVDプレーヤー	94	3.2	59.6	37.2
CDプレーヤー等	93	3.2	22.6	74.2
OHP	93	2.2	9.7	88.2
母音図	87	1.1	6.9	92.0
キューサイン表	85	1.2	1.2	97.6
音声記号図、調音部位図	84	0	9.5	90.5

自立活動

表 4-6-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（幼稚部） (%)

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく 使う	時々 使う	使わ ない	N	その まま	手を 加え	自作	使わ ない
絵本（行事、物語、説明等）	164	94.7	5.3	0	159	78.6	20.1	1.3	157	68.8	30.6	0.6	0
紙芝居（行事、物語、説明等）	164	93.0	5.6	1.9	162	16.7	67.9	15.4	134	57.3	26.1	1.9	0
絵日記	158	39.9	57.0	3.2	160	75.6	21.9	2.5	155	58.7	13.5	25.8	1.9
写真（人物、場所、活動場面等）	164	89.2	10.8	0	163	88.3	11.7	0	157	37.6	43.3	0	19.1
動画	161	80.7	8.7	10.6	161	9.3	67.7	23.0	164	39.6	24.4	8.5	27.4
絵カード	164	81.9	16.9	1.2	163	90.8	8.0	1.2	160	39.4	26.9	32.5	1.3
文字カード	160	66.3	28.8	5.0	162	62.3	30.9	6.8	158	20.9	23.4	48.7	7.0
实物	164	59.0	37.3	3.6	162	45.6	53.1	1.3	145	78.8	14.7	4.5	1.9
新聞、雑誌	160	74.4	18.1	7.5	162	1.9	46.9	51.2	144	24.3	29.9	1.4	44.4
広告、ちらし、ポスター	159	71.1	20.1	8.8	162	1.9	50.6	47.5	145	23.4	33.1	0.7	42.8
図鑑	164	95.2	4.8	0	160	5.1	5.6	0.2	155	84.5	13.5	0	1.9
音楽CD	163	86.7	12.7	0.6	162	34.0	48.8	17.3	157	63.7	16.6	2.5	17.2
DVD	163	73.9	18.2	7.9	163	5.2	44.4	56.9	154	42.2	5.2	2.6	50
手話・字幕付きDVD	155	54.2	5.2	40.6	156	0.6	11.5	87.8	144	11.1	0	0.7	88.2
PCソフト	154	38.3	9.7	51.9	154	0.6	13.0	86.4	139	10.1	2.9	2.9	84.2
ことば絵じてん	164	89.1	9.7	1.2	164	50	46.3	3.7	160	78.8	18.8	0	2.5
カレンダー	164	89.6	10.4	0	164	90.2	9.1	0.6	160	31.3	45.6	22.5	0.6
インターネット上のWeb情報	156	78.8	5.8	15.4	161	11.2	32.9	55.9	69	18.8	76.8	2.9	1.4

表 4-6-3 屋外活動の教材（よく使う+時々使う 70%以上：幼稚部）

	回答総数(学校、個人)	回答数(%)	
		N	よく使う
1 スケッチブック	144	9.0	36.1
2 メモ帳	145	31.7	44.8
3 虫かご	163	23.9	69.3
4 虫取り網	161	17.4	80.6
5 魚とり網、たも網	108	13.0	62.0
6 バケツ	164	4.3	55.5
7 ことば絵じてん	164	2.4	9.8
8 図鑑	164	9.1	47.2
9 絵本	164	3.7	30.6
10 紙芝居	164	1.2	4.3
11 写真	162	38.3	52.8
12 絵日記	155	2.6	16.1
13 デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	164	76.8	18.3

表 4-7-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）

	N	学校	個人	ない	よく使 う+時々	(%) 加工 and 自作
1 聖学校用教科書	153	92.8	2.6	4.6	64.7	36.6
2 文部科学省著作	148	70.3	4.1	25.7	20.3	12.2
3 附則の9条本	138	54.3	15.9	29.7	25.4	13.0
4 日本語指導用教材	145	56.6	24.1	19.3	60.7	37.2
5 市販のワークブック、問題集	151	54.3	38.4	7.3	82.8	52.3
6 国語辞典	154	97.4	2.6	0	66.2	3.9
7 漢和辞典	153	96.7	2.6	0.7	41.2	1.3
8 電子辞書	145	7.6	25.5	66.9	5.5	0.7
9 手話辞典	154	92.9	5.8	1.3	66.9	9.1
10 ことわざ辞典	151	88.7	7.9	3.3	44.4	9.9
11 ことば絵じてん	157	94.3	5.1	0.6	92.4	20.4
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	155	97.4	2.6	0	91.0	9.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	156	96.2	3.8	0	90.4	21.2
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	150	96.7	0	3.3	44.7	13.3
15 なぞなぞ	155	89.7	8.6	2.6	65.8	38.7
16 カルタ、百人一首	156	76.9	20.4	2.6	63.5	10.9
17 絵カード	157	75.2	22.9	1.9	42.0	21.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	153	60.8	37.3	2.0	45.1	32.0
19 カレンダー	153	81.7	17.6	0.7	44.4	19.0
20 絵日記	144	50	41.7	9.7	34.0	18.8
21 新聞	153	89.5	7.8	2.6	30.1	16.3
22 広告、チラシ、ポスター	147	81.6	10.9	7.5	26.5	14.3
23 雑誌	146	56.2	19.9	24.0	26.0	12.3
24 音素材用PCソフト、CD	148	71.6	10.8	17.6	32.4	10.1
25 耳の構造図	146	93.8	2.1	4.1	50	15.8
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	153	92.8	5.9	1.3	77.8	8.5
27 補聴器点検用具	152	19.1	0	0	85.5	4.6
28 発音・発語指導用具	153	87.6	9.8	2.6	73.9	31.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	146	90.4	2.1	7.5	53.4	6.
30 DVD（テレビ番組、解説等）	147	81.0	7.5	11.6	45.6	5.4
31 手話・字幕付きDVD	146	80.8	8.9	10.3	42.5	4.8
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	152	91.4	8.6	0	89.5	44.7
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	149	92.6	6.7	0.7	69.1	30.2

表 4-7-2 授業で活用する機器（小学部）

（%）

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	150	98.0	0.7	1.3	86.9	3.3
2 発表板	84	56.4	20.8	22.8	67.1	8.7
3 漢字表	113	74.8	16.6	8.6	58.3	10.6
4 指文字表	114	75.0	17.1	7.9	45.4	7.2
5 手話表	73	49.3	16.9	33.8	35.8	10.1
6 電子黒板	88		0	41.7	8.	1.3
7 OHP	121	79.6	0.7	19.7	4.6	1.3
8 パソコン	155	10	0	0	70.3	14.2
9 プロジェクター	150	98.0	0.7	1.3	51.6	2.0
10 地上デジタル対応テレビ	137	90.1	0	9.9	44.1	3.9
11 DVDプレイヤー	150	98.0	0	2.0	54.9	1.3
12 CDプレイヤー等	150	98.0	1	0.	61.4	2.6
オーディオ機器						
13 実物投影機	135	88.2	0.7	11.1	33.3	0.7
14 デジタルカメラ	148	94.9	4.5	0.6	84.0	12.2
15 デジタルビデオカメラ	150	98.0	2.0	0	64.1	7.2
16 集団補聴器	135	88.8	0	11.2	48.7	0
17 放送機器	139	92.1	0	7.9	29.8	1.3
18 個人用FM等システム	61	42.1	9.0	49.0	26.2	2.1
19 ひらがなカード	107	70.4	26.1	3.3	59.9	27.6
20 音声記号図	139	92.7	2.7	4.7	48.0	13.3
21 母音図	135	88.2	8.5	3.3	55.6	20.3
22 キューサイン表	66	44.3	6.0	49.7	16.1	4.0
23 カードリーダー	94	62.3	2.0	35.8	19.9	2.6

表 4-8-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）

	N	学校	個人	ない	よく使 う+時々	(%) 加工 and 自作
1 聖学校用教科書	122	82.0	0.8	17.2	37.7	52.5
2 文部科学省著作	122	68.0	4.9	27.0	14.8	71.3
3 附則の9条本	113	64.6	12.3	27.4	19.5	69.0
4 日本語指導用教材	122	45.9	23.0	31.1	46.7	45.9
5 市販のワークブック、問題集	122	43.4	45.9	10.7	77.9	25.4
6 国語辞典	131	93.9	5.3	0.8	70.2	21.4
7 漢和辞典	131	93.9	5.3	0.8	10	35.9
8 電子辞書	129	10.9	44.2	45.0	23.3	58.1
9 手話辞典	131	90.1	9.9	0	0.2	20.6
10 ことわざ辞典	130	84.6	10.8	4.6	47.7	39.2
11 ことば絵じてん	132	85.6	6.1	8.3	47.7	37.1
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	132	97.7	1.5	0.8	60.6	27.3
13 絵本（行事、物語、説明等）	131	96.2	1.5	2.3	45.8	38.9
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	128	88.3	0	11.7	16.4	64.1
15 なぞなぞ	130	81.5	10.8	7.7	36.2	47.7
16 カルタ、百人一首	128	71.1	21.1	7.8	40.6	50.8
17 絵カード	128	73.4	17.2	9.4	61.7	36.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	128	62.5	25.0	1.2	76.6	37.5
19 カレンダー	128	86.7	12.5	0.8	75.0	19.5
20 絵日記	125	31.2	20.8	48.0	28.8	56.8
21 新聞	127	87.4	9.4	3.1	85.0	28.3
22 広告、チラシ、ポスター	125	76.8	14.4	8.8	60	30.4
23 雑誌	124	49.2	32.3	18.5	50.8	35.5
24 音素材用PCソフト、CD	123	69.9	10.6	19.5	30.9	56.9
25 耳の構造図	127	92.1	2.4	5.5	63.8	26.0
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	128	88.3	8.6	2.3	70.3	23.4
27 補聴器点検用具	125	96.8	3.2	0	78.4	18.4
28 発音・発語指導用具	125	84.8	5.6	9.6	47.2	42.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	123	87.0	0	13.0	30.1	56.1
30 DVD（テレビ番組、解説等）	127	76.4	16.5	7.1	56.7	35.4
31 手話・字幕付きDVD	127	80.3	11.8	7.9	56.7	29.9
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	128	89.1	0	0	85.9	16.4
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	127	92.1	0	0	74.0	21.3
34 インターネットのWeb情報	127	84.3	0	0	84.4	12.5

表 4-8-3 授業で活用する機器（中学部）

（%）

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	130	98.5	0.8	0.8	86.9	3.1
2 発表板	129	62.0	17.1	20.9	55.8	7.8
3 漢字表	125	58.4	11.2	30.4	27.2	62.4
4 指文字表	128	81.3	7.8	10.9	28.9	2.3
5 手話表	123	50.4	15.4	34.1	26.0	7.3
6 電子黒板	127	58.3	0.8	40.9	18.9	0.8
7 OHP	127	77.2	0	22.8	11.8	0.8
8 パソコン・プロジェクター	128	10.0	0	0	88.3	11.7
9 地上デジタル対応テレビ	127	92.9	0	7.1	5.5	2.4
10 DVDプレイヤー	128	98.4	0	1.6	7.8	2.3
11 CDプレイヤー等 オーディオ機器	128	95.3	0	4.7	10.9	0.8
12 実物投影機	123	84.6	0	15.4	11.4	1.6
13 デジタルカメラ	130	96.2	3.1	0.8	8.5	5.4
14 デジタルビデオカメラ	129	97.7	1.6	0.8	7.8	3.1
15 集団補聴器	127	91.3	1.6	7.1	4.7	0.8
16 放送機器	126	93.7	0	6.3	3.2	2.4
17 個人用FM等システム	123	49.6	13.8	36.6	1.6	0.8
18 ひらがなカード	125	68.8	13.6	17.6	1.6	0.8
19 音声記号図	122	86.1	1.6	12.3	3.3	4.1
20 母音図	126	84.9	2.4	12.7	4.0	0.8
21 キューサイン表	122	47.5	4.9	47.5	0.8	0.8
22 カードリーダー	119	53.8	7.6	38.7	3.4	1.7

表 4-9-1 教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）

（%）

	N	学校	個人	ない	よく使 う+時々	加工 and 自作
1 聖学校用教科書	92	65.2	4.3	30.4	9.8	<u>72.8</u>
2 文部科学省著作	87	59.8	2.3	37.9	12.6	<u>74.7</u>
3 附則の9条本	89	56.2	7.9	36.0	12.4	<u>71.9</u>
4 日本語指導用教材	94	68.1	7.4	24.5	33.0	55.3
5 市販のワークブック、問題集	10	59.0	28.0	13.0	61.0	30
6 国語辞典	104	95.2	3.8	1.0	67.3	25.0
7 漢和辞典	104	91.3	5.8	2.9	48.1	38.5
8 電子辞書	99	13.1	51.5	35.4	43.4	39.4
9 手話辞典	103	94.2	4.9	1.0	<u>75.7</u>	18.4
10 ことわざ辞典	97	88.7	8.2	3.1	44.3	45.4
11 ことば絵じてん	98	85.7	9.2	5.1	36.7	55.1
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	10	97.0	1.0	2.0	44.0	47.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	99	97.0	1.0	2.0	33.3	53.5
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	97	82.5	1.0	16.5	14.4	<u>69.1</u>
15 なぞなぞ	97	85.6	8.2	6.2	26.8	55.7
16 カルタ、百人一首	99	80.8	7.1	12.1	29.3	54.5
17 絵カード	97	80.4	11.3	8.2	36.1	56.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	97	66.0	21.6	12.4	68.0	40.2
19 カレンダー	102	91.2	6.9	2.0	58.8	34.3
20 絵日記	92	43.2	22.8	33.7	21.7	68.5
21 新聞	10	90	60	40	<u>82.0</u>	13.0
22 広告、チラシ、ポスター	99	89.9	6.1	4.0	60.6	33.3
23 雑誌	98	58.2	18.4	23.5	50	39.8
24 音素材用PCソフト、CD	90	67.8	6.7	25.6	36.7	55.6
25 耳の構造図	10	91.0	30	60	56.0	34.0
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	10	92.0	50	30	68.0	25.0
27 補聴器点検用具	10	96.0	40	0	59.0	34.0
28 発音・発語指導用具	97	82.5	5.2	12.4	28.9	59.8
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	95	90.5	1.1	8.4	17.9	<u>68.4</u>
30 DVD（テレビ番組、解説等）	10	87.0	10	3.	67.0	29.0
31 手話・字幕付きDVD	98	89.8	7.1	3.1	<u>71.4</u>	24.5
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	99	98.0	0	0	<u>81.8</u>	20.2
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	99	97.0	0	0	<u>70.7</u>	31.3
34 インターネットのWeb情報	96	97.9	0	0	<u>89.6</u>	12.0

表 4-9-3 授業で活用する機器（高等部）

（%）

	N	学校	個人	ない	よく使う +時々	加工 +自作
1 黒板	101	97.0	1.0	2.3	86.1	1.0
2 発表板	101	61.4	12.9	25.7	58.4	5.9
3 漢字表	99	55.6	8.1	35.6	40.4	3.0
4 指文字表	10	77.0	4.0	19.0	22.0	5.0
5 手話表	99	51.5	10.1	38.4	17.2	5.1
6 電子黒板	99	59.6	1.0	39.4	21.2	4.0
7 OHP	10	81.0	0	19.0	19.0	3.0
8 パソコン・プロジェクター	103	98.1	0	1.9	93.2	<u>11.7</u>
9 地上デジタル対応テレビ	99	94.9	0	5.1	56.6	3.0
10 DVDプレイヤー	102	99.0	0	1.0	75.5	2.0
11 CDプレイヤー等オーディオ機器	101	96.0	1.0	3.0	45.5	2.0
12 実物投影機	96	92.7		7.3	55.2	3.1
13 デジタルカメラ	101	98.0	2.0	0	82.2	9.9
14 デジタルビデオカメラ	102	98.0	1.0	1.0	64.7	5.9
15 集団補聴器	102	96.1	1.0	2.9	40.2	0
16 放送機器	103	92.2	0	7.8	26.2	0
17 個人用FM等システム	94	50	7.4	42.6	17.0	0
18 ひらがなカード	93	6.8	8.6	22.6	18.3	3.2
19 音声記号図	96	80.2	2.1	17.7	17.7	3.1
20 母音図	99	75.8	4.0	20.2	17.2	2.0
21 キューサイン表	90	53.3	2.2	44.4	5.6	2.2
22 カードリーダー	89	57.3	2.2	40.4	16.9	0

電子黒板

表 5・5・1 国語科担当者が電子黒板を活用したことがある教科

小学部 N=133、中学部 N=95、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	14	17	10
社 会	9	4	5
公 民	—	—	4
算数・数学	10	1	5
理 科	5	1	7
音 楽	4	1	0
生活科	5	—	—
外國語	6	2	6
図工・美術	3	0	5
保健体育	0	0	4
技術・家庭科	2	1	4
道 德	6	6	—
特別活動	5	7	0
情 報	—	—	10
総合的な学習の時間	7	15	13
学校行事	10	11	11
その他	4	0	8

表 5・5・2 算数・数学担当者が電子黒板を活用したことがある教科

小学部 N=131、中学部 N=101、高等部 N=83（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	12	0	6
社 会	10	2	0
公 民	1	—	0
算数・数学	11	16	4
理 科	6	2	2
音 楽	3	0	0
生活科	1	—	—
外國語	3	0	0
図工美術	1	1	0
保健体育	2	0	0
家庭科	0	1	0
道 德	6	3	0
特別活動	7	8	0
情 報	—	—	6
総合的な学習の時間	7	11	5
学校行事	10	4	3
その他	13	11	7

表 5-5-3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用したことがある教科
小学部 N=99、中学部 N=89、高等部 N=66（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
國 語	10	2	5
社 会	10	3	2
公 民	—	—	1
算数・数学	11	1	0
理 科	6	3	1
音 楽	3	1	0
生活科	2	—	—
外国語活動・英語	10	17	11
図工美術	2	1	0
保健体育	3	0	1
家庭科	4	2	0
道 德	5	4	—
特別活動	6	8	0
情 報	—	—	2
総合的な学習の時間	11	14	11
学校行事	8	6	7
その他	3	3	9

表 5-6 学部別 電子黒板を活用することが望ましいと思われる教科等
小学部 N=482、中学部 N=381、高等部 N=305（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
國 語	120	70	50
社 会	137	80	55
公 民	—	—	36
算数・数学	126	75	43
理 科	139	86	59
音 楽	24	28	2
生活科	51	—	—
外国語活動・英語	65	58	35
図工美術	28	38	35
保健体育	29	28	28
家庭科	36	48	33
道 德	33	42	—
特別活動	43	66	0
情 報	—	—	61
総合的な学習の時間	86	10	69
学校行事	70	69	61
その他	11	21	22

※ その他…自立活動、LHR や HR、職業科、生徒対象の講話や研修会、教科等を合わせた指導

表 5・7・1 国語科担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科

小学部 N=133、中学部 N=95、高等部 N=83(複数回答 数値は回答数)

	小学部	中学部	高等部
国 語	32	20	20
社 会	38	20	22
公 民	—	—	15
算数・数学	38	17	14
理 科	37	19	18
音 楽	5	8	0
生活科	16	—	—
外国語活動・英語	14	11	16
図工美術	4	9	16
保健体育	7	9	14
家庭科	8	11	15
道 德	6	10	—
特別活動	11	16	0
情 報	—	—	20
総合的な学習の時間	15	24	26
学校行事	18	21	24
その他	2	0	2

表 5・7・2 算数・数学担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う教科

小学部 N=139、中学部 N=101、高等部 N=83(複数回答 数値は回答数)

	小学部	中学部	高等部
国 語	34	15	12
社 会	42	16	6
公 民	—	—	4
算数・数学	36	27	10
理 科	42	24	10
音 楽	6	6	0
生活科	13	—	—
外国語活動・英語	14	10	1
図工美術	5	7	3
保健体育	7	5	3
家庭科	8	12	4
道 德	10	6	—
特別活動	13	13	0
情 報	—	—	15
総合的な学習の時間	30	24	9
学校行事	23	15	6
その他	2	8	5

表 5-7-3 外国語活動・英語担当者が電子黒板を活用することが望ましいと思う
教科 小学部 N=99、中学部 N=89、高等部 N=66（複数回答 数値は回答数）

	小学部	中学部	高等部
国 語	22	14	9
社 会	25	19	12
公 民	—	—	7
算数・数学	19	15	8
理 科	27	18	14
音 楽	8	6	0
生活科	9	—	—
外国語活動・英語	19	20	12
図工美術	7	7	11
保健体育	8	4	7
家庭科	12	11	10
道徳	9	13	—
特別活動	10	18	0
情 報	—	—	14
総合的な学習の時間	22	25	19
学校行事	15	17	19
その他	4	7	7

資料2：特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーションと
言語に関する実態調査（調査2）

資料2

第3章 特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査（調査2）

表 3-3-3 コミュニケーションの評価の必要性

実態	<ul style="list-style-type: none">・客観的な評価と行動観察、保護者からの聞き取りや医療（療育）情報を合わせ総合的、多面的な実態把握をする必要がある。
把握	<ul style="list-style-type: none">・幼児の実態把握の際、基本となる聴力（補聴器装用時を含む）を各担任が読み取ることができること。
握	<ul style="list-style-type: none">・幼児の実態把握とともに指導者の指導方法や内容の反省や改善につながる。・生徒の状況を定期的に把握することは必要。・実態把握には必要な評価であり、また、児童の変化を確認する意味でも必要。・児童の実態把握や指導方法の工夫の為に必要。・実態把握のために必須。・生徒の指導のために実態を把握するため。・生徒一人一人の発音やコミュニケーションの実態を明らかにして個々の実態に応じた教科指導に活かすために評価が必要。・本校では部内で統一した評価を行っていないが個別指導等で実態を把握し、指導している。・実態を把握し、個の聴力やコミュニケーション能力に応じた指導を行うためには大変重要。・子どもの実態から市販の検査等は難しいので要求、意思表示に関するチェック表を作成し活用している。コミュニケーションの評価は実態を把握し学部の教師全体で指導に当たる必要があるので何らかの形の評価は必要。・学部での共通したものはなく学級担任が生徒の実態を見て実施しているが全員を対象とした実施も望まれている。・客観的なコミュニケーションの実態や課題を知る方法の一つとして、検査は必要だと思う。・個別の教育支援計画の中にコミュニケーションの欄を設け項目ごとに現在の状況と課題等を記入して評価に当てている。・幼児の場合、集中力や興味によって課題（検査）に応じられない子もいる中でペーパーや生活に関係ないコミュニケーションの検査は厳しいと思う。生活の中で話す内容、やりとりなどをチェックしていくスケールがあるとよいと思う。・主に就学前（5才児）に担任が必要性を感じた場合 WISC-III、ノンバーバルなどを行っている WISC-IIIを実施した場合には言語性検査によりある程度のコミュニケーション、日本語、手話（手話で実施した場合）の評価が得られると考えている。・一人一人の幼児の実態を正しく評価することによって課題や手立てをより適確に設定し指導を勧めができるようになると思われる所以、よりよい評価となるようにしていきたい。・客観テストを使用することで、子どもの課題が明確になる。学部内で子どもの実態を共通理解できる。・個々の実態を客観的に把握し適切な課題を設定するため。・結果は担任や ST とも共通理解できる客観的評価で自立活動等の指導につながる。読字力テストは臆

- 自立活動**
- ・覚活用が比較的できている生徒でも、曖昧な聞こえで間違えた読みをしていることがわかる。
 - ・社会に出たときに、どれだけ通用するかが大切で就業体験や現場実習などはそのよい機会と考える。
 - ・コミュニケーションの評価は自立活動の中で数値化していく方法も考えられる。
 - ・コミュニケーションの評価については、自立活動の時間における指導で担当者の判断で行っている程度で日常の観察が主な評価となっている。定期的にどんな評価を行っていけばよいかの検討が必要である。
 - ・個別の教育支援計画や自立活動の目標設定等を作成していくための評価として必要である。将来に向けての必要な力をつけていくため。
 - ・日常生活（教科学習）の時の指導や自立活動の時の指導に活用するため必要である。
 - ・自分の発話がどの程度どのように他者に聞こえているのかについて生徒自身にフィードバックして意識させたり、検査の結果をうけて日ごろの指導の中でも意図的に取り上げたりすることは必要。
 - ・もともと聴覚を活用している生徒が多い。最近は人工内耳の生徒も増えている。聴力の状況の把握は必要である。また、進学就職にあたって自身の発音を気にする生徒も出てくる。高等部では3年次のみ自立活動の時間を使い発音指導を行っているが、とても大切な活動だと考えている。
 - ・生徒の日本語力の評価は自立活動や教科学習のグループ編成に役立つ 実態の把握は指導内容の（日本語指導・発音指導）の精選化に役立つ。
 - ・将来の社会自立を見据え自立活動における発音指導のニーズが高まってきている。幼稚部から高等部までの継続的、段階的な指導が必要と思われる。
-
- コミュニケーション**
- ・部内や家族など限られた人とのコミュニケーションはある程度できている。ただしいずれも大人を介する場合が多く、子ども同士の話し合いが十分できていないことや環境も含め模索しているところである。
 - ・読話テストがそのやる目的が、現在のろう学校の現状に合っているのかという疑問の声が教員から上がっている。
 - ・コミュニケーションの評価自体むずかしい。あれば授業の中でも使える。現在子どもの姿をもとに評価を検討している。
 - ・本人が場に応じたコミュニケーション手段を使い自身が知識はもちろん自己を確立していく過程で自分のコミュニケーション力を知ることは必要である。また、本人が社会に出たときにすべてを手がかりとして活用できるよう、自分のきこえの状態を知りどうすればよいかを考える手立ての一つになると考えている。
 - ・コミュニケーション自体を検査することはしていない。日常生活や授業の中で生徒のコミュニケーションの状況をとらえ、指導している。
 - ・アンケートの実施は生徒のコミュニケーション状態や必要性を把握する上で有用。
 - ・コミュニケーション手段を手話としているためコミュニケーション力と手話力は密接に関わっていると思い手話力の評価を行いたい。そのための指標がなく困っている。幼児から教員まで評価できるものがあると良い。
 - ・検査をするまでもなく、非常に評価が低い生徒もいる。聞こえや発音を成人に近い高等部でどう評価し、とらえていけばよいのか？
 - ・音韻や音声言語の受信や発信の状態を知ることは、日本語の習得について個々に合わせた指導をし

たりコミュニケーションをしたりするときに欠かせない情報だと思う。

- ・小学生は分かりたい・伝えたいという思いが強いので特にそういう意欲を持っている。小学部の時期であるからこそコミュニケーションの力がどれくらいあるのかコミュニケーションとして欠けている力を補うためにも必要であると思います。
 - ・コミュニケーションスキルに関する評価は、客観的に評価できていないのが現状である。チェックリスト等作って評価する必要性を感じている。
 - ・児童のコミュニケーションの状況や興味・関心の有様についての詳細なアセスメントが必要であるとともに言葉の質的な側面である「生活」の中で言葉が果たす役割について教師一人一人が共通認識を有することが肝要である。
 - ・コミュニケーションは様々な方法を用いて伝え合うことだと考えている。そのため筆談や身ぶり表情、絵なども含めた力をはかる検査が必要と考える。
 - ・児童の実態が具体的に（どの発音ができていないか、どの音がききとれていないがなど）分かることで次の指導内容を見直したり、普段の生活の中でもその部分に気をつけることができる。また、児童本人の気付きにもつながり自分のコミュニケーションを意識することができる。
 - ・まずは親子で通じる、担任と通じる→他の人にも通じる→みんなに通じることを基本にしている。数値化はしていない。
 - ・子どもと教師また、子ども同士のやりとりの様子から 5W1H を含めたことばの理解、表出について日々観察を行っている。
 - ・生徒の傾向や特徴を知ることは大切。
 - ・本人の障害認識を含めた指導に活かすこと。
 - ・やりとりの中で質問されたことに適確に答えられず一部のことばだけをとって自分の言いたいことばかりしゃべる子どもがいる。質問されたことをどの程度理解できるか、分からるのはどうして分からないか（手話が必要…ことばを知らない）を把握できる。
 - ・教員が生徒の発した言葉を理解するためには、生徒一人一人のコミュニケーションを評価することは大切であると思う。
 - ・いわゆる言葉のセンスやターンの良さ、要領を得た応答の仕方などについて評価できる検査がなく、類種の検査と日常的な観察を組み合わせて評価するようにしている。
 - ・スマートフォンのソフトで自分の声を文字化するものを使った時、本人は言っているつもりでも、そのような文字、文章に変換しなかった。本人はショックを受けていた。自分の発音の明瞭度を知るよい機会となったと思う。
 - ・明瞭度検査は毎年やっているので指導の成果が明らかになり、また、課題も把握できるので日常の指導に役立つ。その他コミュニケーション態度（最後までしっかり聞く、わからうとするわかりやすく伝えようとするなど）や伝ええる話の内容のレベル（どの程度の話題ならスムーズに伝ええるのか）などに关心をはらい評価していくことが必要であると思う。
 - ・評価をする事によって意欲が高まるし課題も見えてくると思います。評価がなかなか良くならない時にはげまし方が大切になると思います。
-
- 聴覚
- ・聴覚活用の実態、発音明瞭度の実態を把握し、①日々の指導に生かし②聴覚管理や③保護者支援につなげていくために評価が必要。

- ・聴力検査の結果と併用し個々の実態により具体的につなげられる。
 - ・検査を通して聞き取りにくい語、聞き取りやすい語の実態を把握すると共に補聴器装用の効果についても確認することができる。
 - ・聞き分ける力、発音の明瞭度の向上のため評価を基に自立の指導計画を作成するので何らかの評価は必要。
 - ・聞こえやすい音、単語など個々の聞き取りの状況を把握し、生徒が自己理解を深められるようにしている。
 - ・聴覚活用と音声コミュニケーションの成立のためには聴力の状況とその活用状況を常に把握しておかないといけない。子どもに負担をかけすぎたり逆に能力を伸ばせなかったりする。
 - ・閾値検査（純音聴力検査）は定期的な検査に加え変動が疑われるときは随時実施する必要がある。
 - ・聴覚活用、手話、読話、発音、発語、文字等のコミュニケーション手段を活用することによって意思の相互伝達が客観的にどの程度まで可能となっているか把握する必要がある。
 - ・職場実習やインターンシップの際、聴力測定の結果だけでは先方に生徒のコミュニケーションの状況を客観的に伝えることが難しい。「聴覚活用ができているので正面から話しかけてほしい」というような説明だけでは誤解を生じる。教員が生徒の聞こえの状態や聴覚活用の有無、主たるコミュニケーションモード（発信、受信）等より細かに把握する必要がある。
 - ・聴覚を最大限に活用するために聞こえの状態を把握する。FM補聴システム活用のための工夫（音環境の整備、補聴器、人工内耳のSN比など）
 - ・聴力と聴覚活用の程度、バランスを評価し指導に活かすため、現在聴能に関する指導が不十分でない面あるため他学部の聴能担当とも連携をとりながら指導の充実を図りたい。
 - ・語音聴力検査で今までわからないという答えがあつたため聞こえの状態の把握が不十分な場合があり、意味のある言葉でなくとも聞こえたように言ってもらうように統一しようと考えている。
 - ・人工内耳のマッピングや補聴器のフィッティングの参考にするため。
 - ・市販の検査ができるにくい子の客観的評価をどうするか。
 - ・評価の効果的な活用について聞き取り発音の状況を知り指導に活かす
 - ・きこえ、発音の実態をつかみ語音聴力検査より補助手段の効果的な使い方、話しかけの声の大きさをコミュニケーションに活かしたり、より課題となる音、音声の順序等参考にしている。
-
- | | |
|-----------------------|---|
| 発
音 | <ul style="list-style-type: none"> ・発音の明瞭度がその生徒なりに保たれ、向上しているか評価したり、コミュニケーション手段に関する実態を調べるために必要。 ・子どもの実態を把握し指導に活かすことができるので必要。 ・発音の実態をとり発音指導の手立てと考えるために活用。語音聴力検査は聞こえの状態を知り指導に活かすために実施している。 |
| 職
員
間
理
解 | <ul style="list-style-type: none"> ・職員の共通理解が図れる ・コミュニケーションの実態を全職員に正しく理解してもらい指導に役立てるには評価は必要。 ・指導の方向性を出すために客観的かつ具体的なコミュニケーションの評価=実態把握は不可欠だと思います。課題はその評価を担任以外の全職員が共通理解すること。 ・生徒数が少ないため同じコミュニケーションモードを使用する集団を形成してのコミュニケーション |

ン活動を深める場が乏しい現状です。コミュニケーションの評価の観点一覧表を基に職員が同じ観点で生徒の実態を評価していきたい。

- ・このプログラムは作られる以前は担任の経験から主観的な評価しかできておらず見通しをもった指導につながりにくいという反省がありました。経験の浅い先生にも専門性が同じように求められ3年間を通して育てたい力を問われた際にも活用できると思い作成したものです。
 - ・評価を行うことで日常的な印象ではなく客観的な指標として保護者やクラス担任に説明できる点では有効であると思う。
-

表 3-3-4 コミュニケーションの評価の課題

実態把握	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態把握はできたが、分析等細かな話し合いができるていない。 ・発音指導・きこえの実態については担任に任せられており客観的な実態把握ができるない。計画的な発音指導をしていくための実態把握は部内で検討していきたい。 ・実態を適確に把握するために検査等を用いた評価は有効である。しかし、そこから一人一人にあった適確な課題や指導方法につなげるところに課題がある。 ・幼児の実態に即した指導ややりとり、日常の配慮をするために評価が必要である。また、就学やインテグレーションにあたっては幼児の実態からそれが妥当であるかどうかを検討するために評価が必要である。発音の評価については指導に活かすという本来の目的が十分生かされていないのが現状。 ・生徒の実態把握をするうえで必要な評価であると考えているが教員の移動や専門性ともかかわって、指導にいかしきれていないのが現状であり課題である。 ・実態把握を研修会等をもって共通認識をもつようになっているが、実態は曖昧と感じている。客観的な評価を加えた共通認識をもてるようにしたい。 ・コミュニケーション力を基盤とした言語活動の充実を図るため、幼児の実態把握として客観的な評価は必要であると考える。その結果を分析し効果的な指導につなげていくことが課題である。 ・個人のコミュニケーション力の発達の様子や実態を把握し、より個に応じた細やかな指導を行うため必要と思われるが、学部内で明確な位置づけや実施計画がなく担任まかせになっている点が課題。 ・入学してくる生徒の実態が毎年あまりにもちがいすぎて評価の必要性など考察する余裕がない。 ・個々の生徒のコミュニケーション状況のアセスメントに関する全校的な研修が急がれる。 ・コミュニケーション力は語彙量だけではないので客観的に評価することが難しい。 ・幼児にとってコミュニケーションの評価ができる検査があるのかよくわからない。コミュニケーション発達段階表を作成中である。 ・コミュニケーションの力は聴力等聴こえだけで評価できず様々な要因が関係しているので、それらをどのように考慮していくのかが課題である。 ・コミュニケーションの構成要因は何かあるか、これを測定できるものさしと、その結果の解釈、そして今後の指導に活かす対応が一貫されており、かつ信頼性が高く評価できる検査があれば紹介していただきたい。 ・コミュニケーションの評価について必要性は感じるが特に統一した評価を行っていない。 ・コミュニケーションという言葉には様々な要素が含まれているので聴覚障害のある生徒の特徴として「言葉の裏を読む」ということが苦手であり、その事に起因するコミュニケーション上の課題が多い。 ・検査結果の共有は図られているが実際の指導の中で十分に生かし、本人のコミュニケーションスキルを高めるところまで活用しきれていないことが多いのが課題と言える。
重複障害	<ul style="list-style-type: none"> ・重複の子どもの評価が難しい。 ・重複児の割合が高く、発達全般の評価に偏りがちになる。
重複障害	<ul style="list-style-type: none"> ・重複障害のある児童の割合が増え検査ができる子が減っている。職員の入れ替わりが多く発音指導や検査の方法などについて引き継がれていかない。

-
- 手話**
- ・コミュニケーションのつまずきや実態を把握し指導に生かし一次言語をしっかり身に付けさせる必要がある。
 - ・コミュニケーションの状況と言語力は大きく関係しておりコミュニケーションの評価、日本語、手話の言語力の評価は分けて評価することはできない。
 - ・教師の手話力の問題もあるので、生徒がどれだけ手話を理解し行動できているのか、日本語に置き換えることができているのか、評価する点で困難を感じる。
 - ・LCスケールを主たるコミュニケーション手段が手話に適用しにくい面がある。
 - ・例えば80%検査でききとれたからといって実際のコミュニケーションで8割分かるわけではない。逆にどれだけきこえづらいかを教師や親が考えて代替手段（手話、指文字等）をきちんと使用する等、コミュニケーションの障壁をとりのぞく努力につなげていくことが課題ではないかと思います。また、小学校部以降は情報保障という視点も課題になると思います。
-
- 検査**
- ・談話や語用能力、会話能力を評価するツールがない。
 - ・実施した検査の結果はある程度評価されるが、その評価を指導に活かすための手立てが個々の指導計画に十分に反映されていないことが課題としてあげられる。
 - ・客観的にコミュニケーション力を評価できる検査方法、特に年少のまだ文字が読めない幼児を対象に実施できる検査方法があれば、それについても研修していく必要がある。
 - ・日常観察で記録に残し次の指導に活かすようにしているが客観的な評価が継続的にできる検査については研修不足もあり実施には至っていない。
 - ・何をどう評価するのか 本当に現行の読音聴力検査やで正しい評価ができるのか。口話の有用性を否定する人もいる。
 - ・評価は必要だと思うが、実際場面に生かせるような検査法と評価があればよい。
 - ・検査結果を実際の指導にもっと生かしていくよう活用の仕方を改善していくことや他にもっとよい（指導に活用しやすい）検査方法を探していくことが課題。
 - ・言語聴力検査を正しく実施できる教員がない。聴力測定が学級担任が実施することになるので正しく実施できているか心配。認定補聴器技能者の資格をとるよう呼びかけている。
 - ・検査をすること結果をその後の指導に生かしていくこと等のスキルを全職員が向上させることが課題。
 - ・アセスメントの課題をどう指導につなげるか。
 - ・測定の結果を日ごろの指導に活かすこと。
 - ・コミュニケーション能力の要素として視線、表情、人と関わる意欲など客観的に測ることができない面が多く含まれることや、客観的に得られた検査結果が必ずしも実生活でのコミュニケーション力として反映させられない場合もあることなどからコミュニケーションの評価の難しさを感じる。
-
- 将来**
- ・個に応じたコミュニケーション手段はどのようなものかを探ったり自己の発音状況を把握することは、社会自立をするために必要な自己理解であると思う。人事異動により発音指導が可能な教職員が少なくなっていること等が課題となっている。
 - ・社会に参加し自立していくためのコミュニケーションのあり方を指導するために評価は必要である。日常生活の中で授業での様子、交流活動における聴者とのやりとりの様子などを観察して評価している。場や相手に応じて適切にコミュニケーション手段を使いわける指導も必要である。
-

- ・人の声がどの程度聽こえているのか、それが社会で役に立つものなのか客観的に判断したい。職場で困らないように曖昧なコミュニケーションを減らしたい。
- ・学校を卒業し就職した時、コミュニケーションの能力はとても大切になる。そのコミュニケーション能力をどの程度身についているか確認するための評価は必要である。言葉の語彙数や文章能力、声の発音や語音聴力の個人差を埋めていくかが課題である。
- ・コミュニティーの中で生活していくには必須の内容であり本人が少しでも豊かな生活を送れるための力をつけてやる必要がある。そのために正確に客観的評価を行い職員が共通の評価基準に基づいて指導を展開していくために評価は必要。課題はその評価をどう指導に活かしていくかという点で個々の教師の技量にかかる点が大きいなど評価の必要性ややり方など知らない人が増えているので研修で扱ってはいるが実際に行うまでには至っていないのが現状である。
- ・卒業後の進路先において音声を使ったコミュニケーションは重要な部分を占めることになる。そのため、コミュニケーション評価の必要性は大きい。しかし、本校高等部ではこの評価を受けての指導体制が十分とは言いがたい。今後の課題である。

聴覚

- ・67Sは検査材料が10例あるのだが67Aに関しては2例しかないので、もう少し検査材料がほしい。
- ・いわゆる聴覚管理<能力の育成>は聴覚口話法による言語コミュニケーション能力の育成にとって重要であり、その能力育成が同時に重要な（指導上の）課題です。
- ・特に聴力の重い生徒について補助手段の理解度を把握した上で授業等での活用に配慮が必要。
- ・デジタル補聴器、人工内耳の進歩によりキューサインが曖昧になっている児童が増えている。聴覚口話、キューサインを原則としているので学部内での手段のばらつきはないが、人工内耳装用児に対する指導もきちんと考え方なければならないと思っている。
- ・聴力等に関しての教員の知識不足。
- ・子ども達がどれくらいの音を聞いているのかを把握することで音声でのやりとりがどこまで理解できそうなのかを知る手がかりになる（自声フィードバックが装用児にはできるのかどうか。聴覚学習の指導段階はどのあたりか・・・など）。
- ・担任が定期的に聴力測定をすることで子どもの聞こえに合わせた声掛けやコミュニケーション手段の選択ができる。また、聴力低下等の急変にもすばやく対応できる。

発音

- ・コミュニケーション能力は聴能面、発音面からだけではとらえきれないと考える。
- ・聞こえの良し悪し=発音が明瞭というわけではないのに発音が明瞭だと聞こえがよいと思いこんでしまう。そのため配慮しなければならない点が曖昧になる。

指導力

- ・教員の指導力に格差がある（コミュニケーション技能）
- ・評価者と指導者との連携が困難。客観性をもたらす評価から同僚教員に率直な授業改善の提言がしにくい一面がある。外部の評価を導入したり、様々な工夫が必要となる。どうしても相互の評価がしにくい教育現場、特に専門性を自負するベテランの多い環境では課題となる。
- ・現在在籍している高等部生徒については実施していない。必要に応じて自立活動等で積極的に行っていく必要がある。
- ・指導計画の作成、見直し等行っているが、具体的な授業の場面になかなかつながっていない。
- ・聴能室をよく使っているが、使いたい時になかなか使えない。行事と重なって学部使用可の時に使えない

いこともある。聴力測定ができる職員を増やす研修、新しい先生が使えるまでの機会が少ない。

- ・職員全員が生徒一人一人のコミュニケーション力向上のための課題を共通理解し日々の生活の中で徹底した指導を行えるようにすることが課題である。
- ・正確な数値を計測するために複数の担当者が必要であるが、実際は1名で対応している。
- ・課題として語彙の獲得が少ない場面や聞いた音を再現（音声、指文字、文字）できない幼児の場合は評価がしづらい。また、教師の力量不足で指導に生かしきれない、活動の中でのちょい指導につなげられない等、評価だけで終わってしまうことがある。
- ・自立（聴能）担当に任せることが多く普段の指導に生かせていない。
- ・検査をした後、その結果を正しく理解しコミュニケーション方法の選択や言語指導に活かす方法が十分に行われていない。
- ・意思を伝え合うために個々のコミュニケーション手段をどこまで使いこなしているかという評価は必要。筆談でコミュニケーションを行うための文章表現等が課題である。
- ・生徒がどれくらいの音なら聞こえるのかを把握することで音声でのやりとりをどこまで理解できるのかを知る手掛かりになる。高校生になると進路を見据えて補聴や発音への意識が高まる子らと逆に全くあきらめてしまう子どもが出てきて、その差が大きくなるために指導の進め方も難しい面がある（よい面もあるが）。

保護者	<ul style="list-style-type: none">・保護者の願いや医療機関からのアプローチとの調整も課題の1つ。
教員	<ul style="list-style-type: none">・個々のコミュニケーションの力に合わせたやりとりができているかを観点にして日常生活の中で児童のコミュニケーションの力を引き出すことを目標にしている。子ども同士、子どもと教員の両方が大事。児童同士の話し合い活動を積極的に取り入れていくことで、児童と教員ではまだ伝わり合うことが難しい部分もあることが課題。
間連携	<ul style="list-style-type: none">・担任や関係研修連携を取る場合には検査結果を資料として共有するだけでは不十分であり、分析を行った上でこの検査を今後どのように指導していくかという点での共通理解が必要であるが、その辺りで課題が残るよう思う。・生徒のコミュニケーションの実態から次のステップや進路指導のポイント等を考えていく必要があると思うが学部間での共通理解を図ることが難しい。
時間	<ul style="list-style-type: none">・教科指導に追われてなかなか検査結果を指導に活かすことができない。・ろう教育の専門性の継承において非常に大切だと思います。実際には授業中にかなり経験的に言語指導をすることが多く、実践を整理して伝えられないのが課題です。・児童数が多く検査に時間がかかる。また、検査結果もなかなか十分に分析できない。検査者（自立活動担当）と担任がもっと連携しなくてはいけない。・職員の測定技術の向上、聴能に関するノウハウの伝授、これらが必要であるがその時間的余裕がないというのが現状。・自分の聴こえの状態や発音の状況を知ることは自分できること周間に支援を求める等を理解させるために必要である。このことは自立に向けて重要なことと位置付けている。生徒自身に上記必要性をいかに自覚させるか、また、その積み上げに要する時間の確保が課題である。・教科指導や日ごろの学部・学級運営で手がいっぱい。評価の時間や話し合いの時間がない。（例：医的ケアの児童が入学し、新しく体制を整えるのにかなりの労力をさいている。系統立てた指導計画・評価の計

画がない。担任の意識や経験の差などにより指導内容にも温度差がある。

- ・発音の実態をとり発音指導の手立てと考えるために活用。語音聴力検査は聞こえの状態を知り指導に活かすために実施している。語音聴力検査は保護者と子どもについて話し合う時には必要だが、評価方法を学習したり評価する時間を確保したりするのが厳しい。
 - ・語音聴取検査等は補聴器調整など聴覚管理上、必要であり数多くの検査法が市販されているので客観性がある。また、語音聴取検査や本人の障害認識を深める意味でも必要である。ただ中学部では発音指導の時間が十分にとれていない。
 - ・コミュニケーションのもととなる「聞こえ」について正しい評価をし、フィッティングすることが聞き取りやすさにつながるので聞こえの状況の把握はまず第1に必要なことだと考える評価をもととした指導方法は教師の経験によりバラつきがでてしまう。教師が研修をする時間の確保が必要。
 - ・明瞭度を確かめ○×をつけることではなく、発音要領を身につけ、やがては日本語の獲得につながっていくものであることから、その評価の必要性を感じている。評価や評価後の指導の時間が足りないのが課題である。
 - ・生徒の実態について教職員がよく知る必要がある（このように通じる、このように通じないという実態）それをもとにコミュニケーション方法等についての研修が行われることが望ましいが、研修の時間がなかなか確保できず課題である。
 - ・実態を知り指導に活かすため必要。しかし、検査実施方法、評価の方法、指導に活かすための職員の研修時間を確保すること、児童をぬきだし検査する時間を確保することが難しい現状がある。他にも職員の研修課題があり職員の専門性を維持していくことが難しい。
 - ・社会に出た時に手話や指文字でのコミュニケーションではなく口話や筆談で伝えることが多くなるので高等部の生徒こそ発音指導も重要だと考えるが現実は時間的に難しいこともあって思うように実施できていない。
-

第5項 日本語の評価の必要性や課題

表 3-3-5 日本語の評価の必要性

実態	<ul style="list-style-type: none">・それぞれの教科指導の中で日本語の評価に近い内容で生徒の実態把握をしながら指導方法の検討をしている状況です。基準となる評価方法で評価することは必要と感じています。
把握	<ul style="list-style-type: none">・学力の基礎となる日本語をどこまで理解できているかを推し量るために必要。・児童の実態把握、読解力や思考力を評価できる。・客観的な評価があることでより確実に実態を把握し学習内容の検討や指導に活かす。・日本語が身についているかということは読書力、学力、ひいては人生観にも影響が及ぶ。教員にとって子どもの実態把握と同様に自分の指導法に関する適切性についてフィードバックを図る必要がある。・本校では帯自立（15分間）の指導として言語指導を習熟度別のグループ編成をして行っており、そのために実態把握と評価は必要です。一定の成果も上がっていると考えています。・手話や身ぶり表現はできるが、なかなか日本語が定着しない児童の把握（実態把握）には日本語力検査は必要。具体的な内容は理解できているが、なかなか抽象思考が難しい児童の実態把握に必要。・生きていくうえで必要な日本語力を把握するのに必要である。・生い立ちや家庭環境も含め総合的にとらえていくこと。・一人一人の実態を把握し指導に役立てることができる。保護者にも客観的資料として結果を知らせ家庭と連携を図る上での1つの材料とすることができる。J.COSS 日本語理解テストも今後実施予定。・本人の得意・不得意分野を把握し、指導に活かすため定期的な評価が必要である。・特に書き言葉や能力をより正確に把握することで学校の全教育活動の手法が決定すると考えている。・日本語の言語力と学力の間に相関があるのかないのかを明らかにする。・どのことばを知っているのか、何がわからないのかを適確に指導者も保護者も分かる。次にどのように支援したらいいか子どもの課題も明確になる。抜けていることば、知らないことばがよく分かる。・「ことばのきろく」の中に含まれる言葉の中に時代遅れのものがあったり、必要なものが入っていないなかつたりするので今年度、改訂版を作成予定。保護者が理解語彙をカウントしていくため評価にややばらつき（厳しい保護者と甘くつける保護者）があるが大体の語彙を把握できるのと何より成長の様子がつかめるので引き続き使用していく。
検査	<ul style="list-style-type: none">・絵画語彙検査やITPAなど担任が個人的に実施する場合もあるが客観的な日本語の評価は学部としては行われていないので何か実施をしてもよいかとも感じる。・評価（検査結果）によって児童の言語力の実態が把握でき、分析により指導の目安が立てやすくなる。・読書力の診断検査を止めてCRT標準学力検査に切り替えて総合的な日本語の力を把握するよう取り組んでいる。生活にも学習にも総合的な日本語の力が必要であると考えている。・日本語の力（ある部分ではあるが）を客観的に見られる。検査の内容と結果を細くみることで指導方法の改善につなげられる。調べたい事柄とうまく合う検査がなかなか見つからない。検査結果だけでは日本語の全体の力を評価することはできない。結果のみがひとり歩きしないように注意を要する。・日本語の言語力は様々で分かっていると思われることばでも分かっていないことがあり、指導に活かすための状況を把握する意味でも必要。・読書力検査の結果の下位項目のプロフィールは過去の状況とあまり変わっておらず読解力を高めるた

めの指導の必要性が高い。

- ・言葉の理解の程度にはかなりの差がある。個に応じて、どの程度の言葉を使用するべきかを判断する上で日本語の評価は大切である。本校では基礎言語力検査を行っているが国語科の指導にとどまらない活用の方法も考えたい。
- ・年に1回の検査により実態把握と言語力の伸びの確認、指導方法の検討を行っている。
- ・日本語の評価をどのような検査バッテリーで行っていくのかという学部内のコンセンサスが必要。
- ・日本語の言語力を把握することは必要だと思います。把握するための手段?検査法を知りたい。
- ・検査だけでは計りきれない言語力の評価。
- ・読書力診断検査を実施し読字力、語彙力、文法力、読解の鑑賞力において実態把握と結果の分析を行いより丁寧な日本語思考力の実態把握に努めている。検査の経過(前回との)比較も行っている。実施方法や結果の分析方法の共通理解を図るため研修を組んでいる。
- ・他の検査等を用いて、より多面的な評価が必要である。
- ・聴力障害のある児童にとって日本語力を育てることは大変重要な側面を持ち、その為にいろいろな観点から検査を行うことはより実態を客観的に把握でき、有効であると思う。
- ・言語力の向上は本校の重点課題の一つである。よりよい指導を目指すためにも生徒の言語力の実態を学部で共有し各教科等で指導方法を探る必要がある。中学部段階で言語力向上をより確かにするとには生徒の実態が必要である。
- ・幼稚段階における「読む」「書く」「聞く」「話す」など日本語習得の評価は必要。小学入学後は教科書やノートを使っての学習ができるように幼稚部で評価できる検査があれば紹介していただきたい。
- ・日本語の評価は主観的になりやすいので市販の検査を使い客観的に評価することは必要である。ただ、それが日本語の力を測るすべてではないので評価結果の扱いについては注意する必要がある。
- ・これまでの幼稚部では手指に重点を置いていたので検査方法も音声提示ではなく聴力差の生じない文字、指文字、手話を用いて問題提示をしていたようです。現在その提示方法について検討しています。
- ・小学部での学習と関連性が見られるものとWPPSIのようにあまり見られないものがあり、目的と検査の特性を踏まえて活用している。
- ・基本は日々児童と接する中で(授業時間だけでなく)言語力、学力をチェックしていくことだと思うが標準化されたテストを年度ごとに行うことで経年的変化や領域別の課題も明らかになる。
- ・指導上必要であると考えている。年齢相応の力はなくともその子なりの向上がみられたりある領域に特に遅れがみられたりなど日常気付きにくい点が把握できるので指導に役立つ。
- ・生徒の発達段階に応じて課題はかわるのだが10代以降の生徒の言語力を測定するスケールとなるテストや観点がなかなかみつからない。

-
- コ　・基礎学習において日本語は欠かせないものであり教科指導を行っていく上でも児童の言語力を知っておく必要がある。教科指導にかかわらずコミュニケーションをとる上でも(手話等を使っても)日本語は重要と考えます。
 - ニ　・豊かなコミュニケーションをするための評価は指導の目標・手立てを考える上で必要である。日常的な言語活動(読解、作文、コミュニケーション、新聞作り、授業内のやりとり等)の中で総合的に判断し指導に役立てていくことが必要である。
 - シ　・生徒同士がコミュニケーションをとる場面や指導をする場面などにおいても、その生徒の日本語の力

- ヨ を理解しておくことは重要である。
- ン
- ・幼稚部での主なコミュニケーション方法は手話付きスピーチである。そこでコミュニケーションに大きな支障がない場合には日本語としての誤り（例：単語の音節を正しく覚えること、助詞を正しく使うこと、語尾の変化など）を見落としがちである。そこで正しい日本語を習得しているかどうかを日常会話の中でも注意深く評価していく必要を感じる。
 - ・生活言語レベルでの音韻意識。
 - ・今後社会に出たとき様々な人間関係を形成していく上で不可欠なものと考える。
-
- ・読書力診断検査終了後、学習指導係が分析し誤りの傾向等について部の教員に報告している。やりっぱなしではなく分析し全員に伝えることは必要だと思う。
- 職員間
- ・日本語の言語力の状況について教員間で共通理解を図ったり、保護者に説明したりするために、ある程度標準化した評価の必要性は感じる。特に5歳児の就学先を検討する際に活用することができる。
 - ・聴覚障害のある生徒の日本語力の把握と教員全体としての課題の共通理解が必要である。
- 理解
- ・学習グループの編成や日本語指導の目標設定に役立つ。生徒の共通課題を抽出することで学校全体としての日本語力の課題を把握できる。
 - ・学部間のわたりを具体化することと課題を全職員が共通理解すること。
 - ・客観テストを使用することで、子どもの課題が明確になる。学部内で子どもの実態を共通理解する。
-
- ・社会生活上では日本語が中心となるため日本語をどのように理解して使っているかを把握し、その後指導に役立たせるためには必要性を感じる。
- 指導
- ・言語の習得具合を確認するのに必要。
 - ・学習活動を進めるまでの生徒個人の実態把握。学習グループ編成の資料として活用。
 - ・「ことばの力」（日本語の力）を育てることをめあてにして教育活動を進めている。客観的な評価は実態の把握のため、また、指導の評価にとっても大事な観点だと思う。
 - ・コミュニティーの中で生活していくには必須の内容であり本人が少しでも豊かな生活を送れるための力をつけてやる必要がある。その為に生活に客観的評価を行い職員が共通の評価基準に基づいて指導を展開していく為に評価は必要。課題はその評価をどう指導に活かしていくかという点で個々の教師の議論にかかる点が大きい。
 - ・日本語の理解の状況の評価をすることで語彙の理解と文の理解の状況（名詞、形容詞、動詞、否定、複文、重文など）を知ることで指導に活用する。
 - ・評価は必要だが、実態に合った、また、指導に活用しやすいものがあればよい。
 - ・正しく使用しているか分かって使用しているか、どこでつまずきがあるか、繰り返しつまずくのはどこか等を把握し指導に活かす。
 - ・生徒の傾向や特徴を把握し苦手なところ弱いところを補ってやるような配慮が必要である。
 - ・言語力を把握し指導方針、指導計画を立てるために評価が必要。
 - ・高等部では生徒自らが言語力を知ることで学習への意欲を高めることができる。
 - ・日々の保育の中で実態に即した概念形成や思考力の育ちの積み重ねができるか課題。子どもの側に立って、共に試行錯誤しつつ考え方の道筋を尊いたり、子どもから表出を導くことより教えることに重きを置きがちなので、定點的に評価することで子どもの言語力の育ちを振り返りたい。

- ・通じるだけでなく理解する、さらに考える学習を行うためには日本語の言語力が必要になる。校内で日本語指導を推進している。共通のテキストも作成した。しかし、中高等部向けの内容となっており、小学部の児童向けに新たに教材化して使用している。
- ・生徒の日本語力を把握し指導に活かすために必要。
- ・適切な課題設定のため、発達の様子を客観的に評価することにより段階を追うことができる。就学先を検討する上での参考となる。就学先への引継ぎ資料として。
- ・児童の言語力の状況を把握し指導目標を具体的に検討、修正するためにも必要不可欠である。
- ・日本語習得の為の方法を考えたり、指導の評価をするために必要だと思います。
- ・日々の指導や観察によって幼児の言語力の実態は把握できるので必要ではないと考える。

教科

- ・今後 ALADJIN の結果がでたので必要なドメインを選択して実施していくことを計画している。学習を進めていく上で基礎となる一次言語をしっかり身につけさせる必要がある。実態をしっかり把握した上で指導を勧め遅れずに教科学習を進めていく力を付けさせる必要がある。
- ・日本語の力が教科指導を行う際に重要になってくる。教科学習の内容を理解するためには児童がどれだけの言語力をもっているかの評価は必要だと思う。
- ・生徒一人一人の日本語の実態を明かにして教科指導に活かすための評価の必要性があると考える。
- ・生徒の日本語力を正しく把握することが各教科、科目、特別活動、自立活動等、学習指導の基盤となる。学習グループ分け等の際の参考にもしている。
- ・教科指導を進めていく上で日本語の言語力を把握しておくことは大切なことである。

読み

- ・本校生徒の日本語活用は高いとは言い難い。理由の 1 つに語彙力不足が考えられる。例えば熟語の意味と読みが一致していない理解をしていることがあり十分使いこなすことができていない。よりきめ細かい指導、教科を越えた全体でかかる指導が必要と考える。
- ・児童段階における言語活動を構成する各活動、例えば「読み」「書き」「聞く」「話す」活動は充実していくなければならないと考える。
- ・子どもの情報のとり方、表出の状態など個々に合わせた指導を行うため評価も必要と思うが難聴児にとっての検査は手話を使うかどうか文字にした場合、読み取りの力が影響するなど一般的の検査では力を把握することに難しさもある。検査時の様子、使ったコミュ手段などを考慮して評価し個々の得意、不得意を考えた指導、課題設定などに活かすようにしている。
- ・漢検などにより漢字の数は増加しても読み取る力、伝える力が弱いという状況があり、そのギャップや課題を客観的に把握するため必要である。
- ・読み取る力を知ることでウィークポイントを補う手立てをうち読み取る力を高めていく必要がある。
- ・読み書きの力を養うために必要な指導方法、内容を考えるために必要である。

語彙

- ・語彙チェックについて使いやすいものを作りたいと考えているが現在は各担任が過去の資料などを使ってチェックをしている。
- ・知的能力と語彙の関係など客観的評価を参考にする事でより具体的となる。
- ・絵画語彙検査を定期的に行うことで、どのような言葉を身につけたらよいかの課題がはつきりする。
- ・行事の言葉など幼稚部の主な活動の語彙表は作成しているところである。幼児の言語力をチェックしおさえる言葉を明確にすることで経験が短い教員の参考となるようにしている。

- ・やりとりが成立するには語彙数がたくさんあることが必要である。たくさんある語彙の中から調査することばを選ぶ手掛かりとしてシソーラスを利用している。シソーラスの見直しもする必要がある。
- ・日本語の読解力や語彙力を評価していくことは、その生徒に適した学習内容を検討して授業を行う。また、日本語の言語力や表現力を探ることは日常の生活指導を行う上でも不可欠である。
- ・コミュニケーションで必要な語彙をどのくらい獲得しているか検査し、実際の場面での活用の様子を把握するようにしている。
- ・語彙力、理解力を知り授業に役立てる。類語、同音異議語などタイミングよく教え、幅を広げる。

文
法

- ・語彙獲得や文法、よみとりの力を評価することで日常の学習に生かせることができ個々の課題にあわせた内容を選んでいくことができる。
 - ・日本語力の客観的な評価方法とその分析結果から「～のような点に課題があり」(例...格助詞の使い方) 「～のような指導が効果的である」(帰納的な方法での文法指導)のような評価と指導が一体になったものがあればよいと思います。
-

表 3-3-6 日本語の評価の課題

実態把握	<ul style="list-style-type: none"> ・結果を指導場面で効果的に活用することが課題である。 ・生徒の実態把握をするうえで必要な評価であると考えているが、教員の移動や専門性ともかかわって指導に活かしきれていないのが現状であり課題である。 ・実態把握が生徒の能力を決定付けてしまい一層の向上に向かうのではなく現状を肯定し生徒の能力を見切ってしまうことにつながる懸念がある。 ・日本語の評価により実態把握した後、指導に活用してはいるが言語力の向上に結び付ける市同方法や指導内容に教師は課題を感じている。 ・市販の標準化された検査で評価、実態把握を行っているが全員が対象といいつつも重複障害の児童には使用できない。 ・障害が重度、多様化する中で子どもの実態把握し指導に活用できる検査等を知りたい。 ・実態把握にはなるが、活用が効果的でできないのが課題。 ・言語力の把握方法について現在学部で検討中。評価は必要であるが絵カード等は母子関係が危ぶまれるほどのトレーニングに追い込まれる可能性もある。 ・年齢=読書力にはなっていない。その生徒の実態に合わせた問い合わせが必要となるため。
検査	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的な日本語の力の実態や課題を知る方法の一つとして、検査は必要である。 ・検査結果を充分に生かし切れていないことが課題である。 ・市販の検査では把握しかねる実態の児童について自作の検査がない。 ・音声言語だけでの検査の場合、その子の本当の力を評価できるのか?しかし、手話で検査することも妥当とは思えないで検査方法がわからない。 ・諸検査を通して児童の日本語力における評価を客観的にしていくことは大切である。しかし、その結果を以後の指導にどう生かしていくかが課題である。 ・生徒の実態は把握できたが細かな分析についての話し合いができていない。読書力診断検査の結果、読字力はあるが読解力、文法力に欠けている。クラスの実態に応じた毎日の課題学習（短い文章の読解等）を行っている。学部全体ではブックトーク（週に1回）等の読書推進活動を行っている。 ・読書力診断検査の結果を十分に分析しきれていない。日本語力をつけるための小学部全体の共通した方策がなく個々の教員の考えで行っている。 ・聾学校高等部生徒に適した検査がない。漢字能力検定や日本語検定が最も適していると思われるが経費のこともあり全員が受けるのは難しい。 ・児童の実態がさまざまであるが、どの状況でも把握しやすく日々の指導にいかしやすい検査を使うことを考えているが研修不足で実施には至っていない。 ・言語力がかなり厳しい生徒には読書力検査を有効に扱えないという声があり今後 J.COSS 検査を用いる予定である。また、検査を実施した後、「結果を十分に分析し教員間で把握し生徒にフィードバックする」ということができていないことが課題。原因として考えられるのは多忙と教員の意識である。 ・読書力診断検査の結果は各担任に返却し目を通している。また、各教科担当にも見られるようにしている。しかし、結果を知るだけで指導に活用することは余りできておらず課題となっている。

- ・言語力を客観的に把握する必要を感じている。例えば、幼稚部卒業後に地域の小学校を希望する保護者が多い。小学校の学習や人間関係に対応する日本語力があるのか等、示せるものがなかった。今年度実施する絵画語彙検査も含め、客観データと分析が課題である。
- ・研究授業のために検査を行っている。また、必要に応じて各種のテストの利用をしている。
- ・日本語の評価とまではいかないが読解力、表現力、思考力などの力を教科の学習の中で評価しているのが現状。より簡単に実施できる検査があれば実施したい。
- ・学習したこと柄についての評価は可能だが、どれくらいの応用ができるのか定着の度合いなどを評価できるものがない（あるのかもしれない）。
- ・市販の検査ができにくい子に対する客観的評価、評価の効果的な活用。
- ・実態を適確に把握するために検査等を用いた評価は有効である。しかし、そこから一人一人にあつた適確な課題や指導方法につなげるところに課題がある。
- ・定期的な検査をもとにした効果的、継続的な指導について課題がある。
- ・諸検査の結果をどう有効に活かしていくか検討。
- ・現在本校では書記日本語について研究テーマを設け、学部全体で取り組んでいる。そのために個々の児童の言語力の状況を把握する。また、系統立てた計画をたてるために状況把握の検査は必要。
- ・日本語の言語力をつけていく上で評価は絶対必要だが幼児の力を把握する検査が少ない。
- ・日本語の力の正確な評価がピンポイントの指導に結び付くのではないか。下学年対応の児童の検査（読書力診断検査を対応学年のものは難しすぎて解くことができない児童への対応）。
- ・どんな検査があるのか分からぬ。
- ・読書力診断検査は高等部バージョンがないので中学部用を使っている。
- ・幼稚部の年齢でできる客観検査があまりなく適確に評価できていないのが現状である。
- ・作文力を把握する検査の開発。
- ・実態を把握し指導に活かすために必要。検査の結果を指導にどう活かすかが、まだ十分に考えられていないのが現状。

- 評価**
- ・個々の生徒の言語力の把握が指導者たちの印象や学習した資料等によるものが多く共通理解を得るにはアバウトで曖昧さが残る。このような調査等を行い客観的な評価の活用を図る必要がある。
- 方法**
- ・必要を感じているが現段階で決めて行っているものはない。今年度、何を使ってどう評価していくのか検討していく予定である。
 - ・経験言語レベルから生活言語レベルへ、そして教科言語レベルへと意識を高めていくためにも定期的に評価することは大切だと思う。評価結果の活かし方が課題。

- コ**
- ・評価によって一人一人の苦手な分野が明らかとなった際、それに対してより効果的な指導が課題。
- ミ**
- ・生徒のつまずきがどこにあるのか理解のレベルはどの程度なのか等、生徒の実態を把握することで日ごろの指導方法や指導内容に反映させることができる。テスト結果を分析し、日ごろの指導に具体的に生かす技量を教員が磨いていくことが課題である。
- ケ**
- ・言語力の評価は日々の授業に生かして言語力を向上させるために必要だと思うが、把握する方法が少なくどう客観的に判断し指導に活かすことができるか悩むところである。
- シ**
- ・日本語の知識はできるだけ増やしたい。日本語の力、即ちコミュニケーションの力ではないので日本語の力をコミュニケーションの力に結び付けていくことが課題である。

- ン
- ・日本語（母語）の運用能力の状況を客観的なデータで把握・評価すること自体重要であり、かつ難しい課題だと考えています。
 - ・語彙力を伸ばし将来のコミュニケーション力につけていくためには指導の前の評価として必ず実施すべき内容である。
-

- 指
- ・語彙に関する評価は行っているが日本語の言語力を総合的に評価する必要性を感じている。
- 導
- ・教科学習をすすめていくために児童の言語力を客観的に把握しておくことは必要であり、その発達段階に応じたていねいな言語指導をしなければならないと考えている。
 - ・毎日の日記指導で助詞や言葉の順序について書くことができるようになる具体的な指導方法の工夫。
 - ・助詞の使い方をよくまちがう生徒がいる。濁音や半濁音をつけまちがう。日記を書かせ文の書き方など指導しているがなかなか直らない。
 - ・指導をしていく上では生徒の日本語の評価をする必要があると感じている（生徒が理解できる発問の仕方や指示を考えるなど）。
 - ・子ども一人一人の日本語力の段階や発達を把握することで、次にどんな指導が必要かを考え選定していくことができるので評価のめやすとなる指標や段階表などが必要ではないかと考える。
 - ・評価を行う上で自分の弱い所を知る事ができ、そこを中心に学習することができると思います。
 - ・生徒の言語発達の現状を知り、個々の言語におけるつまづきに対して指導を工夫する。
 - ・評価を効果的に活かす指導内容、方法が課題。
 - ・筆談をする時に自分の言いたい事をきちんと相手に伝えるために日本語力は必要である 助詞の使い方をどうやったら理解できるかが課題。
 - ・日本語の言語力は国語や自立活動の時間だけでなく、全ての教科の中で高めていくという意識が大切。筆談を正確に行えるよう指導している。
 - ・個々の生徒の実態はある程度把握できるが実際の指導に結び付けにくい。
 - ・語彙や表現力の乏しい生徒が多いので実態を把握し日々のHPや授業で補うことが社会へ出る直前の高等部としてはとても大きな課題になっている。
 - ・日本語の力をつけさせるためには子ども一人ひとりの日本語の諸能力がどの程度かを見極めてその少し上の段階に引き上げることが必要。無茶など一般的なとか、年齢相応のとかの指導を数打ってもなかなか当たらない。
 - ・高等部段階では個人差が大きくないので結局は個別対応になります。小学部のようなボトムアップを丁寧にする時間のない中、トップダウンで必要性の高いところから取り組んでいるのが現状。
 - ・健聴児との比較を常に忘れず基礎学力を身につけさせるために必要。日本語獲得の難しさ。
 - ・様々な方法で客観的な日本語の言語力の状況を知ることで授業内容や指導方法に活かすことができる。学習意欲に差が出、あきらめてしまって学習する姿勢が後退してしまう生徒への指導が課題。
-

- 読
- ・文法の中でも助詞の指導方法の工夫 日本語の読み取りに対する評価の方法。
- み
- ・情報を正確に読み取り自分の考えを整理してまとめて伝える力を身につけさせるための具体的な指導の在り方について研究、工夫していく必要がある。
- 文
- ・日本語の教科書を使って学習を進めるためには日本語の読み書きは必要。さらに意味理解において文法力、○○大学附属市民総合医療センターも読みの力等が課題となっている。
- 法
- ・日本語の読み書きの力はすべての教科指導のために必要であるから、児童の力を把握しておくことは

必要である。課題・評価の範囲が広いので簡単には実態をつかみきれない。

- ・音韻認識等、読み書きのレディネスを評価できる検査がない。
- ・読み書き障害等を併せ有する場合の評価方法。
- ・読み書きの力をつけるために評価が必要だと思う。ただ、助詞や主述の理解など日ごろの指導でも課題はたくさん見つかるものだと思う。指導法を見つけることが必要かも知れない。
- ・児童がどこに課題があるために文章が書けないのか、読み取りで単語の意味が分からぬいためにイメージがつかめないのか文法が分かっていないので内容が読み取れていなかつたのかなど実態が分かることで必要な指導を組み立てることができたり、力を伸ばしていく指導につながることができる。結果を指導場面で取り入れていくが、どういう方法でどうやって指導に結び付けていくと効果的な指導ができるのか次のステップへのつなぎ方が課題です。
- ・一人一人の子どもの実態に合わせた文法指導（自立活動）。
- ・言語力とは何をさすのかが明確でない。自発語の数だけでも評価できないし構文力を評価する方法もわからない。

時 ・教科指導（教科書指導）で本人がどれだけの力を持っているのか実態を把握する必要がある。その力を向上させる必要があるが時間がない。

間 ・教科書がない中、担任の考えだけで指導をしていくには不安もあり保護者にもお話する上での指針となる。じっくりと検査にとりくむ時間がとりづらい。
・お子さんの実態をとらえ保護者と話をするには必要である。しかし、その実態をもとにどのように指導計画をすればよいのか、また、評価方法の学習、評価の時間の確保等難しい。
・課題としてはこれらの検査には時間がかかり少し構えないと実施に踏み切れない。
・第三者の立場で児童の実態を評価することができるのが良い点だが調べられない力もある。検査については実施する時間やお金の問題もあるため多くの検査を実施することは難しい。
・評価することで、幼児の言語力の傾向が分かるが語彙の数のチェックなど時間がかかるのが課題。
・個々の児童の実態把握を適切にする事で課題が見えてくるのだが検査を分析し正しく活用する能力・経験・時間的余裕が足らず検査をしても充分に活かしきれていないのではないかと思う。
・自ら読書をし、自分の考えをもつことができる生徒を目指しているが、とても難しく現カリキュラムの中では読書指導（文法、読解等）の時間がしっかりととれていない。
・助詞や構文に関する実態を知るための評価は就学に向けての実態把握として1回実施しているが、普段の指導に役立てるためにも行えばよいと思われる。ただ実施に時間を作ることが難しい。

**保
護
者** ・今年度在籍の幼児には単語（名詞中心）の言葉チェックぐらいしか実施できない（実態により）学校と保護者の共通理解及び指導の際の参考となるため必要である。
・いろいろな検査があるので目的に応じて使っていくことが大切。保護者への説明が不可欠だが適切に説明する必要がある。
・手話でコミュニケーションをしていると手話さえあれば全て理解できると誤解することもある。
・学校からの教科学習が始まることをふまえて生活言語を日本語でも理解・表現する力をつけていくことは必要なことなので、指導する上において子どもの課題をつかむことは大切。課題を保護者にかえして、どう力をつけていくかが理解してもらうのはなかなか難しいこともある。

- ・学校を離れ聾の世界だけではない社会へ出ていく上では当然日本語は必要。保護者の願いとの調整も課題の1つである。
-

第8項 手話の評価の必要性や課題

表 3-3-8 手話の評価の必要性

必 要 性	・手話そのものを考えるなら将来、いわゆる聾社会の中に溶け込んでいくためには必要なものだと考える。学校教育においては概念形成をしていくため一方法だと捉えている。
	・行っていません。必要性は感じていません。
	・手話の必要性を意識してもらうには言語力評価を実施することは大変有効と考える。
	・現在のところ特に必要は感じていません。
	・幼児の実態把握のため必要である。手話での単語レベルの評価はしているが対応手話での理解表出の評価の方法は観察等にとどまっている。文法的にどの程度言語力があるのか評価するのに教師の手語力によってまちまちであり適切な評価方法がないのが課題である。
	・必要だと思うが現在は評価する形をとっていない。
	・手話の言語力と学力の間に相関があるのかないのかを明らかにする。
	・手話の言語評価は必要だと思いますが本校ではできていません。
	・行っていない。手話を使用している関係上、必要なのかもしれないが、現段階では検討していない。
	・必要であると思うが具体的にどのようにすれば良いかわからず手をこまねいている。
手 話 力	・近年の幼稚部在籍児が聴覚活用がよくできる音声言語を中心の子どものため手話を使うことが少ない。そのため手話の言語力評価の必要性をあまり感じていない。
	・本校の高等部では手話を常時使用しているので生徒の実態から今後手話の使用も考慮する必要があるとは思うが、本人がまだその必要性について理解しておらずその使用について検討していく必要があると考える。（注）生徒数が減少のため中学部在籍は現在中1名のみ。
	・手話力については日常生活の中でどの程度使用しているかを評価する必要性がある。
	・教員の手話力の不足をどう向上させるか必要です。コミュニケーション力、言語力を図りたいが图れないのが現状。「○○こんな言葉もしない」「ことばがない」とよく言われますが、言う人たちは日本語のみ「ことば」と言っている為、手話言語についての理解が得られません。一般化された手話力評価のものがあると、どこに課題があるのか測れます。
	・教師の手話力の問題があるのでビデオ教材を使って行っているが、保護者の手話力をどうつけるか。
	・教師の手話力（日本手話）。
	・幼児でも取り組めるものがあるとよいが教師自身の手話力が拙いことも課題である。
	・職員の手話力がまちまちなので一定基準の技術や表現力を維持。
	・子どもたちの教育歴や家庭環境は様々であり手話の力も様々。また、子ども達の手話力を評価するためには子ども達以上の手話表現力と手話読み取り力が教員には必要だが、どちらもなかなか上達せずに苦労する教員もいるのが現状。子どもたちもそうだが自分が間違っていることになかなか気づけず、まちがったままの手話を繰り返し提示し、予想外の返事が子どもから返ってきたときに子ども

が理解できていないと勘違いしてしまうなど…事態は深刻。

- ・生徒の手話力の実態をつかむ必要性はあると考えるが、教師側の手話力もまだ不十分な面もあり、そのような取組は今のところできていない。
- ・将来的は必要な評価と考えている。その前に指導者の手話力の課題をなんとかしなくてはならない。
- ・教員の手話力の向上。
- ・人工耳装用の児童が多く手話力の向上という意味合いが薄れている。重複のお子さんについても簡単な意志疎通ができる程度であり、言葉をおさええるのには指文字を使っている状況。
- ・教員の手話能力向上の取組。

手話の言語力

- ・聴覚障害教員（非常勤）の手話をどの程度理解できているかを把握できるとよい。しかし、手話の言語力を伸ばすためにはあえて「授業で」というより普段の学校生活や聴覚障害教員の授業などを通して自然に身につけさせていくしかないのではないかと考えている。
- ・手話の言語力評価は必要だと思うが、手話力向上のための研修をもっと充実させることがまず必要。
- ・手話の言語力というよりは日本語と手話とのマッチング能力…つまり日本語力の評価になってしまふようにも思えるが教師が発信する手話を生徒がどの程度知っているのかは測っておきたい。
- ・中学部から進学する者と他の中学校から進学してくる者がいる。そのため手話を使ってのコミュニケーション力に差がある。しかし、卒業後のろう社会で生きていくためには手話の上達は必須となる。手話の言語力評価をする必要性は感じているがまだ実施していない。
- ・手話の言語力評価の方法について、どのようなものがあるのかなど、あまり校内で話題にされることはないので情報を知る必要がある。
- ・他校種からの異動者や産休代替、時間講師の手話の言語力について課題があり校内で手話講習会を行っているが、どのくらい身についているか分かるとよいと思う。
- ・生徒の手話も曖昧な所があったりすることもあり、教師も含め手話の言語力向上のための評価は必要と思います。
- ・今のところ手話の言語力についての評価は予定していないが必要性については考えていかなければいけないと感じている。
- ・手話の言語力評価については必要性を感じている。
- ・両親聾の生徒以外は手話の言語力は不確かである。生徒どうし話しているのを見てどの程度伝わっているのかと思う時もある。お互いの意志疎通がうまくできずにトラブルになる事例もある。日本語も手話も曖昧なセミリンガルの状況を感じる。
- ・本校では手話の言語力の評価を今までしていないと思います。日常的に伝わる、伝わりにくいという判断になっている部分があるので今後手話の言語力の評価も必要と思いました。

日本語

- ・日本語の言語力と手話の言語力を同一バッテリー（本校自立担当者自作）を用いて評価している。今後検査内容の検討が必要。
- ・日本語把握との関係性を知る上では有効と考える。
- ・手話で一次言語をしっかり身に付け、遅れずに教科学習、日本語の学習についていくことができる（読む、書く）。

- ・言葉のイメージを捉えるために手話は有効であるが、日本語と結び付けて指導する必要がある。
- ・あくまで日本語力と両輪であるべきという前提で生活・学習場面で手活力（受容、思考、表現の力）は必要である。しかし、小学部中学年・中学部の段階で手活力と日本語力に明らかな差が出るケースは子どもへの心理的影響を考える必要が生じる。手活力評価は受容、理解、表出が平易によみとれるアセスメントが必要と考える。
- ・中学部の目標からもまずは日本語力の向上を目指している段階である。
- ・手話の内容を日本語におきかえていく時には手話で理解できているのか確認する必要がある。
- ・日本語から手話、手話から日本語に置き換えて表現できる力を持っているかで本当の意味理解につながると考え、中学部では週一時間自立の時間に実施してきている段階。
- ・手話付きスピーチが主たるコミュニケーション方法ではあるが本学部では日本語の言語と同じ比重で手話の言語と指導しているとは言い難く現段階では評価するということは考えていません。不必要とは考えませんが、手話の位置づけ幼児一人ずつの手話のニーズをしっかり検討し職員が手話の言語力をつけているということが前提になると思います。

- コ
ミ
ュ
ニ
ケ
ー
シ
ョ
ン
・本校及び当学部では先に（P2）「学部の指導目標」で示したとおり「個に応じた手段でコミュニケーション能力を高める」指導を行っていますが、現在のところ聴覚手話法を基盤にして行っており、当面、手話はその補助的手段として活用しています。言語コミュニケーション手段の多様な考え方を総合的に検討しながら指導にあたってまいります。
- ユ
ニ
二
ケ
一
シ
ヨ
ン
・生徒が手話、音声のどちらの手段から主に情報を得ているのか、どの程度理解できているのか等の現状把握は生徒個々のコミュニケーション手段を考えていく上でも必要である。
- ・手話を含めたトータルなコミュニケーションツールを用いた言語力養成は、生徒の将来を左右する大きな問題であると思う。
- ・口話同様に手話表現の追求を図る取組が少ない。手話をつかっているが手話そのものへの研究が不足している。同時に口話や聴覚への研究が不足している。ただ手話を保障し話を補聴器できいている生徒がいるという印象があり、どこまできこえていて手話は一人一人に何を伝えもたらしているのかというコミュニケーションの側面での捉え方は弱いと思われる。「通じている」ことは確かであるが一体どういうルートをつかってどれだけ通じているかという分析は不十分と考える。
- ・コミュニケーション、言語、手話ともに定点観測のような評価ができれば成長がよくわかると思います。ただ中高には自立の専科担当がないので必要性を感じる教師が個人的に実践しています。もっと広く学部の共通認識になればと思います。
- ・将来のコミュニケーション手段の方法として必要。
- ・実態把握、コミュニケーション能力向上の指導に活かす。
- ・手話が主なコミュニケーション手段である生徒がいるのは事実なので手話の言語力評価も必要かとも思うが、生徒も教師も日常の簡単な手話ですんでしまっているのが現状である。

- 実
態
把
握
・日本手話文法テストは数年前1度実施しましたが、その後は使用していません。現在手話を第1言語とする児童は重複障害の児童だけなので観察でほぼ実態把握はできると考えています。
- ・部内では手話中心に活動が進められている。ろう教員は小学部30名中7人名いる。手話の使える教員もたくさんいる。しかし、子ども同士のやりとりは読み取りきれないものがある。手話を覚えていける最中の教員はたいへんな負担を感じている。実態把握をして授業を行うために評価は必要ある。

- ・言語の定着を確認するのに必要。
- ・生徒がどのような手話をどのように理解しているか実態を把握することは大切。
- ・手話の理解度を把握した上で授業等での活用に配慮していく。
- ・手話の言語力評価は特にやっていないが、語彙数のチェック時に手話で表わすことができるかを確認している。
- ・部内で手話に関する評価について検討していない。
- ・学級担任が学部行事（弁論大会など）と関連づけて個別に評価を試行している。
- ・ある程度客観的評価ができるとよいと思うが、方法について考えていく必要がある。
- ・評価していない。今後は検討していく必要があるかもしれない。
- ・本校の「観察」は聽覚口話を基本としたもので手話に特化したものではない。人工内耳装用が増えている一方で蝸牛奇形があり人工内耳、補聴器ともほとんど活用できない幼児も増えている。今後手話の評価が必要になる可能性がある。
- ・今後は実態に応じて全国の検定試験などを実施したい。
- ・大人の手話単語ではなく幼児の手話表現を育てたり評価（？）する方法、学習方法があればと思う。

研　・教師側の評価も必要だと考えます。

修　・自分達が日常使用している手話表現が、本当にその時その時の文章に合ったものであるか見直したり通常使用する表現以外の手話があることを知る機会を設けることは大切だと思う。

指導　・小学部までは、「日本手話文法理解度検査」（金沢大）を使用していたが、中学部生徒向けではないため、実施していない。

・教科学習を進める上で、必要な言語力（手話に関する）を把握し、指導を進める必要を感じる。

・どのように評価していくのかを共通理解していくこと　・評価したあとどのように指導していくか。

・手話に関して幼稚部段階で客観的に評価する必要性を今のところ感じていない。

幼　・幼稚部の段階では手話は意味理解の手掛かりとして使用しているため獲得状況の評価は必要としていない。

稚　・幼稚部段階で使用する手話は身ぶりの延長の範囲にとどまることが多いので今の時点では必要性がない。

・幼稚部で使用しているのが理解やコミュニケーションの補助としての身ぶりサインであるので手話の評価を必要としない。

・人工内耳の幼児が増える中で手話を位置づけ、幼稚部として検討中。

表 3-3-9 手話の評価の課題

手話力	<ul style="list-style-type: none">教師の主觀で生徒の手話力を評価しており、それがコミュニケーションの豊さや学力の向上に十分につながっていない。また、この手話力の重要性等について学部や学校全体で話し合いがされていない現状であることが課題としてあげられる。教師の手話力もまだ不十分な状態では生徒へ教える語数も少ない。現在は手話力についての評価は実施していません。今後の検討課題です。このアンケート内容を見ながら生徒のコミュニケーションや言語力の実態を正しく捉えるためには生徒の手話力を客観的に把握することが大事だと気付かされた。脇中氏（京都府立ろう学校）の作成されたチェック表で調査を行ったことがあるが、本校生徒の実態に合ったチェック表をどのように作成し評価後の指導にどのように活用するのか等課題として考えられる。教科学習（教科書指導）をする中で手話力が必要になる。そのためどれほどの手話力を持ち、その手話表現は書記言語としても理解できているのかは必要である。新しい言葉を意味理解まで学習するとなると時間がかかる。手話コミュニケーション能力を評価する教員の手話力の研修システム。幼児向けのものがなかなかない。手話力に差がある。教職員の手話の力量に課題がある。
手話の言語力	<ul style="list-style-type: none">聴力の厳しい子、聴覚障害の家庭など、手話言語を持っている子どもの評価も必要と思う。また、一般的の検査ではやりにくいこともあるので手話での言語力評価も必要だろう。本校では実施していないが他校の情報などを得ることも課題の一つである。手話の言語力向上は大切ですが指導者側の手話力は課題だと思います。ただし手話ができるできないだけで教員を選ぶことはたいへん危険だと思います。自立活動の時間に帯時間で毎朝、手話表現の指導をしている。手話の言語力をまとまった形で評価していくなかつたが行う必要があると思う。課題としては生徒のニーズに応じて指導の内容が異なるので目的とどこまでの（実態からくる教育的ニーズ）内容を扱うかを学部で検討する必要がある。コミュニケーションを深める意味でも手話の言語力評価は必要であるがテストを実施できていない。手話の言語力評価は必要と考えるが定期的に実施するにはまだ指導体制が十分とは言えない。手話の言語力評価は必要だと思うが、本校では現在行ってはいない。手話の言語力を評価する具体的なイメージが浮かばないため、その必要性を感じていない。しかし、言語力の向上を何らかの形で確かめることは大切だと思う。評価の方法や客観性が課題だと思う。日本語に対して国語のテスト、英語に対して英語のテストがあるように手話に対しても手話の言語力評価は必要だと思われる。実際の方法については今後の検討課題である。手話学習会（外部講師）を定期的に実施しているが、手話の言語力評価までは行っていない。手話の言語力を 2 つに分けて考える。1 つは手話通訳として翻訳のように置き換える力、もう一つは児童のもつ言語力を伸ばすための手話を使う力。教育現場では後者のほうがよいが、これを評価する検査がない。手話の言語力を 2 つに分けて考える。1 つは手話通訳として翻訳のように置き換える力、もう一つは児童のもつ言語力を伸ばすための手話を使う力。教育現場では後者の方がよいがこれを評価する検査がない。

- ・語彙表に関しては、子どもの語彙力を把握し指導に活用することが目的で、手話の言語力を評価するものではないため、手話に限定されるとあてはまらないこともある。
- ・手話の言語力の評価はしていますが、それをうまく指導につなげていこうという職員内の共通理解はしていません。

実態	<ul style="list-style-type: none">・伝達内容の詳しさ 伝達の意欲 日本語の習得とのバランス（コミュニケーションと日本語の押さえ）必要であると感じているが実施には至っていない。
把握	<ul style="list-style-type: none">・コミュニケーションの評価と同じカテゴリーになるのでは？ 地域差が激しい手話を統一的な視点で評価できるのだろうか。・生徒が普段使っている手話について通じ会っているようでしっかりと通じていないこともある。・手話の理解力の把握・実態把握後の指導例がない。・結果のデータ数が少ないので比較が難しい。・実際に手話での言語がどれくらいあるのか状況を把握する必要があるのだろうが、本校では実施していない。しかし、実態把握ができたとしても手話の指導は難しく結果が活かせないのではないか。・中学部段階で手話よりも指文字を使う生徒が多い。手話の定着度を上げるため、評価をどう活かしていくかが今後の課題である。
指導	<ul style="list-style-type: none">・手話表現や手話で通訳する場面で正しく理解できているかを把握するため指導にどう利用するか。・評価の仕方に課題 語彙の広がりをどう指導するか。
評価法	<ul style="list-style-type: none">・まだ学校として「生徒の手話使用」「手話の指導について」様々な意見があり手話をどう学校教育に位置づけるかという段階です。・特に指導はしていないが間違った手話は正している。・手話と文字言語を結び付けて指導していて手話のみは行ってない。教師の手話力不足。・手話が必要な子どもにとって、それが身についているのかを確認していくことは必要。・聴覚活用をまずすすめ、曖昧な部分を手話で補っている。・必要性を感じるがその方法が本校にはないという点では課題を感じる。・これまで行ったことがなかった。今後検討してみたい。・生徒が社会に出た時に日本手話の理解や手話通訳者の手話の理解も大切。様々な手話の表現方法や手話単語なども自立活動等で今後扱っていくことが重要であるが、本校では現在それらの活動が本格的に行われておらず、どうしていくかが課題である。・小学部では小学部用手指辞典（基本単語 350）を使用して 6 年生から先行学習を行っている。中学部での手話使用にスムーズに入れる児童もいるが、なかなか移行できない（覚えられない）児童もいる。・児童が違った手話を使っていることが多く評価の必要性を感じる（原因は教員が誤った表現をしているのでそれを覚えてしまったのか？）教員の異動のため 1~2 年の先生は手話がわからない。特に児童の手話の読み取りができない。・国語や英語においてテストを行なうように手話においてもどれくらい手話単語を、文章を表現できるかというテストを行う必要があると思います。ただどのようにやっていくかという方法が確立されていない気がします。

- ・どのような方法で評価すればよいか具体的な話し合いができるていない。
 - ・実施、活用していないことが課題である。
 - ・評価法の知識が普及していない。
 - ・手話にも方言がある。
 - ・手話の語彙の獲得状況を評価するツールがない。
 - ・何らかの形での実施の必要性は感じるが良い手段が見当たらない。
-

第10項 教師の手話の言語力向上のための評価内容

表 3-3-10 教師の手話の言語力向上のための評価内容

研修	<ul style="list-style-type: none">・学部、学校としては、実施していないが、会議の際に（職員会議、学部会等）、ミニ研修を行ったり、全校研修に年間数回取り組むなど手話力の向上に取り組んでいる。・校内研修の中で、日本手話文法テストを行う（評価は特にしていない）。・校内研修での年度末確認テスト（上級、中級、初級にわかつて各講座講師が実施）。・教師の評価はないが、職員全員による手話研修や有志による手話研修（サークル）などで研修を実施している。・手話研修会は実施しているが、評価は特にしていない。・特に実施していないがレベル別手話研修を年4回実施。これ以外に新転任者向け手話研修を4月末までに5回実施している。・着任の教員に対する手話研修の最終回は手話テストを実施している（表現と読み取り）。・月1回、職員の手話研修、保護者への研修を行っていますが評価までは行っていません。・各教師の自主研修に任せている。・評価というよりは折々機会をとらえて研修を続けています。・ろう教員や手話の上手な教員による「手話講習会」を年に数回行っているが、特に評価を用いていない。・（評価ではないが）毎週1回「手話の勉強会」が開かれ、特に新任者が多く参加している。・特に評価はしていないが週1回手話の勉強会を持っている。・手話学習会を初級、中級と設けている（各5回）。・週1回の学習会を行っている。・手話学習会でろう者の方に協力をいただいて行ったことがある。・手話力向上のために年間6回手話講座を5:15～行っている。・○○教育委員会が行っている自己評価による手話力の評価を実施している。・各教師の習熟度に応じてグループ分けによる研修は実施していますが客観的評価については十分ではありません。・研究授業後の検討会において教師の手話表現について検討する。
手話検定	<ul style="list-style-type: none">・任意であるが手話検定を受けている。・手話検定の本を使って手話の勉強している。ドリル練習を行い検定用のDVDを使っておおまかな評価を行う。・手話検定に沿った研修の実施。・希望者は手話能力検定を受検しているが、評価をしているわけではない。・手話検定か、県聴覚障害者協会主催の講座への参加をよびかけている。
その他	<ul style="list-style-type: none">・自己評価ではあるが学部会のはじめ5分程度、手話の読み取りを行っている。出題者の手話（20字程度の文）を代表1名が声を出して読み取る。その後、参加者全員で出題者の手話付きスピーチを聞きながら自分の読み取りについて評価する。・授業の指導自己評価の中で一部評価項目として挙げてあり全教師がチェックしています

- ・校内においても日本手話と日本語対応手話についての認済が深まらず、どちらをターゲットにして育てていくのかの方向性を定めにくい。
 - ・通常小学部では手話付きスピーチまたはスピーチでのかかわりが多い為、特に教師の手話力を評価することはできません。ただ児童に少し複雑な話をしようとする時は日本手話が有効なので教師の手話力は向上させなくてはならないと思っています。
 - ・ないため、必要性を強く感じています。手が動いていれば「手話をしている、取り入れている」と言っている人が多いのですが、実際見てみると読み取れないものが多く、指導にも影響が出ているのではと思われます。
-

専門研究D

聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する研究
平成24年度

研究成果報告書

研究代表者 原田 公人

平成25年3月

著作 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

発行 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

〒239-8585

神奈川県横須賀市野比5丁目1番1号

TEL : 046-839-6803

FAX : 046-839-6918

<http://www.nise.go.jp>

